
君は私で私は君で

サクラ咲く

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君は私で私は君で

【NZコード】

N4138R

【作者名】

サクラ咲く

【あらすじ】

私はずっと みんなと一緒にいたかった。ずっと。ずっと。

NARUTOの一次創作小説。

主人公はサクラ（成り代わり？）。原作を変える為にサクラが頑張るお話です。恋愛要素は薄め。主人公のサクラは最強ではあります。ちなみに愛され（？）状態、捏造（オリジナル設定）、独自解釈があるので、苦手な方はご注意を。

毎週日曜日に更新予定。

サクラには特殊な術や才能はありませんが、基本をしっかりとすればかなり強くなれるはず、というコンセプトでいきます（追記）。

第四十四劇の後に間劇「同じものなど存在しない」を割り込み掲

載（2011年 09月 21日）

感想での「原作批判」「原作のサクラ批判」はご遠慮願います。

注意しても直らない場合は即削除させていただきます。ご了承ください。

感想を書く際のお願い

原作批判、原作サクラ（他のキャラ）の批判はご遠慮ください。

そもそもこの物語は原作がなければ存在しません。私が原作を、
サクラを好きだから誕生したものです。

なり代わりにしたのは、原作サクラを壊したくなかったのと、原
作サクラ自身が幸せになる方法を模索するためです。チート（する
な）能力をつけていないのは、サクラ自身で掴み取れる幸せがある
のだということを証明するためです。

私はサクラが大好きで、原作が大好きです。嫌いなキャラもいま
せん。

また、感想のページはどなたでも見ることができる場所でもあり
ます。

以後はまず一言注意をし、それでも直らない場合は削除させてい
ただきます。ご了承ください。

みんなで楽しく物語を楽しむためにも、ご協力お願いします。

第零劇「始まりの産声」

どうすれば追いつけるの？

声がして、私はそちらを見た。味気ない世界の中、異彩を放つ輝きがあった。

その子はどうやら泣いているようだつた。なんだか見ている私まで悲しくなつてくるような泣き方だつた。

どうしたの？ なんで泣いているの？
だ、誰つ？

いつまで経つても泣き止みそうにない様子に、私はついつい声をかけてしまつた。

勢いよく顔を上げたその子は、きょろきょろと世界を見回した。しかし、私を感知できなかつたのだろう。不安そうに膝を抱く腕に力を込めた。

大丈夫。私は君を傷つけたりしないから。

ほんと？

うん、ほんとだよ。だから、私に話してじらん。

ひつゝ、ひつゝとしゃべりあげたその子は、ポツリポツリと話し始めた。

大切な人たちがいるの。

うん。

守りたい人たちがいるの。

うん。

だけどいつも守りられるのは私の方で。

うん。

彼らの方がずっとずっと強くて。

うん。

一生懸命修行しても、彼らは私以上に強くなつて。

うん。

私は彼らの背中を見ているだけなの。

うん。

それが辛い。

そつか。

世界に沈黙が下りた。

私はなんで声をかけてしまったのか、はつきりと理解した。この

子は だ。

がんばったね。

……ううん。私なんかまだまだ。

そんなことないよ。君はよくがんばった。えらいよ。

ええっと。そ、そうかな?

うん。

そうだつたら嬉しいな。

うん。だからね。

どうしたの?

私は自然と微笑むのを自覚した。

私が代わつてあげる。

え? でも……いいの?

いいよ。

今度はあなたが疲れちゃうわ。

んん？　ああ。そうかもしないね。けど、きっとその時には君
が元気になつてゐるはずだから、バトンタッチしよう。だからね、
今は。

むつくり、お休み。
うん。ありがとう。……お休みなさい。

第零劇「始まりの産声」（後書き）

私は決してサクラが嫌いなわけではありません。むしろ大好きです。

しかし、好きすぎるが故に衝動的に書いてしまいました。やつち
まつた感も反省もしています。サクラが自分の手で幸せを捕まる
手段はないのか、を模索したいと思います。
では、よろしければこのサクラともどもみまもってやってください
いましゃ。

少し改定（11・03・18）。後々に影響しますが、今は忘れ
ていてオーケー。

第一劇「入学式」

「おばさん。配達終わりました！」

まだ早い時間なためか、彼女は抑え気味に声をかけた。店の奥から恰幅の良い女性が出てきて、ニット笑つた。女性もまた抑えた声を出す。

「お疲れ様。いつもながらサクラちゃんに任せると早くて間違いもないから助かるよ……はい、今週の分ね」

「ありがとうございます」

差し出された茶色い封筒を彼女、サクラはお辞儀をしてから大事そうに受け取つた。その際に桜色の髪と赤いリボンがピヨコピヨコ動き、女性は笑いを堪えるために握つた拳を口元に当てる。堪えきれない笑いが合間にからこぼれている。

「ユウちゃんありがとう……ほら、今日は入学式だろ？ 準備しておいで」

「はいー。」

女性の様子に気づかず、最後にもう一度ペコリと頭を下げたサクラは店の外へと駆け出していった。外はまだ日が昇り始めた頃合で暗かつたが、彼女の顔は反対に明るい。

「今日はいい日にならうー。」

つい大きな声を出してしまったサクラに、壁の上で寝ていたネコ

が迷惑そうな顔をした。サクラは「あ。ごめんね」と可愛らしく舌を出して猫に謝った。猫はしおがないなと言わんばかりに長い息を吐き出して、また目をつむった。猫の様子にサクラは苦笑を浮かべ、しかしすぐにまた楽しそうにスキップしつつ家に向かった。

待ちに待った忍者学校の入学式の準備のために。

* * *

ここには忍者の存在が当たり前の世界だ。

そして、浮かれている先ほどの少女は春野サクラという。髪の色は名前が主張するように、色鮮やかな桜色で、大きな瞳は綺麗な翡翠色の中々可愛らしい少女だ。年は八つになる。

サクラが生まれ育ったのは、火の国にある忍びの隠れ里（隠れ里とはいっても、別段隠しているわけではない）木ノ葉隠れで、彼女は忍びになるために今まで生きてきた。木の葉で忍者になるためにはこのアカデミー卒業するしかないのだから、喜ぶのも無理はないかもしれない。

「サクラーここちこつち！」

「お、おはよう。サクラちゃん」

「イノ、ヒナタ！ おはよ！」

アカデミーへの途中で、サクラは二人の少女と合流した。金髪ショートヘアで気の強そうな少女は山中イノ。青紫色のおかつぱ頭の大人しそうな少女は日向ヒナタ。三人はお互いを親友と言い合えるほどの仲だった。

サクラの満面の笑みを見たイノは呆れた顔をした。

「予想はしてたけど、ほんとあんた嬉しそうね」

「えへへ」

「サクラちゃんはずっと楽しみにしてたから」

楽しそうに盛り上がりしている彼女たちはそれぞれが違った意味での美少女で、なんとも華があった。

そんな華を離れたところから見つめている一人の少年がいた。ツンツン尖った金髪の少年の名は、うずまきナルトという。サクラたちと同じ年頃だらう。オレンジ色を基調とした上下、という曰立つ格好の彼はアカデミーの正門付近に立っていた。

親と子供たちでわいわいと賑わっている中、なぜか彼の周りは不自然に人がいない。ぽつかりと空いたそこだけ別空間のようだった。

「ちょっとあの子……」

「まったく。なんであんな奴がアカデミーにいるなんて」

「まあ、あんなところに立つて、邪魔よねえ」

ひそひそと子供をつれた親たちが、ナルトを見ながら会話する。彼を見つめる大人の目は、まるで道端に落ちているゴミを見るような、あまりにも冷たいものだった。

「…………」

ナルトは、小さく口を開けた。

しかし、結局何もいわずにその場を立ち去った。

期待に胸を膨らませるもの、不安にするもの、一人で式を迎えるもの……各自の思いを胸に、少年少女たちの忍者生活は、幕を

開
け
た。

第一劇「入学式」（後書き）

いきなり原作と違つてすみません。女の子三人はもつと仲良いのがいいなあという願望の現われです。

中身が違うため、人物の相関図もかなり違つております。
あと原作が手元に無いため、原作と違う設定も出てくるかと思いま
す。ゆるい感じでみていただけると幸いです。

アカデミーが何才からか分からなかつたのでこの小説内では七歳
(八歳?)からの五年間としています。

修正(11・03・28)

修正。改行を入れました(11・04・05)

修正(11・04・16)

修正(11・06・11)

第一劇「また明日の約束」

アカデミーの授業はほとんど男女合同で行つ。

しかし科目によつては男と女に分かれることがあつた。今、サクラが受けている授業も女の忍び／＼のいちだけで行つ『花をいける』という一見忍者に関係ないものだつた。

忍者、と一口に言つてもその役割といつのは實に幅広い。

具体例を挙げるならば、盜賊退治や暗殺、潜入に情報収集というものから、子供のお守りや草抜きにおつかい、畑の収穫など「こんな忍びに任せん仕事か」と疑つようなものまである。なんでも屋、というのが一番しつくり来る。

今彼女たちが行つているのは主に潜入（情報収集）や、良家の息女の身代わりを行う際などに必要となるスキルである。

潜入任務は基本女性の方が警戒されにくいため、くのいちに潜入任務が回つてくることは多く、どこにでも違和感なく潜入するために様々な知識は必要不可欠となる。

身代わりに関しても、教養ある女性の身代わりをするにはやはり教養は必要だ。そうでなければボロが出てしまう。

「まずは好きな花を摘んできなさい。花を数本選んだら先生のことを持つてくれるよ。道具を渡します」

先生の言葉に、女の子たちは仲の良いグループに分かれて花を摘みに行つた。きやつきやつと騒ぎながら花を積んでいる姿からは、とても忍びの授業中とは思えず、微笑ましい。

サクラもまた、イノやヒナタと花を摘もうとしていた。

イノは家が花屋なだけあつてすいすいと花を選んでいる。彩りはさすが花屋の娘と感心するほど綺麗で、時折考えるそぶりを見せて

いるので、花言葉も考えて摘んでいるのかもしない。

ヒナタは迷いつつも、気に入った花を手にとっている。ヒナタの日向家は由緒正しい家系で、彼女は跡取りだ。そのせいだろうか。彼女の手にある落ち着いた花たちには、どこか気品があるように見えた。

一方のサクラは、といつと一本だけ……淡い紫色のその花をじっと見て、何事か考えている。しばらくしてからため息をつき、周りをキヨロキヨロと見て、また手の中にある花を見て、何度も繰り返す。眉が情けなく垂れ下がっていることから、何を摘んだから良いのか分かつていらないのかもしねない。

「サクラ？ 何してつて、あんたフジバカマしか摘んでないじゃない？」

大体摘み終わったのだろう。手に鮮やかな花を抱えたイノが呆れた声を上げた。サクラは手に持つた、淡い紫色の花を見下ろした。へえっと声を出した。

「フジバカマっていうんだ。これ

「あんた、それすら知らなかつたの？ いつもあんなに難しい本読んだるくせに？」

「う」

「……サクラちゃん」

「ヒナタ、言いたい」とは分かるけどそのままはやめて

呆れたような顔と声と仕草に、はつきり「呆れた」と言われたサクラは、ぐうの音も出ない。どうやら花には詳しくないらしい。普段あまり自己主張しないヒナタからも、なんともいえない目線をもらってしまったサクラは、肩をがっくりと落とした。

イノは腰に手を当ててサクラに言い聞かせる。その姿はしつかり

もののお姉さんたちのもの。

「あのねえサクラ。私たちがなるのは忍者は忍者でもくのいちなんだから。じついう知識も必要なのよ。分かった?」

「はい」

「よろしい。じゃあ、今日は特別にこのアタシがコツを教えてあげるから、感謝しなさいよ」

「うん! ありがとうイノ!」

ぱあっと顔を輝かせて真っ直ぐ礼を言つサクラに、イノは声を詰まらせた。頬が少し赤い。ヒナタがそんなイノを見てくすくすと笑い、イノはヒナタを軽く睨んだ。サクラは不思議そうに一人のやり取りを見ていた。

咳払いをしたイノは、改めてマジメな顔を作った。

「うわ……」「ほん! じゃあまずはメインになる花を決めて…」
…」
「うん」

「ええっ! そ、そ、うだつたんだ。やつぱりイノちゃんはず」「こなあ

その後はヒナタもサクラと一緒にイノの生花講座を聞き、そしてサクラはなんとか初めてのくのいち授業を乗り越えたのだった。

* * *

「絶対あの子は変よ」

それは、イノが初めてサクラと会つた時から言い続いている言葉

だつた。

サクラはイノと同じ年だつたがいつも遊ぶ子供たちを遠くから眺めるだけで、決して自分から混じりうとしなかつた。誘う声があれば笑顔で応えて遊びに加わるもの、サクラの存在は浮いていた。なんといつても子供たちを見つめる翡翠の瞳があまりにも穏やかで優しすぎた。まるで親が子を見るかのような目に、子供たちの誰もが照れたのだ。

いつしかサクラを誘う子はいなくなつていた。

だがそれは決して嫌つてているだというわけではない。そもそもサクラは遊びよりも勉強や忍びになるために修行に時間を費やしており、子供たちと会つことが少なかつたのだ。

当然、そんなサクラに友達と呼べるような相手がいるわけもなかつた。

「ちょっとあんた」

イノに話しかけられたサクラは話しかけられたことにびっくりしたようで、翡翠色の大きな目をさらに大きくしてイノを見た。サクラ色の前髪は長いため、イノにその瞳は見えなかつたが。

「えっ？ わ、私？」

「あんた以外に誰がいるのよ」

「ごめんなさい」

うつむいて謝るサクラにイノは拳を突き出した。もちろん殴つたわけではない。握り締めた赤い布紐を差し出したのだ。サクラはそれをじつと見て、またイノを見て、顔を横に傾けた。

「リボン？」

「そうよ。あんた折角可愛い顔してるんだから、にうにうのつけて

少しはおしゃれしなさい」

「かわいい？　い、え、つと」

赤面したり慌てたりと忙しいサクラの手にリボンを無理やり握らせ、イノはじゃあねと走り去った。

なんでそんなことをしたのか、本人も良く分かつていない。走りながらしきりと「なんとなくよ、なんとなく。うん。そんな気分だつただけ」と呟いた。

次の日、町を歩いていた桜色の頭には赤いリボンがちょこんと存在した。前髪が上げられ、さらされた少し広いおでこと大きな瞳はなんとも可愛らしい。初めてまともに見たサクラの素顔に、

「なんか騙された気分がする」

呆然と呟いたイノの青い目と、翡翠の目がかち合つた。翡翠の瞳が嬉しげに細められ、ふつくらした唇が動く。

「ありがとう」

微笑んだサクラは、やはりイノと同じ年の女の子には見えなかつた。ただ、全身で嬉しいのだと表しているサクラに居心地の悪さを感じ、明後日の方向を向いた。

よほど気に入つたのか。サクラは毎日のように赤いリボンを身に着けていた。あの日以来ほとんどサクラと会話していなかつたイノがまた、彼女の前に立つ。手には青いリボンを持っていた。

「あなたね。毎日毎日同じのばつかつけるんじゃないの。つたくもつ

反論は聞かずにリボンを押し付けたイノは、走つて友達の待つ場所へと駆けた。相当慌てていたのか。運動神経のよい彼女らしくな

く、足をもつれさせていた。イノの頬は、やや赤い。

「何してんだる、あたし」

「どうしたのイノちゃん。顔赤いよ、風邪？」

「ちょっと走ったからじゃない？」

友達に問われたイノは、なんでもないような顔をして少し手で顔を仰いだ。

それからまた数日が経つた。青いリボンをつけたサクラが緊張した面持ちでイノの前にいた。まるで今から告白でもされるかのようにピンとした空氣に、イノの顔つきは自然と硬くなつた。

「い、いのちゃん！」「これ」

サクラが両手で差し出したのは、手のひらに收まりそうな大きさの四角い何かだった。中身は白い包装紙に包まれていて分からぬ。震える手を見ながらイノは断る理由もないで、「ありがとう」と受け取つた。声がガラにもなくかすれてしまい、彼女は顔を赤くした。

「ありがとう！」

イノの手に収まつた包みを見たサクラは、それはもう嬉しいと満面の笑みを浮かべた。まるでオウム返しのような言葉に、イノは奇妙な顔をした。呆れているような、嬉しいような、怒っているような。

「あんたが礼を言つてどうすんのよ」

「だつて。だつて本当に嬉しかつたから」

怒った口調のイノに対し、サクラはどこまでも嬉しそうな笑顔を貫いた。それは、いつもの大入りたものではなく、年相応な笑顔であった。

「サクラー、そろそろ帰るわよ」

少し離れた場所からサクラと同じ髪色、似た顔立ちの女性が手を振っていた。彼女の母親なのだろう。彼女は母親に「今行くー」と返事をして、イノに言つた。あまりにも自然と言つた。

「じゃあイノちゃん。また明日ー」

「ああ、うん。また明日」

だから自然とイノはそう返していた。

イノがそのことに気づいたのは、サクラと彼女の母親が仲良くな田の中を歩いているのを見送つて、しばらくの間。

「また、明日つて」

腕を組んで悩んでから、イノは「やられた」と小さく呟いた。

* * *

「サクラって詐欺師の才能あるよね」

「うわ、イノひどいっ」

しみじみと呟くイノと、怒るサクラの図が見れるようになるのが、もう少し未来の話。

第一劇「また明日の約束」（後書き）

授業について。

くのいちクラスがあるのは確実ですが、同時に全員で授業受けている気もしたので、この小説内では時折男女別の授業があることにしました。

任務について。

女性や子供が警戒されにくいのは当然のこと。潜入するのに男でも変化すればいい、というものではないだろうな、という考え方からこうなりました。術の場合はまずチャクラを使う。消費は少ないのでしょうが、常に変化しつぱなしというのはつらそう（集中力もいるし）。&明らかに無教養だと変化しても行動でばれてしまう。

修正（11・03・28）

修正。改行を入れました（11・04・05）

修正（11・04・16）

修正（11・06・11）

第二劇「女の子失格?」

入学式から早1週間が経過した。

「」のままだと、無理だ

サクラは焦りを感じていた。彼女が思つていた以上にアカデミーの授業内容は生ぬるかつた。サクラは忍者を目指しているが、そこはただの通過点に過ぎない。目的達成のために必要な強さには、このままだと到底たどり着けそうになかった。

ならば自分で更に修行を課すしかない。今までもサクラは自己流の鍛錬を積んできたが、果たしてやり方があつていいのか、成果が出ていいのか。自分で判断できないため不安は尽きない。

先生に自己鍛錬の方法を教えてもらおうとサクラが聞いても、全員が「遊ぶのも修行だ」と教えてくれない。他に教えてもらえる人はいない。自分でどうにかするしかないのだ。

「えっと足にチャクラを集中……こうかな？」

なので今サクラは、図書館で探した修行法を試していた。

チャクラとは身体エネルギーと精神エネルギーのことをいう。忍術を使う際はこれらを用途に合わせて練り上げる。最初はチャクラという存在を感じするのも大変だったが、練ることはできるようになつた。

身体エネルギーは『体を構成する細胞の1つ1つから取り出したエネルギー』のことで、生まれ持つ量は各々で違つていて、成長とともに増えるが、年を取ると減つていく。

対して精神エネルギーは『修行や経験から得られるエネルギー』を意味し、修行次第で増えていく。

これら、チャクラの量をスタミナといつ。割合としては身体エネルギーの方が多い。スタミナはあればあるほどたくさんの術を使うことができ、戦闘を有利に運びやすい。逆にスタミナが少ないことはそれだけで不利となるが、コントロール（扱い方）次第では不利を覆すことも十分可能となる。

行おうとしているのは、このチャクラをコントロールするための基礎的な鍛錬法であった。

体内にあるチャクラを足の裏に集中させ、一定のチャクラを維持したまま『手を使わずに』木を登る。実行できるかはさておき、文にすると至って簡潔だ。

半信半疑ながらサクラが右足を木の幹にかけると、幹と足が引っ張り合ひつつぐぐついた。

「なるほどねえ。チャクラひとつひとともできるんだ」便利だ。

しばらく感触を確かめるように何度か足を動かし、放出するチャクラ量を調節していく。じつも多すぎると木から足が弾かれるようだ。

「うん。よし」

感覚を掴んだサクラは、恐る恐る左足を上げる 地面と木の幹は当たり前だがほぼ垂直で、地面につけてくる足まで上げてしまつては、体は重力に従つて落ちるしかない。

「え、うそっ？」

しかしサクラの体は、浮いていた。

「やつ！」

喜ぼうとしたのもつかの間、集中が乱れたらしく足が滑つてサクラは落下した。……まだ1歩目だったのが幸いだった。ぶつけた腰が痛いものの、特に怪我はない。むくっと起き上がり腰をさすった。

「いたたた

チャクラの量は少なければ吸着力を生まず、体重を支えきれなくなる。が、強すぎれば弾かれる。第一、スタミナの無駄遣いにしかならない。サクラは体力にはそこそこ自信があるものの、チャ克拉のスタミナに関しては。

なので、自身の体重を維持できるぎりぎりのチャ克拉量を常に足の裏に送り続けなければならないのだが、どうも必要なチャ克拉はごくわずかのようで、調整するだけで難しい。そもそも足裏に集めるのもかなり集中しなければならない。

「道のりは長いなあ

木の天辺を見上げたサクラは、言葉通り、長いため息をついた。

* * *

ひゅうが
日向とは、木の葉の隠れ里で最強と謳われる優秀な忍びの一族だ。
ヒナタはそんな日向宗家（本家）の嫡子（跡取り）として生を受けた。

そんな彼女は物心ついた時から修行に明け暮れていた。宗家を継ぐものとして強くなければいけなかつたのだ。当主である彼女の父

も厳しく指導した。

だがヒナタには、残念ながら才能がなかつた。

父親は彼女へため息をたくさん吐くようになつた。失望の表情を浮かべる父親に、ヒナタはそれでも認めてもらおうと必死に修行した。

期待通りの結果を出すことは、いつだつてできなかつた。

「ひつくえぐ」

秘密の修行場で今日もまたヒナタは一人、膝を抱えて泣いていた。修行に明け暮れていたことと、何より名門一族であるがために友達と呼べる者はいなかつた。引っ越し思案な性格も関係しているのだろうが、涙する時、ヒナタはいつも一人だつた。

この日までは。

「どうしたの？」

間近でした声に、驚きすぎてヒナタは一瞬泣き止んだ。近づかれたことにまったく気づいていなかつた。ヒナタは勢いよく顔を上げた。

白いハンカチを差し出して微笑んでいる少女がいた。ヒナタと年は変わらないだろうに、桜色の髪と翡翠色の瞳が放つ穏やかな光は、優しい母親と酷似していた。ヒナタの中で何かがはじけた。

その子が誰かも分からぬまま、目の前にある細い腰に抱きついでヒナタは泣いた。少女はバランスを崩して後ろに倒れこんだが、文句は何一つ言わなかつた。ヒナタの背中を少女は優しく叩く。

「うええええつひつうぐつ」

「大丈夫。大丈夫」

春野サクラと名乗った彼女はヒナタの話を真剣に聞いた。日向の名をオドオドと告げても、サクラの態度はまったく変わらない。どうか、

「じゃあさ、一緒に修行しない?」

話を聞き終わったサクラの第一声は、それだつた。ヒナタはポカント翡翠の瞳を見た。サクラは恥ずかしそうに笑つて舌を出す。

「実はね。私も強くなりたくて修行しているんだけど全然で、落ち込んでたの」

「サクラちゃんも?」

「そ。だから一緒にやらない? 絶対1人より2人でやる方がいいと思うんだ。あー、でも無理についてわけじゃなくて……いきなりこんな話してごめ」

「お」

慌てて胸の前で両手を振る彼女に、ヒナタは精一杯の勇気を出した。

「お願ひします!」

* * *

「あなたたちの出会いって変よ。絶対」「え、そ、そうなの、かな?」「別にそんなことないとと思うけど」「いいえ。絶対変よ。おしゃれするより修行だなんて女の子失格!」

「えええっそりなんだ

「ちょっとイノ。ヒナタが言ひやうつのは

彼女たちがそんな話をするのもまた、もづくし未来の話。

第三劇「女の子失格?」（後書き）

チャクラに関してはNARUTOウイキを参考に自己解釈的なものも入っています。精神チャクラよりも身体チャクラの比率が大きそうなんですが、どうなんでしょう。

とりあえずしばらくはこんな感じ（サクラ視点　他キャラ視点）に進みます。

修正（11・03・28）

修正。改行を入れました（11・04・05）

修正（11・04・16）

修正（11・06・12）

第四劇「頬の痛みが熱に変わった」

サクラの朝は早い。

日が登るよりも早く起き、顔を洗う。さつぱり目が覚めたところ
で着替えて牛乳を一杯飲み、カバンを揃んで家を出る。まだ外は日
が昇つておらず暗いが、サクラは慣れた様子で静かな街を駆けてい
つた。

「おはよー」「わーい

向かったのは『木の葉新聞』と書かれた看板を掲げる店だ。半分
だけ開いているシャッターを慣れた様子でぐぐり、挨拶をする。声
は朝早いため、押さえ気味だ。中にいた中年の男がサクラを見て二
ツコリと笑つた。男もまた抑えた声で言つ。

「ああ、サクラちゃん。おはよー。そこに置いてある分頼んでいい
かい？」

「分かりました」

男が指差した場所には新聞の束があつた。返事を返したサクラは
重いだろうソレを抱えて、愛用の白いカバンに入れた。新聞配達用
のカバンはパンパンで、彼女の小さい身体が一瞬バランスを崩した。

「今日はいつも以上に広告が入つてね。いけそう?」

「つとと、大丈夫です」

「じゃ、頼んだよ」

「はい」

元気の良い返事に満足そうに頷いた男は、サクラの倍の量をバイ

クに積みこんだ。走り去ったバイクを見送つてから、サクラは男の去つた方角とは逆へ駆け出して行く。最初こそふらついたものの、すぐに慣れたのか。軽快に走つて新聞をポストに入れていく姿は普段ならどこか微笑ましい光景なのだが、

「ええっと、足にチャクラ、チャクラ」

呪文を呴いているサクラは、たいそう怪しかつた。

* * *

サクラは一人暮らしをしていて、生活費を自分で稼いでいる。さすがに子供の給料だけでは生活費のすべては稼げないので両親に頼つている部分もあるが、彼女はなるべく自分の手で稼いでいた。新聞配達を終えると一端家に帰り、朝食を作るついでに弁当もこしらえる。手際はなかなか良い。だが、なぜか弁当は2つあった。ピンク色の小さいお弁当箱と、オレンジ色の派手な弁当箱におかずが詰められていき、おにぎりを最後に入れて弁当は完成した。中々彩りもよく、おいしそうだ。うんうんと彼女は一人で満足そうに頷いた。

「いただきます」

彼女は行儀正しく一礼をしてからようやく朝食を食べ始める。テーブルの上には、玉子焼きと野菜炒めに、ワインナーと味噌汁、白ご飯。どうやらサクラはご飯派らしい。

「今日は、卵が安いんだよね。帰りに買ってこなきゃ

入っていたチラシやテレビで特売情報や天気予報を確認し、口をもぐもぐさせながら頷いている姿は主婦そのもの。見た目は完全に子供なため、どうにもちぐはぐだった。

手早く朝食を食べ終えたサクラは洗濯物を干し始めた。やはり手馴れている。最後にピンとタオルを伸ばし、うん、と満足そうに笑顔を見せるも、時計を見て「やばっ」と声を上げた。

「遅刻する！」

学校用カバンの中身を軽くチェックし、鏡の前で身だしなみを軽く整え、少し散らかった部屋を振り返り顔をゆがめた。掃除をする余裕はない。諦めのため息が小さな口から出た。

「お父さん、お母さん、行つて来ます」

それでもサクラはすぐに笑顔を浮かべて棚の上で笑っている2人に声をかけ、勢いよく部屋を飛び出ていった。

* * *

気づけば彼は一人だった。

周りの大人は彼を見ると嫌そうに眉間にシワを寄せ、ボソボソと何かを呟く。同じ年の子供にしても、大人の態度が乗り移り、彼をあざける目線しか向けてこない。

なぜそこまで嫌われるのか。

彼は理由を知らない。悪いことをしたのなら言ってくれれば謝るし直そうとも彼は思っているのだが、誰も彼に教えてはくれない。

どこか誰も彼の名前を言わない。誰も彼自身を見ない。
だから、なのかもしない。

いつしか彼の夢が里のみんなを見返してやる、となり、里一番の忍者の称号『火影』を目指すようになったのは。

そんな彼が生活していけるのは、定期的にポストにいれられるお金があるからだった。

この日もまた入っていたお金を持ちスーパーに来ていた。慣れているのか。迷いなく店内を進み、カツラーメンのコーナーへ一直線に向かう。彼はラーメンが好きだ。料理があまりできないこともあって、カツラーメンばかりの毎日を送っている。どう考へても不健康だが、それを指摘して直させようとする人間など、彼の周りにはいないのだ。

カツラーメンは様々な種類があった。最初に新商品を手に取つた彼は、迷いなく次から次へとカゴに放り込んでいく。と、中でもお気に入りのラーメンが1個だけ残っていた。自然と笑みがこぼれた。

「ラッキー」

いつも売切れになるそれに手を伸ばし、隣から伸びた別の手が見えて彼は手を止めた。向こうも同じく気づいたようでそれ以上手は伸びなかつた。

「あ、ごめんなさい」

普通に謝られたことに驚いた彼　　うずまきナルトは、相手を見た。鮮やかなピンク色が揺れ、穏やかな輝きを帯びた翡翠色の瞳が真っ直ぐナルトを見つめていた。

その組み合わせには、見覚えがあつた。

「あの？」

『どうしたの？』

「いっいや、い、いひかひひひ『ゴメンだつてばよ』

一瞬過去の映像が浮かんだナルトは、怪訝な声に我へと帰った。それから悲しいような、安堵したような複雑な表情をした。ナルトは目の前の少女を知っているのだが、少女はナルトのことを覚えていないらしいからだ。

「……ラーメン、好きなんですね」

少女の視線はナルトから、彼の持つカゴへと移った。カゴの中には山積みにされたカツチラーメンがあり、少女の目が厳しい光を帶びた。思わずナルトが1歩後ろに下がってしまうような迫力が、そこにはあつた。

「ちゃんと野菜も食べてますか？」

ナルトは何も言えなかつた。

* * *

結果とするならば、下手に反論しなくて良かつたのだろう。おかげでほぼ毎日、ナルトはおいしい弁当にありつけるようになった。

アカデミーに行くため彼が部屋を出ると、ドアノブにくくりつけられた風呂敷がドアとぶつかりカツンと音を立てた。ナルトは青い瞳をネコのように細める。わくわくしたよつて風呂敷を手に取ると、ずつしり重たい。

「ん？」

そのまま力バンに入れようとして、風呂敷に乗っていた白い紙に気づく。手紙のようだ。首を傾げたナルトは「なんだか」「と弦きながらそれを開いた。

『ピーマンもちやんと食べなさい。今度残したら、もう行らなければ』

書かれた文字を読んだナルトの顔が、わあっと彼の瞳の色に染まつた。

手紙には絵も描かれていた。無駄に上手い絵はお弁当の絵で、おかげばピーマンづくしに見えた。と、こいつことはおやぢへ今日の弁当の中身は、

「そ、そんなあ」

普段なら樂しみなはずの弁当が、ナルトには悪魔に見えたのだった。

* * *

「どうしたの？」

空が赤く染まり始めた、ナルトの一番嫌いな時間帯だった。顔を上げたナルトを見て、声の持ち主である少女は慌ててカバンから何かを取り出すと、ナルトの頬に問答無用で貼り付けた。

ピリッとした痛みが頬を走って、ナルトは少しだけ眉を動かすもすぐに元の表情に戻った。痛みには慣れている。

「「めんね。今バンソーコーしかなくて」

申し訳なさそうな少女を、しかしナルトはほけつと見た。こんな風に接してもらったことがなかったから、どう反応すればいいのか。彼にはまったく分からぬのだ。

「サクラー。そろそろ帰るわよ」

「あ、はーい」

母親らしき人に呼ばれた少女は、ピンク色の髪を揺らした。

「じゃあね」

最後まで声を発せられなかつたナルトは、馬鹿みたいに少女の背中を見つめていた。

夕暮れは孤独をつれてくるから大嫌いだった。でもその時のナルトには、オレンジ色に染まつた世界が、

「温かい」

頬に軽く触れたナルトは走る痛みに顔をゆがめながら、その温かさに身をゆだねた。

この日、彼の好きな色が増えた。

第四劇「頬の痛みが熱に変わった」（後書き）

ナルトがどうしてあそこまでサクラを好きなのか。勝手に捏造しました。

こんなことがあるといい。

アニメでサクラは料理下手っぽかったのですが、この小説内では1人暮らし（自炊）しているのでそこそこ上手です（プロ並、とかではないです）。

関係ないですが、タイトルは結構お気に入り。

ナルトの1人暮らしはどうやってしていたのか。記述なかつたためこれも捏造です。ナルトが1人暮らしできているのだからサクラにもできると主張^{したい}。

- 修正（11・03・15）
- 修正（11・03・28）
- 修正。改行を入れました（11・04・05）
- 修正（11・04・16）
- 修正（11・06・12）

第五劇「図書館での攻防」

図書館の端、あまり人目につかない場所に設置された机の窓際、もはや定位置と化したその席にサクラは座っていた。

「へえ。この花つて薬にもなるんだ」

時折関心の声を上げている彼女が読んでいるのは、いろいろな薬草が載っている本だつた。それをイラストごとノートに写している。最初は下手だつた絵も、慣れればそこそこ見れたものになつた。コピー機を使わないので全ページを写すためである。本を買う余裕などサクラなく、コピー代も馬鹿にはできない。また、修行の一環でもあつた。

彼女の手に握られたシャープペンシルは、最大限まで芯が伸ばされていて。こんな状態で文字を書こうとすれば普通芯は折れるのだが、彼女はそんなシャーペンでスラスラと文字を書いている。芯にチャクラが流されているのだ。

細い芯の中を更に細く伸ばされたチャクラが通り、芯を補強している。それだけでも集中力がいるというのに、本を詳細まで写しているのだからサクラの意識の中から世界が断絶されても、まあおかしくはない。

「お前もよく飽きねえよな

ボキッ。

突如声をかけられてチャクラコントロールの乱れた芯は、見事に折れた。机を転がる芯を見たサクラの肩が震え、翡翠の瞳が怒りをまとつて正面に向けられる。怒氣を帶びつつ抑えられた声が声の主を呼んだ。

「し～か～ま～る～？」

黒い長髪を高い位置で一つにくくつた彼、奈良シカマルは視線を気にした様子なく、あぐびをした。田つきの悪い田は半分以上閉じていて、なんとも眠そうだ。

ちなみにシカマルの口癖は「だりい」で、彼はいつだって眠そうな顔をしている。

「んだよ

「んだよっじゃなくて。あんたのせいで芯が折れちゃったじゃない知るかよ。集中を勝手に乱したのはお前だろ」

「うつ。そ、それは、そう、だけど」

痛いところを突かれたサクラは静かになつたが、不満なのだろう。頬を膨らませた。その様子をシカマルは眠そうなまま見ていた。

「でもシャー芯代だつて馬鹿にならないんだからね」

「はいはい。気をつけますよつと」

「……氣をつけられた覚えがないんだけど?」

いつもサクラがこうして頑張っているところを、シカマルは面倒くさそうな顔をして邪魔する。彼が面倒そうなのはいつものことだが、面倒なら放つておけとサクラは強く思つ。唇を尖らせてサ克拉は不機嫌を表した。

「ふあ～あ。ねみい」

またあぐびをして寝る体勢に入つたシカマルに、サクラはもう少しで大声を出すところだった。が、寸前でここが図書館であることに

を思い出し、慌てて口を手で塞ぐ。無理やり飲み込まれた言葉が指の間からもれ出た。

今度は小声で言つたまにサクラは口を開き、すぐに閉じる。顔にはあきれ果てた表情が浮かんでいた。

「相変わらず寝るの早いし」

くうくう寝息を立ててゐるシカマルにため息を一つこぼしたサクラの口元は、しかし弧を描いていた。文句を言いつつも、彼女はこんなやり取りが嫌いではなかつた。

またシャー芯を伸ばしたサクラはノートに目を向けた。

* * *

初めてサクラと会つたのがいつだつたか、シカマルは覚えていない。

確かにイノに紹介されたのだと記憶しているが、詳細もよく覚えていない。ちなみにイノとシカマルは、親同士が仲がよく、いわゆる幼馴染という奴だつた。

つまりシカマルにとって、サクラは『イノの友だち』程度の認識でしかなかつた。

のだが。

目の前で馬鹿みたいにシャー芯を伸ばしていいる彼女を見下ろして、シカマルは「めんどくせえ」と小さく不満をこぼす。サクラは彼の声に気づかない。

『たまいでいいからさ。サクラのこと、見てあげてくれない?』

ふと、イノに頼まれた時のことをシカマルは思い出す。

断ることも、簡単ではなくともできた。イノは強引などこひはあるが、本当に嫌なことを押し付けたりはしない。断るもの面倒だつた彼は、適当に頷いた。サクラのよく通りとこづ図書館がたまたまシカマルの昼寝場所だったの、まあその時に様子を見るぐらいいいかと、気楽に考えていた。

そんな経緯の末にサクラを観察するよつになつたわけだが、なぜイノが頼んできたのかをシカマルはすぐ理解した。サクラは、休まないのだ。

アカデミーでは眞面目に授業を受け、時間があれば本を読み修行に明け暮れる。今も勉強しながら修行するといつ、シカマルから見れば馬鹿みたいなことをしている。

なぜそこまで強くなろうとしているのかを彼は知らない。イノは少し知っているみたいだったが、聞こうとは思わなかつた。イノも何も言わなかつた。

ただ、このままではいつか倒れるのは田に見えていて。さすがのシカマル（面倒くさがり屋）も、田の前で倒れそうな彼女を見て見ぬフリはできず、昼寝以外の理由で図書館に通つていた。

「お前もよく飽きねえよな

ボキッ。

いい音が彼女の手元でしたのを聞きながら、あぐびが一つ零れ落ちる。翡翠の瞳がシカマルを睨んだ。

「し～か～ま～る～？」

「んだよ」

「なんだよつじやなくて。あんたのせいだ芯折れついたじやない」

「知るかよ。集中を勝手に乱したのはお前だろ」

「うつ。そ、それは、そう、だけど」

少しサクラと話してから、シカマルはいつもより横たわる姿勢に入った。

「相変わらず寝るの早いし

聞こえた声に、シカマルの口元は弧を描いていた。貴重な睡眠時間を持つてもいいかと思えるほどには、このやり取りを気に入っていたのだ。

第五巻「図書館での攻防」（後書き）

シャープペンシルは原作でなかった、気がしますが、このナルトの世界にはあるということでお願いします。

シカマルとは微妙な距離感あるのが好きです。

修正。改行を入れました（11・04・05）

修正（11・04・16）

修正（11・06・12）

第六劇「まるでプロポーズ」

修行は順調に、かどりがサクラには判断つかないが、とりあえず進んでいた。

手を使わない木登りはとりあえず頂上にたどり着けるよつになつた。……10回に2回ぐらいは。修行を始めて2週間経つたが、まだ成功率が半分以下であることにサクラは苦笑しかできない。

「じ、地味な割りにしんどすぎる」

草地に全身を預けたサクラは、木の間から覗く空をなんとなく見た。鳥が数羽、気持ちよさそうに風に乗ってどこかへ飛んで行つた。チャクラの修行でサクラが痛感したのは、スタミナ（チャクラ量）のなさだった。

平均値は知らない。少なくともサクラはそう判断した。今行つている修行メニューがきつい。木登りの成功率が低いことには、途中でスタミナが切れることが大きく関係していた。なので本当に、ギリギリのチャクラを練らなければならず、修行の難易度を上げていた。

「修行で増えるチャ克拉ってどれぐらいなのかな」

アカデミーの教科書には増えるとはつきり書いてあるが、増える量には個人差があるとしか書かれていらない。そこまで書けよ。何度もそんな悪態をついただろ？ サクラはふっと息を吸い込む。

「よしつと。休憩終わり

勢いよく立ち上がつた。

次は忍術の練習だ。アカデミーで習つた基本忍術だが、基本故に

応用が利きやすい。

手で印を結ぶ。

この『印』とは忍術発動のために必要なもので、両手である形を作る。印の基本は12種類あり十一支の名前がつけられているが、これらを組み合わせて術を発動させる。難しい術ほど難解な組み合わせとなる。特殊な印もあるが、ここでは割愛する。

必要な分だけのチャクラを練り上げ、使いたい術の印を結ぶ。

「分身の術」

煙とともに現れたのは4人のサクラ。本体も含めると5人だ。分身体は各自自由気ままに行動しており、見事な分身の術だった。アカデミーの教師がこの様子を見れば感嘆の息を吐いたはずだ。

「ん~、まだまだ、か」

しかし本人は不満があるらしく、眉を中央に寄せた。

「もつと早く確実に印を結べないと」

戦闘中に『あ。今術使うからちよつとまつて』など言って敵が待つてくれるわけではなく、また『術が発動できれば勝てました』など言い訳にもならない。どれだけ早く印が結べるかというのは、それだけ戦闘で有利になるのだ。

「もう一回」

分身を消したサクラは、また術の修行に戻った。

* * *

チョウジは、首をひねった。駄菓子屋の前をうろついている不審な影があつたのだ。

「あれ？ どうしたの、サクラ。こんなところで

「あ。チョウジ」

見覚えのある影は知り合いで、チョウジは小さな目をサクラに向けた。チョウジはややぼっちやりした（ぼっちやりであつて決してデ ではない。ブは彼には禁句である）少年で、常にお菓子を持ち歩いている。

今日チョウジはお菓子の補充にやつて来たのだ。

「入らないの？」

そわそわといつもと違つ様子なサクラに声をかけて、チョウジは中へと入つていく。

「あ、う、うん。入る」

戸惑い氣味に返事をしたサクラも続いて入つていく。お邪魔します。そんな聲を聞いてチョウジは小さく笑つてしまつた。サクラが恥かしそうに身体を縮めた。

店内では甘い匂いが充满していた。背の低い棚には、多種多様なお菓子が所狭しと置かれている。チョウジは新作のお菓子に目を輝かせたり、お気に入りのお菓子をたくさん手に取つたりと忙しい。

「ねえ、チョウジ」

引きつった声に、チョウジは振り返った。サクラは無理やり貼り付けた笑みを浮かべ、チョウジの腕に抱かれたお菓子の数々を指差した。

「もしかしなくとも、ソレ、全部食べるの？」

「え？ うん。 そうだけど？」

「そ、そう」

首をかしげるチョウジにサクラはなんでもないと首を振り、持つのを手伝うと言った。チョウジはこれ幸いと腕の中の空いたスペースにいくつかお菓子を加え、それを見たサクラがさらに顔を引きつらせたのを不思議そうに見た。

「ありがと…… サクラはお菓子買わないの？」

礼を言つてからチョウジは彼女が手ぶりことに気がついた。たゞねれば「もう買つた」と返つてくる。それでも不思議そうな彼に、サクラはお菓子を片手で抱えなおして空いた手でポケットを探つた。飴玉が一つ出てきた。

「これだけで、いいの？」

純粹に驚いたチョウジに、サクラは苦笑した。チョウジと同じ年のはずなのだが、この笑い方をするサクラはずつとずっと年上に見えた。そして、チョウジはあまりこの笑い方が好きではなかつた。

「飴が食べたかつただけなのよ」

チョウジはなんだかこの日の出来事が妙に気になつた。

気になつたので、意識してサクラと話をするようになつた。話をするうちに2人は仲良くなつて、お金がないからお菓子を買えないのだと、サクラは恥ずかしそうにチョウジへ教えた。

なんだ。

チョウジは笑つた。

「じゃ、一緒に食べよひよ」

「え？ でも」

断りうとしたサクラを遮り、

「お菓子は大勢で食べた方がおいしいから。あ。でも最後の一囗は渡さないけどね」

チョウジは膝をついてポテチの袋を彼女に向けた。
決まった。

そう言わんばかりの格好つけた表情のまま、彼はちらりとサクラを見る。サクラはポカンと口を開けていた。

「ふつあははははっ！ じゃ、じゃあ遠慮なくいただきます

しばらく経つた後、ポテチをかじったサクラは笑つた。年相応の笑みだった。チョウジも楽しくなつて大きな声で笑つた。サクラにはこっちの笑みの方が似合つたと彼は思った。彼もまたポテチを食べた。

「うん。おいしい」

この日から2人は一緒におやつを食べるよになつた。そこに寝をしにきたシカマルや、サクラを追いかけてきたイノも混じり始

め、チョウジの周りは騒がしくなつた。

「何つーか、チョウジらしいな」

「ほんとよねえ」

話を聞いていたシカマルとイノは呆れた顔をした。サクラはポテチを口に放りこみ、

「でもあの時のチョウジ、カッコよかつたよ。なんか、プロポーズみたいで」

「は、はあっ？」

言葉を失つた周囲を放つて、1人、満足そうに笑っていた。

第六劇「まるでプロポーズ」（後書き）

勘違いで第五劇をあげてました。すみませんでした。
チヨウジとはお菓子友達だといい。

木登り修行の難易度は、まだアカデミー入りたてにはかなり難し
いといつ自己解釈のもとこいつ表現になっています。

修正。改行を入れました（11・04・05）

修正。誤字：不振 不審（11・04・06）

修正。誤字等（11・06・12）

第七劇「犬の恩返し」

「次！ 春野サクラ」

「は、はい」

かすれた返事に担任のつみのイルカは苦笑した。サクラは見ている方が心配になるほど緊張した面持ちで1歩前に進み出た。丸太につけられた的を見つめる目は、真剣そのもの。

「はじめ」

イルカの声に、サクラは素早く手裏剣のホルスターに手を伸ばし……。

* * *

「あんたってホント本番に弱いわよね」

「イ、イノちゃんもうちょっと優しく言つてあげないと。ほら、練習では百発百中なんだし」

「何よ、ヒナタもそう思つてんじゃないの」

「えつ？ あ、その」

「練習では、練習では」

「あああつー ち、ちちち違うのサクラちゃん、今のは

ズバズバと言つてきたりよりも、むしろフオローしたヒナタの言葉にサクラはぐせつときて弱弱しく笑つた。

「大丈夫よヒナタ。あなたの思いはちゃんと伝わったから」

「ああうう、ごめんなさい」

「嫌味言つ元氣あるなら大丈夫ね」

カラカラとイノは笑つた。

今日、学校で手裏剣のテストがあつた。3人の中で1番手裏剣に自信があつたサクラは大失敗こそしなかつたものの、本来の実力を出せなかつた。数少ない自信のあるものだけにだいぶ凹んでいた。先ほどの会話は帰る時間になつても落ち込んでいたサクラを2人が励ましてくれていたわけだ。逆効果ではあつたが。

「じゃ、また明日ね、2人とも」

「また」

「元気出してねサクラちゃん！ 次はできるよ」

家の方角がバラバラな3人はいつものように別れた。最後のヒナタの言葉にサクラは苦笑し、

「ほんと、次はできたらいいのだけど」

無理だろうな。

誰にも聞こえないように囁いた。

* * *

ふと彼が思い立つてその場所に行くと、予想通りのピンク色があつた。

「また落ちこんでんのかよ」

「う、うつさい。バカキバ」

「つおひ」

声をかけると彼、キバに返ってきたのは予想通り、ではなく予想以上に元気な声と手裏剣だった。キバの方を見ずに投げられた手裏剣は彼のすぐ横を通り過ぎ、木に突き刺さる。深々と突き刺さっている手裏剣を見てキバの頬が引きつるのは、仕方ないだろう。

「あつぶね！ いきなり何すんだよ、このバカ女」

「あら外れたの？ 刺さればよかつたのに残念」

「てめえな」

当てる気はなかったのだろうが、サクラは随分荒れているようだ。ブチブチと何事か呟いている姿に、キバはフード越しに頭の後ろをかいてため息をついた。誰がどう見てもサクラは落ちこんでいた。

「大体てめえは合格したのになんで落ちこむんだか。俺なんか補習だつつの」

「ああ、あんた、ナルトの次に下手だつたもんね」

「ばつ！ おまつ訂正しろ。ナルトと一緒にすんじゃねえっての」

「はいはい、ごめんなさい」

手を振つて適当に応対する彼女を見て、こんなところに来るんじやなかつたとキバは心底思つた。

「わうわうわう～ん」

しかし頭上から聞こえた非難の声に、

『あ。もしかして』

いつかの声を思い出した。

* * *

その日犬塚キバは、子犬を探して演習場の森に来ていた。
子犬といつてもただの犬ではない。忍犬にんけんと言つ訓練された犬で、
キバの大事な相棒だ。 犬塚家は犬とともに戦う忍びの一族で、
鼻が利くため、探索も得意とする。

そんな相棒がどこかに行つたまま返つてこない。赤丸と言つ名の
子犬はまだ訓練を始めたばかり。何かあつたのではないか。キバは
いつもの勝気な表情をどこへやつたのか。まるで『私は不安です』
と書かれた紙を貼り付けているような顔をして、辺りを見回してい
た。

「わんわん」
「赤丸？」

相棒の声が聞こえたのはキバの思考が、「まさか誘拐されたんじ
やつ？」まで進んだ時だつた。楽しそうな相棒の声にひとまずホッ
として、キバは声の方へと向かつた。

「ふふ、慰めてくれるの？ ありがとう」

しかし赤丸以外の声にキバはとうさに木の後ろに隠れた。隠れた
後で、なんで隠れたんだと動搖し、足元でかさつと草が音を立てた。

「誰つ？」

「あーつと。わりい。邪魔するつもりは無かつたんだが」

腹をくくつてキバが姿を現すと、少女の膝に乗つかつていた赤丸が「やれやれ」と言いたげに「わん」と鳴いた。キバの頬が引きつた。

ピンク色の髪をした彼女は涙こそ無かつたものの、翡翠の目は赤く、泣いていたのかもしれない。ますます気まずくて、キバは視線をさ迷わせた。彼女はキバをしばらく不思議そうな目で見て、声を上げた。

「あ。もしかしてこの子の家族の方ですか？」

飼い主だとかペットだとかではなく、自然に自分たちを『家族』と呼んだ。それが思いのほか嬉しかつた。だから恩返しというわけではないが、彼女が落ち込んでいると放つておけずここに来てしまう。

きびすを返そつとしていたキバは、サクラの斜め後ろにじかつと座つた。赤丸が嬉しそうにサクラの膝に乗つた。

「で、どうしたつて？」

第七劇「犬の恩返し」（後書き）

私の家には2匹の犬がいます。

そして私は彼らをペットだと飼っているとかは言いたくない
んです。家族ですから。

でも誰かに説明する時は言わなきゃいけなくて……そんなジレン
マをぶつけてみました。さつとキバ以上に赤丸はうれしいと思う、
そんな話。

タイトルが思いつかず、テキトーになつた。キバごめん。

後、決してヒナタがキレイなわけではありません。むしろ大好き
です。ただ、ここではイノ＝ツツ＝ミ＝サクラ＝ボケ、ヒナタ＝ト
ドメ（！？）という役割でいきます。ヒナタ、超ごめん。

修正。改行を入れました（11・04・05）

修正（11・06・12）

第八劇「彼と彼女の趣味事情」

勘違いしている者もいるが、サクラは何も修行や勉強ばかりしているわけではない。たまには自分の好きなことをして気分転換もある。まあ、その気分転換も修行の効率を上げるために思つていいことは否めない。

その気分転換、とは植物採取・観察であつた。まったくもつて女子らしくない。

イノに言えば確実に呆れられるのが分かつてゐるので、サクラがこのことを誰かに告げたことはなかつた。

「あ、咲いてる咲いてる

いつになく明るい声を出しながらサクラは大きな木の根元にしゃがみ込んだ。そこにあるのは彼女が先日ここへ来た時、ツボミを見かけて気になつていたタンポポだつた。黄色の花を観察しつつ、サクラは懐からノートと鉛筆を取り出した。

「根っこは確か胃や肝臓にいいんだよね。他にも効用があつたような……なんだつけ」

サクラは花のスケッチを始める。見たままを描いた絵は、中々上手い。色鉛筆も使いある程度描いたところで、今度は花の名前と効能、色や生息地など花の情報を書き込んでいく。このノートにはそういういくつの植物が描かれてあり、いわばサクラお手製の植物図鑑であつた。完全に趣味で作つてゐる図鑑だが、実益も兼ねているところが彼女らしい。

最後に今日の日付を書き込んでサクラは立ち上がつた。

「今日も始めますか

木の葉の里周辺には豊かな自然が広がっている。温暖な気候が様々な生物の生長を促進しているのだろう。生息する動植物は実に多種多様だ。

なので何回来ても毎回新しい発見ばかり。そのうち未発見の植物も見つかりそうで、胸が躍る。歩いているだけでもサクラは楽しかった。

「サクラ」

鼻歌を歌いそうなほど機嫌のよい彼女に声がかけられた。サクラは驚かない。声の主を彼女は知っていた。

「シノ、おはよう」

丸いサングラスをかけた少年がそこにいた。

* * *

シノという少年は、油女あぶらめ一族に生まれた。

油女一族は蟲むし使いの一族で、昆虫採集・観察は修行の一環だった。それがいつしか習慣となり、木の葉周辺の昆虫をほとんど知り尽くした今では、ただの趣味として行っていた。知っていたと思うものでも観察していると知らない一面が見れることもある。発見した時はやはり嬉しい。発見できずとも森の空気は新鮮で歩くだけでも楽しいものだ。

「へえ、葉っぱの裏つてこいつなつてたんだあ」

こつものように森は静かだったのでその声はよく響き、シノはひどく驚いた。こんな朝早くから森を散策する者はほとんどいない。少なくとも彼は己自身以外に見たことがなかった。もつとも、眉がかすかに動いただけなので、彼が驚いたことに気づけるのは親しいものだけだつたろう。

草木が生い茂った森の中、シノの位置からは声の主は見えない。顔を少し下に向けたシノはゆっくり歩いてそちらへ近づいた。

「うー、描くの難しいな。んーーっと。じじがこいつなつてこいつながつて」

木と木の間から薄紅色の髪と赤いリボンが見えて、シノは声の主が誰だか悟つた。春野サクラ。アカデミーの同級生だ。

シノは小さな丸いサングラスの向こうで数度まばたきした。サクフとは男女の差や、シノが同学年の子供とあまり遊ばないこともあつたため、話したことはない。つまり、接点がない。

じゃあ放つておけばいいものだが、仮にも同級生である。無視するのにはいかがなものかと彼は悩んだ。声をかけるにしても彼は口下手で、普段あまりしゃべらない。何を話していくものかも分からない。

それに女子が虫を苦手とすることも彼は知っていた。……小さく頷いたシノは、そつときびすを返した。

「んつとこれでよし……って、わわっ！ シノ君、いつからや」と

が、立ち去る前に見つかってしまった。こいつなつてしまえば仕方がない。

「……すまない。声をかけようかと思ったのだが邪魔になると思つてな」

「なんだ。そんなこと気にせず声かけてくれて良かったのに」

「そうか」

立ち上がったサクラの手には鉛筆とノート。ノートの表紙にはスケッチブックと書かれてあつた。シノの視線を察したのだろう。サクラは少し恥ずかしそうに笑つた。

「たまに植物を見に来てるの。その際にちょっと絵を描いてたらいつのまにか習慣になっちゃつて。あ、他の人には内緒にしてね」「構わない」

シノは間をおかずしに頷いた。サクラはありがとうと笑つて、

「そういうえばシノ君はどうしてここに?..」

「ああ。俺も似たようなものだ」

「似たような?」

「昆虫採集と観察だ」

* * *

「シノ、おはよ!」

「ああ、おはよ!」

挨拶を済ませると、それきり無言で2人はそれぞれの作業を続けた。一見気まずいしだが、仲が悪いわけでも、喧嘩したわけでもない。2人はいつもこうだ。お互いか互いのことを気にせず好きなこ

とに没頭できる。それは、シノが思っていたよつもずつと居心地の良い空間だった。

第八劇「彼と彼女の趣味事情」（後書き）

キバとの出会いに似てるとか、そそそそそんなことは！つてか、シノむずかしすぎる。彼が同期と遊んでいる光景が思い浮かばないのは自分だけ？ 一番子供らしくない子ですよね。この小説のサクラもたいがいですけど。

ちなみに私は虫が苦手です（聞いてない）。

作中に出でくる花は創作です。図鑑開かないように（笑）。

花の箇所書き直しました。タンポポの根っこは本当に胃、肝臓にいいらしいです。肌も綺麗になるとか。お茶として飲みます。葉っぱも栄養あるみたいです。興味のある方は調べてみてください（11・03・15追記）。

修正＆空白行入れました（11・04・05）

修正（11・06・12）

第九劇「何よりも強力な応援歌」

最近サクラは悩んでいた。

恋の悩み、などという年頃の女の子らしいものではなく、修行内容についてだつた。

1人での修行にはやはり限界がある。基礎能力を上げることは1人でも可能だが、実践練習となれば相手が必要だ。特にサクラは体術が苦手なのでなんとかしたかった。

イノやヒナタと修行することはもちろんある。しかしイノは修行よりも恋やファッショントリニティに余念がなく、ヒナタは家での修行もある。第一、2人はまだ子供なのだから遊んでいい、とまでサクラは思つてゐる。

「まあ、私も子供なんだけどね」

ため息一つ。

「とりあえずは体術の修行方法をどうにかしないと」

打ち込みならば1人でも可能だ。丸太人形相手に打ち込めばいいが、実際の相手は動き、攻撃もしてくる。イメージトレーニングも考えたものの、サクラにイメージできるほどの経験がないため不可能だ。

「先生も忙しそうだし、羨むするわけにも行かないもんね」

出した結論は1人で何とかするしかない、といいつもと代わり映えしないものだつた。しばし考え、首を横に振つた。

「とりあえずいつもの木登り行きますか

サクラは立派な一本の木を見上げ、走るように幹を登つて行った。木登りの成功率は7割に達していた。

* * *

カラソッ。

「何の音でしょ?」

演習場へと向かう途中で聞こえてきた音に、彼はピタリと足を止めた。

長い黒髪を一つに編んで背中に流した少年だ。彼は特徴的な太い眉と丸い目で怪訝な表情をした。彼の名前はロック・リー。忍者アカデミーの2年生。サクラたちの1つ上である。

カラソンカラソン。

音はずつと聞こえてくる。リーは困った。これから修行をしなければならない。しかし、音は非常に気になる。今まで聞いたことのない音なのだ。まん丸の黒目が音の方角と修行場所の方角を行き来する。何度も何度も何度も。

「……少しだけなら、いいです、よね」

少年は好奇心に負けた。

* * *

音の先には、他よりも一際大きな木があった。

「い、れは」

リーは言葉を失う。

木の枝には長さの違う縄があちこちにくくりつけられており、縄の先には30センチほどの竹筒がいくつもぶら下がっていた。リーが聞いたのは、これが揺れてぶつかり合つ音だつたらしい。そして、中心には1人の少女がいた。

「ハアツふつ」

桜色の髪を揺らした少女は自身に向かつてきた竹を手と足で弾き飛ばし、時には飛びのいて避けた。弾かれた竹、避けた竹はある程度揺れて、また彼女に向かっていく。少女はひたすらにそれらを弾き、避け続けた。その度に少女の桜色の髪が揺れた。

舞のようであった。

口を開けて呆然とリーは彼女を見つめていたのだが、舞はそう長く続かなかつた。

「あ」

疲れた少女がふらつき体勢を崩した。そこに竹が迫る。最初の竹はなんとか手で弾かれたが、後ろからきた竹を少女は避けられなかつた。

「いつつう

痛みに顔をしかめ、少女は大きく飛びのいた。

カラーンカラーン。

竹は先ほどまで少女がいた場所を通過していった。竹が届かない位置まで飛びのいた少女は、仰向けに倒れ込む。

カラーンカラーン。

「あー、まだまだかあ」

少女の顔は、リーの位置からでは見えない。しかし、声はリーにもはっきりと聞こえた。

修行が上手くいかなくて、ひたすらに悲しくて悔しい。
そんな思いが痛いほどに伝わってくる。

心配になつて近づこうとしていた足を止めて、リーはぎゅっと拳を握り締めた。こういう声を出す姿は誰にも見られたくないものだと、彼はよく知っていた。

カラーンカラーン。

邪魔者がいなくなつた木の根元では、いくつもの竹筒が楽しそうに揺れていた。

* * *

「休憩は終わりです」

リーは文字通り飛び起きた。彼の目の前には太い丸太がふてぶてしく立ちはだかっていた。

「右ひざ蹴り100回ー。」

気合の入った声と同時に彼は丸太を蹴り始めた。重たい音が森の中に響く。

硬い丸太を思い切り蹴りつけるとズシンとした衝撃と共に痛みが体を駆け巡る。リーの顔がゆがんだ。歯を食いしばった彼は痛みを無視して蹴り続けた。ズキズキしていた痛みは麻痺して段々分からなくなつていく。少しホッと息を吐き出した彼だったが、今度は足が重くなり上げるのが辛くなつた。今すぐ止めたくなり……どこからともなく、音が聞こえた。

カラーンカラーン。

「つ！ まだまだ！ 56つ57つ」

彼が諦めそうになると必ずその音は響いた。桜のように舞う少女を思い浮かべた。少女の姿はあの日以来見ていない。しかし、焼きついたあの光景は今でもはつきりと思い出せた。

カラーンカラーン。

今日も彼は音に背を押され、夢へと近づいていく。

第九劇「何よりも強力な応援歌」（後書き）

同期組みだけにするはずが、なぜカリー登場。何か他に接点あればという願望が出ましたね。

木登りを作中のサクラは簡単にこなしますが、今はまだ幼いことと、かなり大きな木の頂上までたどり着かなければ成功に数えていいためです。作中で語れなくてすみません。

修正＆空白行入れました（11・04・05）

修正（11・06・12）

第十劇「交わる視線」

「キャー、サスケくうん」

朝の教室に響いた恒例ともいえる甲高い声に、サクラはピクリと反応した。億劫に視線を動かせば、黄色い声の発信地にはイノと女の子たちの群れがあつた。彼女たちの目にはただ一人しか写っていない。

「ふん」

女の子たちの視線を独占している1人の少年は、女の子の歓声にまったく興味がなさそうだった。

黒い髪に紺色のシャツ。背につけた彼は、随分整った顔立ちをしている。顔だけでなく成績もトップで性格はクール、とくれば女の子が騒ぐのも、まあ無理はない。

「いつもながらサスケ君すごい人気だね」

「そうね」

隣に座っているヒナタの声へサクラは短く返した。そつけない態度だった。いつものことなのか。ヒナタが気にしている様子はない。「うあ～」唸つたサクラは机の上に顔を乗つけた。眠いのかまぶたが半分落ちかかっている。

そんな時、女の子たちに囲まれながら席へと向かっていたサスケが、ふと、目を動かした。

「つ

一瞬。

サクラとサスケの視線は確かに交差した。他の誰かが気づく間もなくサクラは目を閉じ、サスケは席へと目を向けていたが。

『ウザイんだよ、お前』

どこからともなく聞こえてきた声に何かがこみ上げ、サクラはソレを無理やり飲み込んだ。

* * *

悲劇の少年。

里の大人たちにそう呼ばれる少年の名前はうちはサスケ。忍びの名門、うちは一族唯一の生き残りである。

うちは一族は木の葉の里の一角に住居を構えており、小さな町ほどの規模があった。当然その人数が多い。にも関わらず、彼らは一夜にして殺された。しかもたつた1人の手によつて。

うちは一族を殺した男の名はうちはイタチ。かつて天才と呼ばれたサスケの兄だった。

「愚かなる弟よ」

イタチは血溜まりに倒れている両親へ目もくれず、サスケを真つ直ぐに見ていた。サスケは何が起きているのか分からなかつた。イタチは優しい兄だつた。忙しい身の上にも関わらず、時折サスケの修行を見ててくれた。落ち込んでいたら励ましてくれた。だからこそ、イタチから向けられている視線の冷たさを、理解したくはなかつた。

「なんで……なんでだよ、兄さん」「すべては」の器を図るために

平坦な声で、考えるそぶりも見せず返事は返ってきた。サスケは以前にもその言葉を聞いたことがあった。

あれは、イタチが殺害容疑をかけられた時のことだ。普段とでも冷静な彼がひどく怒りを覚えていて、今のような声で「俺の器はこの一族に絶望している」と告げた。あの時は理解できなかつた意味を、今よづやくサスケは理解した。

鍛錬所の床に座り込んだまま、サスケは首を何度も横に振った。何度も。何度も。何度も。

すべてを否定するように、彼は首を振った。理解など、したくな

いのだ。

「分からぬよ。だからってなんで、こんな」

じつとサスケを見ていたイタチの赤い目が、変わった。正確には目に浮かんでいる模様が。3羽の手裏剣のような黒い模様が、赤い瞳の中に浮いている。見ていると、心の底まで見透かされそうな不思議な目だった。

「ハ、ハチの巣を発見したみたいだねえ」

サスケが唐突に頭を抱えて叫び出した。イタチは何もしていない。
いや、違う。幻術をかけられたのだ。イタチが一族を殺していく映
像が、サスケには見えていた。

何度も父が、母が、友だちが、おばさんが、おじさんが、知っている人たちが、イタチに、兄に殺されていく。あるものは首をかき切られた。あるものは火遁の術によつて燃やされた。あるものは幻術により狂い殺された。またあるものは毒によつて死んだ。イタチ

による虐殺をとめる方法などサスケではなく、見せ付けられる映像にただ泣き叫ぶしかなかった。兄に「止めてくれ」とみつともなくすがり、頼んだ。

イタチはそんなサスケを見て、嫌悪したように眉間にシワを寄せた。ようやく幻術が解かれる。

「愚かなる弟よ、お前は殺す価値すらない」

映像から開放され呆然としているサスケの耳に、容赦ない兄の声が侵入してきた。

「しかしお前は俺と同じ目を開眼し得る者。俺を恨み、生にみつともなくしがみ付くといい。そして俺と同じ目を持つて俺の前に来い」

兄の言葉を、サスケはまだ理解したくなかった。力なく床に倒れ、涙を流しながら、

「ど、して、兄さん」

何度もか分からぬ問いをぶつけた。答えは短い。

「己の器を図るためにだ」

* * *

サスケが目を覚ますとそこは病院だった。顔には包帯が巻かれ、白いベッドで寝かされていた。

『聞いた？ うちは一族の話』

『ええ。生き残ったのあの子だけなんじょ。かわいそりに』

聞こえた会話に彼は思わず駆け出していた。

うちの家々があつた場所には黄色いテープが張られ、立ち入り禁止と書かれてあつた。サスケは呆然としたままテープを潜り抜けた。

いつも学校帰りに通つた道を歩いていく。

『サスケちゃん、おかえり』

「つ！ おばさ」

聞きなれた声にサスケは振り返つた。……誰もいない。いつも道を掃除していくせんべい屋のおばさんも、散歩をしているおじいさんもない。がらんとした通りが広がるだけだつた。我慢できなくなつてサスケは走り出した。

「あんなの、ただの夢に決まつてゐる。父さんは強いし、兄さんが、あんな」

本当は彼にも答へは出でていた。夢ではなく現実なのだと。

しかしそれでも受け入れがたくて、一縷の望みを持つて自宅へと急いだ。玄関で靴を脱ぐのも待てずそのまま上がり込む。

「父さん！ 母さん！ いるんだろつ？」

今、書斎、台所と周り、鍛錬所に着いた。やはり誰もいない。視界に入った床に広がる黒いシミは、否応無く悪い想像をサスケに抱かさせ、足から力が抜けていく。

「そんなん……かあさんっ？」

膝をつきそうになつた時、玄関でかすかな音がした。少し笑顔の戻つたサスケは玄関へと急ぎ、

「母さん！ おかえ

元気よく言葉を続けることはできなかつた。玄関にいたのは母ではなく、鮮やかな髪の少女だつた。サスケと同じぐらいだろう。どこか見覚えのある少女だつたが、今のサスケに思い出す余裕はなかつた。指先が凍えたように震えていた。

「あ、あの
「なんだよ」

心配をまとわせた声に、

『あの子もかわいそうにねえ』

病院で聞いた声が頭によぎり、自然とサスケの口調は固くなつて少女は肩を震わせた。俯いていたサスケにそんな少女の様子は伝わらない。……いや、伝わつたとしてもきっと結果は変わらなかつただろう。握り締めた彼の両手が、ぎしりと音を立てた。

「俺を哀れみにでも来たのか？」
「ち、ちがつ！ 私、ただ心配で」
「心配？ それが哀れみだつて言つてんだ！」
「ごめつごめんなさい」

前髪の間からサスケは少女を睨んだ。だが不思議と、少女の顔が

はっきりと彼には見えなかつた。彼は自分の中にあるやり場のない感情を、もてあましていたそれらの感情を、すべてぶつけるように少女を睨んでいた。

「ウザインだよ、お前」

* * *

少女がクラスメートであり、あの時の女の子だとサスケが気づいたのは事件後、大分経つてからのことだつた。気になつて時折目線を向けるも、翡翠の瞳と目が合つとサスケはどうしても逸らしてしまつ。

何かを彼女に言いたい気がしていた。だが、何を言いたいのか自身よく分からない。謝りたいのか。もっと攻め立てたいのか。…感謝を述べたいのか。どれでもあつてどれでもない気がした。

事件の後、サスケを心配して彼の元を訪れてきたのは、三代目火影を除けば彼女だけだつた。火影にしても事件から3日後だつたことを考えれば、本当に心配したのだろう。

あれ以来彼女とサスケは話をしていない。

ひどいことを言った。謝りたいし感謝もしたい、のだとサスケは思う。あの時吐き出せたから少し楽になれたことを、落ち着いた今、彼は痛感していた。

でも口を開けばまたひどいことを言つてしまいそうで、結局サスケは彼女に声をかけられない。事件の悲しみも、兄への憎しみも、弱い自分への怒りも、決して消えたわけではなく、彼女を見るとその時のこと思い出してしまうからだ。

「くそつ。だせえ」

今日もまた、サスケの1日が終わる。

第十劇「交わる視線」（後書き）

「」のままでいいと、原作のあの名言（？）が聞けないため、こうなりました。

ひとまず、同期キャラ遭遇編は終了です。とりあえず、わざわざ卒業させて原作に入りたいところ。

修正＆空白行入れました（11・04・05）
修正（11・06・12）

第十一幕「彼らの距離」

サクラの田の前には弁当が3つ並んでいた。ピンク色の小さく可愛らしい弁当箱と、オレンジ色の派手な弁当箱、それから紺色のシンプルな弁当箱。ほとんど中身は同じなのだが、やたらと紺色の弁当に気合が入っているようには見えた。

「うん。大丈夫。味も確認したし、焦げてるのはナルトのにしたし」

中々ひどい発言をしながら、サクラは箸と一緒に弁当箱を包んでいく。紺色のを包む時は手が震えていた。翡翠の瞳からは不安の色が消えない。

「お礼だけは、言わなくちゃ」

重たい弁当を抱えて、サクラはいつもより早く家を出た。まず最初にナルトの家に向かう。

慣れた様子でアパートの階段を登り、サクラはドアに風呂敷をくくりつけた。毎朝届けていれば慣れもする。本当は学校で弁当を渡すのが手取り早いのだが、ナルトが嫌がるためこうなった。嫌がるのは、照れ、などという単純なものではない。

里の人たちはナルトにとても冷たい。忌み嫌っていると言い切つてもいい。ナルトを見る視線の冷たさは、視線を向けられていなイサクラをも震え上がらせるほど。

ナルトはサクラにもその視線が行くのではないかと心配していて、人目がつくところでサクラに話しかけることはない。無理に話しかけようとすればナルトがひどく怯えるので、サクラはあまり話しかけないようにしていた。

そもそもナルトに弁当を作っているのは自分と同じく一人だった

彼への同情、だつたのかもしれないなどと考えてしまい、サクラは答えの出ない迷路に飲み込まれて動けなくなる。こんなことでどうするんだと自分を叱咤しても、寂しそうに去っていくナルトの背中を追いかけられない。きっかけが欲しいと思っている自分がなさけなくて、サクラは口を開いた。

「……っ」

しかし声はそこから出ではくれず、サクラは手を握り締めて立ち去った。

* * *

田の前にある立派な屋敷を見上げ、サクラはうつむいた。ナルトに対してもそうだが、今から自分がする行為は果たして正しいのか。

『ウザイんだよ、お前』

どうしてもあの一言がサクラの耳から離れない。

上手な励まし方なんて彼女は知らない。ただ、手伝いをしていた病院で看護士が話しているのを聞いてしまって。気がついた時には走っていた。何を言えばいいのか。何をすればいいのか。何も考えられぬまま走った。

その結果、彼を苦しめることしかできなかつた。自分はなんて無神経だつたのだろう。今ならソレが分かる。だから、接触はこれで最後にしよう。サクラは決めていた。

「あ、あのー」

第十一劇「彼らの距離」（後書き）

今回は短めで、途切れ途切れに。前後編っぽいです。
チームの中ではナルトとサスケの関係ははつきりしていて強いものがありますが、サクラだけ置いてけぼりな感じがしていたので、
ここら辺も大分変えました。

加筆修正（11・03・15）

修正＆空白行入れました（11・04・05）

修正（11・06・12）

第十一劇「お弁当がみつ」

サクラにとつて昼休みがこれほど待ち遠しく、またこれほど来な
ければいいと願つたことは今までない。

「はあ」

「ちょっとサクラ！　あんた今日どうしたの？　朝からずっと辛氣
臭い顔して」

「い、イノちゃんもう少し優しく」

チャイムの音と同時にため息をついたサクラへ、親友から辛らつ
な声がかけられる。相変わらずヒナタの言葉はフォローしているよ
うでトドメの一言だ。

「ヒナタ。そこは否定して欲しかつたな」

「あつこ、『めんなさい』

「で。何かあ」

「ねえねえサスケくうん。一緒にご飯食べない？」

イノの声をさえぎる黄色い媚びた声に、青い瞳が不愉快そうに細
まつた。イノの目線がサクラから外れ、サスケに向かう。サクラも
内心ドキドキしながらそちらを見た。

「断る」

「つものように女の子を一刀両断したサスケは、手ぶらで教室を
出て行つた。ホツと息をつくイノの横で、サクラは仕方がないと肩
をすくめた。初対面同然の相手から突然弁当を渡されても困るだろ
う。自分がサスケの立場でも気持ち悪いと思う……サクラは額を押

さえた。

「どうしたの？」

「ちょっと頭が痛くて」

「また難しい本でも読んでたんでしょう」

ははは。

軽く2人に笑い返しながら、サクラは自身につくづく呆れた。ずっとお礼を言いたくて、謝りたくて。でも自分の顔なんて彼は見たくないだろうと思えば一步を踏み出せなかつた。なんとかしようと必死に考えた結果がお弁当である。

なぜ弁当？

冷静になれば手紙で感謝と謝罪を伝えれば良かつたはずだ。直接顔を見せずにいたかつたのに弁当を手渡すなど本末転倒すぎる。…いや、そもそもなぜに弁当？ 考えれば考えるほど、変だつた。どうもサクラは必死に考えると変な方向に思考が進むらしい。

「とりあえずお弁当食べよっか」

「え？ 頭は大丈夫なの？」

「ヒナタ。あんたその言い方だとサクラの頭が変みたいじゃない。ま、変だとは思うけど」

「うつ、どうせ私は変人ですよー」

「ああああっ！ サクラちゃん、今のは本当に違つくて」

必死に違うのだというヒナタを見ながら、自分は心底彼女に嫌われているのではないかと思うサクラだった。

* * *

珍しく、サスケは呆然としていた。手には紺色の風呂敷。

『以前は助けていただいてありがとうございました。……それから、あの時はすいませんでした。

今更、ですけど、お礼とお詫びにお弁当作りました。良かつたら食べてください。いらなかつたら捨ててください。では』

最初から最後まで堅苦しいしゃべり方を通した彼女は、サスケの目を真っ直ぐ見て微笑んでいた。悲しげで、それでいて慈しむような瞳からサスケは目を逸らせなかつた。そのまま何も言えずにいる間に無理やり渡された風呂敷は、ずつしりと重たい。

『ほらサスケ。お弁当』

ふと笑顔で紺色の風呂敷を差し出す母の姿がサスケの頭に浮かび、冷たく黒い感情が湧いた。しかし、それ以上に温かいものを感じて、彼はしばらくな間たたずんでいた。

「変わった奴だ」

サスケは少し、笑つた。

そして今、空になつた紺色の弁当箱を見下ろし、彼は腕を組んでいた。渡された弁当は少し覚悟していたものの、普通に美味かつた。彼もある程度自炊はするが、ここまでの腕はない。だから、そのこと自体はいい。問題は、

「これをどうするか」

これ、とは紺色の弁当箱のことだった。中身は空なのでむづるん

軽い。

「返すべきだよな」

自信なさ氣にサスケは呟く。捨ててもいいとは言われたものの、食べたのだから空になつた箱は返すべきだ。返す際にあの時のことと謝るチャンスもある。しかし。サスケはグダグダと考え込んだ。いつ返すべきか。学校、は無理だ。校内では女子がうるさい。揶揄されるのが嫌でわざわざ中庭に弁当を隠した意味がない。家に直接届けるのが一番だつたが、サスケはサクラの家を知らない。

「放課後待ち伏せてつてストーカーか俺は」

普段冷静なサスケには珍しく随分と混乱しているようだつた。

* * *

いつも楽しみな昼休み。誰にも邪魔されないようになるとナルトは木の上で弁当箱を開けた。いつも以上に多種多様なおかずが見え、自然と頬が緩む。今日は随分と豪勢だつた。

「へへんつおいしそうだつてばよ。いっただつきま……！」

ニヤつく顔を抑えもせずにナルトは両手を合わせ、息を潜めた。普段人が来ないその場所に誰かが来たのだ。

あ、あいつ。

透かした顔をした少年を見て、ご機嫌だったナルトは唇を尖らせた。ナルトは少年、サスケが好きではなかつた。

早くどっか行けってばよ。じゃないとサクラちゃんのお弁当が食べれない——！

そわそわしながらサスケが立ち去るのを待つていると、あいりとか。サスケはナルトが座っている木の真下に座り込んだ。ビックやらこの場で昼を食べるらしいと悟つてナルトは「キイーっ」となつてしまつた。

なんで今日はここで食べるんだってばよ。

ナルトは毎日この場で昼食をとつてゐるが、サスケの姿は今まで見たことがない。仕方がない。移動するかと彼が思った時、サスケが弁当を開けた。

慌てて口を手で塞がなければきつと声を漏らしていただろう。ナルトは呆然とした。サスケの弁当に入つてゐる料理は、今ナルトの前にあるものと酷似していた。

ああ、そうか。

中身の配置や彩などには若干の違いがあるものの、ナルトにはあの弁当を誰が作つたのか分かつた。他にもどうして今日は豪勢なのか、とか。彼女が妙に落ち着きなかつたのはどうしてなのか、とか。分かつてしまふと急に体が冷え、移動しようとした体勢のまま、ナルトは動けなくなつた。

時折サクラがサスケのことを見ているのは知つていた。サスケもまたサクラを見ている事にも気づいていた。

だが2人の視線はどこか申し訳なさそうな、罪悪感を伴つた視線で。2人の間に何かあつたのだと察しても、あまり気にしたことはなかつた。

ナルトは視線を自分の弁当箱に向けた。サスケの弁当を見た後では明らかに見劣りがした。自分にとつて特別なのはサクラだが、サクラにとつて特別なのは自分ではない。目の前に突きつけられた現実に、彼は少し肩を落とす。しかしすぐに立ち上がり、

「サスケ！」

叫びながら飛び降りた。

* * *

突如降ってきたオレンジ色の塊に、サスケは間抜けにもほかんと口を開けてまつた。

「サスケ！」

金髪に青い瞳の少年には見覚えがある。「うずまきナルト。アカデミーの同級生で、そして自分と同じ、孤独を知る者。

「なんのようだ。ウスラトンカチ」

とりあえず動揺を隠し、いつもの声を出した。ウスラトンカチと呼ばれたナルトはムカツとした顔をした。忍びがそんな分かりやすくてどうする。思ったものの、サスケは口には出せなかつた。

「お前にばぜつてえ負けねーつてばよー」

ナルトは指を突きつけてそれだけ言つと、オレンジ色の包みを抱えて去つて行つた。

「なんなんだ、あいつは」

意味不明な行動に呆れた。

行動の意味をサスケが悟ったのは、その日の夕方だった。

弁当箱を返す方法を考えながら帰宅していたサスケの目の前に、見慣れた色が見えた。そういえば途中まで帰り道は同じだったと思い出す。まだ友達らしき2人と一緒にいるが、他に同級生は見えない。家まで尾行するわけにもいかないので、今が返す絶好のチャンスだつた。そして一言謝つて、このもやもやとオサラバすればいい。

「サークーラちゃん」

意を決してサスケが声をかけようとした時、能天気な声が響いた。

「ナルト？」

「へへっ。今日の一段と美味かつたつてばよ」

「それは良かった、けど……どうしたの、突然？」

自然と話す2人は仲がよさそうだ。サスケの記憶には2人が学校で話していた覚えはないが、ナルトがオレンジ色の包みをサクラに渡したのを見て、そういうことかと理解した。ポケットに入れた手を痛いほど握り締める。それでもしないと、また怒りをぶつけてしまいそうな気がした。

表面上は何事もなかつたようにサスケは彼らの横を通り過ぎた。

* * *

突然話しかけてきたナルトにサクラが驚きつつも喜んでいると、彼が通り過ぎるのが見えた。

「あ、サスケ君。またね」

イノが田をハートに変えて声をかけ、一瞬サスケと田があつた。ようこそサクラは思った。結局サスケは何も言わずに立ち去つたが、イノは「やっぱりカッコいい」とうつとりしていて、挨拶が返つてこなくとも良いなんて変わつてる。サクラは何度田か分からぬ感想を抱いた。

「ねえねえサクラちゃん。明田は俺も一緒に昼飯食つていい?」「えつ?」

ナルトが大きめの声を出した。サクラはまた驚く。本当に今日のナルトはどうしたんだろうか。少し心配になつた。

「何あんた。女の子の空間に割つて入ろうつて言つの?」

サクラの沈黙をどう受け取つたのか。イノがからかいつつに言つ。ナルトはちげーよと向きになつて反論した。

「なんだよ。シカマルだつて入つてるじゃねーか

「ああ、あれね。いいのよ、あれは数に入らないから」

「……えーっと。いつもこんな感じなの? サ克拉ちゃん」

「まあ、概ね」

「なんかシカマルが可哀そうなヤツに見えてきたつてばよ」

「とりあえず、あたしは構わないわよ。ナルト一人ぐらい増えたつて」

「そりゃ。ヒナタはど……あれ? ヒナタは?」

振り返つても、ヒナタがいたはずの場所には空氣しかなかつた。サクラが首をかしげると、イノがニヤニヤしながら「あそこあそこ」と指を刺す。不気味な笑顔にサクラが顔をしかめながら指差された

方角を見ると、10メートルほど離れた電柱の影に隠れたヒナタがいた。

イノがあの笑顔のままヒナタに近寄つていいく。ビクリと肩を震わせたヒナタだつたが、イノに何事か囁かれ、サクラに向かつて頷いた。イノが戻つてくる。

「オーケーだつて」

「おっしゃ！ ヒナター、ありがとな」

「（＼＼＼＼＼）」

「ちょっとナルト。あたしには感謝の一言もないの？」

「あー、イノもありがとうだつてばよ。……じゃ、サクラちゃん明日もよろしく」

手を振つて上機嫌で去つていいくナルトをよく分からぬままサクラは見送つた。ヒナタが戻つてきたのはナルトが角を曲がつて姿を消した後だ。何やら興奮した様子でサクラに詰め寄つてきた。

「さつさくつちやー いいいいいまのつなんつおべんどうが、たべー

「はいはいはい。ヒナタ、とりあえず深呼吸しなさい。はい、すつてえはいてえ」

すーはーすーはー。何度か深呼吸をして落ち着いたらしいヒナタを見て、イノがサクラに向き直つた。楽しそうな笑みに、サクラは思わず1歩下がつた。

「わ。吐くもの吐いてもらいましょうか

「吐くもの吐いて、サクラちゃん！」

別に隠すことでもないのでサクラはナルトとのことを2人に話し

た。この時初めてサクラはヒナタが恋をしていたこと、その相手が誰であるのかを知った。

「ええええっ！ そうだつたんだ。全然気づかなかつた」

「あんた鈍いもんね」

「言わなくてごめんね、サクラちゃん。その、は、恥ずかしくて」

「つづん。私もさ気づかず「ゴメン。知つてたらもつと前からお皿」」
飯ぐらい引っ張つてきたのに」

「つてかあんた。他にもいろいろ隠してるでしょ？ この際だから吐いてしまってなさいよ」

「サクラちゃんはサスケ君が好きなんだよね」

「くつ？」

「あー やつぱつヒナタもそつ思つ？ ま、負ける気はないけど」

「えつと？」

「自覚ないの？ サクラちゃん、サスケ君のことよく見てるよね」

「自分で気づいてないと、ほんとこつぶいわね、あんた。ほりほ
り、お姉さんに話してみなれー」

2人から詰め寄られたサクラは、彼女たちに囲ひざるを得なくなつた。

女の子つて怖い。

サクラは実感した。

第十一劇「お弁当がみつ」（後書き）

複雑な関係力モソ！（笑）

ナルトは落ち込むよりこんな感じで前向きなのが良いですね。サスケは変なプライドがあるて素直になれないさそう。ここにサクラは原作ほど押し寄せなタイプじゃないので、もどかしい感じ。まだこの時点ではつきりラブなのはナルト サクラぐらいですね。サスケとサクラは罪悪感でもやもやしているだけです。

あと女の子同士のコイバナってやっぱいいですね、といつ話。
今回やたらと長くてすみません。一話一話の量の違いに愕然としてます。

第一章は十五劇までの予定（は未定）。

修正＆空白行入れました（11・04・05）

修正（11・06・12）

第十二劇「せなか」

生まれてからずっと見る夢があった。だからサクラは今見ているものがいつもの夢だと知っていた。

『待つて』

夢の中で、サクラはずっと誰かを追いかけている。ありったけの声を出して精一杯手を伸ばすのに、誰かは振り返ることなく背中だけをサクラに見せ続ける。走っても走っても、歩いているだけの『彼』との距離は開いていった。

『待つて、待つて……君！ 置いていかないで』

その背中が見えなくなつたところでサクラはいつも目が覚める。ぼやけた視界の中、伸びされた自分の小さな手が、ひどく頼りない存在に見えた。

夢を見た日はいつも以上に修行に没頭した。没頭せざるを得なかつた。他の事を考えたくないのだ。

無心になつてクナイの素振りを続けていたサクラだが、一端休憩しようと呼吸を整えてぐくりと膝を地面に落とした。

『あれ？』

口からのんきな声が漏れ出た。サクラは足に力を入れようとするが、力の入れ方を忘れたように足は言う事を聞かない。身体を見下ろすと手も震えていた。いや、全身が震えていた。そこで気づいた。ああ、アレか。

時折やってきてはサクラを悩ませているものがきたのだ。

「はつ」

呼吸が乱れる。震える手で口元を押さえようとしたが上手くいかず、苦しくてその場に倒れ込んだ。短い呼吸が何度も繰り返され、心臓は文句を言つように激しい音を立てた。

「う」

目がカバンをとらえ、ぼんやりした頭でもあれを使えばと手を伸ばす。カバンまでは少し距離があった。手は届かない。誰かを呼ぼうにも声が満足に出せない。声が出たとしても演習場付近は人が少ないので、助けはなかつたろうが。

「おつおい！ どうしたつ？」

しかし聞こえた甲高い他者の声に、叫びたくなるほどの安堵をサクラは感じた。口調からすると男の子だらうか。顔は視界がはつきりしなかつたので見えなかつた。

「はあつはあ、か、ばん」
「カバン？ あつ待つてろ」

途切れ途切れの言葉を拾つてくれた男の子は、サクラのカバンを持つて傍にしゃがみ込んだ。サクラはありがとうを言う前にカバンを開けて顔を中に突っ込んだ。背後で驚いた気配を察したが、気にしている場合ではなかつた。……ただ、背中をそつとさすってくれたのが心地よかつた。

しばらくそうしていると呼吸が落ち着き、心臓も静かになつたのでサクラはカバンから顔を出した。まだ身体は震えていた。立てる

ようになるまでは時間がかかるだらう。

「大丈夫か？」

心配そうな声を出し、男の子が顔を覗き込んできた。だが、サクラの視界は酸欠と涙でぐにゃぐにゃしており、やっぱり彼の顔は分からなかつた。

「う、はつだいじょ」

「ぶじやなさそうだな。ちょっとここで大人しくしてろ。誰か呼んで来る」

「あ」

男の子はサクラが止める前に走り出していた。走り去る彼の背にはうちわの紋様。その背が、夢と被つた。

『待つて、待つて……君！ 置いていかないで』

サクラが手を伸ばした時には、すでに彼の姿は見えなくなつていた。

その後、駆けつけてきた里の大人に病院へ連れて行かれたサクラは、そこでの男の子の名前を知つた。

お礼を言いに家へ行つたものの生憎とサスケは留守で、彼の兄に伝言を頼んだ。

何度か直接言おうとサクラは足を運んだが、サスケの姿を見ると夢のことを思い出して声が出なくなつた。最近ではそんなこともなくなつたので、改めて礼を言おうと弁当を渡した。

* * *

「ちょっといきなりお弁当つて！
抜け駆けはなはだしいわ」

しんみりしそうになつた時、イノがいきり立つた事でそんな空気が吹つ飛んだ。心中でイノに感謝しつつ、サクラは苦笑した。

「抜け駆けつて、別に私はお礼がしたかつただけで。たしかになんでお弁当だったのか自分でも分からぬけど」

ふうん。ま、今のところはもういいとして置いてあげる。け

と負にしたがらね

気合を入れて いるイノに更なる訂正は いれなかつた。こうなつたイノに いくら言つても 無駄なのだ。だてに 彼女の 親友は して い ない。

「どうかいいねえ、お前は運営上手だねえ

「上手つて言うかまあ、毎日作つてたら自然にね」

「そうだ。サクラ！ 今度あたしたちに料理教えなさいよ」

卷之三

房は良しにとどまらず

「あんたは、か料理上手アヒールはスルイじゃない！　あたしもお、

「ズルイっ言われても……聞いてないし。はあ。で、ヒナタはどう

するの？」

「よかつたら教えてもらつてもいい?」

「わわわわわへへひがやん!」

真っ赤になつたヒナタにハハハとサクラは明るい声を出した。サスケとの関係修復はできなかつたが、2人とさらに友情を深められ

たから、結果的には良かつたと思えた。

「2人とも大好きよ～」

サクラは笑顔で2人に抱きついた。

第十二劇「せなか」（後書き）

イノの一人称はWIKIによると「私」らしいのですが、勘違いしていました。当方ではこのまま「あたし」でいきます。

サクラがなつてているのはいわゆる過呼吸。字の「」とく呼吸し過ぎでなります。対処法は自分の吐いた息を吸わせること。袋なんかを口元に当ててあげるのがよいらしいです。

サスケとの出会いは特に「都合主義になつてているかもしませんが、最初の方から構想としてありました。なぜ彼がそこにいたかは同期の中で1番演習場を使っているのがサクラとサスケだったから、なんですかどね。描写をどこにいれたらよいか分かりませんでした。いつか、書けたら良いな。

このサクラがどういう存在なのかは後々。

原発、作業員・周辺住民の方は大丈夫なんでしょうか。心配です。こちらの連載はちょっとどいつも？な、内容にならない限り投稿を続けます。

修正＆空白行入れました（11・04・05）

修正（11・06・12）

第十四巻「妨げるもの」

アカデミーの教育は5年間で、卒業試験に合格したものだけが忍びとれる。5年が長いか短いかは各自の取り方次第だが、サクラには月日があつという間に流れている気がしてならない。入学してからもう3度めの春を迎えていた。

サクラの修行は、入学当初とは比べものにならないほど質、量とも向上していた。今も木登り修行の次のステップ、水面歩行をしている。

水面歩行とは名の通り水面を歩く修行だ。足の裏から一定量のチャクラを放出し続けて身体を支え、水面に浮かす。木や壁と違い水面は不安定でコントロールは難しく、チャクラも木登り以上に多くのチャクラを使う。いっぽしの忍びなら当たり前にできるけどまだ忍びにすらなっていないものにはかなり難しい。

しかし、サクラはわざわざ足に意識を集中させずとも平然と川の上に立っていた。何か考えているのか、眉間に年々不相応なシワが寄っている。

「はあー。ホントに基礎しかやってないんだけど、これ以上はどうしたらいいんだろ？」

ほとほと困り果てていた。

書物は一般に貸し出されているものなら片っ端から読んだものの、今サクラがやっている以上のことば載っていない。忍びとは存在こそ公になっているが、内情はあまり知られていないのだ。忍びの技術は便利である一方、扱い方を誤れば危険極まりないものであるから仕方がないことではある。だからこそその学校で、誰もが忍びに耐えるわけではないのだ。

では誰かに教わろう、としたところ下忍（下つ端の忍び）です

らないサクラに教えてくれるわけはなく、教わる相手もない。イノやヒナタは忍びの一族なので親に特殊な術を教わっているが、サクラの家は一般家庭だ。第一、忍びの家系にはそれぞれ秘伝の技があり、同じ里のものでも教えてはくれない。もっとも、教えてもらつたとしても、一族の血を引いていないものには扱えないことがほとんどだ。

もちろんアカデミーには親が忍びでないものも大勢いる。だが、なぜだかサクラと仲が良いものはほとんどが忍びの一族の血を引いていた。イノ、ヒナタ、シカマル、チョウジ、キバ、シノ、サスケ。……ナルトは、分からぬ。彼の親をサクラは知らないから。

「私、本当に強くなつてゐるのかな」

両手のひらを見下ろす。小さな手は、マメや怪我だらけで全然女の子らしくなかつた。サクラは少しそれが悲しく、それ以上に誇らしい。つぶれたマメの上にマメができてまたつぶれ、を繰り返した手は「ひとつ」と硬くかさついていた。痛くて悲鳴を上げながらも修行を続けた自分の誇りである。

翡翠の瞳が潤んだ。

誰よりも修行したとは言わない。それでも、どうしてここまで成果が出ないのか。手裏剣をなげれば適度に当たり、適度に外れる。術を使えば成功はするものの、思った結果はいつだって出ない。試験の時はいつも重力が増したような錯覚を覚えた。

「いのまだと、私はまた

サクラつ！

「つー」

頭の中で呼ばれた自分の名前。目の前には広くて力強い背中。背中は徐々に小さくなり、やがて紺色をまとう。手を握り締めた。

「分かつてるよ。分かつてる。諦めたり、しない」

力強く言い切った彼女はいつものメニューをこなし始めた。

第十四劇「妨げるもの」（後書き）

忍びについての記述は捏造です。誰もが簡単に忍者になれるなら誰も忍者に依頼しないだろうという判断から。第一危ないしね。サクラの成績について質問をいただきましたがちゃんと理由があります。後々明らかになる、と、思います。お楽しみに。

訂正（11・03・28）

修正＆空白行入れました（11・04・05）

修正（11・06・12）

第十五劇「懺悔」

サクラに兄弟はない。親戚という親戚もほとんどない。祖父母は母方父方両方ともすでに亡くなっていたし、近しい者は叔父が1人いるだけ。しかし叔父は行方不明。他にも探せばもしかしたらいるかもしれないが、そこまでしなければ分からぬ親戚を、果たして親戚と呼べるのかは疑問だ。

まあ。何が言いたいかというと、サクラには身元引受人がいない、ということであった。

事が起きた時、サクラは五歳だった。本人からしたら『もう』五歳ではあつたものの、世間一般的に言えば『まだ』5歳の子供でしかない。いくら治安がよく連帯感の強い木の葉の里と言えども、1人暮らしするには早い。……前例はあるが。

しかしサクラは一人で暮らすこととなつた。彼女自身が強く望んだからだ。

当時から仲が良かつたイノには大反対され、イノの両親からは一緒に暮らすことも提案されていたが、サクラは家を売り払い、小さなアパートに引っ越した。両親の遺産にはなるべく手をつけず、新聞配達をして生活費を稼ぐようになった。

両親と過ごした家はすでにならない。数年の間は空き地になっていたが、今ではまた新しい家が建っている。こうしてあの記憶は薄れ、新たな記憶を積み上げているのだろう。周囲は確実に時を進め、変化している。

「じゃあ私は？」

サクラは問いかける。

「私は進んでる？」

手を伸ばし、硬い樹皮に触れた。サクラと同じ名前のその木は、誕生日に父が買ってきたものだ。小さかつた背はあつという間に抜かされ、今では見上げなければならないほど立派に育った。この木ほどではないが、この体も大きくなつた。だといつになぜなのだろう。時が止まっている気がしてならない。

顔を上げれば枝が好き勝手に伸びているのが見える。だが、花は見えない。花どころかつぼみすらそこにはない。里には桜色が溢れているといふの。この木は、一度も花を咲かせたことがない。

「お父さん、お母さん。私ね、私……卒業したよ、アカデミー」

木の枝が少し風に揺れた。

「卒業試験は分身の術だったよ。それで明日は説明会があつて、あつて」

言葉が出てこなくなつた。

もうすぐ、自分の役目が終わることを理解していた。彼女が目を見まとうとしている。そしたら、自分は。

「ねえ、サクラのお父さん、お母さん。怒りますか？ 憎んでますか？ あなたたちから娘との時間を奪つた私を」

翡翠の目がゆつくりと閉じられた。

「もう少しだけ待つてください。後少しで私は

消えますか

「ひ

第十五劇「懺悔」（後書き）

謎な話ですみません。今は軽く流していただいてかまいません。

あと、今回で第一章完結。第二章に入ります。
もつと修行編も考えていたんですが強くなりすぎても困るし、何
と言つても原作に入らないとつまらない（爆）。
それから第零劇をちょびっと改定。ほんと少しだけですが、関係
していくのは最後の方なので気になくとも大丈夫です。
叔父はオリキャラになりますが、登場予定は未定。迷った末に出
したい時に出せるようこのようにしました。ちなみに父親の弟
です。

修正＆空白行入れました（11・04・05）

第十六劇「前途多難なスリーマンセル」

忍びの証である真新しい額当てをつけた子供たちが教室に集まっていた。今日はアカデミー卒業生の説明会である。

どの子供たちも……大抵の子供たちが期待に満ち溢れた顔をしている中、ものすくへしんどそな顔をしているものがいた。

「ぐふう」

机に突っ伏しているのは、リボンの代わりに額当てで髪をまとめたサクラだ。説明会はこれからだといつのことすでに疲れきっている。

「大丈夫？ サクラちゃん」

そんなサクラを心配するヒナタは首元に額当てを緩んだ状態でつけていた。イノは呆れた顔をしている。彼女の額当ては腰だ。どうやら額当てといえど、つける場所は自由らしい。

「最後になるからつて頑張りすぎるからよ。馬鹿じゃないの？ あんた」

「うう。返す言葉もありません」

今日で忍びになるわけだが、忍びには任務が与えられ、任務に応じた給金が与えられる。今までよりも忙しくなることもあり、新聞配達は続けられない。なので今までお世話になつた恩返しのつもりで、まあ、張り切りすぎたのだ。いつもの2倍配達すれば、ソレは疲れるというもの。

「ふふ。でもそういう間抜けなどこれがサクラちゃんのいいところ

だよね

というフオローなのか。トドメなのか。相変わらず分からない一言をサクラがもらった所で、サスケくんと黄色い声が教室中に響き始めた。見ると、いつの間にか隣からいなくなっていたイノが、窓際に座っているサスケの席を巡って他の女子生徒と争っている。

朝から元気だなあ。

いつもなら気にならないサクラだが、疲れきった現状で黄色い声は耳に痛い。頭まで痛くなりそうだったので耳を塞いだ。

のだが、隣にいるヒナタの様子がおかしくなったので、サクラは目線を追いかけた。そこには相変わらずドハデなオレンジの服を着たナルトと、紺色のシャツを着たサスケがいたわけだが、2人の距離はありえないほど近かつた。というよりも、2人の距離はゼロで……つまり、何がどうなったのかは不明だが彼らはキスをしていた。ちなみに位置関係は、サスケが席に座っていてナルトが机に乗つている状態だった。

あまりにも衝撃的な場面を目撃して数秒。

「はっ？」

思わず耳から手を離してしまったサクラだが、気にせず2人を凝視した。

一瞬そういう関係なのかと思ったが、気持ち悪そうにしている様子を見る限り、違うらしい。前の席の男子が「え？俺のせい？」と言っていることから、彼が意図せずナルトを押してしまい、ああいうことになった、と思われる。

「ちょっとナルト、アンタねえ」

「よくもサスケ君の」

「えええっ俺のせいじゃねーってばよ」

女子に詰め寄られているナルトは視線を彷徨わせ、一いちらを見た。ナルトと曰があつたサクラは、口だけを動かした。

「（バーカ）」

「（そんな、サクラちゃん、助けてってばよ）」

ナルトの言葉を理解してはいたものの、先ほどまでのしんどそうな顔はどこへ行つたのか、サクラは面白そうな笑顔を浮かべるだけだった。

「さ、サクラちゃん。いいの？ 助けなくて」

服の裾を引っ張つてきたヒナタが控えめに言つてくる。しかし、

「ん～？ ヒナタがいけばいいんじゃない？」

「えつええつ？」

含んだ笑みを向けると途端に顔を赤くした友を、サクラは微笑ましく思いながら説明会が始まるまでからかった。……決していつも仕返しがしたかったのだと、そういうことではない。違うつたら違う。

そういうしているうちに担任であるつみのイルカが教室に入ってきた。途端に教室が静まり返る。

「君たちは一人前の忍者になつたわけだが、まだまだ新米の下忍だ。本当に大変なのはこれからだということを決して忘れるな。」

今後、君たちは三人一組の班を組んで、担当の先生のもと、任務をこなしていくことになる」

スリーマンセル。

イルカの言葉に反応して教室がざわついた。イノもヒナタもそわそわとしている。イノはサスケと、ヒナタはナルトと組みたいとも思ったのだろ？

そんな2人の間でサクラは「誰とも組みたくないな」と思った。特にサスケ。どう接すればいいか分からぬし、他のメンバーにせよ。誰かがいると頼りきりになってしまいそうで嫌だつた。まあ、そんなことを言つても仕方がない。3人という数字が任務遂行の上で適切なことは以前読んだ本で理解していた。

「力のバランスが均等になるよう、班分けはこつちで決めた。発表するぞ」

緊張して呼吸がどこかおかしいヒナタ。サスケ君と組めますように何度も呪文のように呴いているイノ。憂鬱なため息をついているサクラ。と、まさしく三者三様の反応を見せながら名前が呼ばれていく。6班まで呼ばれたが、3人はまだ呼ばれない。

「次、7班。うずまきナルト」

ヒナタが面白いほど肩を震わせた。

「春野サクラ」

ナルトが立ち上がり、ガツッポーズをした。

「うちはサスケ」

イノとヒナタががくつと肩を落とした。

「次、8班。日向ヒナタ。犬塚キバ。油女シノ
「えつあ、はい！」

聞こえてくる他の班組みを右から左へと流しながら、サクラは少し呆然としている。どうしてよりによつてこの2人なのか。サクラは今日一番の憂鬱な息を吐き出した。

「ちょっとサクラ！ サスケ君と組めるなんて羨ましいのになんでため息ついてんのよ」

が、隣のイノに怒られた。しまつた。口を塞ぐがすでに遅し。

「まつたく。なんであんなやつがいいのかね、女ってやつは」

ダルそうな声にイノの矛先がそちらへ向く。黒髪を高い位置で1つにくくつた少年、シカマルは、今日も相変わらずやる気がなさそうだ。彼の隣ではチョウジがポテチを食べまくっている。

「そんなことも分からぬの？ だからあなたはモテないのよ。まったく、あんたみたいなのは組みたくないものだわ」「へいへい。そうかよ」

自分から話しかけたわりにシカマルはどうでもよさそうだ。サクラはハハハと笑い、「ほんとそうだよね。イノちゃんの言つ通りだよ、サクラちゃん」という声に、笑顔のまま固まつた。どうしようか、振り向きたくない。

「次、10班。山中イノ。奈良シカマル。秋道チョウジ」

「うぐつ」

「組むことになつたみたいだな」

何事か言い合つ2人をよそに、サクラは泣く泣くヒナタの方を向いた。そこには満面の笑みを浮かべたヒナタがいて、気合を入れていなければ確実に悲鳴を上げていただろう。ヒナタははにかむことはあれど、あまり満面の笑みは浮かべないのだ。

「ほ、ほらあれよ。先生に直談判すれば変わつてもら
「イルカ先生つてばよ！」

必死になだめようとするサクラの声は、ナルトの大聲でかき消された。教室中の視線がそちらに向かう。

「優秀なこの俺が、なんでサスケなんかと組まなきゃならないんだつてばよ」

「あんのヤロー！ ナルトの分際でサスケ君になんてことを
「いっイノ！ ちょっと落ち着いて」

睨み殺さんとしているイノをなだめるサクラは、両手に花、ではなく……深く考えるのはよそう。イルカが、はあと腰に両手を当ててため息を吐いた。

「あのなナルト。サスケはアカデミートップの成績。ナルト、お前はドベ！ 班の能力を均等にするとどうしてもそうなるんだ。分かったか？？」

ドベのところで教室が笑いに包まれる。サクラも一緒に笑いたいが笑えなかつた。右からの圧力が半端ない。

「班、変われないみたいだね」

「アハハハハ……ごめんなさい」

別にサクラが決めたことではないのだが、謝る以外の選択肢は思いつかない。

「フン。精々足を引っ張るなよ。ドベ」

「なんだとおつ」

サスケとナルトは早速いがみ合つていいし、親友からはこの通り。せめて友との関係を修復しようとサクラは言葉を搜すも、ふさわしい言葉が見つからない。あたふたと無意味に手を動かす。

「くすくす。冗談だよ、サクラちゃん」

「え？」

「一緒に班になっちゃつたら、私、緊張して何も話せなくなると思う。だから、これでいいの」

「ん~そうね。サスケ君は押しても反応ないから、押して駄目なら引いてみろ作戦よ」

サクラはパチパチと数度まばたきをした。

「2人とも前向きだね」

「あんたが後ろ向き過ぎるのよ。ってかこつも考えすぎなの、サクラは」

「サクラちゃん、がんばろいっし~」

2人から言われ、考える。確かに同じ班になれたのならサスケとの関係修復にちょうどいい。誰かと組むと頼りそうになるのなら、頼らないよう心身ともに強くなればいい。

考えれば、そう悪いことばかりではない、か？

「うそ、ちがう……ナビ

頷きながら、サクラは冷や汗をかいだ。

「あの田線せものすいへ痛いんですナビ。」

あの田線とは他の女子たち（サスケファンクラブ）のあつ～～～い田線のことだ。ヒナタはつこと田をサクラから逸らし、イノは、

「まあ、諦めなさい。」

「やつばつ？」

肩をぽんと叩いてきた。サクラはがっくつと肩を落とす。 前

途多難だ。

第十六劇「前途多難なスリーマンセル」（後書き）

ゆづやく動く感じですね。第一幕開演。サクラの運命やこかにつ?

修正 & 空白を入れました (11・04・05)

修正 (11・06・12)

ナルトにサスケ、ね。あいつも大変そなとこに入れられたもんだ。

視界の隅でイノとヒナタを宥めているサクラを捉え、シカマルはそんなことを思った。

シカマルはナルトやサスケと特別親しいわけではないが、特別嫌つたり避けたりしているわけでもない。道端で会えば挨拶はする。その程度だが知っている事もある。

先ほどイルカが言つた通り、サスケはトップの成績でナルトはドベ。それだけでも窮屈だろうに、この2人はどうも相性が悪いらしい。何度も衝突する場面を見てきた。一見ナルトが一方的にサスケをライバル視しているように思えるが、そうじやないことは観察していれば分かる。そんな2人に囮まれれば、ただでさえいろんなもの抱え込んでいるサクラの負担になるのは、確実だった。

あいつ、最近吐き出さねーからなあ。

出会つた当初は、シカマルが上手く誘導すればそれだけでポロつとこぼしていた。しかし最近そうそう引っからなくなつた。日ごろの勉強の成果かもしれない。こんなところで発揮するなと思つても、これが中々に手ごわい。単純に知恵がついたこともある。だが、それだけじゃない。もっとも厄介なのは、

「シカマル、一緒のチームになつたね」

「ああそうだな。これからも頼むぜ」

「うん」

駆け寄つてきたチョウウジと軽く言葉を交わす。チョウウジは後ろを振り返つてイノやサクラにも声をかけていた。

「イノもよろしく！」

「はあ。まったく代わり映えしないメンバーよね」

翡翠色の目がチョウジに向けられた。シカマルの位置からだと、その瞳はよく見えた。

「いいじゃない。気兼ねない相手でさ」

「ムキー！ サクラには慰められたくないわよ！」

「ヒドイなあ」

怒り出したイノにサクラは呆れて苦笑している。シカマルは会話をなんとなく聞きながら、サクラの目を見ていた。翡翠の奥に、彼は時折『渦』を見た。グルグルと回る『渦』を見ていると奥へ奥へと吸い込まれて、最後はいつだつて身動きが取れなくなってしまう。図書館で敗北し続けているのは、つまりこのせいだった。

チョウジやイノにせりげなく聞いても見えないというその『渦』は、気のせいかと思うシカマルをあざ笑うように消えては現れる。今もかすかに見え、捕らわれる。

「ん？ シカマル、お弁当食べないの？」

「……食べる」

いつの間にか隣で弁当のフタを開けていたチョウジの声で我に返つた。シカマルは心の中で彼に礼を言つ。あの状態になると自分では解けないのだ。だからなるべく見ないように自分を戒めているのだが。

カバンから母親が準備してくれた弁当を取り出す。

つたく、俺は馬鹿か。

見るな見るなとシカマルがどれだけ言い聞かせても、目は勝手に翡翠を追いかけ、身体は嬉々として『渦』に呑み込まれる。

「相変わらずすうつい量ね」

「はは。あまり食べ過ぎると身体に毒だよ」

「大丈夫！ 父ちゃんも母ちゃんももつと食べてるけど健康だし」

「そ、そつなんだ」

横から聞こえる会話に、振り返りたくなって、シカマルはため息を吐いた。

問題「#9の謎の解法」（後書き）

結構謎なお話。徐々に明らかに出来たらいいなあ。
しかし、シカマルは書きやすい。

修正＆空白に入れました（11・04・05）
修正（11・06・12）

第十七劇「怪しい男」

新米下忍の第7班は、教室に取り残されていた。

昼休憩の後、他の班はそれぞれ担当上忍につれられてどこかへ行つたが、7班だけまだ来ていない。

「おっせえなあ」

サスケは無言、サクラは読書をする中、ナルトはドアから廊下を覗いていた。廊下は静かなもので、担当の忍びが来る気配は皆無だ。教師の姿すらない。

「……はあ。ナルト、少しは落ち着いたら?」

「だつてよおサクラちゃん。なんで俺たち7班の先生だけこんなに遅いんだつてばよ。他の班はとっくにいっちゃったのに」

仕方がなくサクラが声をかけると、ナルトは若干嬉しそうな顔をしてから不満をこぼした。サクラはナルトから再び本へと目を落とす。

「私が知るわけないでしょ。でも来ないものはじょづがないんだから、おとなしくしてなさい」

それきりまた本に意識を集中した。ちなみに今サクラが読んでいるのは『木の葉の歴史』だ。アカデミーの教材とは違つ、事細かに書かれた分厚い専門書である。決して1~2歳の子供が読むよつなものではない。

また相手にされなくなつたナルトは手持ち無沙汰に視線を彷徨わせ、サスケと目が合つた。2人の間に静かな火花が散る。

「ふんっ」

しばらくの後、ほぼ同時に目線は逸られた。

移り変わった視界の中で、ナルトは黒板消しに目を留めた。ぽかんとしてから、すぐに何か思いついたらしく「にひひ」と笑い、黒板消しと椅子を持ってドアまで移動した。サスケが訝しげにナルトを目で追いかけた。

ナルトは置いた椅子に乗り、黒板消しをドアの一番上に挟む。ドアを開けると黒板消しがドアを開いた者の頭に落ちる、という簡単な罠の完成だ。

「上忍がそんなブービートラップにひつかかるかよ、ドベ」「なんだとてめつ」

小馬鹿にしたようなサスケの声にナルトがいきりたつたその時、ドアの隙間から手が見えた。喧嘩するのも忘れた2人は、緊張の面持ちでドアを見つめた。ドアが横に動く。

がらがらッポン！

文字にするならこんな感じだろうか。入ってきた銀髪の男の頭に黒板消しは見事命中し、チョークの粉が宙を舞つた。ナルトが腹を抱えて笑う。

「だははははつひつかつた。ひつかつたってばよ。ほらよ、サスケ。ひつかつたじゃねーか」

サスケはナルトの言葉に無言だつたが、こんな上忍で大丈夫かといふ顔をし、サクラはナルトの大声で本から顔を上げたものの、きょとんとしている。状況が分からぬのだろう。

入ってきた男は わざとなのか、自然となつたのか だらし

なく斜めに額当てをつけており、左目が隠れて見えない。更には黒い布で鼻の上までスッポリ隠しているため、見えてるのは右目周辺だけ、というかなり怪しい見た目である。

服装は落ち着いた深緑のベストを身に着けていた。このベストは中忍以上の忍びだけに着用を許されたもので、ベストの下に着ている紺の上着とズボンは多くの忍びが着用しているものだ。顔を知らない以上アカデミーの教師ではない。十中八九、彼が第7班の担当上忍だろう。

男は床に落ちた黒板消しを拾い、笑顔で言った。

「なんていうのかな。お前らの第一印象はあ……ま！ 嫌いだ」

* * *

最悪な印象をお互いに持つた第7班は、外に場所を移していた。建物の屋上で、男はてすりに腰掛け、3人は男の前へ適当に座った。

「そうだな、とりあえず自己紹介でもしてもらおうか」

第7班を受け持つことになつた上忍の男は、面倒そうに言った。やる気あるのか聞いただししたい。

「自己紹介、ですか。えっとどんなことを言えばいいんですか？」

戸惑いがちに声を発したのは班の紅一点、春野サクラ。まだ子供なのに礼儀がなつてゐるなあ。最近の若い子は礼儀を知らないといふのに。まだ20代と思われる男はそんなジジくさいことを思い、思つてしまつた自分に密かに衝撃を受けた。

とはいって、そんなことは表に出でず、男は自己紹介について適当に語る。

「そりや好きなものとか嫌いなもの、将来の夢とか趣味とか。まー、そんなんだ」

「あのおさあ、あのさあ？　俺らのことよりまず先生が自己紹介してくれってばよ」

「んん？　俺か？」

先生ちょーあやしーしさあ。と、遠慮なくズケズケと言つてきたのはうづまきナルト。男は自分を指差して、少し面倒そうに頬をかいた。

「そうだな。俺ははたけ力カシって名前だ。好き嫌いをお前らに教える気はない。将来の夢つて言われてもなあ。……趣味はまあ、いろいろいりだ」

力カシは自己紹介をした。サクラやナルトが顔を引きつらせ、小声でささやきあつ。

「結局分かったの名前だけじゃない？」

「うん」

「じゃ、次はお前らだ」

生徒たちの声は聞こえていただろに意に介した様子なく、力カシは淡々と続ける。最初に自己紹介を当てられたのはナルトだった。額に装着した木の葉の額当てをいじりながら、彼は元気良く喋りはじめる。大きすぎる声量に、隣のサクラが少し迷惑そうな顔をした。

「俺の名前はうづまきナルト。好きなものはカツチーフ。もつ

と好きなものはイルカ先生におじつもらつた一樂のラーメン。嫌いなものはお湯を入れてからの3分間。趣味はカップラーメン食べ比べ！」

ラーメンばつか。

聞いていた者全員の心が一つになつた。が、周りの反応など気にせずナルトは夢を語る。青い目はキラキラと輝いていた。

「んで、将来の夢は火影を越す！　んでもつて里の奴ら全員に俺の存在を認めさせてやるんだ」

おそらくここがアカデミーの教室なら笑い声が響いていただろう。火影を越すなんてお前には無理だ、と騒ぎ立てるものもいたろう。その場にいるものは、誰も笑わずナルトの夢を聞いていた。カカシは面白い成長をしたものだとナルトを見ながら、残り2人の反応も観察した。サスケは興味なさそつだが、サクラは真剣に聞いているようだ。少し興味が湧く。

「なるほどね。じゃ、次。女の子……ああ、敬語は使わなくていいから」

「これからチームとして任務をこなすかは彼ら次第だが、ひとまずそう言って話を促した。

「えっと、名前は春野サクラ。好きなもの、というか宝物は2本のリボン。嫌いなものは、ちょっとすぐに思いつかないから多分ないと思う。趣味は……森の散策と植物観察。将来の夢、か。夢つて言うより目的は」

サクラは、そこで一端区切り、息を整えた。

「ある人を救うこと」

真っ直ぐ前を向いたサクラは力強く言い切り、「それぐらいかな」と照れくさそうな笑みで締めくくつた。

カカシは相槌を打ちながら軽く目を伏せた。担当上忍の元には各下忍の情報があらかじめ伝えられている。名前や顔写真、身長、体重、年齢、成績だけでなく、家族構成や経歴も。サクラの経験の中にはこんな文章があった。

『エイノ事件被害者の娘であり、本人もまた現場にいた関係者である』

あれからもう7年も経つのか。どおりで年を食う訳だ。
またもやジジくさいことを考えながら、カカシはサクラを見た。

第十七巻「桜じい男」（後書き）

さて、次は原作から離れ、この小説のサクラの過去話になります。
よろしければお付き合いください。

修正＆空白行入れました（11・04・05）
修正（11・06・12）

第十八劇「エイノ事件」

サクラの家は、父親は医者で母親は元看護士、という医療一家だ。父親は医者という職業に誇りを持っていた。そんな父をサクラはとても尊敬していた。だから朝早くに起きて仕事に行く父親を必ず見送った。彼の背中を見送るのが大好きだった。

そんなサクラであるから、医者というものに关心を持つのは当然の流れだつたろう。幼いながらも医者について調べた。人の命を救う尊い仕事だと分かつた時は、忍びではなく医者を目指してもいいかもしれないと思つたほど。

勉強に力を入れ始めたのは、おそらくその頃からだ。

「サクラもおとうさんみたいにだれかをすぐれるおとなになるの!」「そうか！じゃあ勉強頑張らないといけないね」「うんっがんばるよ」「はいはい。勉強は分かつたから、二人とも好き嫌いせずに全部食べなさい？」「うつ……はい」「ううつはあい」

母親は勉強ばかりのサクラを心配していたが、それでも止めたりはしなかつた。父親は嬉しいのか、時折サクラを病院につれて医療の現場を見学させたりもしていた。

遊ぶより勉強が好きとは変わつた子供であつただろうが、それでも両親がいて、いつも笑顔が絶えない。「ごく普通の家庭で彼女は育つた。

事が起きたのは夕食の時間。

サクラは母親を手伝つて食器を運び、父親はテレビを見ていた。

なんら変わりない食卓に、

「春野……お前のせいで姉貴は死んだんだ」

突如響いた声があつた。驚いて振り返れば若い男が立っている。いつ、どこから入ってきたか分からないその男に、サクラは見覚えがなかつた。しかし父親にはあつたらしい。驚いていた。

「エイノさんっ？ 一体な」

「姉貴を殺しておいてお前はなんで笑ってるんだ。なんでお前は、俺は一人で」

サクラは男の言葉を理解できない。父親が顔をしかめたのが見えた。

「エイノさん、落ち着いてください」

「つむさいっ！ お前にも俺と同じ苦しみを『えてやる！ 孤独を知れえっ」

ギョロリとした男の目がサクラを見た。男の手には黒く光るクナイが握られていた。

「 サクラっ！」

何がおきているか分からぬうちに、サクラの前には見慣れた背中があつた。

「ちいっくそっ放せ！」

「いほつさつ、ら、逃げ」

「どけだ」

父親の身体がゆっくりと崩れ落ちていった。理解が追いつかない。男に蹴られた父親が床を転がっていく。床やカーペットには赤いものが付着していた。赤は見ている間にも侵食して周りをどんどん染めていく。

あんなどこかにペンを置いてあつたわけ？

「くわづくわづくわづー。
やる。お前も同罪だー。」
勝手に死にやがつて。殺してやる殺して

真っ赤になつた目がサクラを再び捉え、すぐに逸らされた。男の腹にピンク色がまとわりついていた。

「逃げなさいつサクラあ！」

母親が男の腰に抱きついて叫んでいた。男が忌々しげに舌打ちする。男はクナイを振り回し、母親の目元を切り裂いた。赤色が母親の髪を染めた。それでも母親は男を放さなかつた。

クナイの持ち方を変え、男は母親めがけて振り下ろそうとしていた。……ふと、棚の上においてあるハサミがサクラの手に留まつた。気づいた時、サクラはハサミを握つていて。

六

エイノ事件。

とある家に刃物をもつた男が侵入し、その家に住む夫婦を殺害。

夫婦の子供は無傷で保護。

犯人の名は影乃ハクト。^{エイノ}姉が一人いたが、病死。その死を担当医であつた被害者のせいと逆恨みしての犯行と思われる。犯人は自害。

以上が一般に公表された内容である。以下に詳細を載せる。尚、この情報は把握次第処分すること。

犯人の影乃ハクトは一般人ではなく、暗部の者である。この事実が与える影響を考え非公開となつた。また、自害ではなく何者かに刺殺されたと見られているが、現場には他に夫婦の子供（当時五歳）しかいなかつたことが確認されている。

凶器はハサミ。子供が握っていたものと傷口が一致。影乃の血を大量に浴びていたことから、子供が殺したと見られるが、仮にも暗部をただの子供が殺せるのか。子供に逆行催眠をかけたが、ハサミを握つた以後の記憶が途切れている。

他にも家にはまるで竜巻が起こつたような跡もあり、実際に近所の住民が竜巻を目撃している。この事件については不明な点が多くあり、疑問は尽きない。

三代目火影の命により、子供の殺害容疑については不問となつた。

第十八劇「エイノ事件」（後書き）

サクラの両親について。

原作では特にサクラの両親については描かれておりません。が、弟子入りの際にまでに医療に関する特別知識があつたわけでもなさそうなので、おそらく本当に一般人だったと思われます。そしてサクラの性格などを考えても両親は共に健在でしょう。

本小説内では上記の仮定を元に進行します。矛盾していますが後々判明します。

ちなみに、エイノ ハクトは、影乃薄人と書きます。思いついた時ふはつと笑った。影の薄い人はもちろんオリキャラです。

修正＆空白行入れました（11・04・05）
修正（11・06・12）

第十九劇「真逆の夢」

『将来の夢、か。夢つて言つより目的は……ある人を救つこと。それぐらいかな』

カカシは意識をサクラに戻し、言葉を反芻した。ある人というのがひつかかたが、彼女は医者の子供だ。不特定多数の、という意味なのかもしね。

しかしナルトに続いて、この子もまた随分と真っ直ぐ成長したもんだな。カカシは少し感慨深く思いながら、最後の少年を目で促した。彼の夢には想像がついたが。

「名はうちはサスケ。嫌いなものはたくさんあるが、好きなものは別にない」

サスケは平坦な声で淡々と語り、夢の段階でその目に暗い光が宿つた。十一歳の子供には不釣合いな光だ。

「夢なんて言葉で終わらす気はないが、野望はある。一族の復興とある男を必ず、殺す、ことだ」

しんとその場が静まり返った。 やはり、か。

先ほどのサクラとは真逆の目標に、彼女が少し目を伏せたのが見えた。ナルトは、自分じやなかろうかとビビッているみたいだった。安心しろ。お前じやないから。

カカシは心の中でナルトを励ました。もちろん伝わることはない。

「よーし、三人とも個性豊かで面白い。明日から任務やるぞ」

場の雰囲気など関係ない！ とばかりに能天氣な声でカカシは言った。すぐさま元気を取り戻したのはナルトだ。ワクワクした表情でどんな任務なのかと聞いている。良くも悪くもムードメーカーな少年だ。

「まずはこの四人だけでできる」とやる。……サバイバル演習だ」「さばいばる、演習？」

カカシの一言一言に大きく反応するナルトを余所に、サクラもサスケもかすかに眉を寄せただけで、随分と落ち着いていた。

「もちろん、ただの演習じゃない」

「んん？ ジヤあさじやあわ。どんな演習なの？」

* * *

ナルトが尋ねるとカカシは突然笑い出した。

「何がおかしいんだってばよ、先生」

「くくくくくついや。俺がこれ言つたらお前ら絶対引くからや」

前置きしたカカシは笑いをまた突然止めて、言つた。

「卒業生二十七名中、下忍として認められるものはたった九名。残りは全員アカデミーに帰される。つまりこの演習は脱落率六十六%以上の超難関テストって訳だ」

ナルトが大口を開けていた。サスケの表情に変化はあまり見えない。サクラは、少し驚いたものの、むしろ納得していた。卒業試験が分身の術だけできれば合格、というのは簡単すぎると思っていたのだ。あれで忍びになれるのならほとんど誰にでもなれる。だが、現実は忍びになれない者の方が圧倒的に多いのである。

大きく反応したのがナルトだけだったからか、カカシはちょっと残念そうな顔をした。もつと驚いて欲しかつたらしい。

「そんな馬鹿な！ あれだけ苦労したってのに。じゃあ、何のための卒業試験だつてばよ」

叫ぶナルトをサクラはちらりと見た。ナルトは分身の術が大の苦手なのだ。……全体的に成績は低い、のだが。

そういえばどうやつて卒業したんだろ、ナルト。

依然サクラが見たナルトの分身の術は、何やらペラペラの白っぽい言われればナルトかもしれないなあたぶん、という物体を生み出していた。さすがにあの状態で合格した訳ではないだろう。どんな特訓したんだか。

「んあ？ ああ、あれは下忍になる可能性のある者を選抜するだけ。ま！ そういうことで明日は演習場でお前らの合否判定をする。忍び道具一式持つて朝五時集合。あ、それと朝飯は抜いて来い。吐くぞ。じゃ、解散」

最後に物騒な言葉を残し、謎の上忍は姿を消した。

第十九劇「真逆の夢」（後書き）

忍者になる難易度について。

忍者が一般人より少ないとしたのは、誰でもなれるなら学校がないことや、皆が忍者なら忍者に依頼する必要もなくなり里の維持ができない等が上げられます。他に、戦えない者を避難させるシーンもあるのでこうしました。

まだ演習に入つてません。が、自己紹介のところは結構大事な話なので飛ばしませんでした。

次回はいよいよ演習です。かなり気合を入れつてしまして、長めです。
戦闘シーンは難しい。

サクラがどう活躍するのかお楽しみに！

あと気になつてるんですが、卒業生二十七名なのに十班あるんですね。一班めが再試験生徒だから一緒に数えていないだけなのか。うーん。謎だ。

修正＆空白に入れました（11・04・05）

修正（11・06・12）

第二十劇「サバイバル演習の謎」

朝五時、演習場。

まだ日も昇っていない時間ではあるが、元々早起きであるサクラは普段と変わらぬ表情でその場に着いた。

「おはよー、ナルト……サスケ君」

「サクラちゃん、おはあおう」

「……ああ」

眠そうに目をこすったままのナルトと、こちらもこつも通りのサスケに挨拶をした。サスケの名前を呼ぶ時は緊張を押し隠すのに必死だったが、返事が返ってきたことにサクラはホッとする。話しかけるのはあるお弁当事件以来だ。

他には特に話題がなく、騒がしいナルトもオネムなため三人の間には沈黙が降りた。

やがて日が昇り辺りが明るくなった。カカシの姿はどこにもない。疲れたサクラはとうとう座り込んだ。ナルトはいびきを上げている。サスケは黙っているが、機嫌が悪くなっているのが一目で分かる。

「やあ、諸君。おはよー」

と、カカシがやってきたのは影がだいぶ短くなつた頃だった。さすがに目の覚めていたナルトが大声で抗議する。いつもならなだめ役のサクラも、じとっとカカシを見た。サスケは睨んでいた。

「おっそーーーーいってばよ」

「それがな、目の前を黒猫が通り過ぎても。いやほほほほほほ……」

「ほん」

途中で言い訳の空しさに気づいたのか。カカシは咳払いしてナルトの抗議を遮り、目覚まし時計を丸太の上に置いた。丸太は地面に突き刺さるように立てられており、高さはナルトたちよりも少し高い。時計が置かれたのは三本あるうちの真ん中で、セットの時間は十一時、今の時間は十一時過ぎだった。もはや遅刻というレベルではない。

チリン。

サクラたちに向き直ったカカシの手には一本の紐と、それにつけられた鈴が一つ揺れていた。

「本日の課題は俺から昼までにこの鈴を奪うことだ。奪えなかつたものは昼飯抜き。」この丸太に縛り付けた後、目の前で俺が弁当食うから

丸太を叩きながらにこやかに告げられた。朝飯食うなつてのは、つまりこいついうことだつたわけだ。素直に朝飯を抜いてきた三人の腹が鳴る。空腹を忘れるようにサクラが質問した。

「でも先生。鈴が二つしかないけど」

「ん。そうだな。最低一人は丸太行きになる。そいつは任務失敗つてことで失格だ。アカデミーに戻つてもう。不合格者は最低一人かもしれないし、全員かもしれない。手裏剣使つてもいいぞ。俺を殺す氣で来ないと取れないからな」

僅かにサクラは眉間にシワを寄せた。何かが引っかかった。考え込もうとしたが、ナルトの大聲でサクラは意識を目の前に戻す。

「先生、黒板消しもよけられないのあぶねーってばよ

「世間じや実力のなにやつほぞ呟えたがる。まー、ドベはほつとこ
て、よーいスタートの合図で」

「どべつ？ ほんの……くつそー たあああつ」

あつさつと言葉を返されただけでなく、ドベと一蹴されたナルト
は田を吊り上げ、クナイを握り締めてカカシに襲い掛かった。
はずだった。

「まあまあ、落ち着けよ。まだスタートは言つてないだろ」

カカシはいつの間にかナルトの背後にいた。ナルトの腕を取り、
金色の後頭部へ彼自身のクナイを向けさせた状態で、何事もないよ
うに立っていた。ナルトはまだ一步も足を踏み出していない。サク
ラはぱいくつとつばを飲み込んだ。

いつの間に 見えなかつた。これが上忍の実力。

「でも、ま。これで俺を殺す氣になつたようだな。やつとお前らを、
好きになれそうだ。始めるぞ。

よーい、スタート！」

演習開始だ。

* * *

忍び足るもの、基本は気配を消し、隠れるべし。

基本原則通り隠れたサクラは先ほど中断した思考を再開せし……。

「こぞ、尋常に勝負、勝負だつてばよ」

またしてもナルトの大声に遮られた。あの馬鹿。

肩を落としているサクラ同様、カカシもまたがくつとしていた。
忍者の癖に真っ向勝負とは、ある意味で意表をついている。

「あのおさあ、お前ちどぞれでない？」

「ズレてんのは先生^{そつち}の髪型だろ」

忍者らじしくもなく真正面からぶつかって行くナルトに対し、カカシは呆れつつどこまでも落ち着いていた。そして、片手を腰のポーチに入れて中を探る。ナルトもさすがに警戒したのか、足を止めた。

「忍び戦術の心得その一、体術を教えてやる」

言いながらカカシが取り出したのは……『イチャイチャパラダイス』と書かれた本だった。裏表紙には年齢制限マークが描かれている。つまり、そういう本らしい。なぜかカカシはそのままイチャバラ（本の略称）を読み始めた。彼の意図がその場の誰にもつかめない。

戸惑っているナルトにカカシはどりした、と問いかけた。彼の目は本から全く離れない。目が動いているので本当に読んでいるのだろう。首をかしげてナルトは尋ねた。

「あのおさあ、なんで本なんか？」

「なんでつて……そりや話の続きが気になっていたからだよ。気にはんな。お前ら相手じや本読んでも関係ないから。ほら、さつとかかってこい」

あからさまな挑発だった。

「「」なんのおつぽつ！」ぼこにしてやるー。」

とてもあつさり挑発に乗ったナルトが繰り出した拳を、力カシは視線を一切向けないまま片手で受け止めた。パシッと小気味よい音が鳴った。ナルトは表情を険しくさせ、身体をひねった。続いて放たれた回し蹴りを力カシはしゃがんで避け、また拳を突きつけたナルトの上空を軽やかに飛び越えて、彼の背後でしゃがんでいた。流れれるような身のこなし、とはこういうことなのだろう。

「あり？」

拳を前に出したまま力カシの姿を見失ったナルトが首をかしげた。力カシは呆れた声を出す。

「忍者が何度も後ろ取られんな、バカ」

力カシはいつの間にか閉じていた本を両手の中に挟み、両手の指一本を立てていた。それは火の術、火遁かどんを使う寅の印に似ていた。下忍相手に使うようなものではない。慌てたサクラはナルトに逃げろと叫ぼうとし、

「木の葉隠れ秘伝体術奥義、千年殺しいいいいつ！」

その前に、力カシがナルトの尻に思い切り指を突き刺していた。口を開けた状態でサクラは固まる。……寅の印でもなんでもなく、ただのカンチヨウらしい。勘違いにサクラの顔が赤くなつた。何が秘伝だ。

「ぎやひいいいいいいん！」

一応威力はあつたらしく、ナルトが叫び声と共に飛び上がり池に落ちていった。派手な水しぶきを見ながらサクラは思考を切り替える。

と、とりあえず。

あの動きを見る限り、自分の実力では到底かないとこない。サクラの結論はその一言につきた。大体忍びにすらなっていない彼女たちに、上忍から一本取れとは無理すぎる。これでは九人どころではなく全員失格になるだろう。そういうこともまれにあるかもしれないが、さすがにこのままでは試験にならない。実際に合格者が何人もいるわけだから、必ずどこかに合格する穴があるはずだった。サクラは考える。

「ははははは」

目の前ではカカシが本の内容に笑いながら、池からナルトが放った手裏剣を指でくるくると回している。こんな相手から自分一人で鈴を取るなどふかの…… 一人？ サクラはハツとした。

そうだ。オカシイ。

そもそもなぜサクラは一人で鈴を取ろうとしているのか。鈴が一つしか用意されておらず、誰か一人は不合格になると言われたからだ。

じゃあわざわざスリーマンセルに分かれたのはどうしてなのか。卒業生二十七名中、九名しか合格できないのであれば、チーム分けせずともそのまま最終試験をした方が手取り早い。しかし実際は三人に分けてている。何か理由があるのでどう。

「スリーマンセル。卒業生二十七名中、合格者はたつたの……九名

？」

口に出してサクラは気づいた。

合格者は九名。随分と中途半端な数字だが、これを班分けで考えるとちょうど三班になる。カカシは合格者九名という言い方をしたが、もしかしてこれは三つの班が合格するということではないだろうか。最低一人は不合格なのではなく、全員合格か全員不合格のどちらか。つまり班員の三人で何かをしなければならない。そう考えると班分けをした理由にも納得する。

だがカカシは一人は不合格と言つた。サクラの推理が正しいのならカカシは嘘を吐いていることになるが……なぜそんな嘘を。

あの嘘の中に、合格の答えが眠っているのだろう。考える。自分はこんなところでつまづいている場合じゃないのだから。

「ん？」

水音と共にびしょぬれのナルトが池から上がってきた。座り込んでいる彼の腹から空腹の音が聞こえ、サクラも思考で忘れていた空腹を思い出し、ちょっと情けない気持ちになった。

「じゃなくて、考えなきゃ」

首を横に振ったサクラは、カカシとナルトを目で追いながら考える。もし三人同時に合格するという推論が正しければ、鈴が一つしか用意されていないのはなぜだろう。三人で何かを成し遂げる必要があるのでないのか？ これでは逆に仲間割れを起こしてしま、う？

「あ

サクラは数度瞬きをした。そつか、そういうこと。

目の前ではナルトが七人となつてカカシに襲い掛かっていた。足音が聞こえるので、ただの分身の術ではない。実体がある。サクラ

の知らない術だつた。

しばしそれらをボケッと見ていたサクラは、太ももに手を伸ばし手裏剣を手に取る。この試験の本当の狙いが分かつた今、ただ隠れている訳には行かなくなつた。

とはいへ、むやみやたらと手裏剣を投げるわけにも行かない。自信はそこそこのがナルトの動きが読めない以上、動きを阻害してしまつだけだ。サクラはじつと様子を伺う。ちょうどナルトの本体が力カシの背後をつき、動きを止めているところだつた。

「しまつた」

「忍びは後ろを取られちゃ駄目なんだろ、せんせ！」

そのまま他の分身体が力カシの四肢をがっちりと固め、残りの一体が力カシに殴りかかる。もしかしてフォローせずとも終わつてしまつ？

「えつ？」

しかし、殴られたのはナルトだつた。……どうやら力カシはナルトの分身体と変わり身の術で入れ替わつたらしい。その事に気づかないナルトは「お前つてば力カシ先生が変化の術で化けてるんだろ」と分身体に殴りかかり、分身が全て消えた時ぽつんと一人で佇んでいた。ものすごくかっこ悪いが、こっちの方がナルトらしかつた。

「でも力カシ先生はどこに？」

未だ手裏剣を構えながら力カシの姿を探すが、さすが上忍。全く気配がない。

そしてナルトは“たまたま落ちていた”鈴に目を輝かせていた。疑うこ

となく鈴の元に向かう彼は、本当に忍びなのだらうかと疑いたくなる。

「先生、慌てて落としていつたんだな。ラッキー！ これで鈴ゲツとおねおねおねおねおねおねおねおねおねおねおねおねおねおねおね？」

鈴にナルトが手を伸ばした瞬間、繩のしなる音がした。一瞬のうちにナルトは両足を繩で縛られて木に逆さ吊り状態になっていた。サクラは頭痛を覚え、空を仰いだ。そんなの罷に決まってるでしょ、なんで引っかかるの。

「術はよく考えて使え。だから逆に利用されるんだ。それと……バレバレーの罠にひっかかるんな、馬鹿」「んつ」^{ハヤハヤ}

木から現れたカカシは鈴を拾い上げ、ナルトの目の前で音を鳴らして見せびらかしていた。サクラは氣を取り直す。まだ動けない。今ナルトを罠から救つても意味がない。

「忍びは裏の裏を読め」

カカシは身動きの取れないナルトに向かつて言つて居るようで、その言葉が自分たち全員に向けられたヒントだとサクラは気づいた。そう。裏の裏を読まなければいけないのだ。

逆さ吊りのナルトはピヨンピヨンと跳ねる。はたから見ていると遊んでいるみたいに思えた。

「んなの分かつてゐてばよー」

「あのね、分かつてないから言つてんの。大体お前の動きつて無駄だらけなんだよ」

その時、多数の手裏剣がカカシに向かつて飛んでいった。サスケだ。サクラもここでようやく手裏剣を放った。サスケとは違いサクラの目的はカカシではなく、ナルトの縄。そして場所がばれただろうからすぐに退避する。今までのことからカカシがあれだけでやられたとは到底思えない。

予想通り、手裏剣がささつたように見えたカカシは丸太へと姿を変えた。先ほども使つた変わり身の術だ。ナルトが無事に脱出できなかは分からぬが、ひとまず話をするならサスケからだろう。ナルトの周囲は見晴らしがいいから話し合いもできない上に、彼の性格を考えると身を隠すなんてこともないだろう。……忍びとしてそれはどうなのかと思うが。

とはいって、サスケも移動しているのでどうやって探すかが問題だ。演習場は広く、時間制限もある。説得するのも大変そうだ。それに作戦も立てなければならない。しかし落ちる訳には行かない。

サクラはぐつと拳を握り締めた。

第二十劇「サバイバル演習の謎」（後書き）

サクラの推理について。

第一期の時点でサクラが能力を発揮できるのは頭脳ぐらいだらうと判断し、第七班のブレインとして頑張つてもらうつもりです。なので今後このような推理場面が多く出てくると思います。分かりにくい点、間違っている点などがあれば遠慮なく教えてください。原作を知らない方、知っているが細かいところを忘れた方のためにかなり描写を多くしています。わざわざいかもせんがお付き合いください。

しかしサクラ視点で一番困るのはサクラ自身がほとんど戦闘に参加していない点です。当事者以外の目線だとこんなにも戦闘描写が大変だとは思いませんでした。精進します。

演習編は後一話+です。

修正&空白行入れました（11・04・05）

修正（11・06・12）

第一十一劇「答え合わせと本物の意味（こたえ）」

「説得したら、ナルトにさつきの術で注意をひきつけ足止めしてもらって、私とサスケ君で鈴を……ううん。私はナルトのフォローするべきか。先生を一人で止めるのは無理ね。でもそうすると」

目の前を走る少女の咳きを聞いたカカシは、僅かに目を細めた。
気づいたか。

先ほどもナルトの縄に手裏剣を放っていたことから「もしかして」と思っていたが、これは間違いなさそうだ。今は作戦を練りながらサスケを探しているのだろう。声に出しているのは甘いが。

合流させるか、どうするか。カカシは少し悩んだ後、サクラ自身の実力を確かめることにした。場に不釣合いな明るい声をサクラにかける。

「サークラ」
「はつ」

振り向くと同時にサクラはカカシに手裏剣を放ってきた。反応、手裏剣の狙いは共にアカデミー生にしては、合格ラインか。思いながらカカシは手裏剣を片手ではじき、素早く印を結んだ。サクラが目を開いて息を呑み、しかし目が空ろとなり虚空を見つめ始めた。サクラの周囲では不自然な風が大量の木の葉を踊らせている。

忍び戦術の心得その二、幻術。

幻術とは一種の幻覚催眠法のことである。物理的なダメージを負わせる事は難しいが、相手に精神的なダメージを与える事ができるのが特徴。人の五感のどれかを対象とするもので、カカシが今使ったのは視覚系の幻術である。

あっけなく幻術に落ちたかと思えたサクラは……目に力を取り戻した。すぐさま彼女は手を組み、

「解

幻術を解いた。今のは幻術返し。術によつて掌握された己のチャクラをあえて乱すことで幻術を解くのだ。カカシは目を細めた。アカデミーで幻術返しは教えていない。

「でも残念」

幻術に気づくまでと、気づいてから解くまでの間が長すぎた。背後に回りこんでいたカカシはサクラの首裏を軽く叩く。それだけでサクラの身体からは力が抜け落ち、カカシは小さな体を抱きとめた。

「まー、返されるとは思つてなかつたけどな」

そう難しい幻術ではなかつたため見破られる事はあっても、返されることは予想していなかつた。幻術返しは中忍でも上手く出来ないものもいるほど難易度は高い。もしかしたら、サクラには幻術の才能があるのかもしねりない。……まあ、あの人の血縁者であることを考えると別段おかしくもない、か。

気絶した少女を地面に横たえたカカシは、ふと、サクラがしている黒い手袋に目を留めた。別におかしなことではないのだが、彼女にはひどく不釣合いに思えたのだ。悪いと思いつつ、カカシは片方の手袋を外し右目を大きく開いた。

「これは」

サクラの手のひらはマメだらけだった。つぶれたマメや細かい傷

も多い。つぶれたマメが治る前にまた出来てつぶれ、を繰り返したのだろう。皮膚が硬くなっている。決して普段の生活でなるような手ではなかつた。

これは修行の跡だ。

別段隠す必要のない、むしろ誇るべきものだがそこはやはり女の子。気になるのだろう。カカシはそつと手袋を元に戻し、顎に手を当てて考え込む。

「ふむ」

アカデミーの成績を見るとサクラの取り柄、と言えばペーパーテストぐらいだつた。他は平均値、よりやや上程度。しかしあの手や先ほどの動き　　ただ走るのではなく、チャクラを足裏に集めて吸着と反発を利用して走つていた。脚の動きに合わせてタイミングよくチャクラを集め、微細に調節しなければならない。しかも足裏は一番チャクラを集めにくい場所だ。理論上、確かにそうすれば早くなるが、同じことができるものは上忍クラスになるだろう。そんな走法を下忍にすらなつていらない子供が自然と行つているのは、さすがに驚いた。さらにつの試験の意味に気づいたとすれば　。

あまりあの成績表はあてにならなさうだつた。元からあまり当てにしていなかつたのだが。

「基礎がめちゃくちゃなナルトから考えれば基礎がかなりしつかりしているな。ちゃんとした指導者の元で経験を積めば、あるいは」

経歴や家系からナルトとサスケにばかり注目していたが、サクラも侮れない。なんとも大変そうな班を任せられたものだ。カカシは一つため息ついて、サスケの元へ向かつた。

* * *

サクラは勢い良く飛び起きた。

「鈴！」

すぐさま太陽の位置を確認する。気絶する前からあまり経っていないようだ。ホツと息を吐いて、すぐに顔を引き締めた。

「とはいっても時間がないのは変わらず、と」

カカリに不覚を取つたことについて反省点はあるが、そもそも一人でどうにか出来る相手ではないので気にしないことにした。するだけ無駄というものだ。

「早く一人に伝えなきや」

気配を探つて慎重に走りながら、サクラは一人の説得方法を考える。

「ええっと。なんて説明するのが手っ取り早いかな。ナルトは普通の言い方じゃ理解できないだろ？し……！ 今の音は…」

走っている中、大きな振動と共に破裂音のようなものが聞こえた。誰かが近くで戦っている。サスケか、ナルトか。どちらにせよサクラが探していた人物であるのは間違いない。今日、この演習場は第七班の貸切なのだ。

彼女は音の方角へと、慎重に向かつた。

「……サクラか」

「ええつ？ うん」

「頼むから、引くな」

「『めんなさい』」

たどり着いた先ではすでに戦闘は終わっており、サスケがいた。のだが、サクラは思わず一步下がってしまい怒られた。

無理も無いだろう。サスケは首から上だけが見える状態で、身体は完璧土の中に埋まっていたのだ。後少しで悲鳴を上げていたかもしない。

「とりあえず助けるね。手、出せる?」

「……いや」

「じゃ、クナイで掘るからその間に話を」

ジリリリリリリッ！

「え？ 嘘ツ」

「ちつ」

演習場に場違いに響いた田舎ましの音。ざつやら間に合わなかつたらしい。サクラはガクッと肩を落とした。

「はあ。掘るから口閉じててね。砂入っちゃつか」

「ああ」

一人が丸太の場所に戻ると、なぜかナルトが丸太に縛られていた。どうもルールを破つてお弁当を食べようとしたらしい。呆れすぎてどんな言葉も出てこない。といつよりも、ぐぎゅるるるる～。

お腹が減りすぎて考えられないといつべきか。

「おひおひ。腹の虫が鳴つとるね、君たち」

元凶の男が平然と言つてのけるのが腹立たしいものの、サクラには怒る元気もない。演習の目的を察したところで、実行には移せていないのだ。サスケは一人でも鈴に触れたというが、演習の目的には気づいていない。ナルトに至つては、まあ、そういうことだ。全員不合格なことは明らかだ。

「とにかく演習についてだが、君たちはアカデミーに戻る必要はないでしょ」

だからカカシがそう言つた時も喜ぶナルトとサスケを余所に、サクラだけは目を伏せた。

「じゃあさ、じゃあさ、三人とも
「や。三人とも 忍者を辞めろー！」

しんと静まり返つたその場に、裏返つたナルトの声が響く。

「忍者辞めろって、どうこうことだよー そりゃあやつやさつ鈴取れなかつたけど、なんで辞める今まで言われなきゃなんないんだよー！」

「どいつもこいつも忍者になる資格もないガキつてことだよー」

「あ、サスケ君ー！」

淡々としたカカシの言葉に、サスケがクナイを握つて飛び掛つていつた。

「だからガキだつてんだ」

「ぐつ」

力カシはサスケをいとも簡単に取り押さえサスケの頭をグツと足で踏みつけた。それからゆっくりとナルト、サクラへ向けられた力カシの目は、冷たい。

「サクラ」

田をサクラで留めた力カシが声を急に柔らかくし、言つた。

「答え合わせをしようか
な、なんだつてばよ。答え？」

ナルトは不思議そうにサクラを見るが、サクラはただ真っ直ぐに力カシを見た。どうやら力カシはサクラが”気づいていることに気づいている”らしい。一度、サクラは深呼吸をした。頭を働かせて整理をする。

「まず最初に先生からルールを聞いた時、引っかかりました。

下忍にすらなっていない私たちが上忍にかなう訳がないということ。いくら忍びが過酷なものだと言つてもこれでは誰も合格しません。

また、先生は最大で”三人のうち一人しか受からない”って言いました。けど、もしそうならばスリーマンセルをわざわざ組む必要がない。どころか組まない方が手つ取り早く試験を行えます

「ふーん。それで？」

淡々としている力カシは全く表情を変えない（見える部分は少な

いが、動搖しているとは思えない）。話していることが合っているのかいないのか。イマイチ判断がつきにくい。だがサクラには推理を続けるしかない。

「次に、合格者が九名という点。九というのは随分と中途半端です。でも班で考えるとちょうど三班が受かることになります。そこから三人の中で誰か一人は不合格なのではなく、全員合格か不合格しか存在しないのではと考えました」

「つまり、俺が嘘をついていると？」

「はい」

聞いてきた力カシに躊躇無くサクラは頷いた。ナルトが「え？ 何？ なんの話だつければよ」と場違いな声を上げていたが、二人は意に介さない。サスケはただ一人を眺めていた。

サクラは息を吸う。ここからが本番だ。

「ではどうして先生が嘘をついたのか。それはこの試験がただの鈴取りゲームじゃないからです」

「つ！」

「えつ？」

「へえ。じゃあ、聞こうか。ただの鈴取りゲームじゃないなら、この試験の目的は何？」

問い合わせてきた力カシは面白がつていてるように見えた。一泊置いてサクラは答える。

「チームワークを見る試験、ですね」

言い切った時、たしかに一瞬力カシは笑った。

「ちよちよちよつと待ってくれつてばよ、サクラちゃん。だつて鈴
は二つしか」

「ナルト、この試験はね。ワザと仲間割れさせようと仕組まれてる
の。 忍びは裏の裏を読め。その言葉を先生が言った時に確信し
ました」

前半はナルトに、後半はカカシに向かつて告げ締めくくった。
パチパチパチ。

随分と能天氣な音が演習場に響く。カカシが手を叩いたのだ。

「んー、概ね正解」

サクラはカカシの言い方に引っかかるものを感じて、眉間にシワ
を寄せた。これ以上の答えが果たしてあるのだろうか。

「俺の台詞からその結論をよく導いた。だが、お前は答えを知つた
だけで分かつちゃいない」

この試験は確かにお前が言つた通り、こういつた状況の中でも利
害に関係なく、チームワークを優先できるものを選抜するために出
来ている。……まー、まったく試験の意味を考えなかつたどつかの
馬鹿たちよりはマシだがな」

カカシの目が鋭くなつた。それだけでサクラの背筋が震えた。

「サクラ。お前は答えを導いたがそれだけ。本質を理解しちゃいな
い。ナルト！ お前は独走するだけ。サスケ！ お前は二人が足手
まといと決め付け個人プレイ。

任務は班で行う。確かに卓越した技能や考えることは必要だ。が、
それ以上に優先されるのはチームワーク。仲間をないがしろにした
個人プレイは、仲間を危機に陥れ、殺すこになる。例えだ」

今までの飄々としたカカシはどこにもいなかつた。上忍の迫力とでも言うのか。サクラもナルトも、そしてサスケも、カカシの放つ重い空氣に呑まっていた。三人が身動きの取れない中カカシは腰のポーチからクナイを取り出し、驚いたことにサスケの首元へ突きつけた。

「サクラ！ ナルトを殺せ！ もないとサスケが死ぬぞ！」

「ふええつ」

「つ！」

「と、こうなる。

人質を取られた拳句、無理な一択を迫られ殺される。任務は命がけの仕事ばかりだ」

クナイをしまったカカシはサスケの上から退いた。そしてそのまま歩き、丸太と正反対に置かれた石の前に立つた。

「これを見てみる」

石というには少々大きなそれを彼は示す。石の表面はツルツルしており、たくさんの文字が彫られてあつた。

「ここに刻まれた数多くの名前。これは全て、里で英雄と呼ばれている忍者たちだ」

「つ！ それって」

「あ。それそれそれ！ それいい！ 僕もそこに名前を刻むってことを今決めた！ 英雄英雄。犬死なんてするかつてばよ

「ちょっとと馬鹿ナルト！ あんたね」

興奮しだしたナルトにサクラは諫めの声を上げるが、本人は聞い

ていない。英雄とまで言われる忍びが、こんなにたくさんいるはずがないのだ。

「が、ただの英雄じゃない」

「へえ。どんな英雄たちなんだってばよ」

少し振り返った力カシに対しても能天氣だった。説得を諦めたサクラは地面を見つめて続く言葉を待った。力カシはまた前を向いた。答えるそぶりはない。じれったそうにナルトが足を暴れさせた。

「ねえ、ねえ？」

「殉職した英雄たちだ」

やつぱり。

自然と心が沈むも、ナルトは意味が分からなかったらしい。無邪気な表情で首をかしげている。

「じゅーんーしょーくつて？」

「任務を遂行するために、亡くなつたつてことよ」

「え？ あ！ おつ俺つ」

ナルトはゆつくりと言葉を飲み込んでいき、固まった。何か言うとして、言葉が見つからなかつたのだろう。無意味に動かしていた口を閉じ視線を下に向けた。

「これは慰靈碑だ。」の中には、俺の親友の名も刻まれている

慰靈碑を向いている力カシの表情はサクラたちには見えない。しばらく、誰も声を発しなかった。

* * *

「お前らにもう一度だけチャンスをやる。昼からはもっと過酷な銃取り合戦だ。挑戦したいヤツだけ弁当を食え」

沈黙を破つたのは、振り返つたカカシだった。先ほどの悲しげな雰囲気はない。

「ただし！ ナルトには食わせるな

「ひえっ？」

「ルールを破つて一人昼飯を食おうとした罰だ。もし食わせたりしたら、そいつをその時点で失格にする。
ここでは俺がルールだ。分かったな」

まだチャンスがある。サクラは心を入れ替えて気合を入れた。

第一十一劇「答え合わせと本当の意味（こたえ）」（後書き）

幻術（返し）と戦闘について。

ナルトWIKIを参考に自分なりの解釈も入れています。手元にファンブックがないので、術に関してはいろいろ困っています。

幻術返しを使えたのは勉強の賜物ですが、経験がないため使うまで時間がかかるて、ほとんど原作通り氣絶してただけになつてます。めちゃくちゃ活躍するのを期待されていた方おられたらすみません。いろいろ子供離れした箇所が見えてきますが、まだまだ弱いのです。

答えにたどり着くだけでは駄目。本当の意味でのチームワークを知る必要がある。今回はそんな話でした。

修正＆空白に入れました（11・04・05）
修正（11・06・12）

第一十一劇「三人で一つ」

弁当を食べながら、サスケはちらと横を見た。隣ではサクラがゆっくりと弁当を食べている。

意外、だつた。

サクラはただ鈴を取ろうとした自分やナルトとは違い、カカシの言葉を真正面から受け止めなかつた。何となく彼女は相手の言うことを素直に聞くイメージがあつた。なので先ほどサクラが見せた冴えを、サスケは意外に思った。

ぐぎゅるるるるる~。

真ん中から聞こえた音にサスケは思考を中断させた。ナルトは相変わらず丸太に縛られたままだ。縄を解くのもカカシから禁止されていた。

ナルトはサスケと目が合つとブイツと顔を空に向けた。

「俺つてば飯なんて食わなくても全然平氣だあ！ 全然へっちゃらだつてばよお～」

強氣で言つ彼だが、腹の虫は正直で発言中も自己主張を止めなかつた。サスケは自分が食べている弁当を見下ろす。食べ始めたばかりでまだまだ残つていた。

「……ほうよ」「はい」

「え？」

サスケが弁当を差し出すと、サクラが差し出した弁当箱と当たり、カツンと音を立てた。翡翠の瞳と目が合つ。彼女はしばし驚いた表情をした後、嬉しそうにはにかんだ。サスケが正面からサクラの笑

顔を見たのは、これが初めてだった。

妙に恥ずかしくなったサスケは彼女から田線を逸らし、氣を紛らわせるように口を開く。

「昼からは三人で鈴を取りに行く。足手まといになられちゃ、」
「ちが困るからな」

早口になってしまったが、幸い誰にも気づかれなかつた。彼はホツとした。

「そうそう。だから遠慮なく食べなさい」
「サスケ、サクラちゃん。ほんと、ありがとうだつてばよ」
「お礼は良いから早く食べなさいよ」

腹が減っているだろうと、差し出された弁当をナルトは食べようとしている。怪訝に思つてサスケがナルトを見ると、少し。いやかなり鼻の下を伸ばした状態で手を示した。ナルトは腕ごと身体を丸太に縛られているので自分で飯を食べられないのだ。

「ああ、それもそうか。はい」
「あ～ん」

あつさり頷いたサクラは、飯を箸でつまみ、ナルトの口へと持つていく。ナルトの青い目がサスケを見て、ニヤリと笑つたのが無性に腹立たしく感じた。やっぱり飯やるの止めるか。本気で考えた。ナルトが飯を飲み込んだ瞬間、突如強い風が吹き乱れた。サスケはそれが自然のものではないとすぐさま気づく。溢れる氣配に舌打ちした。こんなに近づかれるまで気づかないとは。

「ちつ」

「あわわわわわっ」

「ひやあっ」

「お前らああああっ！ ルールに逆らうとは覚悟はできんだろ？ な、ああん？」

風の中心には怒った様子のカカシが立っていた。サスケが戦闘体勢に入った時、カカシは低い声で尋ねてきた。

「何か言つ事はあるか？」

あまりの迫力に一瞬ひるんだナルトは、しかしきつと顔を上げた。サクラも毅然とカカシを見ていた。サスケは……軽く心の中で笑つた。

こういうのも、まあ、悪くない。

彼もカカシを睨みつけた。

「だつて。だつてだつてだつて！ 先生をつき言つたつてばよ。だから一人とも」

「俺たちはスリーマンセルなんだろ？」

「そうよ。私たちは三人で一つ、でしょ」

「そりなんだつてばよ。だから」

近寄ってくるカカシを見ながら、三人は言い切つた。険しい顔をしたカカシは「三人で一つ、ね」と呴きながら全員の顔をじいつと覗き込み。

「ううかーく！」

と、笑つた。

「はっ？」

サスケもサクラもナルトも、すぐには言葉の意味が飲み込めなかつた。それだけ合格の響きが予想外だつたのだ。

「いやあ、お前らが初めてだよ。今までの奴らは俺の言う事をきくだけのボンクラばかりだつたからな」

まだ三人が呆然としている中、カカシの雰囲気は明らかに柔らかくなつっていた。

「忍者は裏の裏を読むべし。確かに忍者の世界でルールや掟を破るヤツはクズ呼ばわりされる。けどな。

仲間を大事にしないヤツは、それ以上のクズだ」

カカシがぐつと親指を立てた。ふん。そういうことか。サスケは立ち上がった。

「これにて演習終わり。全員合格！ 第七班は明日から任務開始だ」「はーい」「フン」「やつたつてばよ。俺忍者！ 忍者！」

「帰るぞー」

背を向けたカカシの後を、笑顔を浮かべたサクラと、いつもより機嫌のよさそうなサスケがついていく。さらに後ろには……。

「どーせこんなオチだと思つたつてばよー」「うりあつ！ 繩、ほどけ——————！」

足をばたつかせたナルトの叫び声がこだました。

第二十一劇「三人で一つ」（後書き）

演習編完結。次話は間劇です。その後も一つオリジナル話が入り、第二十四劇で波の国編になります。つてか、進行速度遅くてものすごく長くなりそうな予感がヒシヒシと。が、がんばります。

修正＆空白行入れました（11・04・05）
修正（11・06・12）

間劇「綺麗な渦」

火の文字が書かれた帽子を机に置いた老人 三代目火影、猿飛 ヒルゼンは煙管を銜えて息を吸い、ゆっくり煙を吐き出した。火影とは木の葉の忍びの頂点であり、アカデミーの校長であり、里長でもある偉大な存在だ。

「して、どうじゃつた？」

部屋には彼以外誰もいないと思えたが、応じる声と共に膝まづく力カシの姿があった。暗い部屋の中、銀色の髪が月明かりを受けて輝いている。

「正直とんでもない奴らを任せられた、と思つてますよ」

苦笑交じりの声にヒルゼンは大仰に頷いた。

「うむ。あのうちはサスケにうずまきナルトじゃからな。しかしう前以上に適任もあるまい」

正直なところ、彼らを押さえつけられるのは力カシしかいないとヒルゼンは考えていた。力カシは軽く首を振った。

「まああの一人もそうですが春野サクラも、ですね。別に羨慕するつもりはありませんでしたが他の一人を特に注視していた感は、否めません」

「春野……ハイノ事件の子じゃな」

「はい」

ヒルゼンは少し記憶を遡つた。あの事件の後、事情聴取もかねて会いに行つたことがある。その時彼が思ったのは、

「お前から見てあの子はどう『』った？」

「頭の回転は悪くないようです。チャクラコントロールはかなり飛びぬけています。経験を積めば化けるでしょう……と、言つ事ではなさそうですね」

「うむ」

「少し大人びた印象がありましたが過去から考へると当然とも思えますし、今のところ特には」

訝しげな力カシに「そつか」とだけ言つてヒルゼンは目を閉じた。左手に握られた煙管から上がつた煙が、風に揺らされて奇妙な舞を披露していた。

* * *

『大変な目に遭^おうたのサクラ。もう、大丈夫じゃからな』

腰をかがめてサクラと視線を合わせたヒルゼンは、笑顔を浮かべたまま一瞬息を呑み、内心の驚きを隠すのに必死になつた。五歳とは思えぬ落ち着いた声が彼をさらに追い込む。

『いえ、それは違います二代目。遭つたんじゃなくて私が遭わせたんです』

翡翠色の瞳には綺麗な渦があつた。

渦は何十年、何百年、何千年、それ以上の年月をヒルゼンに彷彿とさせた。決して、五歳の子供にあるはずのものではない。そこにあるのは全てを受け止める包容力であり、様々なものを見てきた老獴さであり、猛々しい力強さであり、諦めであり、嘲りであり、疲労であり、純真さであり、また存在感でもあった。

こんな人間を彼は初めて見た。いや、そもそも人間にこんな目が出来るのだろうか。

『つー』

得体の知れないものが彼の身体を駆け巡る。ヒルゼンは背中が寒さに震えるのを感じた。

歴代火影最強と謳われた彼が！　里の者全員を家族と呼び愛する彼が！　里に住む五歳の子供に、恐れを抱いたのだ。

* * *

「サクラが何か？」
「いや」

カカシの声に目を開けたヒルゼンは、思い出したように煙管を口元へ運ぶ。長々と息を吐き出した。

「報告、『苦労じやつたな。下がつてよいぞ』
「はつ」
「……ふむ、カカシのヤツでも感じとれなんだか」

あの渦に気づいたのはヒルゼンだけだった。彼は気のせいかとも

思つたが、何度も見かけた時にもやはり見えた。そして何度も見かけた時に彼は大きな思い違いに気がついた。

あの時に感じたものは恐怖ではない。

以前にも感じたことがあった。あれは何千年も聳え立つ古木を見た時だ。人の身では到達できない年月を経たものだけに宿る力強さ。母に抱かれたような安心感。言葉に表せないほどの存在感に威圧感。それらを人の言葉で表すならば、すなわち『恐怖』いや、『畏敬』の方が近いだろうか。

どちらにせよ。まだ五年しか生きていない子供に、ヒルゼンが敬畏の念を感じたのはたしかだ。現役は隠退して久しいといえど、仮にも火影に敬畏の念を覚えさせたのだ。普通の子供であろうはずがない。

しかし日向一族にも見てもらつたが、身体能力もチャクラ量もごくごく普通の子供でしかなかつた。親戚に特異なものがいるわけでもない。異常性は見当たらない。ゆえに異常であつた。

「そうか。あの子が忍びになつたか」

里の者全員の全てを知つている、とは言わないが、里長として大体の事情は把握しているつもりである。しかしあの子供についてはあまりにも不明すぎた。何かあつた時のためにもカカシに任せたのだが。

しばしヒルゼンは思いふけつた。別段彼はサクラが里に何かをするとは思っていない。里の大人から嫌われているナルトに対しても、普通に接することのできる優しい子だ。サクラのことを彼は信じている。

だがあの目に他の誰かが邪な心の持ち主が気づいた時に利用される危険性があった。彼はただただそのことが心配だった。

おそらくこういった優しさが現役を引退して尚、里中から慕われるヒルゼンの魅力なのだろう。

「ふうむ。綱手、自来也辺りなら分かるかのぉ」

愛弟子を思い浮かべたヒルゼンだったが、意識して最後の一人の
名は口に出せなかつた。

「まつたく、ビルをまつつきてこいのや！」

呴かれた重々しい声とは反対に、煙が楽しそうに踊つていた。

間劇「綺麗な渦」（後書き）

三代目 のじいちゃん 大好きです。こんなじいちゃん 欲しいよね。
力カシ班に配属となつた理由とかあるといいなあつて思つてまし
た。叶つて嬉しい限り。

渦がシカマルに見えて力カシに見えない理由とか、後々書けると
いいな。大風呂敷広げすぎた気がしないでもない。

修正 & 空白行入れました（11・04・05）
修正（11・06・12）

第一二三劇「その熱は氷を溶かす」

忍びに与えられる任務には、難易度が高い順にA・B・C・Dとそれぞれランクがつけられている。これを里の上層部が能力のあつた忍者に依頼を振り分けていく。上忍ならAランク以上。中忍ならBからCランク。下忍ならDランクという風にだ。他にも特性に合わせて割り当てることがある。

サクラたちはまだ下忍なりたてなので、こなしたのはほとんどDランク任務だ。おそらく最初の数ヶ月は試用期間で、その間にそれぞの得意分野などを見極めていくのだらう。ちなみに今までこなした任務は子守、草抜き、畠の収穫、ゴミ拾い等々。そして今は、

「わわわわわっちょっちょっまでつてばよ！ まつつきやああああ
あっ」

犬の散歩、なのだが、なんとも大仰な叫び声が響いていた。

見栄を張つて大きな犬を選んだナルトが犬に引きずられ、ものすごい勢いでどこかへと消えていった。ナルトはいつもこうして身の丈に合わないことに挑戦し、いつもこうして失敗している。反省をまったくしていない。ちなみにサクラは小さく大人しそうな子（チワワ、オス、四歳）を選んだ。

「はあ、やれやれ。お前らは少しここで待つで！」

カカシがため息をつきながらナルトを追いかけて行つた。するこのなくなつたサクラは握り締めたリードに意識を集中させる。任務中にも修行あるのみ。時間は有効に使わなければならない。

忍びになつてすぐの頃サクラは、任務が簡単な分早く終わられて修

行の時間を多くとれる！ と喜んだが、現実は甘くなかった。Dランク任務は簡単な分もらえる報酬も少ないので、忍の給料はその報酬のみなので数をこなさなければ生活に支障をきたす。はつきり言えば新聞配達の方がよほど給料はいい。

しかし、まあ。何事も積み重ね。簡単なものをこなしていけば信頼してもらえて、難易度は徐々に上がっていくだろう。なので別段サクラに不満はない。あるとすれば、ナルトのせいで任務時間がかかってしまうことだろうか。

そんなことを考えながらサクラはチャクラをリードに流し込む。任務中、周りを意識しながらもちゃんとコントロールできるようになり始めた修行だったのだが、チャクラを上手く扱えば物を動かせることが判明した。イメージとしては手足の延長。今なら中指をくいっと曲げるような。

「サクラ」

「うわひやあっ」

サクラはあまりにも集中しすぎていたため、妙な声を上げてしまつた。声をかけてきたサスケはびっくりした様子でサクラを見て、やがて肩を震わせて笑い出した。

「くつくづ。なん、だよ、その声」

恥ずかしさで顔を真っ赤にしつつ、サクラは内心驚いていた。サスケがこうして無邪気に笑うところを見たのは、随分と昔に一度だけだった。ぽけっと彼を見つめているとサスケは少し笑いを治めた。

「お前つて料理上手いんだな」

「え？」

「弁当、ありがとう。美味かつた」

そう言つて笑つた彼に対し、サクラはポカンと大口を開けてさら
に呆けてしまった。結果、その表情が何やらツボに入つたらしいサ
スケに散々笑われることとなつた。クールに見えて、意外と笑い上
戸らしい。

「そつそんなに笑わなくたつて」
「わ、わるつくつくつく」
「もうつサスケ君！」

怒つているサクラと謝りつつ笑うという中々器用な事をしている
サスケの間に、わだかまりはもつ見えない。
変だ。

サクラはサスケとやり取りをしつつ、戸惑っていた。顔が熱い気
がした。心臓もやけにうるさい。別段激しい動きをしたわけでもな
いのに、だ。何か、何かが変わった。

「サスケ君、実は全然悪いって思つてないでしょ」
「いやおもつて……ふくくつ」
「ほらあ！ もうつだからわざきのことは忘れてつてば」

胸は苦しく、サスケは笑い続けている。その状況は不愉快な、はずだ。なのにどこか嬉しく思う自分がいて、サクラはただただ戸惑つた。

* * *

「いやー悪い悪い。ナルトが結構遠くまでひきずられて……ん？」

どうしたサスケ。機嫌よさそうだな。何かあったのか?」

「別に」

カカシとナルトが戻った時、そこにはいつもより楽しそうなサスケと、何やらものすごく疲れた顔をしているサクラがいた。二人の足元では犬が所在なさそうに佇んでいる。

少し首をかしげたカカシだったが、ま!　いいかと頷いた。この二人はどこかぎくしゃくしていたが、それがどうやら解消しているのだ。いつかは何とかしないとな、と思っていたカカシからすれば、喜ぶ事はあつても怒ることはない。……ナルトは複雑そудだが。

いやー、君たち青春してるねえ。

第一二三劇「やの熱は氷を溶かす」（後書き）

忍びの報酬について。

かなり自己解釈が入っています。次の話でも任務について描写があるので細かい話はそのとき。』。

まあ、サラリーマンのように定期的にお金をもらってる忍び、てなんか嫌だと思うのは私だけ？

あとサスケファンにお詫びします。キャラが笑い上戸になってしまった。

全く、君ら青春しているね。

ところで最近困っているのはカカシ先生のポジションです。保護者で通すか口リコンにするか（－）。よろしければ拍手等での無記名で構いませんから「カカシ先生は保護者（○・ヘンタイ）だ」と投票いただけたら助かります。参考にさせていただきます。

修正＆空白に入れました（11・04・05）

第一十四劇「初めての超護衛任務」

今日も今日とて力カシ隊第七班は任務をこなして……。

「ああつもー！ そういうのはノーセンキューだつてばよー…」

いなかつた。

任務・依頼斡旋所にてナルトの不満が爆発していた。力カシとサクラは同時に肩をすくめた。いつか駄々をこねると一人は予想していたのである。まあ、ナルトにしては我慢した方かな。

ナルトの不満を簡単に言うと 任務がしょぼい、だ。確かに今までこなしてきた任務は迷子ネコの捕獲やゴミ拾い、草抜き、犬の散歩等。なぜ忍者に頼むんだ。自分でやつた方が安くつくじやん。と、言いたくなる内容だ。そんなことを言つてしまつと下忍の仕事がなくなるので、サクラは思うだけで口には出さないが。

それに依頼者の気持ちもよく分かつた。

簡単な仕事でも一般人より遙かに身体能力が高い忍びに頼めば早く、安全に済む事は多い。Dランクぐらいだとかなり依頼料がかなり安いこともある。Cランクでもそうそう家庭の財布を苦しめたりもしない程度だ。そうでなければ毎日これだけたくさんのお願いが国内外から舞い込むはずもない。

しかしサクラは、依頼の多さを木の葉隠れに対する信頼の表れ、と考えている。火の国唯一の公式な隠れ里（公式なので隠れていな）は、忍び五大国と呼ばれる中でも最強と言われているほどだ。大きな里ゆえの安心感は少なからずあるはずだ。

忍びの気性が他と比べて比較的穏やかなのも一因かもしれない。そこら辺りは三代目の人格が里に影響していると思われた。もちろん中にはとんでもない性格をした者もいるが木の葉は仲間を大事に

し、信頼には信頼を返す。そういう忍びたちを木の葉は育て上げている。しいて言つならば、依頼量が多いのは三代目への信頼の現われとも言える。

というのは言い過ぎかもしないが、サクラは目の前にいる老人を人格者、指導者として心の底から尊敬していた。なので、駄々をこねて三代目を困らせている問題児を、思い切り殴つて黙らせることにしたのであった。痛々しい音がその場に響くと黄色い頭が床に沈んだ。ピクピクしているが、サクラは全く気にしない。

ペコリと頭を下げる。

「すいません、三代目」
「いいいや」

三代目 ヒルゼンはどこかひきつった微妙な顔をしていた。隣で受付をしているうみのイルカ（アカデミーの教師でサクラたちの担任だった）は、額を押さえて長い息を吐いていた。変わつてないな。そんな声が聞こえた。

「ほん

ヒルゼンはわざとらしく大きな咳払いをして、変な方向へ流れた話を修正した。

「そうじやの。なら、ヒランクの任務でもしてもううか。ある人物の護衛じや
「三代目、それは
「よいよ。イルカ。こいつに世界を見せておくのも良かろつ

ガバッと飛び起きたナルトの目が輝いている。サクラがそつと隣のサスケを窺うと、ナルトほどではないが彼も少し喜んでいるよう

だ。男の子は危険が好き、とイノから教わったがどうも本当らしい。サクラは妙な関心をしていたが、声には出していないため誰にもツツ「まれなかつた。

「ほんとかじいちゃん！　ね、誰？　誰？」

「そう慌てるな。今紹介する。……入つてもらえますかな」

背後から聞こえたドアが開く音に七班は全員振り返つた。まず見えたのは酒ビンだった。

「なんだア？　超ガキばっかじじゃねーかよ」

少ししわがれた声を発したその人はグビグビと酒を飲んだ。第一印象を一言で言つならば、酔っ払いのジジイ、以外に相応しい表現はない。

尖った髪と口の周りのヒゲは年相応に薄い色、メガネの奥にある目は少し眠そうに細められ、額にはねじり鉢巻、首にタオルをかけている。お年寄りではあるが背中はまっすぐしており体格もいい。服装や雰囲気は何となく大工をイメージさせた。

「特に、ほれ。そこの一番ちつこい超アホ面のおめー。ホントに忍者か？」

ズケズケと初対面にもかかわらず言つてくる様子は、見た目そのままだ。

「あはははは。だーれだ？　一番ちつこいアホ面つて

他人事のように笑つてゐるナルトは、サクラとサスケを交互に見た。サクラとサスケの目が合い、二人はやれやれと息を吐いてナル

トの隣に立つた。ナルトはしばらく二人を見て、とある事実に気づいて眉を吊り上げる。すなわち、この中で一番小さいのはナルトなのだ。今すぐ老人に飛び掛りそうなナルトの首元をカカシが掴んで止めた。

ふつこるす

「これから護衛するジーちゃん殺してどーする」

じたばたじたばた暴れるナルトに対し、老人は関係ないといわんばかりにぐびぐび酒をラッパのみしていた。ふへえっと吐かれた息はとても酒臭い。

「ワシは橋造りの超名人タズナというもんじゃわい。ワシが国に帰つて橋を完成させるまでの間、命をかけて超護衛してもらひう

老人、タズナの言葉に少し引っかかりを覚えつつ、サクラは長期任務の準備をするため家へと帰った。

* * *

くぐつた大きな門には『あ』と『ん』の文字が書かれており、それを見たサクラは少し目を細めた。里の外に出るのは随分と久しぶりだ。

卷之二十一

やたらと氣合の入った声を上げてゐるのはもちろんナルトである。遠足に行く子供のようだ。

「何はしゃいでんだ、ウスラトンカチ」
「ムツ。うつせーんだよ、サスケ！ しうがねーだろ。俺つてば
里の外に出るの初めてなんだ。えへえへつほおほおこんな感じ
なのかな」

うがーっと騒いだ後は、里の周りをきょろきょろと見回し始める。
分かつていていたことではあるが、本当に落ち着きがない。タズナがナルトを指差して顔をしかめている。そしてカカシにつた。

「おいおい本当にこんなガキで大丈夫なのかよ

と言った。タズナの気持ちが分からぬでもないサクラは、ただ苦笑した。カカシも心境は似たようなものだろう。はははと軽く笑つた。

「上忍の私がついてますからそつ心配いりませんよ
「そうかあ？ まあ、超頼むぜ」

二人の会話をサクラはじつと観察していた。やつぱり氣になつた。タズナの言動の端々からかなり身の危険を感じていることが窺える。確かに道中で賊に襲われたら彼一人では対処できないだろうが、それなら送り届けるまで済むし、その方が依頼料も安い。わざわざ橋の完成まで護衛しろということは、波の国とやらの治安が相当悪いのか。それとも彼自身に狙われる理由があるのか。……橋の完成までと言い切つたことから後者の可能性が高い、か。
ん～ああ、駄目だ。まだ情報が少ない。

「サクラ、どうした？」

「えつ？ あ、ううん。何でもないよ、サスケ君。ありがと」

「別に」

ボケツとしていたサクラは、サスケの声で我に返った。見るとすでにナルトやカカシたちは十メートルほど先にいた。サスケに礼を言つて早足で彼らに追いつく。

「お前、その癖直せよ」

「癖？」

歩きながらサスケは呆れた顔をした。考え込む癖だと指摘される。

「考え込んでまたぶつかるぞ。」この前のでんちゅ」

「わわわっわーわー！」

サクラは思わず大声を出してサスケの声を遮った。少し前にいたナルトが声を聞いて後ろにやってくる。カカシやタズナはちらりとサクラを見たがすぐに前へ向き直った。

「どうしたんだってばよ、サクラちゃん」

「なつ何でもな」

「いやこの前サクラがでん」

「わーわーわーサスケ君！ な、ななななんで知ってるの？？」

それはついこの間のことである。任務帰りに修行法について考え込んでいたら、集中しすぎて気づかずに電柱と正面衝突したのだ。幸い周りに人がいなかつたので安心していたというのに、どうしてサスケが知っているのだろう。はつ！ まさかあの時見られてた？ 大声を出したり赤面したり青くなったり両手を振ったり、と忙しいサクラをしばらく眺めていたサスケは、顔を彼女とは逆に向けて肩を震わせ始めた。

「ふつくくくく。おまつマジかよ」

「あー？ サスケ、何が面白いんだってばよー」

ナルトが変なヤツだなどサスケを見る中、サクラは気づいた。からかわれていたのだ。

「ちょっとサスケ君！ 嘘吐くなんてヒドイ」

「ええっ？ おいサスケ。いくらサクラちゃんが騙されやすいからって嘘つくのはサイテーだぞ」

文句を言つサクラと、フォローしているのかなんのか微妙なナルトに対しサスケは、

「何やつてんだお前ら。早く来い、置いていくぞ」

一人笑いのツボから開放されていつもの態度に戻つていた。この落差がサスケは激しく、サクラはいつも振り回される。疲労感を両肩に感じながらまた少し早足になつた。自然とサ克拉も意識の切り替えが早くなつてしまつた。

心臓が早く鼓動しているのは、早足のせいだろう。まだまだ体力が足りないんだ。修行しなきゃ。

力カシたちに追いついたサ克拉はそんなことを考えた。

第一十四劇「初めての超護衛任務」（後書き）

依頼について。

かなりの独自解釈が入っています。なぜわざわざお金を払って忍びを雇うのかを考えた末にこうなりました。早くて安全で安いの三拍子そろつていれば、まあ頼むかなあと。

信頼云々は、大きな企業だと安心してしまうあの心理ですね。重要任務（暗殺・情報収集など）を頼んだはいいが裏切られた！では困りますから。

三代目のおかげというのはいいすぎでしょうが、ある程度は関係あると思ったので……ただ単に二代目のじつちゃんが好きだというのもあります。

今日、説明とキーワードに恋愛要素は薄めと追加させていただきました。書いてたつもりが書いていないことに気づいたもので。大変失礼しました。

仲の良い第七班を書きたいんですが、中々難しいですねえ。

保護者の声がきたので、カカシ先生のポジはとりあえず保護者で行きます。サクラ十一、三歳だしな。ふざけて絡むのはありかもしれませんけどね（サスケとナルトをからかう目的等で）。

カカシ先生はどうち（保護者・変たる）にもそれのような感じで行きたいと思います（11・06・12追記）。

修正＆空白入れました（11・04・05）

修正（11・06・12）

第一一十五劇「初めての実戦」

「ねえ、タズナさん」

「んあ？」

サクラが声をかけると、タズナは銜えていたビンから口を離した。キュポンと音が鳴る。

「タズナさんの国つて波の国、ですよね」

「それがどうした？」

「カカシ先生、その国にも忍者つているの？」

見慣れたサクラが今でも怪しいと思つ男に声をかけた。サクラがあまりズケズケ言わないタイプで良かったらう。現在も尚、部下兼教え子に怪しいと思われていると知れば、カカシに深い心のキズを与えたに違ないからだ。

教え子に内心怪しいと思われている哀れなカカシは、質問に答えた。

「いや、波の国にはいない。が、大抵の国には風習や文化こそ違えど隠れ里が存在し、忍者はいる」

忍びとは、簡単に言うと國の兵士だ。隠れ里の力=その國の軍事力と言い換えるもいいだろ。里の力具合で隣接國との境界線を守つてゐる。しかし隠れ里が國へ忠誠をしてゐるのか、というとそうでもない。あくまでも表面上は対等の関係にある。それでも隠れ里が堂々と在れるのは國が保護・援助しているからなので、立場的には少々弱い。

木の葉に関して言えば、その気になれば国を掌握も出来るほど強さがあるため、火の国と里はほぼ同格だ。最近は里の規模を小さくするように国から要請を受けているらしいが、今その話は置いておこへ。

一つの国に対し隠れ里は大抵一つだけしかない。これは里同士の争いを避けるためだ。実際今まで里同士の戦いが起き、大規模な内乱になつた国もあるらしい。

「波の国のような小さな島国だと他国の干渉を受けにくいつから、忍びが必要ない場合もある。

知つてゐるとは思うが……隠れ里を持つてゐる国でも火、水、雷、風、土の五力国は国土も大きく、力も絶大なため、忍び五大国と呼ばれている

「へえ、そうなかつてばよー」

「ぐつナルト。お前ね。アカデミーで一体何を習つたんだ」

一度ナルトに脱力した力カシだつたが、また説明を始めた。

火の国はサクラたちの所属する木の葉隠れの里。水の国は霧隠れの里。雷の国は雲隠れの里。風の国は砂隠れの里。土の国は岩隠れの里。この五つの里の長だけが影の名を名乗る事が正式に許されている。火の国なら火影、水の国なら水影。それぞれ国の名を背負う彼ら五人を五影と呼び、各国の頂点にいる忍者たちだ。

「と、こんな感じだが、安心しろ。Jランクの任務で忍者対決なんてないよ」

笑つた力カシがサクラの頭をぽんと軽く叩く。その際にタズナの表情が一瞬陰つたのを、サクラは見た。どうも雰囲気からするとこれはただのJランクじゃなさそつだが、力カシは気づいているのだろうか。サクラがそつと窺つた上司の顔はほとんどが隠れていて、

よく分からなかつた。

一行は、他に会話と言ひ会話はなく進んだ。

幅三メートルほどの川にかけられた小さな橋を渡ると、土が乾き始めた。砂混じりの足音を立てながら歩いていく。ここら辺は人の手がはいつており、道がある程度整備されているので比較的歩きやすい。天気也非常によく、任務中ではあるが気分は晴れやかだ。もしもサクラが一人であつたのなら、鼻歌でも歌つていたかもしだい。

ナルトの暇だという文句を聞き流し、道の真ん中にできた水溜りを避けて歩きながら、サクラはカカシを見た。カカシはすぐさま彼女の田線に気がつき、よく出来ましたと言わんばかりに田を細めた。

何事もなく一歩二歩三歩と歩み進めた。

鉄がこする音が聞こえたのは、サクラが十歩目を数えた時だつた。振り返ると、鉄の鎖がカカシの身体を縛りつけている。カカシにはそんな趣味が！ な、わけではもちろんなく。鎖の先には見知らぬ忍びが一人いた。額当てに彫られたマークは木の葉のものではない。短い曲線が縦横一いつずつ並んでいる 水の国、霧隠れのもの。つまり、敵だ！

敵の片腕には大きな三本爪が装着されており、鎖はそれぞれの爪部分につながっていた。ところどあのマスクはオシャレなのだろうか。そこに着目したサクラは、冷静でいるようで内心パニクッていたに違いない。

「一匹めえつ」

ぐぐもつた声と同時に忍びが鎖を引っ張った。カカシの身体が浮き上がり、まばたきも出来ぬ間に鎖につぶされた。びちゃびちゃと地面に血液らしきものが滴り落ちる。最後までその光景を見ることなく、ハツとしたサクラはすぐさまタズナの前でクナイを抜き、油

断なく構えた。

「離れないでください」

「お、おう」

その間にもカカシがやられた衝撃が抜けないナルトの背に、二人の忍びが近寄る。

「一匹め」

鎖がナルトを絞め殺そうと迫る。サクラはその場から手裏剣を投げようとしたが、止めた。いち早く動いている影を認めたからだ。投げられた一つの手裏剣は、お手本にしたいほど綺麗な回転を維持して鎖を弾き、ほぼ同時に放たれていたクナイが鎖を木に縫い付けた。敵はひどく驚いていたが、当たり前である。敵の攻撃を黙つて見守る馬鹿はいない。妨害を考えていないこの一人はマヌケとか思えなかつた。

自らの獲物である鎖によつて身動きが取れなくなつた忍びたちの腕にサスケは飛び乗り、

「ふんっ」

両者の顔面に蹴りを入れた。その動きは鮮やかだ。

「ぐぬうっ」

忍びたちはすぐさま鎖を爪から外して別々に動いた。一人は今だ動けないナルトの背後へ。もう一人はサクラ、いや、タズナへと向かつて鋭い爪を突き出す。

攻撃を避けるわけには行かない。受け止めなきや。

ぎゅっとクナイを握り締めてサクラは相手の動きを見つめた。自分でも十分対処できると彼女は思った。しかし敵の姿は突如焼き消えた。代わりに紺色とうちわの文様がサクラの目に飛びこんでくる。呼吸が一瞬、止まる。

『待つて、待つて　君！　置いていかないで』

サクラの頭の中で声が響いた。なんでこんな時に…

「死ねえっ！」

爪がサスケに迫り、

「ガハ」

到達する前に力カシの拳が忍びの腹に入っていた。力カシの片方の腕には、もう一人の忍びが氣絶した状態で抱えられている。力カシがやられたと思われた場所には、細かく切られた丸太が転がっていた。変わり身の術だ。

「すぐに助けてやれなくてすまなかつたな、ナルト」

ほつと息を吐いていたサクラは、力カシの言葉を聞いて『そいえば先生はどうしてすぐに助けてくれなかつたのか』を考えた。敵の襲撃を知っていたはずなのに…しかしまた思考に潜り込みそうだつたので、その前にサスケへ声をかけた。

「サスケ君、さつきはありがとう。怪我はない？」

目の前の彼に礼を言うのが先だったので、サスケはサクラを肩越しに

振り返り、すぐに前を向いた。

「護衛対象を守つただけだ。礼を言われることじやない」

そつけないが、照れているのだとここしじばらぐの付き合いで分かつた。だからサクラは気にせず笑う。それからナルトへ目をやつた。ナルトは手の甲に怪我を負っていたが、命に別状はないそうだった。

「怪我、させてしまったな。まさかお前がここまで動けないとは思つてなくてな」

ナルトがカカシの言葉にショックを受けているのを見ていたが、一番最初に安全確認すべき人を思い出したサクラは慌ててタズナを振り返つた。タズナは少し冷や汗をかいていたが怪我一つない。一息つく。

「とりあえずサスケ、よくやつた。サクラもな

「あ、でも先生。私は」

「いいんだよ。お前の行動は間違つてないさ」

カカシが態々襲われるのを待つた理由に気づき、それを阻害した自分は褒められるべきじゃないとサクラは思った。そんなサクラにカカシは優しい声で言う。今の任務は護衛であり、護衛対象を真っ先に守るのが”普通”だ、と。論理的に諭され、サクラは硬くしていた身体を弛緩させた。きっと「大丈夫」とだけ言われて慰められていたらもっと落ち込んでいただろう。カカシはサクラのそんな性格を把握しているのだ。

ちよつと上司を見直したサクラだった。

「よお。怪我はねーかよ？ ビビリ君

「んぐっ」

そんな和やかなサクラたちとは反対に、サスケとナルトは少々険悪なムードだ。サスケはナルトを気にしていないうでいて、こんな風につつかかることが度々あった。一人の視線が絡み合つ。ナルトからしてみれば悔しかつたろう。自分だけが怖がつてマトモに動けなかつたのだから。悪いのは自分だと分かつていても、はつきりと言われてナルトが黙つていられるわけがない。

「サスケー！」

怒鳴つて今にも飛び掛りそうなナルトを、カカシが制した。

「ナルト、こいつらの爪には毒が塗つてあるからな。お前は早く毒抜きする必要がある」

「え？」

慌ててナルトが左の手の甲を見た。キズ自体は深くなさそうだが、毒があるのなら楽観視はできない。

「傷口を開いて毒血を抜かなくちゃならない。そう強いものではなあそしだが、あまり動くな。毒が回るぞ」

さてと。カカシは黙り込んだナルトからタズナへ目線を移した。タズナが怯む。

「タズナさん。ちょっとお話をあります」

第一十五劇「初めての実戦」（後書き）

国と里について。

原作を元におなじみの自己解釈が混じっています。

国と里は互いに利害が一致している限りは関係良好。国は里に守つてもらい、里は援助してもらつ。火の国など大きいのに里が一つなのはなぜだろうかと考えた結果、戦争回避としました。

まあ、無理に統合したらそれはそれで軋轢を生みますが。

サクラのキャラが、なんか変わつてきている気がするのは、気のせいだらうか。……HINATA様の影響つ？

お気に入り50突破しておりました。ほんと、ありがとうございます！

修正＆空白行入れました（11・04・05）

修正（11・06・12）

第一十六劇「騒がしい集団」

「霧隠れの中忍つてところか。」いづらはどんな犠牲を払つても戦い続けることで知られる忍びだ

丸太にくくりつけた忍びをカカシやサクラたちは見下ろしていた。霧隠れの忍びは口元に大げさなマスクをしており、そこからくぐもつた声がした。

「なぜ我々の動きを見切れた」

敵の質問に答える義務などないが、カカシはサクラを呼んだ。おそらくナルトやサスケたちにも知つておいてもらうためだろう。サクラは頷いた。

「いじら辺に数日雨が降つていないことは乾いた土からも明白。そして今日も晴れ。水溜りなんて出来るはずがないわ」

「そういうこと

「ぐつ」

どう見ても子供であるサクラにまであつさり見破られていたと知つて、霧隠れの忍びは悔しげに顔をしかめた。この二人はあの水溜りの中に術で隠れていたのだ。しかし戦闘中のマヌケつぶりといい、本当に中忍なのだろうか、この二人。

「あんた、分かつていてなんでガキにやらせた」

タズナの声にカカシは一瞬彼へ目をやり、また霧隠れの忍びに戻

した。

「その気になればここにいらっしゃらざらになら瞬殺できます。が、私には知る必要があったのですよ。ここにいらのターゲットが誰であるのかを」「どうぞおどりじゃ」

カカシはそこでようやくタズナに向き直った。嘘を見逃すまいと真っ直ぐにタズナの目を見ていた。

「つまり狙われているのはあなたか。それとも我々の誰かなのか、ということです。今のであなたがこいつらに狙われているのが分かりました。

しかし我々はあなたが忍びに狙われているとは聞いていない。依頼内容はギャングやただの武装集団からの護衛で期間は橋が完成するまで、だつたはず。敵が忍者ならCランクではなく、高額なBランク任務に設定されていました」「う」

木の葉の依頼料設定では、ひとつはまだ庶民に払える程度に抑えられているものの、B以上になると値段が跳ね上がる。しかしながら依頼をこまかす例は少ない。Cランクで依頼するとBランクで依頼するのでは派遣される忍びのレベル（＝安全度・成功率）がかなり違つてくるからだ。

今回のような護衛の場合、あらかじめ危険を察している者がわざわざ危険度の高い方を選ぶことはそうない。

しかしタズナはBにせず、忍者に狙われる可能性を隠して依頼を登録した。事情があるのかもしけないが嘘を吐いて依頼されれば、依頼された方の危険度も増す。心証は悪い。

「これだと、我々の任務外となりますね」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。あの時ワシの前には小娘がおつた。

「やつらの狙いはワシではなく小娘かもしけんじや わづが」

焦ったタズナが反論した。サクラがしてしまった失敗とはこれのことだった。しゅんとしたサクラの頭をカカシは慰めるように撫で、

「サクラ。他にもタズナさんが狙われていると思えることは?」

質問した。名誉挽回の機会をくれたのだ。サクラは張り切った。

「まず一つめ。タズナさんがわざわざ木の葉まで一人で依頼に来たこと。道中の安全確保なら、そもそも国を出る必要がない。つまりは波の国内で危険を感じている。

一つめ。波の国に入つてから橋完成までという依頼期間。単純に国の治安が悪いのであれば完成までと区切る必要はなく、長期契約を結べば済む話。ここから国の治安は命の危険を感じるほどではないが、橋の完成までは命の危険を感じていると推測できる。

三つめ。タズナさんが度々口に出している『私たちのよつな子供で大丈夫か』という言葉。波の国までの道は比較的安全でそうそう襲われることはないにも関わらず、必要以上に身の危険を感じている。

これらを加えるとこの橋を巡つて何か争いに巻き込まれている可能性が高い。以上

「ほえー」

「いやあ、いつもながらサクラはよく頭が回るね。偉い偉い

マヌケな声を上げるナルトと感心したように頷いているカカシを見て、サクラはなんだかむず痒くなつた。カカシがタズナを窺う。

「どうですか？ タズナさん」

タズナは無言だ。その態度を見てカカシは顎に手を当てたわざとらしい声を出す。

「んー、そうだなあ。ナルトの毒抜きには麻酔が要る。荷も重そうだし、こりゃ里に戻るか、な？」

カカシの語尾が上がった。何を考えているのか、ナルトが突然クナイを左手の怪我に突き刺したからだ！ 血が勢いよく吹き出て地面の一部を染めた。サクラは呆然としてから、

「ちょっと何やってんのナルト！」

慌てて駆け寄ろうとしてカカシに肩を掴まれた。サクラが見上げると、カカシはまっすぐにナルトを見ていた。サクラも視線を戻し、ハツとした。ナルトの目が強く輝いていた。

「この左手の痛みに誓つてばよ。俺は一度と助けられるような真似はしねー。このクナイでおっさんは俺が守る！ へへへへへへへ。任務、続行だ！」

左手から血を流しながらかつこうつけて笑うナルトだったが、

「ナルト。景気良く毒血を抜くのはいいけどな。それ以上は出血多量で、死ぬぞ」

「…………え、えつと、じょ、『冗談』

「じゃない。早く止めないとマジでやばいぞー」

なぜか嬉しそうなカカシの言葉にナルトは真っ青になつた。そんな彼にサクラとサスケは呆れた視線を送り、「ダメダメ！ ダメダメ！ こんなんで死ねるかつてばよ」と盛大に騒ぐナルトを見て、

タズナは咳いた。

「やつぱりあのガキは超アホじやな」

サクラはフオローができなかつた。

「はいはい。ほら、ちょっと手、見せてみる」「だずダでつでねよががじせんぜいつ」

怪我を力カシが診てゐる間に、サクラはリュックを下ろして小さな皮袋を取り出した。再びリュックを背負いなおすとナルトの治療がちょうど巻き終わつたところだった。サクラはナルトに取り出した袋を差し出す。

「はいナルト」

「サクラちゃん？ なんだつてばよ、これ」

「何つて、解毒薬よ。いくら毒血を抜いても少しの毒は体に残るから、念のため飲んどきなさい」

「げどくげどく解毒……え―――つ！ こんなのは持つてるならもつと早く出して欲しかつたつてばよ。そしたら」

「うつ。しょ、しょうがないでしょ。効果に自信なかつたし、大体アンタが勝手にクナイを手に刺したんじゃないの」

「さやーさやーとしばし騒いだ後、面倒くさくなつたサクラはナルトの口の中に無理やり解毒薬を入れた。ナルトは苦しそうにしてかうじかんと飲み干し、「につが」と舌を出してつめこた。

「うーん。ま！ ナルトは大丈夫そうだな」

とりあえず力カシの一言でその場は収まつたのだった。

第一十六劇「騒がしい集団」（後書き）

今回の推理について。

自信ないです。ものごとそないです。なのでつづじみどじろが
つた場合はお手柔らかにお願いします。

依頼料について。

里にとつて依頼料は大きな収入源の一つ、と考えました。かとい
つて高すぎでは依頼が来ない。そのためのランク付け。些細なこと
はお安く、危険な仕事は高く。ま、危険手当と考えたら当たり前で
すね。

アニメを見直しているとカカシ先生がやたらと嬉しそうだった氣
がするのでこんな感じに。和氣藪々第七班大好き！

修正 & 空白を入れました（11・04・05）

修正（11・06・12）

第一一十七劇「だてに年は食つてない」

霧で辺りは覆われていた。

視界が悪い中、エンジンではなく手漕ぎの舟が静かに進んでいく。サクラは注意深く周りを見るが、ほとんど何も見えなかつた。こんな霧でよく舟を出せるものだ。

「そろそろ橋が見える」

舟を操作している男が抑えた声で言つた。

「その橋沿いに行くと、波の国だ」

自然と全員の目が前に向かう。まだ霧しか見えな 突如、何か大きな影が現れた。徐々にはつきりと見えてきたそれは建築途中の橋で、サクラの知識にあるどの橋よりも大きかつた。

「うつひょー！ でつけー！」

「こ、こらつ静かにしてくれ。この霧に隠れて舟出してんだ。エンジン切つて手漕ぎでな。奴らに見つかつたら……終わりだ」

喜びの声を上げたナルトを男は叱るも、その声はやはり抑えられた小さな声だつた。ナルトは慌てて口を手で塞いだ。カカシがタズナへ静かに声をかける。

「桟橋につく前に聞いておかなければならぬことがあります。あなたを襲うものの正体、命を狙われる理由。でなければ我々の任務は、タズナさんが上陸した時点での終了」

「つー」

「という線もありです」

サクラは不安げにタズナとカカシを交互に見た。タズナはしばし沈黙していた。事情を知っているだらう男は、舟を操る事に意識を集中させているのか。それとも巻き込まれたくないからか。口を挟まない。

「話すしか、いや。ぜひ聞いてもらいたい」

長く息を吐き出したタズナは、ゆっくりと話し始めた。

「確かにこれはお前たちの任務外じゃねえ。ワシは、超恐ろしい男に命を狙われておるからな」

「超恐ろしい男？ 誰ですか？」

「海運会社の大富豪、ガトーといふ男じや。名前ぐらいはあんたたちも聞いたことはあるじやろ」

「えつ？ ガトーってあのガトーカンパニーの！ 世界有数のお金持ちと言われる」

「ああ、そうじや」

ガトー。表では海運会社社長ということになつてているが、裏ではギヤングや忍びを使い、麻薬や禁制品の密売、企業や国の乗っ取りまでする金をもうけるためなら何でもする男。一年前ガトーは波の国に手をつけた。力でもつてあつと言つ間に入り込んできたガトーは島全ての海路交通、運搬を手中に收めてしまつたのだといつ。

「波の国のような島国で海路を牛耳られてしまつたら、ワシらはさつに全てを支配されているのと同じじや」

話を一端止めたタズナは顔を上げて橋を見た。タズナが狙われる理由は、やはり橋にあつたのだ。

「そんなヤツが唯一恐れているのが、かねてから建設中の橋じゃ」
「この橋が完成すれば波の国には新たな交通網が出来てしまつ。自らの支配が行き届かなくなるガトーからしてみれば、うつとおしい存在だろう。海運会社であつても橋を買い取れるだろうが、波の国の人人が易々と橋を手放すとは考えにくい。少なくとも抵抗にあうのは確実だ。

「じゃあこの前の奴らはガトーの手のものってことか」

「ん？　んんん？」

「はいはい。ナルトには後で説明してあげるから」

一向に理解できていない馬鹿のこととは放つて置いて。

「しかし、それならなお更分かりませんね。相手は忍びすら使つてくる相手。なぜそれを隠して依頼をされたのですか？」

「……波の国は超貧しい国でな。大名ですら金を持っていない。もちろんワシらもな。ワシにはコレランクが精一杯なんじや。

まあ、お前さんらが上陸と同時に任務を打ち切るならば、ワシは確実に殺されるじゃろ。家にもたどり着けんでな。なあに気にするこたあない。ワシが死んでも八歳になる可愛い孫が泣いて泣いて泣きまくるだけじや！」

個性溢れる七班メンバーの表情が、この時初めて一つになつた。
その表情を引きつり笑い、といつ。

「ああ、それにワシの娘も木の葉の忍者を一生恨んで恨んで恨みま

くつて寂しく生きていくだけじゃ。いや、なに。お前さんたちのせいじやがない

忍び四人は顔を見合わせ、カカシは額当てに指を当てカンカンとかきむしるような仕草をした。

「まー、しょうがないですね。護衛を続けましょ」

「おおそろが。それはありがたい」

護衛は続行になった。タズナがブイサインをしていたのは見えなかつたことによつ。

* * *

再び陸路を歩きながら、サクラは氣を取り直してカカシに声をかけた。

「先生」

「ん? どうしたサクラ」

「さつきの奴らが霧隠れの忍びつてことは、次に襲つてくる相手も霧隠れよね?」

「そうだが……?」

「サクラ、どうしたんじや。そんなのは超当たり前のことじやねつ

が

「えーっとね。隠れ里には特色があるの。得意な戦術だとか忍術だとか特徴だとか。それが分かつたら襲撃の際に少しは役立つかなつて

「ふつむ。なるほどね」

もちろんそれらが全てではないが、知っているのと知らないのでは差が大きい。サクラが霧隠れについて知っているのは水遁が得意ということぐらいだ。そうそう他国に情報が漏れることはないが、カカシなら何か知っているかもしれない。

「確かにその通りだが、だからこそ各隠れ里は他に情報が漏れないように徹底しているからな。分かつているのは霧隠れが成功主義であること。水遁系が得意ぐらいか。ま！ 上忍クラスになると他の術も使えるから頭の隅に置いておけばいいだろ」

成功主義。どんな犠牲を払つても戦い続けることで知られる忍び。真新しい情報はないが、しかし考えれば一つの心配要素が浮かんでくる。

「タズナさんってご家族いるんですね？」

「ああ。娘が一人と孫が一人……さつきからどうしたんじや、おめーさんは」

頭が切れるなどを知ったからか、サクラをどこか見直していたタズナは訝しげに彼女を見た。他のメンバーも心配げな顔をしているサクラを窺つた。

「あまりこういうことは言いたくないんですけど、ご家族の方は丈夫なんですか？ 狹われたりとか」「つ？ そ、それは」

タズナは今初めてその可能性に気づいたらしい。申し訳ないとサクラは思うも、大事なことだった。いくら自分たちでタズナを守つても家族を人質にとられてしまえば終わりだからだ。

「すいません。心配をせぬようなどと申つて」
「いや、むしろ申つてくれて助かったわい。そりゃったな。相手
はあのガトーじゅ。何をしてくるか分からんからな」
「……今ここの家族のことを申してもしづがありません。行き
ましょうか」

少し歩く速度を上げた。

* * *

そして今、目の前ではやたらと張り切つて辺りを警戒しているナ
ルトがいた。先ほどの失敗を取り消そうとしているらしい。急ぐ理
由ができたと言つた。

「セヒだあつ」

大声と共にナルトがクナイを草むらに投げた。びっくりしてサク
ラは少し固まる。ナルトは未だに投げたポーズのまま。しばしの沈
黙。

「…………なんだ、ネズミか！」

「びびらすな！」

「頼むからやたらめつたらクナイを使つな、ナルト！ マジで危な
い」

「はあ、ウスラトンカチが」

「ひりつチビー、生きらわしいことするんじゅねえ！ 寿命が超ち
ぎんだわい！」

「おっあそこに人影が！　いや、あっちか？」「

キヨロキヨロキヨロキヨロとうとおしい。

額に手をついて息を吐き出したサクラだったが、その時首筋がビリリッと痺れた。彼女は勢いよく顔を横に向けた。

「そこへ」

またナルトがクナイを投げたのは、サクラが顔を向けた方角だつた。クナイは草を突き抜けて見えなくなつた。反応はない。タズナガナルトの頭に拳骨を落とす。

「だから止めろと言つているじゃらうが、このチビー！」

「いってえな！　だつてホントに誰かがこいつを狙つてたんだつてばよ」「ん？」「

カカシが草を搔き分けてナルトが投げたクナイを追いかけた。気になつたサクラとナルトもカカシの後ろから覗く。見えたのは木に刺さるクナイと、氣絶している白いウサギ。ウサギの頭すれすれにクナイは刺さつていた。ナルトが慌てた。

「うわあああ」めんよ、うわこおおお。俺つてばそんなんつもりは「なんじゃウサギか。ほんとに紛らわしいのぉ

ウサギを抱き上げて頬を摺り寄せているナルトと安堵の息を吐いているタズナを横目に、サクラは首をかしげた。ウサギについて知つている情報が瞬時に頭を駆け巡る。

名前はユキウサギ。全長46~65cmの大きさで体重は1.6kg。夏になると毛色は茶褐色になりその濃淡には

個体差がある。冬になるとほとんどの個体が白色の毛になる（一部が白くならないものもいる）。これは日照時間が短くなるためと言われている。

目の前のウサギはいつも見ても白だった。ちなみにサクラの服装は半袖。特に寒さは感じない。

と、ということは室内で飼われていたウサギなのだろう。それが突然こんなところにいるということは、変わり身用のウサギか。

可哀想な話だが、変わり身の術に生き物が使われることは多々ある。戦闘中はともかく、潜伏中に居場所がばれそうな時など丸太ではバレてしまうが、生き物だと気づかれにくい。目の前のナルトやタズナのように勘違いだと思わせることができるのであるからだ。

まだ国に辿りついてないのに一回目の襲撃らしい。

どこか他人事っぽく思いながらサクラは平静を装つて身構え、うなるような風の音を聞いた。何かが飛んでくる。

「全員伏せろ！」「タズナさんっ！」

第一十七劇「だてに年は食つてない」（後書き）

ユキウサギの記述について。

ウイキと原作での説明を混ぜ合わせました。
忍びの特徴について。

確かに原作で言つてたような気がするんですが、まあ文化が違えば
特徴も違うよな、とこうなりました。

家族が狙われる可能性について。

なぜ誰も指摘しないのだろうと考えたんですが、カカシはわざと
言わなかつたのかも。心配させるだけだし、家族まで守れる人員の
余裕もない。が、今回あえてサクラに言わせてみました。

しかしですね。先を書いているとオリジナル要素が多くなつてい
る気がしているんですけど……あ、今更か。

修正 & 空白に入れました（11・04・05）
修正（11・06・12）

第一十八劇「上忍の戦い」

タズナに覆いかぶさつたサクラの上を、風を切つて回転している何かが通り過ぎていった。それが木に刺さつて動きを止めたことで、ようやく巨大な刃物であることが分かつた。

包丁に似た長方形の刃物の先の方には丸い穴、根本には半円の凹みがある少々変わった武器だ。幅も厚みも長さもあるその巨大包丁を手裏剣のように軽々投げたのは、十中八九刃物の上に立っている男だろう。

男はサクラたちに背中を向け、かすかに顔をコチラへ向けていた。黒髪短髪の頭には額当てが横斜めにつけられており、そこに描かれたマークは霧隠れだつた。

額当ては斜めにつけるのが流行つているのだろうか。それに上半身裸というのは防御的にどうなの？ というサクラの胸中での感想に、残念ながら突っ込める人はこの場にいない。

「タズナさん、大丈夫？」

「ああ。すまん。超助かつた」

起きるのを手伝いながらサクラは男から目を離さない。カカシが数歩前に出た。どこか気の抜けた声で男に話しかけている。駆け引きが始まったのだ。戦闘前に相手の情報を多く掴むのは、これから戦闘を優位に進める上で非常に大事なことであった。

「これはこれは霧隠れの抜け忍、桃地再不斬君じゃありますか」「ぬーけえにんつ？」

マヌケな発音をしたナルトは抜け忍の意味も知らないらしい。が、

今は悠長に説明している場合ではなかつた。飛び出そうとしているナルトを力カシが押し止めているのを見ながら、サクラは自分の行動について考える。力カシがすぐに気づけたほど有名な忍びなら、強さもかなりのはずだ。ならば自分に出来ることは一つしかない。

タズナを守る。

とりあえずそれだけを考えることにした。もちろん情報収集は忘れない。

「しゃりんがん写輪眼の力カシとお見受けする。悪いが、ジジイを渡してもらおうか」

ようやく肩越しに振り返った再不斬は、口元を包帯のよつなもので覆っていた。力カシは己の額当てを掴んだ状態で動きを止める。

「お前ら、まんじのじん元の陣だ。タズナさんを守れ。戦いには加わるな。それがここでのチームワークだ」

言いながら、力カシはゆっくりと額当てを上げていく。今まで隠れていた左目の箇所には縦に傷跡があり、開かれた目は不気味なほどに赤く……そこには小さな勾玉のような形の黒い紋様が三つ、円を描くように浮かんでいた。

「再不斬、俺と戦え」

「ほお。噂の写輪眼をこの目で見れるとはな。光榮だね」

写輪眼とはある一族に伝わる瞳術で血縁限界（遺伝によってのみ伝えられる、特殊な能力または体质）の一つである。体術・幻術・忍術をすべて見抜くことができる上に見ただけでその技をコピーし、自分の技として使うことができる。

写輪眼って何だよ！ と騒ぎ出したナルトにサスケが簡単に説明しているのを聞いていると、突如辺りを霧が立ちこみ始めた。タイミングがタイミングなだけに自然のものとは考えられず、サクラはクナイを握んで構えた。

霧隠れの忍びは水遁が得意、か。

サクラはちらと近くにある湖に目を留めた。水遁を使う際、水場が近くにあつた方が有利である。あらかじめ襲撃場所をここに決めていたに違いない。なるほど。そう考えると水場がたくさんあるこの国は彼らにとつて戦いやすい場所なのだろう。

「俺が霧隠れの暗殺部隊にいた頃、ビンゴブックにお前の手配情報が載つてたぜ。千以上の術をコピーした男。コピー忍者のカカシ。まあ、お話はここまでにしどくか。俺はそこにいるジジイをさつそとやらなきやなんねーからな

サクラ、ナルト、サスケがお互いを背中合わせにクナイを構えタズナを囲つた。

「といつても、カカシ。お前を倒さなきやいけねーみたいだけど、なつ

一瞬で武器を木から抜いた再不斬は湖の上へと降り立つた。何か印を結んでいる。霧が更に濃くなりスウーッと再不斬の姿が焼き消えた。気配も感じ取れない。

「どんどん霧が濃くなつていいくつてばよ」

「波の国は海に囲まれとるから、超霧が出やすいんじや

「……いいえ。これは自然の霧じやないわ。おそらく……霧隠れの術、気をつけて」

霧は数歩前にいたはずの力カシですらサクラの目から隠した。なんとか見えるのは自分の手の届く距離のみ 突然視界が少しだけ晴れ、力カシの背中が再び見えた。彼が何かをしたのだろう。

空気が、冷たく、重い。

力カシと再不斬の殺氣がぶつかり合い、サクラの身体に襲い掛かってくる。重力が増えたような感覚に、意思とは反対に身体は動きを鈍くする。それでも警戒を続けるが、サクラは他の三人の様子がおかしいことを察していた。特にサスケ。殺氣の重圧で身動きが取れなくなっている。これほどの殺氣を浴びるのは初めてだろうから、仕方は無いが。

マズイ。この状態でこっちに来られた。

「サスケ、安心しろ。お前らは俺が死んでも守つてやる。俺の仲間は絶対、殺させやしないよ」

少し振り返った力カシは笑っていて、サスケの震えが止まった。

「つ！」

「それはどうかな？」

近くで聞こえた声にサクラが振り返る。再不斬はサクラたちが組む陣の真ん中に現れていた。早いつ！

再不斬が笑う。

「終わりだ」

巨大な包丁が音を立てて横に振られる。どうする？ クナイで受け止め、駄目だ。クナイ」と斬られる。ならタズナだけでも、とサクラは思うのに身体の動きは遅い。包丁が迫る。くつ間に合わない！

「ぐぬつ」

しかしサクラたちを襲うだらう衝撃が、いつまで経つてもくるとはなかつた。

「カカシ先生っ」

瞬時に移動してきたカカシが再不斬の胸にクナイを突き刺していったからだ。サクラは一瞬喜び、しかし再不斬の傷口から流れ落ちているのが水であることに気づく。水を媒体にした分身の術だ。ぬつとカカシの背後に現れる影。

「先生後ろ」

ナルトの声は遅かつた。再不斬の分身が水に変わつて地面に吸い込まれた時、巨大包丁もまたカカシの胴体へと吸い込まれていた。血が飛び散り　いや、これもまた水！　カカシが再不斬と同じ分身の術を使つたのだ。術と言うものは見ただけで使えるようになるものでは、決してない。それをすぐさま自分のものにするとは。

「コピー忍者。」

その二つの意味を、サクラは田の当たりにしていた。

「動くな。終わりだ再不斬」

再不斬の背後に回りクナイを首前に突きつけているカカシが、今まで聞いたことのない低い声を出した。

おそらく戦いが始まつてから何分も経つていない。あつという間に進み、終わる。これが上忍同士の戦い。桁が違ひすぎた。

「すっぴえー」

明るいナルトの声には賛成だが、気は抜けない。きっとまだ終わっていないからだ。再不斬の目には焦りがなかつた。

「ふ、ふつふつふつふつふつ。終わりだと？ 分かってねーなあ。猿真似」ときじゅーの俺は倒せない。絶対にな

実際、笑い出した再不斬には余裕さえ見えた。もしやこれも分身？ サクラは注意深く周りの気配を探るも、霧のせいか。それとも目の前にいるのが本物だからか。気配は感じられない。もつとも、先ほどの水分身の気配すら感じ取れなかつたので自信はない。

「しかし思つた以上にやるじゃねーか。あの時点で水分身を「ペーし、その分身にらしい言葉を喋らせといて注意を引き付ける。そして本体は霧に隠れて俺の動きを観察してた、と。なるほどな」

けどな。

再不斬の低い声が、一層低くなつた。

「先生っ」

とつさにクナイを投げていた。カカシの背後に、影があつた。再不斬はクナイはかすかに首を振るだけで避けた。

「俺もそう甘かねーんだよ」

バシャン。水分身が水に戻り、カカシの背後から巨大な包丁が真横に振り抜かれる。カカシはその一撃を何とかしゃがんで避けたが、回転の速度を利用した再不斬の回し蹴りをくらい、湖へと飛ばされ

た。

「カカシ先生！」

再不斬が追いかけて湖へと飛び込んだ。そして、

「甘いな。水牢の術

「しまつ」

丸い水の球の中にカカシは閉じ込められた。閉じ込められたのが分身、という都合のいい話ではなさそうだ。

「脱出不可能のスペシャル牢獄だ。カカシ、お前に動かれると厄介なんでな」

サクラの頬を、汗がつたり落ちた。

第一十八劇「上忍の戦い」（後書き）

写輪眼について。

ウイキと作品内の説明を参考にしました。

少年マンガだから仕方ないけど、ピンチ有利ピンチの繰り返しつて、文章で表すのめつさムズイですね。もつと迫力ある戦闘シーンが書きたい。

修正&空白に入れました（11・04・05）

修正（11・06・12）

第二十九劇「忘れていた」と

力カシは捕まり、身動きが取れない。「こちらはナルトもサスケも身動きとれず、タズナは言うまでもない。

「とりあえずあいつらから片付けをせてもらつぜ」

再不斬は右手を水の塊から離さぬまま、片手で印を結んだ。すると湖の水が浮かび上がって形を作り、再不斬の姿となつた。水分身の術を使つたということは本体は動けないのだろう。一つ勝機が見えた。

しかしサクラ一人でタズナや一人を守つて分身と戦いつつ本体を攻撃、などは不可能だ。なんとか一人に自分を取り戻してもらわないといけなかつた。

でもつどうやつて！

力カシのような安心のさせ方など、サクラに出来るはずがない。八方塞のままサクラは焦りをとりあえず内に隠し、クナイを構えてタズナの前に立ち塞がる。再不斬がサクラたちを見下ろしてハツと笑つた。

「偉そうに額当てまでして忍者気取りか。だがな、本当の忍者つてのはいくつもの死線を越えた者ということを言うんだよ。

つまり、俺様のビンゴブックに載るようになつて初めて忍者と呼べる。お前らみたいなのは、忍者とは呼ばねー。ただの、ガキだ」

分身が霧の中に消えた。一瞬後、

「うっ」

「ナルト！」

再不斬に蹴り飛ばされたナルトが、地面を転がった。少年の額には額当てがなく、それは再不斬の足元に在った。まだ新しい額当てが踏みつけられて金属音を奏で、カカシの悲鳴染みた声が響く。

「お前らタズナさんを連れて早く逃げろ！　こいつとやつても勝ち目はない。水牢の術でこいつはここから動けない。水分身も本体から一定距離は慣れると使えないはずだ。とにかく今は逃げろ！」

逃げる？　サクラは胸の内で力カシの案を却下した。

残念ながらカカシ先生。それは無理だ。格上の相手から逃げる難しさを、あなたは知っているはず。さらには一般人であるタズナに殺氣で震える少年を抱えた状態じゃなおさら。

サクラたちがこの場の危機を抜け出すには、カカシを開放するしかないのだ。……それに、たとえ忍び失格といわれようと、逃げることだけはできない。

仲間（先生）を置いて逃げてしまえば、きっとそれはもう^{サクラ}私はないから。

「しつかりしてサスケ君！　今は呆けている場合じゃないの」
「サ、クラ？」

自分一人では無理でも、三人でならできるはずだ。サクラたちは三人で一つなのだから。

「ナルトを引っぱたいて一人で何とかカカシ先生を助け出して。分身の方は私が死んでも押さえておくから」

「なつお前！」

「今はそれしかないの」

サスケの反論を聞かずにはサクラは飛び出そうとしたが、肩をぐつと押さえつけられ、動けない間に横を紺色が駆け抜けていった。翡翠色の目を大きく開いてその背に静止の声を上げた。はずなのに、なぜか声は出なかつた。代わりとばかりにサクラの頭の中で、またあの声が響く。

『待つて、待つて　君！　置いていかないで』

手がようやく伸びた時には、サスケの身体が再不斬に投げ飛ばされていた。タズナの傍から離れてはいけない。サクラは頭で分かつていてに気づけば飛び出していた。無我夢中で走つた。高い位置からサスケが無防備に地面へと叩きつけられる前に下に入り込み、受け止める。反動で地面をそのまま勢い良く転がつた。

* * *

「サスケっサクラちゃん！」

あのサスケが簡単に再不斬に投げ飛ばされ、サクラがそんなサスケを助けに行くのが見えた。一人はしばらく地面を転がつた後、サスケだけが立ち上がる。サクラは、動かない。

「サクっ」

ナルトは震える手をサクラへ伸ばし、白い包帯を田にした。ズキンとあのキズが痛む。

『この左手の痛みに誓うつてばよ。俺は一度と助けられるよつた真似はしねー。このクナイでおっさんは俺が守るー!』

ああそうだった。

手の、身体の震えが止まつた。立ち上がつたナルトは田をサクラから再不斬、そして踏みつけられた木の葉の額当てへと移す。あの額当てではナルトの誇りだ。努力の末に恩師が与えてくれた大事なものだ。まずはそれを取り返す。

ナルトは地面を蹴つた。

「たあああああああ」

「なつ止せ！ ナルトつ！」

「フン。馬鹿が」

再不斬の足が上がつた。ナルトは手を伸ばし、誇りを掴んだ。胸に衝撃が入り激しく咽ながら地面を転がつても、彼は決して手を離さなかつた。

身体をふらつかせ、ナルトは起き上がる。田線は真つ直ぐ逸らさない。

「おい、そこの眉ナシ！ 新しくお前のビンゴブックに載せとけ。いずれ木の葉隠れの火影になる男、木の葉流忍者 うずまきナルトってな」

額当てをしつかり巻きつけて再不斬を睨んだ。そして少し振り返る。

「サクラちゃんは？」

「……頭を強く打つたらしいが、問題ない。気絶しているだけだ」

「そうか、よかつた。タズナのおっちゃん、サ克拉ちゃんを頼むつ

てばよ

「あ、ああ」

ナルトは安心して前に向き直る。

「サスケ、ちょおつと耳かせ。作戦がある
「はつ。あのお前がチームワークかよ」

サスケの言う通り、まさか自分がチームワークを気にするなんて
オカシイとナルト自身も思う。しかし、

『ナルトを引っぱたいて一人で何とかカカシ先生を助け出して。分
身の方は私が死んでも押さえておくから』

自分が動けない間もサクラは”三人で”この状況を変えようとしていたのだ。それを聞いて気づいた。下忍になつてからナルトは自分たちが”三人で一つ”である、ということをすっかり忘れていたのだ。

だから。

「さあて、暴れるぜえ」

ちょっとの間、待つてくれってばよ。

第一十九劇「忘れていた」と（後書き）

試験的に空白の行を入れてみました。連続で何行も入れるのは自分の中のポリスー（笑）と反するのでこれで勘弁してください。
読みにくい、という意見がなければ、全話これで統一します（
11・04・05全話実施）。

サクラちゃんの活躍を期待されてた方には申し訳ない展開に。つてかサスケ君ファンにも怒られそうだ。
あつさり氣絶してしまったサクラちゃんですが、これからどうなるのかつ！？ とか、盛り上げてみたり。

修正（11・06・12）

第三十劇「あつけない終幕」

「サスケ、ちょおつと耳かせ。作戦がある」

ナルトが不適に笑い、サスケは意外そうに目を細めた。
作戦。そういうことを言い出すとしたらサクラだと彼は思っていた。一体このナルトがどんな作戦を立てたというのだろうか。

「ふつふつふつ。随分鼻息が荒いが、勝算はあるのか？」
「お前ら何やつてるつ？ 逃げろつて言つたろ」

返事をする前に聞こえた力カシの声を、サスケは冷静に受け止めた。さすがの上忍も焦っているらしい。普段力カシの言葉をしつかり聞くあのサクラが、力カシの言葉に従わなかつたその意味に気づかないとは。

力カシが捕まつた時点で、サスケたちに取れる選択肢は一つしかないのだ。怪我人と一般人を抱えた状態で身軽な忍びから逃げるのは難しく、力カシを失つた自分たちが追つ手に対処できるとは到底思えない。

サスケもそのことには気づいていた。

『分身の方は私が死んでも押されておくから』

しかしその言葉を聞いた時、彼はとっさにサクラの肩を掴んでいた。翡翠色の目は本気で、実際死ぬ氣でなければ足止めできないだろ。サクラの判断は正しいと分かつていたが、彼女の発した『死んでも』という言葉を聞いたサスケは 腹の底から湧き出るような怒りを覚えたのだ。

サクラにそんなことを語りわせてしまつた、自分の弱さに。

「俺が捕まつた時点で白黒ついてる。早く逃げろ！　俺たちの任務はタズナさんを守ることだ。それを忘れたのか？」

聞こえてきた力カシの声は、今まで聞いたことのない声音だった。ハツとしたナルトがタズナを振り返る。サスケもタズナを見た。彼の中で答えは出ているが、依頼主の言葉は確かに聞くべきだった。タズナは冷や汗をビッショリかきながらもそこに堂々と立つていた。サスケでさえ死んだ方がマシと思えるほどの殺氣に包まれているのだ。膝をつかずに立っているだけでもたいしたものだ。

「なあに、元はと言えばワシがまいた種。この期に及んで超命が惜しいとは言わんぞ。

すまなかつたなお前たち。思つ存分に戦つてくれ」

声は震えていたものの、笠の下には場に不釣合いな笑みがあった。このおっさん、中々根性が座つてゐる。ふつとサスケも笑う。

「ふつふふふふふはーはははははー！　成長しねーな。お前の年頃には俺はもうこの手を赤く染めていたぜ？
ああ。あれは、楽しかったなあ」

にたりと笑つた男に、ぞくりと得体の知れないものがサスケの全身を駆け巡り、

「ぐはつ」
「サスケ！」

気づいた時には再不斬の膝が腹に突き刺さつていた。あまりの衝

撃に腰を曲げて膝を地面につけた。そんなサスケの背中を容赦なく再不斬は踏みつける。骨が痛々しい音を立てた。

「がはあつああ！」

そのまま体重をかけられ身体がつぶされていく。痛い。苦しい。悔しい。サスケの目から生理的な涙がこぼれた。

焦ったナルトが悔しげに顔を歪めながら、両手の指を一本立て十字に重ね合わせる。

「ちっくしょ！ 影分身の術」

実体を伴つたナルトの分身が現れた。数はおよそ三十体。再不斬が少しだけ感心した声を上げていた。

影分身は実体を持つ分身を作り上げる高等忍術。下忍が扱えるようなものではない。さらに影分身の術はチャクラ消費も多い。再不斬が使つた水分身は影分身よりも消費が少なく実体を持たせられるが、分身の強さは本体より落ちる。影分身は本体そのものを分身させるので、分身と本体の強さに差がない。

どちらがより強いかは状況や使い方次第ではあるが、水分身の再不斬でも今のナルトたちより強いのは間違いないかった。

ナルトの分身が再不斬を押さえている間にサスケは一端後ろに下がり、呼吸を整えた。ナルトが再不斬を取り押さえられたのはその一瞬だけだった。分身があっけなく弾き飛ばされ消えていく中、

「サスケエフ！」

叫び声とともに何かをナルトが投げていた。サスケはとっさに手を伸ばして何かを受け取り、作戦とやらを理解した。ナルトが投げてきたのは大きな四枚刃の手裏剣、風魔手裏剣。置まれた状態であ

つたそれを聞く。

お前にしてはよく考えた、ナルト。

「ん？」

「風魔手裏剣、影風車」

「ふんっ。手裏剣など俺には通用せんぞ」

「はあああっ」

余裕を崩さない再不斬の言葉を気にせず、サスケは手裏剣を思い切り投げた。見事な回転をつけた手裏剣が弧を描いて水分身に……当たらなかつた。

「なるほど、こっち（本体）を狙ってきたか」

そう。サスケが狙つたのは分身ではなく本体！ 再不斬は右手を水牢の術に使つてるのでその場を動けない。

「が、甘い」

左手であつさうと受け止められる風魔手裏剣だつたが、空を切る音は途絶えない。

「何つ？」

手裏剣の死角にもう一枚の手裏剣があつた。これを影手裏剣の術という。

もう一枚の手裏剣が再不斬に迫る。右手は術に、左手は先ほどの手裏剣を受け止めた姿勢のままなので動かせない。手裏剣を間近に捉えながらも再不斬にはどこか余裕があつた。その場で彼は軽く跳んだ。手裏剣は空しくも通り過ぎていく。

「やはり甘い」

「それはどうかな」

作戦が成功したことをサスケは確信し、口元に笑みを浮かべた。

「へへんっ」

「何つ?」

再不斬の背後で手裏剣が、ナルトの姿へと変わった。変化の術。あの手裏剣はナルトの変化した姿だったのだ。跳んだことと驚きとで再不斬は体勢を崩している。ナルトは笑って、クナイを投げた。

* * *

「うう」だあつ

迫るクナイに再不斬はとっさに右手を引いて避けた。が、クナイはわずかに再不斬の頬をかすり血を流させた。彼の目が血走る。今までとは段違いの殺氣がナルトに向けられた。

「こなんのガキが!」

再不斬は、左手に持っていた先ほどの手裏剣を無防備なナルトへ投げようとしていた。しかし、目の前で起きている仲間のピンチを、この男が許すはずがない。

右手の甲で手裏剣を止めたカカシは、濡れて張り付いた髪の間からギロリと再不斬を睨んだ。赤い左目に再不斬は一瞬ひるむ。

水しぶきを上げてナルトが湖に落ちていった。すぐさま笑顔で顔を出したナルトに、カカシは声をかけた。目つきとは違い、随分と優しい声だった。

「ナルト、作戦。見事だったぞ。成長したな」

「へへんだったばよ」

影分身で再不斬の視界を遮つて本体は手裏剣に変化。その手裏剣をナルトの分身体にサスケへと投げさせる。サスケは受け取った瞬間に作戦に気づき、自分の手裏剣を重ねて投げたというわけだ。カカシはナルトが立てた作戦に関してもそうだが、何よりもいがみ合っていた二人が連係プレイをしたことの方に、より成長を感じていた。その一人をつなぎ合わせたのが。

「サクラの状態は？」

「頭を強く打つてるみたいだけど、呼吸は落ち着いてるつてばよ」

「そうか」

いいチームになつてきたな。

まだ戦いは終わっていないといつのこと、気を緩めると口元が弧を描きそうだとカカシは思った。

「俺としたことがカツとして術を解いちまうとわな」

「違うな再不斬。術を解いたんじやない。解かされたんだろ?」

「くつ」

「一応言つておくがな。俺に同じ術は通用しない。さあ、どうする

手裏剣が折りたたまれ、カカシの右手にかかる圧力が増した。

手袋の甲につけられた鉄板と手裏剣がこすれ、甲高い金属音が響く。この体勢は不利だ。カカシは右腕に力を込め手裏剣を弾き飛ば

し、同時に一人は飛び退り距離を取った。

再不斬が空中で印を結び始め、力カシはその動きを写輪眼で見、彼もまた印を結ぶ。その動きは再不斬と全く同じ。印は複雑かつ長いものの、二人の印を結ぶスピードは異常に速い。

両手の中指と薬指を折り曲げ、他の指の先を同じ名前の指先につけた酉の印で両者が動きを止めると、静かだった湖が突然波打ち始めた。

「わわわっわうふ！」

今だ湖に浮かんでいたナルトが沈みかけていたが誰にも気づかれず。

「水遁・水龍弾の術！」

果たして早かつたのはどちらの声であつたか。

波が首をもたげるよう龍の姿を形取る。水龍はまるで意思を持つていてるかの如く長い身体をくねらせ、互いの身体にまとわりつき牙を立ててぶつかり合い、周囲に大量の水を雨のように降らせた。

同レベルの術者同士の場合、早く発動させたものが有利だが、水龍は相殺し合つた。

役目を終えた水龍がただの水へ戻っている最中、湖の真ん中で力カシと再不斬は互いの得物をぶつけ合っていた。力はほぼ互角。いや、得物の特性もあつて少々再不斬が有利か。しかし再不斬の表情には戸惑いが在つた。

写輪眼は『術を記憶しコピーするもの』のはず。だといつのに術の発動が同じタイミングというのは、オカシイ。

その動搖が再不斬の力を弱めていた。

「ぐつ」

一人はお互いを押し戻すように離れ、円を描くように走り止まる。

全てが同じ動作だった。

再不斬が左手を真っ直ぐ上げ右手を胸の前にもってくれば、カカリもまた同じ動作を同じタイミングで行つた。それは完全に再不斬の動きを、

「読み取つてやがる」

「つ？」

カカリが声を発すると再不斬の表情が驚きに染まった。カカリはそんな再不斬を冷淡な目で見つめている。赤い左目が怪しく輝いた。再不斬はまた別の印を組みながら赤い目を睨んだ。カカリもまた印を組みながら声を発する。

「胸糞悪い目つきいやがつて、か」

「くつ」

動搖を、再不斬はすぐに飲み込む。

「所詮は『コピー』。一番煎じだ」

慎重かつ素早く印を結んでいく。

「お前は俺には勝てねーよ。サル野郎」「お前は俺には勝てねーよ。サル野郎」

二人の声は完全に被っていた。再不斬は目の前に「〇」の姿が見えた気がし、目を見開く。

「水遁・大瀑布の術！」

だいぱくふ

「なつ」

術を先に発動させたのは術をかけた方の再不斬ではなく、コペー
したはずの力カシであった。

水が浮き上がり渦を巻くような動きを見せ、すさまじい勢いで再
不斬に向かつて放たれる。術の発動前だつた無防備な再不斬になす
術はなく、彼は水に飲み込まれていった。

水は勢いを維持したまま湖を抜け、地面を大きく削りながら木々
をなぎ倒し、それでも勢いは止まらない。決して小さくない湖の水
が流れでどんどんと水位を下げていった。

力カシはそんな中を木から木へと飛び移りながら再不斬を追いか
け、数本のクナイを投げた。

「ぐおおっ」

受身も取れず木に身体をぶつけ、さらにクナイで動きを封じられ
た再不斬へ、力カシは静かに言い放つた。

「終わりだ、再不斬」

水がようやく引いていく。再不斬は息も絶え絶えに問うた。彼の
表情には純粹な驚きがあった。

「なぜだ。お前には未来が見えるのか」

その問いかけの返答は短い。

「ああ。お前は死ぬ」

血が空気を漂つた。

どせりと倒れた再不斬の首には細長い針のようなものが一本刺さっていた。千本と呼ばれるものだ。力カシではない。

「ふふつ。 本当だ。 死んじゃつた」

力カシは視線を声の聞こえた方に向けた。高い木の枝に立つていたのは声や背格好から、おそらくナルトたちとそう変わらない年頃の少年と思われた。顔には不思議な模様のついた面をつけているため、顔立ちは分からぬ。面の額部分には短い斜めの曲線が縦横二個ずつ並んでいる。霧隠れのマークだ。

再不斬の傍でしゃがんだ力カシは首筋に指を触れさせて脈を計り、彼が死んでいることを確認した。

「確かに、死んでいるな」

「ありがとうございました。僕はずつと、確実に再不斬を殺せる機会を窺っていたのです」

「そのお面。お前は霧隠れの追忍おいにんだな」

「さすがですね。よく知つていらっしゃる」

追い忍とは、再不斬のように里へ反抗し里を抜けた忍を追いかけ、殺す者たちのことだ。忍びを殺す忍びであるだ。その強さは普通の忍びとは一線を画する。

この年で追い忍とはな。

ナルトが悔しそうにしているのを視界に納めながら、力カシは少年の動きをつぶさに見ていた。

「ではそろそろ失礼させてもらいます。この身体を始末しなければならないものですから」

いつの間にか再不斬の近くにいた少年は、大きな身体を背負つて、

消
え
た。

第三十巻「あつけない終幕」（後書き）

影分身について。

原作であまり影分身を使つてゐる人（上忍でも）がないため、結構使い勝手が難しいものと判断しました。簡単につかつてなお疲れないカカシやナルトが異常なんでしょうね。

つてか、ナルトは散々「才能がない」と言われてますが、あれだけスタミナがある時点で説得力ないよね。とか、思つるのは私だけだろうか。スタミナも十分才能だと思う。

基本こんな風に原作重視ですが、サクラの活躍の場はちゃんとあるので、安心を（笑）。

見にくいやう意見なさそうなので、会話と地の文を基本的に分けることにします（あえて分けない箇所も有）。

一話一話の長さについてですが、もつと長くてもいいですかね。このぐらいが読みやすいかなあって思つてたんですが、そうするとものすごい話数になりそうで……。短いとか長いとかあれば遠慮なく言つてください。できるかぎり考慮したいと思つています。

修正（11・06・12）

第三十一劇「見えるよつになつたもの」

サクラが目覚めたのはタズナ宅についてからだった。彼女が受けた衝撃を言い表すのは難しい。

「すいません」

「何、お前さんはようがんばつた。それに皆無事じやつたんだ。気にする必要はないわい」

がははと笑つたタズナに、サクラはなんとか笑顔を見せた。お面の少年が去つた後、写輪眼を使いすぎた後遺症で力カシは倒れ、布団で寝ている。写輪眼は強く便利な反面、身体に負担が大きいようだ。

少し落ち着いたサクラは、真剣な表情で力カシを見た。

「ああ、それで先生。話を聞いていて気になつたんですけど」

「どうした？」

「本当に再不斬は死んでいたんですか？」

力カシがサクラの目を覗きこむ。

「千本という武器は治療にも使われます。投擲武器としては当たる面積が点ですからあまり殺傷力はありませんし、首に投げたというのが気になるんです」

「サクラちゃん、首だとどうして気になるんだってばよ」

ナルトの問いに沈黙を返したサクラは、自分の首に手を当てて言った。

「カカシ先生の話だと少年は首のここを正確に貫いています。ここにはツボがあって、肉体を一時的に仮死状態にすることが可能です。他の場所にもありますが、首は筋肉が少ない分当てやすいと思います」

「やはりそうか」

「つ！なるほど。そういうことか」

サクラの言葉に驚きつつ納得したのはカカシとサスケで、ナルトとタズナは「は？」と互いの顔を見合せた。ナルトがよく分からぬ話をしている彼らにムツとし、大声でわめいた。

「お菓子の状態がどうしたんだってばよー！」

「……はあ」

本気でそう思っているらしいナルトに、サクラは深い息を吐き出す。カカシとサスケは呆れを通り越して哀れむ視線をナルトに向か、タズナははつきり告げた。

「やつぱり超阿呆だの、おめーさんは」

「ほん。カカシは咳払いする。仮死状態に関して説明する気はないわねつだ。

「とりあえず、だ。追忍は身体の構造を知り尽くしている。サクラの言つ通り仮死状態にすることは可能だろう。

通常、追忍は遺体をその場で処理をすることもかわらず、重いはずの再不斬の遺体をわざわざ持つて帰つたこと。殺傷能力の低い千本と言う武器を使ったこと。

情報を整理すれば再不斬と少年はグルで、再不斬はまだ生きてい

る可能性が高い」

「そりや超考えすぎじゃねーのか?」

「いや。クサイと当たりをつけたのなら準備をするに越したことはありません」

準備とはなんのことだろうか。サクラは考えるが予想つかない。

第一力カシは一週間ほど動けないのだ。向こうも仮死状態から回復するまで時間はかかるだろうが……カカシはサクラたちをゆっくり見回す。にっこりと笑った。

「お前たちに修行を課す」

* * *

タズナ宅の近くに在る森で修行は行われる事になったのだが、足元に投げられたクナイをサクラは複雑な表情で見ていた。

それもそのはず。修行を課すと力カシにいわれ、一体どんな修行かと期待していたら木登り修行だったのだ。サクラが散々行つてきただ、手を使わずに木を登る、あの修行である。

なぜ今更チャクラの修行なのかと不満なナルトとサスケに力カシが説明をしていた。ちなみに力カシは木の枝の下に逆さ向きで立っていた。チャクラで足と木を吸着させているのだ。

術が使えていたらきちんとチャクラを扱えている、とはならない。術には用途に合わせて身体エネルギーと精神エネルギーを混ぜ合わせる必要があるのだが、これは調合、もっと簡単に言つて料理と考えてもいいだろ?。

料理を作る際、レシピ通りに作れた方が通常はより美味しいものが出来る。たまにレシピからずれてまったく新しい料理(もしくは

よりおいしい料理（）が出来る際もあるが、なんにせよ基本のレシピをマスターしてからの話だ。

しかしそのレシピ通りに作ったつもりでも作れていらない場合がある。そういう場合毎回どこか違う料理が出来たり、失敗したり、余分な材料を使ってしまったりする。つまり、より正確なチャクラコントロール技術を手に入れることで、安定して術が発動できるようになり、余分なチャクラを消費せずに済むということだ。

「お前らにはまだ難しいだろうから、歩いてではなく走って勢いをつけてから登れ。そして登れた場所にそのクナイで傷をつける。そして次はさりに上に傷をつけられるよう心がけろ。いいな？」

カカシの説明を聞き終わり、一番最初にクナイを拾ったのはナルトだった。ついでサスケが拾う。一人とも半信半疑な表情だ。

「こんな修行俺にどうちや、朝飯前だつてばよ！ なんたつて俺は今一番伸びている男！」

「はいはい。ごたくはいいから、せつと登つてみろ」

カカシの適当な相槌にムッとしてから、ナルト、それからサスケは目を瞑つて足にチャクラを集中した。サクラは特に何もしない。する必要がなかつた。彼女はクナイを拾つてすらいない。

「よっしゃー、いっくぞおー！」

ナルト以外の二人は無言で木に向かつて駆けていく。最初に木へ足をかけたのは、やはりとこづべきかナルトであった。

「どぐえつ」

が、一歩田で足を滑らし頭を打つていた。チャクラが少なすぎたらしい。いつてえええ。頭を押さえて叫びながら「ゴロゴロ」転がつていくナルトは、もちろん最初の脱落者だ。クナイで傷をつける暇もない。

そんなナルトの横でサスケが苦悶の表情を浮かべながら駆け登つて行く。十歩目を越した辺りでコントロールが乱れたのだろう。チャクラの量が多くなり、木の幹がサスケを弾いた。クナイでその場に傷をつけ、舌打ちしつつ地面に着地する。

サスケは冷静に分析しているようだ。先ほどの自身の様子と隣で転がっているナルトを見比べ、この修行の難しさを実感していた。

「いっててて……あれ？ カカシ先生、サクラちゃんは？」

松葉杖をついたカカシは木から降り、一本だけ残されたクナイを真剣な目で眺めていたが、ナルトの声に笑顔で頭上を指差した。ナルトが少し顔を上げる。サスケも気になつたのか顔を上げた。しかし、サクラの目立つ髪色は見えない。

「違う違う、もっと上だ
「もつと？」

二人がどんどん目線を上げていく。そしてポカンと口を開けた。木の天辺に、見慣れた色が見えた。顔まではつきりと見えないものの、風になびいている髪と赤い服は彼女で間違いないだろう。木の頂上から何を見ているのだろうか。地上の視線に気づいていないサクラは、どこか遠くを見ているようだった。

「おーい、サクラー」

大きな声でカカシが呼びかけ手を振ると、気づいたらしく手を振

り返していた。

「戻つて」——

一泊遅れて「はーい」と返事が聞こえた。

満足そうに頷いたカカシだったが、すぐに目を見張った。サクラの上体が前に倒れたのだ。

「サクラちゃん!」

「ちつ」

飛び出そうとした一人をカカシは止める。抗議の声と目線に対し「よく見ろ」とだけ言つた。

「よく見ろつたつてサクラちゃんが落ちて……はれ?」

ナルトが不思議そうな声を上げた。確かにサクラは地面へ真っ直ぐ向かってきていた。しかし落下ではないことは、あの猛スピードの中でも決して離れない足と幹が語っている。つまり体重は支えきれないが、木と足が密着する程度のチャクラを調整しているのだ。その差はごく僅かだらう。

あんなの、俺でもできるかどうか。

カカシがサクラへの認識を改めたところでピタとサクラは止まつた。地面から一メートルほどの高さである。そのまま悠々と地面へ降り立つ。

三人を振り返つたサクラは一瞬不思議そうな顔をして、すぐさま「しまつた」と言わんばかりに目と口を大きく開き、パーの手を口の前に持つてきた。任務中は相手の嘘を見破り鋭い推理をするサクラだが、普段の彼女は純粋で嘘がつけない。今のよつに動搖も隠せず、思考が筒抜けなのだ。

「えと、ど、どうしたの？ カカシ先生」

引きつり笑いを浮かべているサクラを追及する声はない。カカシとしては木登り修行に慣れているのが気にはするが、この場で指摘するのは可哀想だと判断した。

「ん？ いやいや。この中で一番チャクラのコントロールが上手いのは、どうやら女の子のサクラみたいだな」

「うひょー！ すげえすげえってばよサクラちゃん！ ねね。今のがどうやんの？」

「ナルト。木登りもマトモに出来ないお前には到底無理だ。木登りをマスターしてからにするんだな」

「によっしゃ！ なんかやる氣出てきた。行くぜ。たあああああつ
「ふんつ」

俄然やる気になつて木へと駆けて行く一人を見送り、サクラを見た。田が合つとサクラは大げさに肩を震わせた。用件を察しているのだろうが、目の前で『私は何も知りません』と宙に目を彷徨わせている姿と、鋭い冴えを見せる姿は重ならない。普段は大人びていが、こういう姿は年相応だ。

「とりあえず修行はいいから。念のためタズナさんたちの護衛に戻れ

「はいっ」

「あ。夕食後、俺の部屋に来るよつこ」

「……はい」

一度喜んだ後、サクラはしょんぼりと肩を下げた。じょじょ去つていいく背を見ながら、カカシは右目を細めた。

力カシが第七班を受け持ち始めてから一ヶ月以上経過している。それだけ一緒にいれば気つくことは多い。その中でも際立ったのが、サクラの強さへの貪欲さだつた。両親が目の前で殺された過去を考えると当たり前かとも思ったが、どうもそれだけじゃないよう見える。もうすぐそこにタイムリミットが迫っているかのような強い焦燥を感じるのだ。いや、焦りというよりもあれば。

それにあの渦。

写輪眼でサクラを見た時の衝撃が彼には忘れられない。三代目が自分にサクラを任せた理由はこれかと悟つた。サクラの中に渦を巻く何かが見えたのだ。今は右目でも見える。突如見えるようになつた原因是不明だが、基本あの渦が見えないものであることは分かつた。

「はあ。やれやれ」

本当に大変な班を任せられた。力カシは思つて頭をかいた。彼の目は、しかしとても柔らかかった。

第三十一劇「見えるよつになつたもの」（後書き）

「うちのサクラはすげーんだぞ！」を、ちょっと主張してみた（笑）。

渕が見える条件はいくつあります。『写輪眼で見えたってシカマルと三代田はどういやねん！』となるかもしませんが、一応理由はあります。ご都合主義かもしませんけども。

チャクラコントロールの説明について。

料理云々とか、よけい分かりづらいとかは言わないと約束。^え

それにしても、やたらとカカシ先生の出番が多いんですが、どうしよう。そのうちカカシ先生主人公になつてたりして（爆）。

修正（11・06・13）

間劇「それぞれの視点」

一体力カシに何を言われたのか。肩を落としてしょんぼりと去つていいく背中を見送り、サスケは前に向き直つた。

『どうしてあんなことをした?』

『え?』

タズナの家に着く少し前にサクラは田を覚ました。礼を言いながら自分の背を降りた彼女に、サスケは言つた。

『なんで俺をかばつた』

『それ、は』

彼が首だけ振り返ると、どこかで見たことのある、困ったような泣きそうな顔をしたサクラがいた。あれはいつ見たのだつたか。

思い出せぬままサスケは前を向く。ナルトとタズナは力カシを抱えながらすでに家の玄関をくぐついていた。この場には一人だけしかいない。息を吐き捨てるように、サスケは声を口からしぼり出した。

『……一度と、するな』

『ごめんなさい。消え入りそうな声を背中で聞いた。

「くそつ」

苛立ちながらサスケは木を登つていく。しかし、先ほどより遙かに下の方で足が滑つた。もう片方の足で木を蹴り空中で体勢を整え、

着地する。ぎりっと見上げた木の頂上はあまりに遠かつた。

「だせえ」

サスケは重々しく呟いた。

あんなのただのハツ当たりだった。サクラは悪くない。あのままの姿勢で落下してたらサスケもただではすまなかつたろう。だが、ピクリとも動かないサクラを見て、サスケは頭が真っ白になつた。呆然とサクラを見下ろすことしかできなかつた。

ナルトがいなければ、間違いなくぼけつとしたまま殺されていたことだらう。

「とつやああああああ」

「ぐるぐるとい叫び声を上げて木を登つていく姿を田で追いながら、サスケはもう一度咳いた。だせえ。

『じめんなさい』

サクラの声がサスケの中で繰り返し響く。あの時サクラは泣いていたのだろうか。ああ、俺はいつもあいつを悲しませるばっかりだ。せつかく最近は普通に話せるようになつて笑顔も。

「おーいサスケ。なんだ、もう休憩か？」

「つ！ んなわけあるかよ。このウスラトンカチ」

カカシの声でサスケは我に返る。自分は何を考えてるんだ。今はこの修行に集中しなければ。サスケは木の天辺を睨みつけた。
風になびくサクラ色が見えた気がした。

* * *

サクラが努力しているのを、ナルトはよく知っていた。以前それで手を気にしていた彼女に、手袋を贈ったこともある。すつごく喜んでくれた。

「すつげえな

ナルトは乱れた呼吸をしながら地面に倒れ込み、木の傷痕を見つめた。一番高くて四メートルほどだらうか。そこから目線を天辺に向ける。まだまだ遠い。

サクラが努力しているのを知っていた。自分も負けじと努力していたつもりだった。だというのに、この差はなんだろうか。ついと彼は手を伸ばす。

「遠い」

サクラの周りはいつでも鮮やかで温かくて眩しくて、ナルトは中々声をかけることが出来なかつた。ナルトにとつてサクラはもつとも近くにいて、もつとも遠い存在だつた。

だから同じ班になれたのが彼はとても嬉しかつた。少しでも近づけると思つた。でも、まだまだ遠すぎる。

あれほどのことができるようになるまで、サクラはどれほど修行したのだろう。想像したナルトは、勢いよく起き上がり、勢いをつけて少しふらついた。情けない。

タンタンタン。

視界の隅で軽快に木を登つていくサスケの姿が見えた。サスケはナルトの印をあつという間に超えていく。遠い。悔しい。自分より

もこつだつてあいつの方が彼女に近いのだ。

ナルトは自分の手を見つめた。修行でマメや傷だらけになつた手を。

『「じめんね、ナルト。もうつた手袋^{ほひ}ほひになつちやつて

申し訳なさそうに言つてきたサクラの姿が思い浮かぶ。一体どんな修行をしていたのか。擦り切れて穴だらけになつた手袋を悲しげに見下ろし、新しい手袋をつけている理由をサクラはナルトにわざわざ話に来た。気にせずともいの、自分が傷つくと思ったのだうつ。

あの時ナルトは確かにショックを受けた。しかしそれは、密かにおそりいで買つていた自分の手袋がまだまだ使える状態だった、ことに対してだ。次の日から彼はもつとがむしゃらに頑張るよつこなつた。それでも、
まだまだ足りないのだ。

「どうやああああああ

気合を入れてナルトは木を登つていぐ。

絶対に追いつくんだ。時折寂しそうにしている彼女の傍に行くんだ。いつだって自分を励まし、引っ張ってくれる彼女を、今度は自分が。

『「じつしたのっ』

こつかの夕暮れを唐突に思い出した。

* * *

これはこれは。

カカシは少し呆れながら一人を見ていた。サクラがいなくなつた途端、先ほど以上に気合が入つていて。これだけ気合が入つていれば逆に集中が乱れそうだが、お互いの存在を意識しつつも徐々に二人は高い地点へと向かっていた。

どうもサクラという存在は一人の起爆剤らしい。そして相性の悪い二人の接着剤もある。

個性溢れる七班がまとまっているのはサクラの存在が大きいだろう。しかし中心のサクラはかなり不安定だ。中心が崩れた時、七班こいつらがどうなるのか。カカシはそこが不安であつた。

まー そこを何とかするのが俺の役目なんだがな。

「とりやああああああ」

氣合の声と共に登つっていくナルトへ自然と目が向かつた。ナルトとサクラはどうもアカデミー前から仲が良かつたようだ。二人の関係は世話のかかる弟とそんな弟に苦労する姉のよう。と、ナルトに言えば怒られてしまうだろうが、サクラは同意するに違いない。光景が思い浮かんだカカシは少し笑つてから、息を整えているサスケを見た。

「だせえ」

小さい弦きが聞こえた。このサスケとサクラの関係がよく分からぬ。最初はぎくしゃくしており、仲良くなつたかと思えばまた戻つている。一人の態度を見ていると単純に恋心を抱いている、とう感じでもなさそうで、かといって嫌いあつてているわけでもなく。

……問題はこの一人だろう。

「一体二人の間に何があるのか。カカシは知らない。知る必要もきつとない。それ自体は二人が解決すべきことだ。

しかし、吐き出し口ぐらいにはなれる。

「とりあえずはサクラから、だな」

カカシは口の中だけで呟いた。

間劇「それぞれの視点」（後書き）

一話一話の長さが増してきていて、ストック切れそつなのが恐い（ガクブル）。

カカシていーちゃんのポジションは、結構半々？ な感じなので、どつともどれる程度の描写に抑えとこうかなあつて思つてます。ナルトやサスケをからかつている大人と、割かし本気な大人気ない先生と。ちなみに私はどつちも好きです。

修正（11・06・13）

第三十一劇「保護者の苦労」

「シナミセ、手伝います」

台所をのぞいたサクラは、タズナの娘であるシナミに声をかけた。ちょうど料理中だった彼女は長い黒髪を一つにまとめ上げていた。サクラを見て微笑んだ。

「気にしなくていいんだよ。サクライちゃんたちはお密やんなんだか
ら」

「はは。でも料理するの結構好きなんですね」

「そうかい？ ジャ、お願ひしようかな。あ、これを短冊切りにしてくれる？」

「あ、はい」

了解をもらつて台所に入り、サクラはシナミと同じように髪を纏めた。手を洗つてシナミから渡された野菜を指示通りに切り始める。その様は自炊しているだけあって手慣れている。シナミがそれを見て感心した声を上げた。

「へえ。本当に上手だね。お母さんに習つたのかい？」

「あつと、そ、そんなものです」

サクラは返事に一瞬詰まつたが、シナミはそれに気づいたのか気づかなかつたのか。明るい声を出した。

「でも嬉しいもんだねえ」

「え？」

大根を切っていたサクラがふいと顔を上げた。ツナミが笑っていた。その笑顔に、サクラは少し固まった。

「娘と一緒に台所に立つの、夢の一つだつたから…… サクラちゃんのおかげで叶つたわ。ほライナリは男の子だし料理なんて手伝つてくれないしね。

あ、娘だなんて勝手に言つちゃつて」めんなさいね

『お母さんね、夢だつたの』

別の声も聞こえた気がして、翡翠の田が見開かれた。だから、途中で申しわけなさそうに眉を下げたツナミに、

「いえ、ありがとうございます」

サクラは笑つて礼を言つた。

* * *

非常に憂鬱なため息がサクラの口から吐き出された。田の前には変哲のないドアがあつた。入りたくない。サクラは思いながらドアを睨んでいた。

「サクラ、何してる。入れ

が、部屋の中から聞こえた声に逃げることもできず、肩を落として彼女は部屋に入つていった。

部屋の広さは六畳ほどで、怪我人のカカシはその部屋を一人で使

つていて。真ん中にしかれた布団で横になりながらイチャバラを読んでいた彼は、誰がどう見ても凄腕の忍者には見えない。サクラが一步部屋に入るとカカシは本を閉じ、座るように田で促した。サクラは迷った後、布団近くで正座した。

本音を言えば入り口付近で座りたい、いや、逃げたい。

「で、サクラ。どうして呼ばれたか、分かっているな？」

「はい」

「あの修行法、どうやって知ったんだ？」

「……図書館で読みました」

かすれた頬りないサクラの声に、カカシの目が細められた。

木登り修行は、簡単そうでいて難しい。そして何より危険を伴う。途中で落下した際、まだ体勢を整えて着地できる程度ならいい。だが、身体も動かせないほどスタミナが切れた場合はどうだろうか。何もできずに落下してしまう。良くて大怪我。下手をすれば死もあらう。

第一チャクラは生命エネルギーでもあるため、全てを使い切ってしまえば死ぬ。チャクラを使った修行とは、それだけ危険と隣り合わせである。なのでアカデミーの生徒（一般人）に教えることはない。あつたとしても、それは保護者付きの上で、だ。

とはいって、サクラも嘘を吐いたわけではなかつた。

「確かに図書館に忍術修行法の本があつてもおかしくはないが、アカデミー生には閲覧禁止となつてゐるはずだ」

図書館とは言つても、一般人に貸し出し・閲覧禁止となつている本は多くある。主に忍者に関する本だ。情報漏えいを防ぐためでもあるが、修行法一つにしても木登りのように危ないことはたくさんあるのだ。到底一般人に貸し出せるわけもない。

「す、みません。その、忍びの人が読んでいるのを横から盗み見ました」

うなだれて白状したサクラは、カカシが驚きに目を丸くしたのを知らない。ひたすら俯いて審判の時を待つていた。カカシのため息にビクリとする。

「サクラ。お前がそこまでして強くなりたい理由は、なんだ？」

次いで聞こえた言葉は、サクラの予想と大きく違った。意図が分からず、サクラは恐る恐る顔を上げてカカシを見た。黒い瞳がまつすぐ彼女を見ていた。真剣な、嘘も言い逃れも許さないといわんばかりの強い目線だった。

小さな唇をサクラは引き結んだ。

「ある人を救うこと、か？」

「……そう、です」

「……サクラ、お前」

サクラが何も言わずにいるとカカシは少し目を伏せてから、またあの目をした。さつきよりも、断然優しいものだつたが。

「お前は一体何を怖がっているんだ？」

「っ！」

体中を電気が走ったように、サクラの身体が小刻みに震え始めた。まるで本当に電気で身体が痙攣しているようだ。異常な彼女の反応を見てカカシが少し慌てた。

「サクラ」

「や」

カカシの優しい声に、サクラは首を横に振る。こわばった顔から血の気が引いてくる。確かにサクラは何かを恐がっていた。何を？

「あの子のために、生まれたのに」「あの子？」

じみ上げるもの堪えるように、サクラは口の身体をキツクキツク抱きしめる。震える手で必死に、自分を閉じ込めていた。そんな努力をあざ笑うように、彼女の口は勝手に言葉を吐き出していく。

「あの子のために生まれ、あの子のために生き、あの子のために繰り返してきた。でもあの子は磨り減るばかりで、消えてしまいそうだつた。このままでは私の意味がなくなってしまう。だから私はあの子になつたのに」

「

聞いていたカカシが何かを言った。サクラにその言葉は聞こえなかつた。一度吐き出し始めた勢いは止まらない。

「ここにいるのが楽しい。ずっとここにいたいと思つてしまふ。みんなが愛しくて仕方ない。もうどうしたらいいのか分からぬの。苦しい。だって私は、私は」

「

誰かの声がして、視界が暗くなつた。

* * *

「すまない、サクラ」

カカシは痛む体を動かしてサクラの体を横たえた。先ほどまでの取り乱した様子とは違い、健やかに寝息を立てていて、彼はホッと息を吐き出した。

「まさかこれほどとは、な」

サクラが胸の奥に抱え込んでいるものの大きさを田の辺当たりにして、カカシの瞳が悲しげに揺らいだ。

正直、彼には言葉の半分も意味を理解できなかつた。あの子というのが鍵なのだろうが。

『私はここにいてはいけないのに』

小さくか細い声が、カカシの耳に強烈に残つていた。何がサクラを追い詰めているのか。カカシには分からぬ。分かつてやることができない。

「あの渦と関係があるのか？」

話している間のサクラの目には渦があり、明らかに普段よりも強く速く渦巻いていた。翡翠の奥で渦巻くそれを思い出してカカシの身体がゾクリと震えた。到底自分の手に負えることとは彼には思えなかつた。あの目は、人にできるものじゃない。しかし、

彼は右手で頭の後ろをかきむしめた。

「……サクラ。それでもな。たとえお前がどんな存在でも、お前は俺の大事な仲間だ。きっとナルトやサスケも、そう思つてる。だからな、もう少し俺たちを頼れ」

* * *

サクラが目を開けると、見慣れたマスクと斜めにつけられた額当てが見えた。彼女はパチパチと数度まばたきをする。カカシはやっぱり右目しか見えていないのだが、よく見ると結構美形かもしれない。

え、いや、違う。そうじゃなくて。えー？

何が起きているのか分からぬサクラに、カカシは笑顔で声をかけた。

「よつサクラ。おはよつ」

サクラは暖かな布団の中にいた。そして目の前の男、カカシも布団の中にいた。部屋には布団は一つしかなく、つまり同じ布団で寝ているわけで、自然と二人の距離は近くなるわけで……彼女は思い切り息を吸った。

「いや――――！」

その叫び声でナルトたちが駆けつけた。勢いよく飛び込んできたナルトとサスケが、なんとも言えない表情をして、慌ててサクラをカカシから引き剥がした。寝たきりのカカシへ詰め寄る一人の剣幕

に押され、サクラが正確に状況判断できるまで数秒かかった。

そしてサクラは思い出す。昨日、話の途中で眠ってしまったことを。さあと頭が冷めた。

「力カシ先生つてば見損なつたつてばよ」

「あのね。今のは私がわる」

「変態上忍」

「いやだから先生が悪いんじゃなくて」

「サクラちゃん、こんなのかばう必要ないつてばよー」

「そうだな。こんなのはさっさと始末すべきだ」

「こんなのつて……待て。いいか？ 僕はこの通り動けないから襲いたくても襲えな……あ、ちがつ。落ち着け！ お前ら田が本氣だぞ」

「ああ、本氣だ」「本氣だつてばよ」

「待つて待つて本当に違つんだつてー」

その後、サクラが四苦八苦しつつなんとか一人の誤解を解くことができ、力カシの命は無事だった。ふう吐息を吐いたサクラは、心が妙にすつきりしていることにようやく気がついた。

「本当に何もしてないんだな、先生？」

「しつこいなお前も。してないつて」

「……ふん。どうだか」

「あのねえサスケ、ナルト。お前らちよつとは俺を信じよつとか思わないの？」

「思わないな」

「同じくだつてばよ」

「がくつ」

サクラは一人に囲まれたままの力カシを見た。

まさかわざと？ 私が昨日のことを引きずつたりしないようにしてくれたの？

じつと見ていると視線に気づいたカカシがサクラを見て、にこつと笑った。大幅に見直したところだったので彼女はちょっとヒドキつとした。

「あー！ カカシ先生がヤラシイ目でサクラちゃんを見ているつてばよ」

「んぐつナルト、お前ね……つてサスケ、無言でクナイを構えるな！ あぶおつ！」

が、

「んぐぐ、考えすぎかな」

必死に下忍二人から逃げ回っているカカシに、サクラはそう結論付けたのだった。

第三十一劇「保護者の苦労」（後書き）

修行に関する記述について。

独自解釈です。基本的な鍛錬法のわりにナルトたちが全く知らなかつたのは変だなあと、こうしてみました。

実際かなり危険ですよね。作中でもナルトが落ちそうになつて危ない！ みたいなシーンもあつたし。

図書館について。

忍者に関する書物が氾濫していたら、アカデミーにわざわざ通わなくても忍者になります。そうすると、正規の忍者を雇わず自分でやつた方がよくなることは多いです。世界が破綻しかねないなと思つたのでこうしました。

変なところあれば教えてください。

今回はカカシでいいちゃーとの話でした。ふざけながらもちゃんと気遣つている先生が好きです。

主人公、サクラちゃんの謎についてはまあ、もう分かつた人いるのかな？ いたら、まだ胸の中になつとしまつていてもらえると助かります。……サクラだけじ、ほとんどオリキャラと化しているな、と最近思う舞姫です。あくまでも肉体はサクラですが。

お気に入り100人突破！ ありがとうございます。これからもがんばります！

修正（11・06・13）

第三十二劇「俯いた国」

トントントンカンカンシャシャッ。

聞いていると一つの楽曲のように思える騒音の中、サクラは珍しそうに工事現場を見回した。積まれた資材や行きかう人の邪魔にならないように注意しながら、何かあればタズナをすぐ守れる距離をキープする。

サクラは力カシからタズナの護衛を任せていた。

力カシたちは、というと襲撃に備えて木登り修行に専念している。今は再不斬も仮死状態の後遺症で動けないはずなので、家族にまで手は伸びないだろうという判断からだ。下手に命の危険を知らせて不安に思わせることもないため、タズナの娘であるツナミと孫のイナリには何も告げていない。

「珍しいか？」

「珍しいというか、すごいなあって」

重そうな角材を肩に乗つけたタズナが初めて彼女を振り返り、そんなことを聞いてきた。黄色いヘルメットがタズナの雰囲気も合つてとても似合っていた。孫がいる老人とはとても思えない。

「これだけ大きいと、バランスだと強度もかなりしつかりさせないと崩れてしましますよね。設計者の方はもちろん、作業している人たちはすごいなあって」

「……おめーさんは、本当に子供らしくないの。あの金髪のガキみてーに純粋に超感動すればえんじゅよ」

「ははは。性分なもので」

サクラが苦笑していると一人の男が駆け寄ってきた。何があったのか。思いつめたように表情が暗い。

「タズナ、ちょっとといいか?」

「どうした、ギイチ」

「俺、よく考えたんだが」

ギイチと呼ばれた男は、随分と歯切れが悪かった。タズナが眉を寄せた。何か察しているような顔だった。

「俺、橋造り、降ろさせてもらつてもいいか?」

「はあ、まさかおめーまでそんなことを言い出すとは」

「あんたとは昔からの縁だ。こんなことは言いたくねーんだが、無茶をすると俺たちまでガトーに田をつけられちまう。それにお前が殺されてしまつたら元も子もない。この辺で止めにしねーか」

雲行きが怪しい。タズナは角材を置き、まだできていない橋の、その先へと顔を向けた。彼は首をかすかに横へ振った。

「そろはいがねーよ

「タズナっしかし

「この橋はワシリラの橋じや。資源の超えしい波の国に物流と交通をもたらしてくれると信じて、町のみんなで造つてきた橋じや」

「けどー! 命までとられたら

「もう毎じやな。今日はこここまでにじょり ギイチ、次からはもう来なくていい。サクラ、行くぞ」

「あ、はい」

歩き出したタズナをサクラは追いかけた。気になつて彼女が振り返ると、まだ佇んだままのギイチがそこにいた。

* * *

「どこに行くんですか？」

「ゆうめし帰りに夕飯の材料を頼まれとつたからの」

会話をしながら一人は町中を歩いていく。

二人とさきほどすれ違った男は『仕事なんでもやります』と書かれた板を持ち歩き、道の両端にはたくさんの人が無気力に座り込んでいた。座り込んでいるものの中にはサクラより幼い子供もあり、傍にはお椀のようなものが置いてあった。お椀の中は、空だつた。

「ドロボー！」

叫び声に驚いてサクラがそちらへ顔を向けると、果物を手につかんだ男の子の走り去っていく姿が見えた。サクラは唇を噛む。鉄の味がした。

「ニニじゅ」

タズナが立ち止まつたのは、看板がなければ店とは気づけないほど小さく静かな建物だった。

あまりにもガランとした店内を見て、今度こそサクラは立ち尽くした。商品を置く棚にはほとんど何もない。空いている棚の方が圧倒的に多く、置いてあつたとしてもやせ細つていたり腐りかけの野菜があるだけ。この状態がただ単に売り切れたから、でないことは簡単に思い浮かべることができた。タズナは黙り込んでいるサクラに何も言わず、いくつかの野菜を買って、彼女を促し店を出た。

「驚いたか？」

「はい……予想はしてたんですけど」

しばし無言が続き、タズナがぼそりと口を開いた。サクラは目を伏せながら頷く。タズナが命を懸けてまで橋にこだわる理由を、サクラは本当の意味で理解した。いつだって自分は頭で知つたつもりになるばかりだ。そのことを、痛感した。

「ガトーが来てから、ですか？」

「そうじゃな。元から裕福とは言えない国じやつたが、こんなにも下を向いてばかりではなかつた。ガトーが来てから、大人たちはみんな腑抜けになつちまつた」

「タズナさん」

「だから今、あの橋が必要なんじや。勇気の象徴。無抵抗を決め込んだ国の人々にもう一度、逃げない心を取り戻すために。あの橋さえ、あの橋さえあれば。町はきっとあの頃に戻れる。みんな戻つてくれる。

ワシは、ワシらはそう信じるんじや」

握り締められたタズナの拳が、決意の重さを語つていた。

「大丈夫ですよ」

感化されたのかもしれない。あの子を重ねただけかもしれない。思いながらも、サクラは口を動かしていた。見上げたタズナの顔は、影になつていてサクラにはよく見えない。必死に笑顔を向けた。

「私たちが必ず守ります！ ですからタズナさんは橋造りに専念してください。絶対に完成させましょう！ そしたらきつわふ」

言葉は最後まで言えなかつた。頭をタズナに押さえつけられたからだ。でも、サクラは抵抗しなかつた。乱暴に頭を撫で付けるその手が、どこか優しかつたから。

「ああ、頼む」

「はい！」

* * *

同時に木へ向かつた二人だったが、先に地上へ戻つたのはナルトだつた。

「くそつ

まだ登つてゐるサスケを見て悔しげに顔を歪ませた。

「ちつ

サスケは幹に傷をつけて降りる途中、ナルトがつけた傷を見て舌打ちした。段々ナルトが彼に追いついてゐるのだ。地上に降り立ちサスケがナルトを見ると、ナルトもまた彼を見た。しばしにらみ合つた後、サスケはまた登つていく。

それを見送つたナルトは深呼吸を何度も繰り返して氣を静めた。

『ねえねえサクラちゃん、コツ教えてくれつてばよ』

『つ……もう、しようがないわね。いーい？ あんたはすぐやつきになるけどそれじゃダメ。リラックスして木に集中するの。分かっ

た?』

サクラにコツを尋ねた時のことを思い出す。そういうえばなんか驚いてたみたいだけど、なんだつたんだろ。驚いてたってよりもショック受けてたみたいな、あれ? 意味一緒に……って違う違う。集中。よーし、いい感じだ。いける!

「おい、ナルト」
「あだつだ」

今までに飛び出すところだつたナルトは、サスケの声に足をもつれさせ、見事に転んで頭を地面にぶつけた。飛び起きてサスケに怒鳴る。

絶対たんこぶできたぞ今ので。

「もおおおおなんなんだばよお前は! 集中してんのに邪魔すんな!」「う、あ、その、なんだ」

ナルトが睨みつけると、サスケの様子がおかしくなつた。いつもなら真っ直ぐ睨みつけてくる田が、あちこちを彷徨つている。そもそもサスケからナルトに話しかけてくること自体が珍しい。ナルトは警戒した様子でサスケを観察した。

「う、この前サクラにコツ聞いてたよな。お前に、なんて言つてた?」

田の前で照れくさそうにしているサスケを驚いた田で見てから、ナルトは嫌味な笑いを浮かべた。

「教えない」

「ぐぬつ」

サスケの眉がぴくぴくと動き、一人はいつもの如く睨み合つた。

* * *

「いやー超楽しい夕食だわい。こんなに大勢で食事するのは久しぶりじゃな」

タズナの笑い声を聞きながら、ナルトとサスケはすごい勢いで食べていた。そんな中、ツナミの手伝いをしていたサクラが台所から顔を出す。料理をしていたからか、いつも下ろしている髪を上げ、エプロンをしていた。

「ちょっと二人とも！ もう少しゅうくり食べなさいってば」

サクラの声にナルトとサスケの箸が一瞬止まる。しかし目が合つた二人はにらみ合い、また勢いよく食べ始めた。カカシがタズナとツナミに申し訳なさそうに笑いかける。

「すいません。遠慮を知らない奴らで」

「いやいやいいんじやよ。にぎやかな方が食事は楽しいもんじや」

「そうだよ先生。それにこれだけ食べてくれば作る側も嬉しいからね」

大人たちはそう言つてまた三人へ目を向けた。その目はどこか温かい。

「サクラちゃんおかわり!」 「サクラ、おかわり」「あ・の・ねえ。私は一人の給仕係じゃないんだから、もひつ」

文句を言いつつ、サクラは睨み合っている一人からお椀を受け取っていた。条件反射のようだ。ご飯をついで一人に渡す姿は中々様になつている。

「ありがとう!」 「サンキュー」

またかき込み始めた二人の周りでサクラはちよこちよこと動き回る。怒りながら、

「ああもう、ナルトっ! あんたもう少し綺麗に食べれないの?」「むぐぐ」

口の周りを汚しているナルトの顔をぬぐつてやり、

「んんっ」「はいはい、一気に食べるからうつなるのよ」

喉に食べ物を詰ませたサスケの背をさすつてやり、

「あ、イナリ君、おかわりいる?」「……いる」

物静かなタズナの孫、イナリを気づかつてやり、と大変忙しい。どうもサクラは根っからの世話焼きのようだ。そんなサクラを眺めていたタズナは、ふむふむと頷く。

「サクラ、おめーさんは将来いい嫁さんになるわ。ビハビヤ。イナリの嫁にこなか？」

「ふふーつじほつけはつ」「ふほつかはかはつ」

彼の爆弾発言にナルトとサスケが同時にふき出した。サクラが「汚い」と顔をしかめて後ろに一步下がる。が、げほげほ激しく咳き込む一人にまた駆け寄つて一人の背をさすり始めた。サクラ自身はタズナの言葉をどうとも思つていないようだ。お世辞の一つ、と考えているかも知れない。

「ちょっと一人とも大丈夫?」

「サクラあ、俺の心配もして欲しいんだが」

「あーはいはい」

ふき出されたものを頭から被つたカカシが哀愁漂つ声を上げ、サクラがタオルを手にカカシの髪を拭き始めた。

「いきなり何言つんだってばよ、タズナのおつかやん! つてか、カカシ先生なんてうらやましい」

「つらやましいってあるなあ、誰のせいで」

「先生動かないでよ! ちゃんと拭けないでしょ

「ごほつかはつはつ」

「わわわっちょ、サスケ君大丈夫?」

「いやー今からひ孫の顔が楽しみじゃわい」

「だーつサスケ、てめつわざとだらそのセキー おつかやんもいい

加減その話題から離れろってばよー」

『あやあやあと騒がしそぎる面々を、巻き込まれないよつに見ていたツナ』は、肩を震わせて笑つていた。こんなに笑つたのは久しふりだと彼女は思った。

* * *

そんな騒がしい食事が終わり、ゆっくりとお茶休憩していると、サクラは壁にかけられた写真に近寄った。

写真には四人写っており、そのうち三人はタズナとツナミ、それからイナリだ。だがもう一人、どうやら男性らしい人がいるのだが顔が分からぬ。そこだけが破られていた。まるで意図的に破り取られたようである。

「なあなあおっちゃん。なんで敗れた写真なんか飾つてんだ？　ここのに飾つてるのって誰だ？」

サクラの隣にやつってきたナルトがそれを覗きこんだ。皿を洗つていたツナミが一瞬、動きを止めた。いや、彼女だけでなくタズナも、イナリも、まどついていた空気をガラリと変えた。サクラが眉を中央に寄せた。

「夫よ」

「かつて、この町で英雄と呼ばれた男じや」

湯飲みを見つめながらタズナが言つと、唐突にイナリが立ち上がりつた。そのまま無言で出て行つてしまつ。慌ててツナミが追いかけ行つた。

「お父さん、イナリの前であの人の話はしないでつていつもドアが勢いよく閉められた。

サクラはほとんどイナリについて知らない。話しかけてもろくろく返事すらしてもらえないからだ。暗くよどんだ目の少年は、最初にサクラたちと会った時「こいつら死ぬよ。ガトーに逆らって無事でいられるわけないんだ」と言い放つた。ナルトが木の葉の火影になり英雄になるのだと語れば「英雄なんていないよ。バカじやないの？」と彼を怒らせていた。

かなり根暗なイメージが強いが、この写真に写っているイナリは年相応の明るい笑顔だった。こうして笑っていると中々可愛らしい顔をしている。

「何かわけありのようですね
「……ガトーが来てからなんじゃよ」

タズナが言うには、昔はよく笑う子だったのだが、慕っていた養父をガトーに処刑された日から笑わなくなつたらしい。

養父の名前はカイザ。国外からやってきた漁師だった。いじめられていたイナリをカイザが助けたことから知り合い、イナリはたいそう彼に懐いて、やがて本当の家族になつた。

他国の人間ではあつたが明るく、また勇気のあるカイザは町の人たちからも慕われていた。大雨が降つて堰が壊れかけた時には命がけでロープをつなぎ町を救つた。町の英雄、とまで呼ばれたすごい人だつた。イナリからしてみればさぞかし誇らしかつたろう。そんなイナリの気持ちがサクラにはよく分かつた。

しかし、そんな人間ではあつたが故にガトーに目をつけられてしまつた。町民たちの希望を閉ざすために、カイザはまだ幼いイナリの目の前で無残にも処刑された。

「あれ以来、イナリもツナミも、町民も変わってしまった。地面ばかり見るようになったんじや」

第三十二三劇「俯いた国」（後書き）

普段髪を下ろしている子が、たまに髪をあげているとビキリとします（笑）。とりあえず、仲良し騒がしい七班が書いて満足。

つてか、話が進んでなくてすみません。どうしてもタズナとの会話は入れたくて。カイザンとはあつさりすませたけど、結構大事な話ですね。なぜこの国が無氣力になつたのか。かなり簡潔にしてしまいましたが、伝わるといいなあ。

しばらくこんな感じで戦闘ないんですが、お付き合いいただけると嬉しいです。

第一幕は何事もなければ三十七劇まで、間劇が一つ入ります。

修正（11・06・13）

第三十四劇「突きつけられた現実」

「えつと……気候を考えるとここいらへんに生えてそつなんだけどなあ」

サクラはきょろきょろと森の中を見渡した。朝の散歩がてら薬草を探していた。カカシの治療のためだ。

一応上司であるし、この前のお礼？ もかねでている。

「怪我や病気とはまた違つから気休めだらうけど、何もしないよりはいいよね？」

一人でブツブツと呟いている様子は、少し不気味だ。
余計なお世話だと思われたらどうしよう。

じてんと傾けたサクラの顔から不安の色は消えない。そんな彼女に迫る影があった。

「どうかしたんですか？」
「うひやあつ！」

声に驚いてサクラが後ろを見ると、目を丸くしている黒髪の美少女が立っていた。思わずその姿勢のまま一人は固まり、しばしの沈黙後に「ふふふふ」と少女が肩を揺らし始めたことで、よつやくサクラの金縛りは解けた。サクラの顔が一気に赤くなる。「まかそろと無意味に両手を大きく振つたことで、細い肘にひつかけている力ゴが大きく揺れて音を立てた。少女がカゴに目を留めてなるほどと頷いた。

「あー！ やりやくじゃ、いやその、藥草をつつひつつ摘みに来たんでしゅ！」

少女の様子に気づかなかつたサクラは、よほど慌てていたらしい。囁きまくつた。

落ち着け。

サクラは心の中で自分にツツコミを入れるが、上ずつた声を聞いてしまつたせいで余計に緊張したらしく、口からは「わひやわひや」と無意味な声が出るだけだつた。元々赤くなつていた顔がさらに赤

沈黙が降りた。

氣まずげに再び硬直したサクラは、まるで審判を待つ罪びとのよ
うに緊張していた。

「ふつあははははははひや、やくじょりなういい場所知つてあります

沈黙を破つたのは、少女の笑い声だつた。少しほかんとしたサクラは、顔を逸らして笑いを堪えているらしい少女に眉を吊り上げた。

「薬草です！」

「すいませ……ふふふ」

- 1

少女は綺麗な顔をしている割に意外と意地悪らしい。笑いを納める様子なく歩き始めた。案内してくれるのだろうが、どうぞと言いながら口元がしつかりと弧を描いているため、サクラは素直に礼を言えなかつた。ムスツとしたままで行く。だがどうにもツボにはまつたらしく、ムスツとした表情まで笑われてしまい、顔に見合わず笑い上戸な少女にデジヤヴュを覚えた。これはいくら言つても

無駄だろ？、とサクラは悟った。

深い深いため息が吐き出された。

案内された先には、確かにサクラの探していた薬草が群生していた。しゃがんで薬草を摘み始めた少女（どうやら同じ目的だつたらしい）を眺めながら、サクラも薬草を摘もうと手を伸ばし、動きを止める。ボロボロの手が空気にされされていた。

普段、手袋はつけっぱなしのだが、寝る時は外す。どうやらそのまま来てしまったらしい。さっき少女の気配に気づかなかつたことといい、随分と寝ぼけている。

まあしきりがないかとサクラは苦笑し、プチんと薬草を摘み取つた。

「……もしかして忍びの方ですか？」

サクラが無心に薬草を摘んでいると、そんなことを問われた。少女の声には、真剣な響きがあった。眉を寄せたサクラが顔をこわばらせて目を向けると、少女が自身の頭を指で叩いていた。サクラの額当てがある位置だ。

そりや額当てを見れば分かるか。

警戒を少し解く。

「まあ、まだまだ弱いんですけどね……いつ

「あ！ 大丈夫ですか？」

余所見をしていて、サクラは草の葉で指を切つてしまつた。ピリリとした痛みと失態に顔を少し歪め、サクラはポーチに片手を伸ばした。

もううどうじてこう今日は寝ぼけてるんだろう。手は、ポーチにたどり着くことなく止まつた。

「あの？」

「ちょっと待つてください」

なぜか田の前の少女に、サクラの手が握られていた。懐を探つた少女は傷薬のようなものを取り出し、茶色っぽい軟膏をサクラの指に問答無用で塗りつけた。傷がしみて反射的にサクラの手が動いたが、少女の力は強く、びくりともしなかった。

手を放してくれる気配は無く、サクラは仕方なしに適切に処置をしていく姿を眺めていた。見れば見るほど綺麗な少女だった。まつ毛長いなあ、とか。髪さらさらしてるなあ、とか。肌白いなあ、とか。顔も可愛いしモテるだらうなあ、とか考えた。ほら、この手もきれ……い？

「つ！」

「駄目ですよ。まだ終わつてませんから」

気づいたサクラは慌てて腕を引いたが、少女の手は、やはりビクともしなかつた。

淡々と治療を続けているその手は、ゴシゴシと硬かつた。それが普通になるものでないことを、サクラはよく知つていて。いろいろと思い違いをしていた。

修行を重ねたものだけにできるその手は、しかしサクラのものよりも大きい。ナルトやサスケの手に似ていて、どれだけ力を入れても動かないことが何より雄弁に語つている。田の前の儂げな少女が、忍びとしての訓練を受けた男の子であることを。

寝ぼけていたサクラの頭が覚醒し、回転し始める。

忍びはこの国にはいないはずだ。と、すれば対象は絞られてくる。……おそれくこの子がお面の少年なのだらう。体格は得ていた情報と一致するし、やっぱ「ローロー」の年のやつ手忍びがいては堪らない。どうする？

腕を取られた状態、しかも相手はかなり強い。助けを呼ぶ？しかしナルトは修行に出ていておらず、サスケやカカシはまだ寝ているだろう。自分でなんとかするしか。

怪我をしていない左手を動かした。

「下手なことはしない方がいいですよ？」

「くっ」

クナイを掻む直前にあっさりと見破られ、草地に押し倒される。両手は頭上で地面に縫いつかれたようで、びくともしない。両足で下半身も押さえ込まれていて、サクラはまったく動けなかつた。

自分を見下ろしている少年をサクラは睨むが、余裕な笑みを浮かべている彼は、己が掻んでいるサクラの手のひらを見つめていた。途端、サクラは身体から力を抜いた。手のひらを見つめている少年がどこか嬉しそうで、気が抜けたのだ。

殺されることはない。

根拠もなく確信してしまい、そんな自分自身にサクラはひどく困惑した。

少年は抵抗しなくなつたサクラに「おや」と目を向けた。本人は自分の表情を理解していないのだろう。「抵抗しないんですか？」聞いてきた少年にサクラはため息をついて、「朝から無駄なことはしたくないの」と答えた。少年はくすくす笑つた。

「あなたは変わった人ですね」

「うつわ、悪かつたわね！　どーせ変人ですよ！」

「ふふふふつ怒るってことは、よく言われるんですか？　でも、僕は好きですよ」

「放つといてくれ……は？」

ポカソと口を開けてしまつたサクラに、少年は微笑んだ。それは

とても綺麗な笑みだつたが、なぜだかサクラは寒気がした。

「だつて僕と同じ目をしている」

「な、に言つて」

「本当はあなたも気づいているはずだ。僕とあなたは似ている。僕たちは道具だ。ある人の目的を果たすための」

「違うっ私は、私の意志で」

『私は彼らの背中を見ているだけなの。それが辛い』

あの子の声が頭の中で響いて、サクラは言葉を続けられなかつた。本当に自分の意思なのか。そもそも自分の意思とはなんのことだ。自分の意思などあつただろうか。自分はあの子の。

「あ、ふうつはひつ」

唐突にサクラの息が乱れ始めた。

苦しいのだらうつ。翡翠の瞳からは涙が零れ落ちていた。少年はそんなサクラの頬を優しく撫でた。サクラは「止めて」と懇願した。苦しさよりも、その先を聞きたくないと彼女は思った。必死に耳を塞ごうと暴れた。少年はそんな抵抗を簡単に押さえ込んで微笑む。整つた少年顔がサクラに近づく。

嫌だ！　聞きたくない！

腕に力を込め、なんとか抜け出そうとサクラは身体をひねる。しかし形のいい唇が動き、吐息がサクラの耳に届いた。

「いつ捨てられるか。いつ居場所を失うか。いつ存在意義がなくなるのかと、怯えている。

あなたは僕と同じそんな目をしている」

* * *

「つたく、どこまで行きやがったんだ。ウスラトンカチ共が」

イライラとサスケは足を動かした。

ナルトは「この世に英雄がいるつてことを、イナリに教えてやる！」と意気込んで昨晩から帰つてこず、サクラは「散歩に行つてきます」と今朝ツナミに声をかけたきり、朝ごはんの時間になつても帰つてこない。

口では文句を言つてはいる彼だが、さつむじい飯を食べ終え「散歩」と称して一人を探していた。きょろきょろ動いている黒い田は、心配の光を持っていた。

草を踏みしめながら歩いていく。ひんやりした朝独特の空気が心地よい。

「はつはつうわ
「……サクラつ？」

小鳥の鳴き声に混じつて聞こえた苦しげな呼吸音に、サスケはピタリと動きを止めた。一度だけ聞いたことのある、忘れようにも忘れない音おもいでだった。

サスケは慌てて音の聞こえた方に駆ける。木がひどく邪魔で仕方なかつた。焦燥が募る中、木と木の間から鮮やかな桜色が見えた。

「サクラッ」

サクラは、あお向けに倒れ込んだ状態で浅い呼吸を繰り返していた。名前を呼ばれても、どこかぼんやりとしている。ふつくらした唇がサスケを呼んだようだつたが、声は出でこなかつた。なんとも

弱弱しい。昨日サスケとナルトに説教していた強気な少女の姿は、どこにもない。彼女の姿は今にも消えてしまいそうに夢かっただ。

柄にもないと頭で思いつつも、サスケは焦った。

どうすればいい？ 前はどうしてた？

「かはつはつあ

翡翠色の瞳は何かをサスケに訴えていたが、パニくるだけでどうするべきか彼には思いつかない。その間もサクラは苦しそうに息をしていて、いつその呼吸が止まつてもおかしくないよう感じた。

このままでは、死。

『お前らは俺が死んでも守つてやる』

『そうだ！ 少し待つてろ。今力カシを呼んでく』

ようやく人を呼ぶという選択肢が思い浮かんだサスケだったが、足は動かなかつた。紺色のシャツを引っ張るものがあつた。

「か、なで」
「サクラ？」

呼吸の間に小さな声がした。肩越しにサスケが振り返ると、サクラは辛そうにしながらも身体を起こし、弱弱しく彼のシャツを握っていた。大きな瞳からは今にも涙が零れ落ちそうだが、サスケを真つ直ぐ見ていた。あまりにも必死な彼女の様子に、サスケは耳へ意識を集中させた。聞かなければならぬ気がした。

『置いて、いかないで』
『待つて、待つて　君！　置いていかないで』

「つー」

その言葉に、サスケの心臓が大きな音を立てた。
どこかで聞いたことがあった。いや、そんなことはない。こんな記憶に残るような声を忘れるはずがないのだ。きっと氣のせい。

「私も、い、しょに」

肩より短くなつた桜色の髪を、サスケは見下ろしていた。自分が守れなかつた証をじつと見て、こいつはこんなに小さかつたかと驚いた。いつも傍にいたのにそんなことにも気づいていなかつた。気づかなかつた自分をサスケは笑つた。

『サクラ、ありがと「つ』

さまざまな思いを乗せた言葉と共に、彼女を置いていった。連れなど、行けるわけがなかつた。いや、違う。サスケは首を振つた。
なんだこれは。こんな光景、自分は知らないはずだ。

「つ、サクラ？」

背中に増した重力でサスケは我に返つた。

脳裏に浮かんでいたすでに情景は消えており、先ほどまで何を考えていたかも分からなくなつたが、今はサクラの方が大事だつた。シャツを掴んでいた手からは力が抜けており、そつと手を外して向き直る。いつの間にか呼吸は正常に戻つていたが、意識がない。ぐつたりした身体を支えてやりながら、サスケは彼女の頬に手を当てる。熱も特になさそうだ。そのまま一滴だけこぼれていた涙を拭い、ほうっと息を吐き出した。

「ほんと、なんなんだよ。お前は……わけ、分かんねー」

眩きながら背負った少女は、自分とそつ体格が変わらないはずなのにとても軽かった。

* * *

「……サクラ、落ち着け」

「ふええつ？　お、落ち着いてます！」

「じゃあ歩き回つてないで座りなさい。それとも先生の膝がいい？」

「え？　あ」

力カシに指摘され、サクラはようやく自分がうつむきよる無意味に歩いていたことを知った。途端に顔が熱くなり、ぎこちなく椅子に腰かける。力カシの後半の台詞は軽く無視をした。サクラの視界の隅では、力カシが少ししょんぼりしていた。

翡翠の目は、テーブルの上に置かれた料理に向かつた。そこにはすっかり冷えてしまつた夕食が一人分、用意されている。ナルトとサスケの分だ。

おそらく一人で木登り修行をしているのだろう。

サクラとて、理解はしていた。だが、理解できても納得しているのかといえば、そんなことはない。なんだかすごく嫌な予感がして、いた。迎えに行こうとして力カシに止められた。サクラがなぜと聞いても「あいつらなら大丈夫だ」しか答えは返つてこない。

「おおつ？　なんじゃおめーら。超バテバテじゃねーか」

背後で聞こえたドアの開閉する音に、サクラは勢いよく振り返つ

た。そこにはサスケがナルトに肩を貸して支えている、という珍しい光景があった。二人はタズナの言う通りボロボロだったが、無事ではあるようだ。

「へへへつ二人とも天辺まで登つたぜ」

ほつとした表情のまま、サクラは固まつた。ナルトの声を頭の中で反芻する。

天辺まで登つた？ まだあの修行を始めて一週間しか経つていないのに？

サクラは愕然とした。木の天辺まで登るためには結構なスタミナが必要で……彼女は約一ヶ月かかったのだ。

どうしようもない現実を突きつけられ、サクラは俯いた。今、二人を見るのは怖かった。

「よし。ナルト、サスケ。次からお前らもタズナさんの護衛につけ
「おつす！」

* * *

どうも変だな。

力カシは腕を組んだ。彼の目の前には、競い合うようにして食事をするナルトとサスケ、怒りながら二人の世話を焼くサクラ、とうここの数日で当たり前と化した光景が広がっている。一見いつも通りだが、違う。

渇が弱まっている。

ナルトとサスケは変わりない。しかしその目に宿る渇が、息を吹きかけただけで消えてしまいそうなほどに小さく、弱弱しい。

おそらく彼女の精神状況も同じなのだろう。なんて分かりやすい。

サクラのことだから、二人の修行がクリアされたことを聞けば喜ぶだろう。カカシは思っていたが、先ほどの彼女は、逆に落ち込んでいた。一人より先に始めていたため、一週間で追いつかれたとも思ったのかもしれない。実際は追いついてなどいないのだが、複雑な心境になるのは分からぬでも、ない。

しかし心中では悔しくとも、サクラなら笑顔で「お疲れ様」ぐらいは言はずだ。彼女はそういう気遣いができる子である。

「おかわり！」「おかわり！」

「マネすんなってば」

「どっちがだ」

「あ～はいはい。にらみ合わないの」

やはり、朝、か。

カカシは今朝のことを思い出す。サクラは、サスケに負ふわれて返ってきた。慣れない環境に疲れたのだろう。タズナやツナミはそう言つて納得していた。ありえなくもないが、カカシには違和感がある。サスケは「寝てた」とだけ報告したが、一瞬目が泳いだのをカカシは見逃してはいなかつた。

「なんで、なんでそんなに必死になるんだよ！　諦めろよ！　どんなに頑張つたってガトーには勝てないんだから」「ん？」

カカシは思考を中断した。

部屋に響いた声はナルトたちよりも幼い。タズナの孫、イナリがドアの隙間から顔をのぞかせてボロボロのナルトたちを見ていた。ナルトは青い瞳でイナリをちらと見て、すぐに逸らした。興味がない。そう言わんばかりに。ナルトがこういった態度を取るのは珍しい。

い。カカシの目がわずかに細まった。

「つるつせえなあ。お前とは違つんだよ」

「黙れよ！ お前ら見るとムカつくんだ。この国のこと何も知らないくせにでしゃばつて。辛いことなんて知らないで、いつもへラへラしてお前らとは違つんだよ！」

泣きながら叫んだイナリの言葉に、ナルトもサスケも、サクラも……反応の度合いは違えど、わずかに身体を動かした。サスケはイナリを見て、身体ごと別の方向へ向けた。サクラはそつと目を伏せた。ナルトは、そんな二人を見てから、

「だから悲劇の主人公気取つてビービー泣いてりやいいってか？」

今までカカシが聞いたことのない低い声を出した。イナリがビクリと震えた。ナルトは机に突つ伏した状態のまま、そんなイナリを見みつけた。

「お前みたいなバカはずつと泣いてる。泣き虫ヤローがつ！」

「んんぐついくつ」

「ちょっとナルト、あんた言いすぎ……ナルト！」

「……ふん」

慌てたサクラが注意するも、ナルトは立ち上がり家を出て行つた。サクラはオロオロしてナルトが出て行つたドアと、泣いているイナリを交互に見ている。カカシは思わず苦笑した。サクラ自身も悩みを抱えて苦しいだろうに、キヨロキヨロしている翡翠の瞳には心配の輝きしかない。

ふとそんな瞳とカカシの目があつた。困惑の表情を浮かべている彼女からカカシは目を離し、ドアを見て、また彼女に目を戻す。聰

い少女だ。意図に気づいたのだろう。少しホッとしたように息を吐いてから、ドアを開けて出て行つた。

こっちとしては助かるが、一番心配な生徒が一番気遣いできるつてのも考え方だな。

カカシはサクラを見送った後、とりあえずタズナヒツナミに謝罪

を口にしたのだった。

第三十四劇「突きつけられる現実」（後書き）

「」という謎のある主人公って、今さらながらどうなんでしょうか。
いやほんと今さらなんですが。

あと、カカシ先生にはこんな風にサクラを構つて欲しい。恋愛感情とか関係なく。年の離れたお兄さん的な感じで。他の二人を、サクラ使ってからかい遊ぶとか、いいよね。

七班は、個人個人も好きだけど、全員そろつとなお好きだ。

次回は間劇です。ちょっと？ 恋愛要素入る、かも。

修正（11・06・13）

間劇「まだ僕には両腕がある」

イナリは一人、桟橋の上で三角座りをしていた。何をするでもなく、水面に写つてゐる月と自分の顔を眺めていた彼の背に、声がかけられた。

「ちよつといいかな？」

彼が振り返ると銀髪の男がいた。鼻の上から首までピチリとし黒い布で覆い、左目を斜めにつけた額当てで隠す、というなんとも怪しい格好をしている。月明かりしかない今は特に怪しくて仕方がない。祖父のからは凄腕の忍者と聞いていたイナリだが、松葉杖をついて柔軟に笑つてゐる男の姿から「凄腕の忍者」は想像できなかつた。

「別にいいけど」

「ありがとう」

そつけなく返した声に怒つた気配もなく返事が来て、イナリはとても惨めな気分になる。膝を抱く腕に力が入つた。

「どうこいしょ。

ジジ臭い台詞を吐きながら隣に座つた力カシは、やっぱり強そうには見えない。でもきっと、怪我をしている今でも自分など及ばないほどに強いんだろう。タズナに聞いた話を思い出し、イナリは俯いた。彼らは自分とは違つて強い。……だけど、それでもきっとガトーには勝てない。

「ナルトも悪氣があつたわけじゃないんだ。ただ、あいつはすぐ

不器用でね

話し始めたカカシに、イナリは視線すら向けず黙り込んでいた。思い出すのは金髪の少年のこと。いや、彼だけじゃない。必死に強くなろうとしているサスケも、弱そうに見えるのにタズナを必死に守ろうとしているサクラも、イナリには理解不能だった。

彼らには関係のないことのはずだ。命を懸けてまでタズナを守るなんて、どうかしている。

『じゃあ、あなたはおじいさんに死んで欲しいの?』

ふとサクラに言われた言葉が頭を掠めた。彼らが帰ってしまえば、十中八九タズナは殺されるだろう。イナリにも分かっている。分かってはいる。イナリだってタズナに死んで欲しくなどない。大事な家族なのだ。

大体じいちゃんもじいちゃんだ。なんでわざわざ危険を冒し、依頼内容を偽つてまで忍びを雇つて橋造りを続けるんだ。諦めたらいいじゃないか。どーせ頑張つたつて無駄なんだ。父ちゃんだつて。

「お父さんの話は、タズナさんから聞いたよ」

聞こえた声にイナリの身体は勝手に反応した。きゅうっと心臓が縮こまるような気が、彼はした。

「ナルトには小さい頃から両親がいない。というより、あいつは親という存在を知らない。ずっと一人で生きてきたんだ」「え?」

「サスケとサクラにはいたけど、今はいない。一人とも君と同じで家族を殺されてる。あいつらはみんな一人だ」

ようやくカカシを見上げたイナリに、しかしカカシは田線を前に向けたままだつた。どこか、遠くを見ているような田だとイナリは思つた。

「でも、あいつらがいじけたり泣いたり、諦めたりしているところは一度も見たことがない。まあ、俺もあいつらとそう長い付き合いつてわけでもないんだけどね。」

ナルトは誰かに認めてもらいたいって田線に向かつて一生懸命で、サスケやサクラも田線こそ違うがやつぱり一生懸命で、前に進もうとしている。

夢のためなら、あいつらはいつも命がけなんだ」

「……どうして？」

「んん？」

「どうしてあんなに頑張れるんだ」

氣づけば、イナリはそんな問いをこぼしていた。カカシは田線だけをイナリに向け「そうだな」と少し田を睨つた。

「きつと泣くことに、諦めることに、飽きたんだよ」

「あき、た？」

「そつ……だから強こいつ」との意味を知つてゐる。君の父さんのようにな」

「父ちゃん」

田を開いたカカシが、また遠くを見つめた。イナリはなんとなくその視線を追いかける。視線の先には水平線と夜空しかない。月がやたらと眩しく感じた。

『危ないよ父ちゃん』

『大丈夫だ。父ちゃんはイナリのいるこの町が大好きだからな』

堰^{せき}が決壊しかけた時、カイザはそう笑つてイナリの頭をなで、激流の中に飛び込んで行つた。イナリはそんなカイザを岸から応援していた。繩がつながった時は、誇らしかつた。

だけど、自分は見ていただけ。

『いいかいナリ。本当に大切なものはこの両腕で守るんだ』
にっこり笑つたカイザの腕は、頼もしかつた。いつか自分もあんな風になるんだとイナリは思つていた。
だけど、自分は彼に頼つていただけ。

『父ちゃん!』

『泣くな、イナリ』

最後に見たカイザは、無残にも腕を切り落とされていた。 嘘
つきだとイナリは思つた。あの腕で守つてくれると言つてたじやないかつて、心の中で父を罵つた。
だけど、自分は泣いていただけ。

「父ちゃん」

ああ、そうか。そうだつたんだ。

ようやく氣づいたことに、イナリは静かに涙を流した。だけど、氣づくのが遅すぎた。あまりにも、遅すぎた。

自分がカイザを『自分の両腕』で守ればよかつたんだ。

ただ見守るのではなく。ただ頼るのではなく。ただ泣くのではなく。いつだってカイザが自分に教えてくれたように、自分の両腕で彼を守ればよかつたんだ。カイザはずつと教えてくれていた。そう。死の間際でさえ、腫れた顔をしたまま笑つて、教えてくれていたんだ。

「もう無理、かな」

「イナリ君？」

「今さら気づいたって遅いかな。もう父ちゃんのようになれないかな？」

力カシの田線を感じながら、イナリは膝の上で握り締めた拳を見つめていた。すると頭の上に軽いものが乗つけられ、何度か帽子越しに彼の頭を撫でた。きっと髪の毛はぐしゃぐしゃになったことだろう。でも怒る気はしなかった。

「きっとなれるさ。君が気づいて、前に進もうとする限り、ね」
水面に[写]っている自分の顔が笑っているのを、イナリは久々に見
た。

* * *

「夜の木の上つてのも、中々いいものね」

ナルトは、細い木の枝の上で器用に膝を曲げて座っていた。

気配には気づいていたものの、ナルトは視線を彼女に向かなかつた。いつもなら声を掛けられただけでも嬉しいはずなのに、今はただ放つておいて欲しかつた。だから出会つてから初めてナルトは彼女を無視した。

というのに、彼女 サクラは気にした様子なく大きな満月を見上げ、心地よい風を全身で楽しんでいた。翡翠の瞳は気持ち良さそうに細められ、横に流れている桜色の髪が、月明かりを浴びて妖しく輝きを帯びた。

「ありがとね、ナルト」

唐突にかけられた言葉に、ナルトはついサクラを見てしまった。サクラは「やつとこつち見た」と彼に微笑んだ。まんまと眼に引っかかつてしまつたのに、なぜか彼は悔しくなかつた。それでも反論の一つぐらいはしたいとナルトは頭をめぐらせたが、彼のの口はポカンと間抜けに開いたまま動かない。

円を背負つて微笑んでいるサクラから田が離せなかつた。なびく髪はいつも見るより落ち着いた色をしていて、顔に浮かべた微笑みはあまりにも優しく、翡翠の瞳はナルトの全てを飲み込んでしまいそうなほどに深い。

まるで生きた芸術品のような いや、自分の頭ではふさわしい言葉が思いつかない。芸術品なんて言葉じや足りない。そんなものじゃ生ぬるい。

田の前にいるのはサクラのはずなのに、別の何かに思えた。

「あんたが私たちの分も怒つてくれたから、すつきりしちゃつた。きつとサスケ君も感謝してると思つ」

声で我に返つたナルトだつたが、サスケの名前に途端不機嫌そうに口を尖らせた。別に、何もしてないつてばよ。冷たく言葉を返しても、サクラはくすくすと笑うだけ。口元に手を当てて笑つている姿にはどこか気品が漂つついて、氣恥ずかしくて目線を逸らそうと思つのに、逸らさせてくれない。ずっと見ていたいとナルトに思わせるのだ。

ずるいよな、サクラちゃんは。気づいたとしても、そつとしておいてくれたらこんな恥ずかしさは感じないのに。

心の中で文句を言いながらも、気づいてくれたことがやつぱり嬉しい、氣を抜くとナルトは顔が緩みそうだった。氣を抜いたって構わないのだが、そこは男の意地だった。

「だけどあれは言いすぎよ。まだイナリ君は八歳なんだから、言葉を選んであげないと」

「だつてあいつが」

「あいつじゃないでしょ？ イナリ君」

「……サクラちゃんはどうちの味方だつてば」

イナリを庇うかのような言動にナルトがムツとして聞くと、サクラは呆れた顔をした。「どっちの味方でもないわよ、中立よ。中立」聞こえた声に、ナルトはさらにムスッと頬を膨らませた。

「ほーらもう。拗ねないの」

「いてつ……別に、拗ねてないつ」

いつの間にかすぐ傍にいたサクラに、眉間を指で軽くはじかれた。たいして痛くはなかつたが、ウルサイ心臓をごまかすため、ナルトは大げさに手でさすつた。すると今度はサクラがムツとし「私はそんな馬鹿力じゃないわよ」そう怒つた彼女はいつも彼女で、ナルトは知らず安堵した。

自然と差し出された自分よりも小さな手を、彼は自然と握り返した。手袋をしていない彼女の手は硬かつたけれど、温かつた。

「さつ帰るわよ」

「うん」

「イナリ君と仲直りしないと朝飯抜きだからね」

「えええっ？ そんな！ サ克拉ちゃんそれだけは～」

「じゃあ仲直りすることね」

「うう」

一緒に木を降りながら、ナルトは横にいる彼女をうかがつた。す

ぐ気づいてこちらを見た彼女に、笑いかける。

「俺、サクラちゃん大好きだ」

ナルトが素直な気持ちを言葉にすると、彼女の身体がガクンと下がって彼は大変に驚いた。

「つひや」

「わわわ、ちょっと大丈夫?」

「ナルトーーー!」

「へ」

なんとか無事地上に降り立った後で散々サクラに怒られたナルトは、しかし不思議そうな顔で彼女を見ていた。彼女の顔は、心なし赤く染まっていた。

「ねえねえ。なんで怒ってるの?」

「なんでって……あんたがいきなり変なこと言つからでしょー!」

「変なことって?」

「……す、好き、だとか」

「だつて俺サクラちゃんのこと好きだし」

「つひやう~」

「ほんとどうしたんだってばよ」

「どどどどうどうしたって……あ、あんたのせいでしょう! いい?

そういうのは気軽に言つちや駄目なの。人前で言つのも駄目!

絶対駄目!..

「なんで? 嘘じやないし、冗談でもないし、ここには俺とサクラちゃんしかいないよ?」

首をかしげたナルトに、サクラは俯いて黙り込んだ。あまりにも

様子がおかしいので彼が心配になつた頃、キツとサクラは顔を上げた。翡翠の瞳が今にもこぼれそうなほど潤んでいて、ナルトはドキッとした。

せりと手が離れる。

「もうあんたなんか知らないつ」

「えっ？ ちよつ待つてつてば、サクラちゃん！ よく分かんないけどゴメン。だから許して」

「ついて来ないでよ」

「そう言われても、家の方向そっちだし」

黒川一樹

理不尽だ。

思いつつもナルトはサクラの背中を追いかける。本気で怒つてい
ないのが分かっているからだ。修行で疲れきったナルトのペースに
合わせて歩いているのが、何よりの証拠。自然と笑みがこぼれる。

「やつぱり俺つてばサクラちゃん大好きだ」

ポロリとナルトが口にしてしまつて、氣のせこどりがないほど顔を赤くしたサクラが振り返り、彼の名前を怒鳴るように呼んだ。いつもなら恐いその声も、今は恐くなかった。

なんと言つても真っ赤な顔が可愛くて、ナルトは癡になりそうだ、とほくそ笑む。基本サクラの「いつ」とは守るのだが、これだけは守れそうになかった。

「おせせせせ。カクツウタシハ一可憐ニ」

「か、かわッナ、ナルト——っ！ もうだから、そういうのは
禁止だって言ってるでしょ。」

間劇「まだ僕には両腕がある」（後書き）

ストーリーと関係あるけれども、サクラ視点がまったくない場合は今度から間劇とします。

イナリの決意的な話を書きたかったんですよ。それと波の国の人
がカイザに頼りすぎてたんじゃ、という思いもぶつけてみました。
ずっと守つてきてくれた英雄を誰も守ろうとはしなかつた。あれは
悲しかつたなあ。タズナが今回がんばってるのは、その反省がある
からじゃないかと勝手に妄想。

後半は書いてできやーっとなった。はずいはずい。ナルトは天然
タラシ（天然黒？）だと信じて疑わない作者です。

修正（11・06・13）

第三十五劇「熱に身を任せた」

「じゃ、ナルトをよろしくお願ひします」

カカシの言葉にツナミが「任せといてよ、先生」と胸を叩いて頬もしい返事をした。彼女の顔が晴れやかなことに、ナルトとイナリが仲直りした一件が絡んでいるのは、間違いなかつた。

一体カカシはイナリをどんな風に慰めたのだろうか。サクラはそれがすつごく気になつて仕方ない。

昨日の夜、サクラとナルトが家に戻るとイナリがいきなり土下座をしてきたのだ。

「今まで偉そうに言つてござめんなさい」

謝つて顔を上げたイナリは、目元が少し赤くなつていたが、真つ直ぐにサクラたちを見た。数度まばたきをしてから「気にしないで」と微笑んだサクラに対し、男の子一人は複雑な顔だった。それでもサスケは「別に」と短く返事をした。まだわだかまりが少ない分、言いやすかつたのだろう。

黙り込んでいるナルトをサクラは肘で小突く。

「う……お、俺もちょっとと言い過ぎたってばよ、『ゴメン。イナリ』

照れくさそうにそっぽを向いていたナルトとイナリの目が合つた。この時一人は初めて笑い合い、すぐさま意氣投合したのだ。今までの険悪ムードはなんだつたんだ、とサクラが文句を言いたくなるほどだった。以前「男なんて基本、単純馬鹿なのよ」などとイノが言つていた。その真理をサクラは見た。

「強くなるためには筋トレだーっ

「おおーっ」

叫びながら腕立て伏せをしている二人を眺め、サクラは納得していたものだ。イノの言葉はホントになる、と。

まあ。そんなことがあつたため、筋トレで疲れきった二人は日が高くなつた今もぐっすり夢の中だつた。

当初の予定では、サクラが家に残つてツナミヒイナリの護衛をする予定だつた。しかしこの通りナルトが寝ているのでサクラは急遽、タズナの護衛につくこととなつた。

再不斬とお面の少年。

最低でもこの二人の相手をする必要があるのだが、この二人は強い。守りながら戦うのは困難で、一人は戦闘に加わらず、タズナを守る必要があつた。つまり最低でも三人は必要となる。

なのでナルトにツナミたちの護衛を任せて、サクラはタズナについて行くというわけだ。いくら疲れきっていてもナルトだって忍びの端くれ、何かあれば起きるだろう……たぶん。

確信を持てないのはなぜだらうか。

「それじゃ、行って来るわい」

「行つてらっしゃい。気をつけてね」

「わかつとる」

復活したカカシ、修行を終えたサスケと共にサクラはタズナについて行つた。

* * *

橋の上は異常なほどに静まっていた。

「なんとこ‘づ、ことじゅ」

タズナが力なく膝をつく。彼をいさめる声はない。

昨日まで活気にあふれていた橋の上に、作業をしている人間は一人としていなかつた。漂っているのは鉄の匂い。散らばつているのは赤く染まつた建築資材と、肉の塊。足元に転がっている黄色いヘルメットの『安全第一』という文字が、白々しくサクラの目には映つた。

「遅かつたな」

その声には聞き覚えがあつた。無言でサクラが目を向けると口布を巻いた男、再不斬がそこにいた。彼の隣にはお面の少年、後ろには見覚えのない忍びが一人立つっていた。

それだけを確認したサクラは、興味なさそうに彼らから視線を外した。代わりに見つめるのは誰のものかもわからない腕。日々の建築仕事で傷だらけの力強い腕が、持ち主不在で転がつていた。

『なんだ嬢ちゃん。橋造りに興味があるのか?』

『すいません。気になっちゃって』

『はつはつはつ! 構わんぞ。いいかあればなー』

護衛の任についていながらもサクラは好奇心が抑えられず、休憩中の作業員に話しかけてしまつた。彼らは嫌な顔一つせずサクラの質問に答えてくれた。楽しくなつたサクラは何度も彼らに質問をしそうして話を重ねるうちに彼らと自然に親しくなつていた。任務の一環だといつのに、橋に行くのが楽しみになつっていたのだ。

忍びとしては失格だが、それでも今日は一體どんな話が聞けるのだろう。内心そんな期待を抱きながらサクラは毎日ここに来た。彼らはこの国に残っていた勇気そのものだった。

『橋が完成したら波の国は変わる！　いや、俺たちで変えてやるのさ』

みんな自分の仕事に誇りを持つていて、橋の先を子供のようなキラキラした瞳で見つめていた。この橋が国に繁栄をもたらしてくれるのだと。俯いている人たちが元気になってくれるのだと、心の底から信じていた。

その信じた未来を、彼らが迎えることはもう、ない。

指の先から氷水につかっていくような寒気がサクラの全身を覆つていく。これは、なんだろう。寒いのに、腹の奥だけマグマでもあるみたいに、熱かった。これは、なんだかう。サクラはそつと腹に触れた。手袋越しに熱が伝わってくるような気がした。

「お前たちがあまりにも遅いからよー。ちょっと遊ばせてもらつたぜ……遊びにもならなかつたがな」

霧が辺りを覆い始めた。「サスケ！　サクラ！　陣を組め」という力カシの声を聞きながら、サクラは構えることもしなかつた。身体がひどく重かつた。殺氣を感じて萎縮しているのではない。身体が拒否反応をしているのだと、サクラには分かつた。春野サクラとしての正しい行動をしろ。腹の中の熱を冷ませ、と訴えているのだ。それは今までに幾度も自分を縛ってきたもの。繰り返されて積み重ねられた泥が、高い壁となつて目の前に立ち塞がつっていた。今まで何度も屈服し続けてきた壁をサクラが見上げると、

『タズナさんを頼むぜ嬢ちゃん。あの人と鍵だからな』

『俺たちがどうかなつても、あの人さえ生きてりゃなんとかなる』

声が頭の中で響き、思った。サクラとしての“正しい”行動？
そんなの 知つたことか。

腹の中に留まっていた熱が一瞬で全身を駆け巡つて行き、重かつた身体が嘘みたいに軽くなつた。そして彼女は、風を切つて自分たちに向かつてくる武器、その数三十一、をはつきりと捉えた。

「サクラ？ 何して」

訝しげな力カシの声を、サクラは意識の外で聞いた。

飛来する脅威のうち、護衛対象、及び自分たちに命中する数二十九。それを防ぐ手順は三種。もつとも確実かつ安全な手順をサクラは選択する。それに則つて己が取るべき行動は十三度、どの角度に、どのタイミングで、どの武器を使い、どのような行動を取るのか。

それらを一秒とかからず計算した彼女は、手裏剣を三つ手に取つた。投擲された手裏剣はそれぞれ金属音を奏で、軌道が逸れた凶器が別の凶器へぶつかつて地上へ落ちていく。計六つの脅威を排除することに成功した。残り二十三。

サクラは手裏剣の結果を見終わる前にクナイを抜いて、右足に練つたチャクラを一気に送りこんだ。全身のバネとチャクラの反発力を使つたその跳躍は、サクラの残像をその場に残した。左手から飛んできたものをいくつかクナイで叩き落し、頭上から降つてきたものに向けてクナイを投げる。力キンと一度音がし、クナイの角度が変わつた数秒後、

「爆！」

声と同時にクナイは爆発した。起爆札（爆発する術式が書かれた札）をクナイに巻いていたのだ。

今ので計算より多くの脅威を無力化することに成功した。すぐさまサクラは手順を修正する。排除すべき対象は後七つ。立ち上がった護衛対象がやや後ろに位置を変更したが、問題はない。

再びクナイを抜いてサクラはタズナの背後に回り込んだ。迫つていた凶器を四つ弾き、手裏剣を斜め後ろと真上に一つずつ投げる。甲高い音が二つ聞こえ、最後の一つはカカシが叩き落した。これでひとまず脅威の排除は完了だ。

驚いた気配を感じつつ、サクラは黙して語らない。語るべきは今ではない。カカシもよくそのことを分かつていたので、彼女に問い合わせることをしなかった。

「ほお。この霧の中でそれだけの動きができるとはな。そっちのガキはそこそこやるみたいだが、もう一人は震えているじゃないか。可哀想に」

周りを囲むように突然現れた再不斬の水分身に、サクラは一瞥すら向ける必要を感じない。身体は相変わらず熱いが、冷静に状況を把握できていた。

「武者震い、だよ」

背後でサスケの震えが止まったのが、今のサクラには見ずとも分かる。彼の口角がひとつ上がったことすらも。

「やれ、サスケ」

カカシの声より少し早くに地面を蹴ったサスケは、水分身が抵抗する前にその身体をいとも簡単に切り裂いていた。水分身が役目を終えて水に戻り、パシャリと音を立てて橋の上に広がる。

「水分身を見切つたか。あのガキ結構成長したな。ライバル出現つてところか、白」

「そうみたいですね」

その場で何が起きているのか把握しているにも関わらず、サクラは目で見てはいなかつた。妙な感覚だつた。タズナはもとよりカクシやサスケの呼吸、まばたき、表情すらも彼女には認識できた。修行の成果だ、と思いたい。

「俺は力カシをやる。白はある小僧、お前らはジジイと小娘だ」「はっ」

濃い霧の中、再不斬たちの姿が不自然に浮き上がつて見えた。

* * *

イナリは膝を抱え、震えていた。

先ほど刀を持った男が家に一人やつて来て、母親を連れて行つてしまつたのだ。タズナに対する人質だといつていた。刃物が目の前に迫つた恐怖を思い出し、イナリはただ震えた。恐くて逃げることもできなかつた。

ナルトはタズナを追いかけて行つてしまい、この場にいなかつた。自分しかツナミを守れる人間はいない。イナリは理解していた。でも、

「ごめんよ。母ちゃん。僕には勇気がなくて。僕は弱くて、死にたくないんだ！」

『泣き虫ヤローがつ！』

「つー」

ポタリと床に落ちた涙を見て、イナリは震えを止めた。

『だから悲劇の主人公気取つてビービー泣いてりやいいってか？お前みたいなバカはずつと泣いてる。泣き虫ヤローがつ！』

『今さら氣づいたって遅いかな。もう父ちゃんのようになれないかな？』

彼は昨日の誓いを思い出す。自分の細い腕を見下ろした。一日腕立て伏せをしただけで悲鳴を上げている腕は、我ながら弱弱しい。けれど、そこにある。養父のよつた力強いものではなくとも、自分にはまだ両腕があった。

養父が教えてくれたように、この両腕で今度こそ大事なものを守る。誓つたんだ。

イナリは目元を拭つて立ち上がった。彼の膝は震えていたが気にしない。逃げそうになる足を叱咤し、ツナミを追いかけた。

何度もこけながらイナリが玄関を出ると、まだ桟橋の上にツナミの姿があつた。繩で手を後ろに縛られているが、怪我は特になさそうだ。とりあえず安心し、イナリは思い切り腹に力を込めた。気を抜くと今すぐ泣いてしまった。

泣くな泣くな。泣いている場合じやない。僕が、僕が母ちゃんを守らないで、一体誰が母ちゃんを守るというんだ！

「母ちゃんから手を離せ」

出した声は、かすれていひどく情けなかつた。男たちが振り返り、軽く睨まれただけでイナリは座り込みそつになつた。それでもツナミの姿を見て、彼は小さな身体から勇気を搾り出す。今勇気を出さなくては、一生後悔することになるのを、イナリは知つていた。

田を見開いたツナミが悲鳴を上げた。

「イナリっ！ どうして來たの。逃げなさいと言つたでしょー！」

「んあ？ なんだ。さつきのガキじゃねーか」

「母ちゃんから離れるおおおおおお」

素手でただ突撃してくるだけのイナリを見て、刀に手をやつた大きな男は楽しそうに笑つた。脣を舐めた表情は、斬りたくてたまらないと如実に語っていた。こみ上げてくる恐怖をイナリは叫び声で無理やり抑え込む。

「ひゅー。なあなあ、斬つていいよな、これはよお」

「しょうがねえな。いいだろ？」

「待ちなさい！ そんなことをしたら舌をかつ」

「つるさい。寝てろ」

「母ちゃん！」

なんとかイナリを守りつとしたツナミであったが、腹に拳を入れられて倒れた。イナリは、母へ手を伸ばす。男一人の姿など、すでに目に入つていない。母を守りたい。それだけを考えた。

「あああああああ母ちゃんは、僕が守るんだあつ

「そりゃ残念だつたな。死ね、ガキ！」

刃が宙に一本の線を描く。イナリの白い帽子が切り裂かれ……しかし、赤い血が飛び散ることはなかつた。桟橋に転がつたのは、三つに切られた丸太であつた。イナリの姿はそこにはない。

「馬鹿な！ 変わり身の術だとつ？」

「おい、女がいねーぞ」

男たちが慌てる中、『彼』は軽やかに着地した。

「遅くなつちまつて悪かった、イナリ」

「ナルト、兄ちゃん？」

「ヒーローってのは遅れて登場するもんだからな」

田の前にある金色の髪を、信じられない思いでイナリは見つめた。ナルトはイナリを肩から下ろすと、腕に抱えていたツナミをそっと横たえた。ツナミは気絶しているだけのようだ。

ツナミの無事を確認したナルトはイナリを見て、青い瞳を細めた。

「よくやつたな、イナリ。お前があいつらを引きつけてくれたおかげで、母ちゃんを助けられたぞ」

「でも兄ちゃんどうしてここに。じいちゃんのところに行つたんじゃあ〜、それがよお。森の中で斬られたイノシシを見つけて、変だなと思つてたら木とかにもたくさん刀傷があつて、それがイナリの家に向かつてゐからどうせ心配になつて」

悠長に話してゐる一人の背後で、男たちは冷静になつて、笑つた。忍者といえどまだ子供。斬る人数が増えたにすぎない。

「なんだ。誰かと思ったら、タズナの雇つた駄目忍者か

「ふんつやるぞ」

「兄ちゃん後ろー！」

再び向かってくる男たちにナルトは振り向きもせず手裏剣を放つ。あつさりと弾かれたが、男たちの後ろに一つの影があった。ナルトの影分身だ。手裏剣はおとつにすぎない。ナルトは笑つた。

「ばーか」
「ぐはあつ」

あっけなく気絶した二人を分身が縄で縛る。あまりにもあっさりした手並みに、イナリはパアッと顔を輝かせてナルトを見た。ナルトはどこか照れくさそうに頬をかいた。

「すっげえ！ 兄ちゃん、忍者みてえ」
「……イナリイ、忍者みたいじゃなくて、俺つてばちゃんとした忍者なんだけどなあ」

そんなに忍者に見えないかなあ。

落ち込んだナルトと、必死に慰めるイナリの姿がしばらくその場にあつた。

* * *

「サクラ」

「大丈夫です。先生は再不斬に集中していく下さい」
「……ああ」

お面の少年とサスケはすでに戦闘に入っていた。霧の向こうから金属がぶつかり合う音が聞こえてくる。

彼らとサクラの間に距離があるからか。どのような戦いになつているのか、サクラには認識できない。まだカカシの位置ぐらいまでは察知できるので、この不可解な現象が切れたわけではなさそうだが、いつまで持つかはまったく分からぬ。サクラは考えた。
同じような攻撃はしてこないだろうとは思うものの、こちらから

攻撃はできない分、状況は自分に不利だつた。

今、サクラの状態で感知できる範囲はタズナを中心として……最大三メートルがギリギリのラインだろうか。敵は一人いる。あまりタズナから離れることはできない。守りながら動くと考えればサクラにはせいぜい一メートルが限界で、身動きもろくに取れない。彼女は体術が苦手なのだ。

とはいって、カカシには再不斬へ集中してもらわなければならない。サスケもお面の白と呼ばれていた少年の相手で一杯一杯だろう。この場にいないうちにナルトに期待するのは愚策だ。時間を稼げればなんとかなるだろうが、周りを把握できるこの状態がいつまでもつか分からない。不確定要素が多くすぎるため、早く終わらせるのが最良のか。

サクラは、手に入るだけの情報を元に作戦を構成し始めた。

「ククク、俺たちの相手はこの二人だつてよ」
「再不斬さんもひでーよな。自分はあのコピー忍者とやりあつてるんだぜ。いいよなあ。俺もやってみたかつたぜ」

姿は見えず、反響した声はどこから聞こえているのか、サクラに読ませない。意識を研ぎ澄ませても分からぬのでおそらく距離が離れているのだろう。

「まあ、その分いい声で鳴かせられるからよしとするか」「そうだなあ。どうもさつき聞いたジジイたちの声だけじゃ満足でねーしょお」「やっぱりガキの声が一番いい」「女だつたら尚更いい」

男たちの声にピクリとサクラの腕が反応した。後ろで心配そうに彼女を呼んだタズナに、サクラは大丈夫と短く答えた。事実、サク

ラは自分が狙われていることをどうとも思っていなかつた。

「あなたたちが、おじさんたちを殺したの？」

気になつたのはその一点で、のどから出たかすり声はなんとも頼りなく、か細かつた。男たちが弱弱しいサクラの声を聞いて笑つた。

「ああ、そうだぜ」

「馬鹿な連中だ。橋造りを止めたら殺さないって言つたのによお。全員、橋を造り続けたんだぜ。俺たちを無視して」

「まったく、失礼な態度だよな。ムカついたからちょっと遊んでやつたら、粉々になつちまいやがつた。カカカ」

男たちの言葉を聞いたサクラの身体が、さらに軽くなつていた。ほんと、この感覚は一体なんなのだろう。サクラは、そう、と吐息のよがり声を出した。頭が妙にすつきりしている。

「ほんと。君たち人間はいつまで経つても愚かな生き物だね。けれど愛しい」

「は？ 何、を言つてる？」

「私はどんなに愚かでも君たちを愛そう。だから「めんね。許して」とは言わないよ。次にめぐる時まで、眠るといい」

翡翠色の瞳が、男たちへと向けられた。霧の中で、サクラは男たちの姿を完全に捉えていた。標的まではおよそ六メートル。一人は右斜め後ろに、一人は左に。同時に襲つてきた場合、左の攻撃を受け止めれば後ろの攻撃からタズナを守れない。かといって後ろに回れば左の敵の標的が自分からタズナに変わるだけ。両方の相手しようにもタズナが障害物となつて遮る。

ならば、

「タズナさん、しゃがんで！」

声をかけながら後ろにジャンプしたサクラは、腰をかがめたタズナの背に片手をつき、空いている手で左の敵へ手裏剣を投げる。敵は首を横に倒してそれを避け、にやつと笑った。しかし、笑ったのはサクラも同じだ。違ったのは、悲しみの微笑だったことか。

「爆！」

「な

敵の真後ろで爆発が起きた。あの手裏剣にも起爆札がつけられていたのだ。敵の身体が爆風で浮き上がり、前方へたたらを踏んだ。その間に後ろから迫っていた敵の腕を掴んだサクラは、相手の勢いを利用して自分より大きな身体を投げ飛ばす。

「はあああっ」

「なっ！ にい」

気合と共に投げられた敵はクナイを前に突き出した状態のまま、しゃがんでいるタズナの上を飛び越え、体勢を崩している相方へと突っ込んでいった。そして一人が驚いている間に、彼らへと凶器は放たれた。

「ぬぐおつああ

「が

手裏剣の一つは眉間に、一つは肺に突き刺さり、二人は抱き合つのような体勢で橋の上に倒れ込んだ。一人はしばらくもがいていたが、サクラがもう一本クナイを投げたことすぐに静かになつた。二人

の死を確認して、サクラは止めていた息を吐き出した。彼女の心に去来するのは、虚しさだけだった。

「……はつ、はつふう」

「おいつ？ サクラ、大丈夫かおめーさん」

サクラの身体から氣からが抜けた瞬間、心臓が急速に活動を始め、足ががくがくと震えた。口元を手で押さえる。タズナの問いかけに、残念ながら答える余裕はなかつた。サクラは顔だけ振り返つて、なんとか笑う。先ほどまでの身軽さはどこにもない。反対にいつもの重力の倍以上を感じ、氣を抜くと座り込んでしまいそうだった。

どうも先ほどの状態はかなり身体へ負荷がかかるらしい。脳へ伝えてくる情報が膨大で、処理するだけで頭がどうにかなりそうなほど痛い。さらには身体が鋭敏になるようで、先日切った指がひどく痛かつた。

強力な分、使いどころに悩みそうだ。まあ、そもそも発動の条件も仕組みも分からぬのだが、きっとあの子なら使いこなせるだろう。

何か一つ残せたことに、サクラはひどく安心した。

「しかし」

「少し、張り切りすぎただけですよ」

まだ心配そうなタズナに、ようやく呼吸が整つたサクラはいつも笑みを浮かべてみせた。

第三十五劇「熱に身を任せた」（後書き）

戦闘は鬼門です。うーん、難しい。
起爆札について。

この発動方式がよく分かりません。ウイキには時間が経つと、つてあるんですが、それだと持っているだけで爆発してしまう。チャクラでも込めるのかな。

とりあえず、サクラの戦闘に関してはこんな感じのスタイル（計算尽くしスタイル？）です。文章力に関しては、まあ、がんばりますです、はい。

今回書きたかったのは名もなきキャラたちです。タズナだけで橋はできない。ともに造ってきた彼らへスポットを当てたかった。原作だとケガしただけですが、実際問題、殺されてるよねって思う。

修正（11・06・13）

第三十六劇「季節外れの雪が降る」

「フオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

どれほどの間じつとしていただろうか。サクラが焦燥を感じ始めた頃に聞こえてきたのは、辺り一面を揺るがせるほど大きな咆哮だった。

人のものではなく、ただの獣でもない。それはなんとも禍々しい気配を放ち、嘆きの声を響かせている。どうして殺したと怒っている。

嫌な予感がした。

サクラは気づいている。この声の持ち主が誰なのか。禍々しい中にかすかに残っているこの温かな気配は、

「ナルト？」

見た目と同じく、いつも明るく笑っている少年のものに間違いなかつた。

いつ来たのかすらサクラは気づいていなかつたが、もしもこの気配が彼なのだとすれば、彼が死を悲しむ相手はカカシかサスケのどちらかに他ならない。カカシならば再不転がサクラやタズナを放つて置くわけはなく、今二人が無事だということはカカシではない。じゃあ、誰が死んだのか。あまりにも簡単な問い合わせだが、サクラは答えを出すことを拒否した。

唐突に霧が晴れていく。

「俺様の未来が死だと？　また外れたな、カカシ」

にらみ合っているカカシと再不斬の間には、白といつねの少年がいた。白の左胸にはカカシの腕が深々と突き刺さっており、絶命しているのは見ただけで分かる。どうやら再不斬を庇つたらしい。どこか満足そうな顔をしている白から、サクラの視線はゆっくり動いていく。

金髪の少年が佇んでいるその奥、倒れ込んでいる影が見えたところで動きは止まつた。一瞬ナルトの青い瞳がサクラを捉え、すぐに逸らされた。彼の唇が動いたが、声はサクラまで届かなかつた。サクラの肩に手が置かれる。タズナだ。

「ワシも一緒に行こい」
「……うん」

一泊置いてサクラはタズナに頷きを返した。大きな手と手をつなぎ、走る。ナルトの横を走りすぎた。

心臓がぱくぱくと跳ねた。

近づけば近づくほどまっかり見えてくる影に、サクラの走る速度が落ちていく。傍になつて見下ろせば、倒れているのがサスケだと、否定しようのない真実が重圧となつて彼女に襲いかかってきた。サスケの身体のあちこちには、千本が突き刺さつておりとても痛々しい。サクラがへたりとしゃがんで血に濡れた頬に触れてみれば、冷たかつた。夢や幻術でも、分身でもなく、それは目の前で起きている現実だった。

ああ、また。

「ワシの前じやからと氣にせんでええ。じつこいつぐらい、おめーさんも素直に泣くといい

かけられた優しさに、サクラはそつと翡翠の瞳を閉じた。

「ある日のトーストでね、忍びの心得第一二十五項を答えるって問題が
出したの」

「ん？ それがどうしたんじや」

「私は得意げに鉛筆を動かして『忍びははゞのよつな状況において
も、感情を表に出すべからず。任務を第一とし、何事にも涙を見せ
ぬよつ心がけるべし』って書いた。

満点もらつたのになあ。おかしいよね」

「サクラ」

「そんなの分かりきつたことだつて、思つてたのこ」

視界がゆがんでいく。

どうしてだらうとサクラは考える。仲間として頑張つていたのは、
あの子と入れ替わつた後、あの子が孤立しないためのはず、だ。深
い理由などない。

腹の底が熱い。

先ほどから何度も感じている抗いがたい熱の正体を悟り、自分で
はなくこの身体が感じているものだとサクラは思った。いや、そう
なんだ。そうに違ひない。どうせ別れがくる、と誰に対しても一定
距離を保つていた、はずなのだから。悲しみなど、感じるはず
がない。

「ううあああああサスケ君、サスケ君つ嫌だ、なんでつなんで！
いあああああああああ」

泣いているのは自分ではない。この身体が、あの子が泣いている
んだ。必死に言い聞かせながらサクラは声を上げた。
世界が、震えた。

「何をしに来た、ガトー」

橋の奥には左腕に包帯を巻いた小柄な男がいた。丸く小さなサングラスをつけたその男は、背後に柄の悪そうな男たちを多数引き連れている。再不斬の様子から判断するに、この小さい男がガトーなのだろう。カカシは、二人の不穏な空気に眉を寄せ、鋭い目をさらに尖らせた。

ガトーはくくくと笑って杖をカツンと橋に下ろした。

「少々作戦が変わつてねえ。悪いが再不斬、お前にはここで死んでもらひ。正規の忍びを雇えばやたらと金がかかる。そこでお前らのような抜け忍を雇つたというのに、このザマだ。せめて相打ちでもなつてくれれば手間も金もかからずにするでよかつたのになあ」

対峙していた再不斬はカカシに背を向けた。カカシが彼の背中に襲いかかるることはなかつた。そんな必要がないからだ。

「悪いな、カカシ。戦いはここまでだ。俺にタズナを狙う理由はなくなつた」

「そのようだな」

カツンカツンと杖で音を立てながらガトーは歩き、白の傍に近寄つた。死んで動けない白の顔を、ガトーはもうことか杖で思い切り殴つた。憎憎しげな顔をしていた。

「なんだいなんだい、このカス死んだのかい。あたしの腕を折つてくれた礼をしたかったんだがなあ。あつけなく死ぬとは。まったく使えないにもほどがある。おらあ！」

満足できないのか、何度も殴り、蹴り、最後にはつばを吐きかけた。ナルトの眉がつり上がる。カカシはナルトの服を掴んで止めた。ナルトの気持ちは分かるが、それは自分たちの役目でないと、彼は知っていた。

「てめえっ」

「よせ、ナルト」

「でもよカカシ先生……再不斬っ大体おめえもなんで何もいわねーんだよ！ あいつはお前の仲間だる。あんなことされてなんとも思わないのかよ！ お前つてば、ずっと一緒にいたんだろ」

「ガトーが俺を利用していたように、俺も白を利用していただけだ。勘違いしているようだがな、小僧。俺たち忍びはただの道具だ。俺が欲しかったのはあいつの能力であって、あいつ自身じゃない。末練は、ない」

再不斬はナルトとカカシに背を向けたまま、淡々と語った。その態度に納得できないのだろう。ナルトは彼自身が泣きそうになりながら、白がどれだけ再不斬を大切に思っていたかを語った。白と戦つている間にいろいろな話をしたようだ。戦闘中にのんきな力カシは思つて、否定した。

わざとのんきに会話をしたのか、と。あの白といつ少年はきっと、優しすぎた。

「あいつはお前のことが本当に好きだったんだぞ。それなのに、お前は本当になんとも思わないのかよ。忍びは道具でしかないなんて、そんな馬鹿なことあるか！ 忍びだって人間だろ？ 悲しくねえのかよ。なあ、なんとか言えよ、ざぶ」

「小僧」

どこまでも真っ直ぐなナルトの声を遮った再不斬は、顔だけ振り返った。彼の顔を見たナルトは、黙り込む。再不斬の目からこぼれているのは、

「それ以上、何も言つな」

再不斬は顔を大きく振って口布を破いた。カカシが壊した両手は、彼の動きにあわせて頼りなく揺れるだけだった。

「白は、俺だけじゃない。お前たちのことで心を痛めながら戦つていた。俺にはわかる。あいつは、優しすぎた。
最後にお前らみたいなのと戦えてよかつた。……ああ、そうだな。
忍びは道具である前に結局、ただの人間でしかないんだろう。まったく、お前の言う通りだよ。俺の、負けだ」「ざぶ

「小僧、お前のクナイを貸せ」

彼の決意を知ったのだろう。ナルトは青い瞳から涙をこぼしつつ、一本のクナイを投げた。空中を舞つたクナイを再不斬は口で受け取る。そして、一気にガトーへと迫つた。怪我人とは思えない動きだつた。何よりも彼がまとつた空気は。

ガトーが情けない悲鳴を上げた。

「ひつ！ 何をしている！ さつさとやつてしまえ

「つおりやあああああつ」

再不斬は鬼人の呼び名に相応しい迫力を背負つていた。

おそらく金で雇われただけのものたちなのだろう。腰が抜けたガトーの情けない姿に眉一つ動かさず、用心棒たちは再不斬に向かつて各自の得物を抜いた。ガトーの姿が男たちの間に溶け込んで消え

る。

にやけた顔をした用心棒たちは、再不斬を甘く見ていた。

「あああああ」

「がはつ」

「いてしまえ」

聞こえてきたのは再不斬の叫び声ではなく、用心棒たちの苦痛の喘ぎ。再不斬の武器は口にくわえたクナイ一本のみだったが、次々と敵を倒し、時には飛び越えて着実にガターへと近づいていく。身体にどれだけの武器が刺さるうと彼の動きは止まらない。そしてついに、再不斬の目がガターの姿を捉えた。用心棒が守りうと動いたが、遅い。

「やつやめ」

恐怖にゆがんだ表情のまま、ガターの顔は肉体を地上に置き去りにして宙を舞つた。

「白」

もうガターから興味をなくしたとばかりに再不斬は、白を振り返つた。彼と目があつた男たちはその気迫におののき、道を空ける。クナイが橋の上に転がつて涼やかな音を立てた。

彼はそのまま一歩、二歩と歩き、限界がきたらしい。再不斬の膝は折れ曲がった。

「もうお別れだ。今まで、ありがとう。すまなかつたな」

力尽きて倒れた再不斬から、ナルトはとっさに顔を背けていた。

カカシはナルトに「目をそむけるな」と強い口調で諭す。酷かもしれなかつたが、きちんとその姿を見届けて欲しいとカカシは思った。

「必死に生きた、男の最後だ」

ナルトは歯を食いしばって、また前を向いた。

* * *

誰かが泣いていた。

彼は聞き覚えのある声だった。しかし考えてみると、そいつがこんな風に泣いているところは見たことがなくて、やはり氣のせいだと彼は考え直す。

ゆづくとサスケは目を開けた。まぶたがやたらと重く感じた。

「サス、ケ、君？」

まず彼の目に見えたのは色鮮やかな桜色の髪と、濡れた翡翠の瞳だつた。サスケはああ、と思った。ああ、ついに泣かせてしまった。悲しませたくなんかないのに。

泣くな。

そんな気持ちと同時に、涙を流すサクラの姿があまりにも綺麗で、もう少し見ていたとも彼は思った。だから呆然とサクラを見ていたのだが、あまりにも涙が止まらない様子にこのまま干からびて死んでしまうのではと、妙なことを心配してしまった。

動かしにくい腕を動かして、サスケはそつと彼女の頬を撫でる。

「……変な顔してんぞ、お前」

「つ馬鹿」

返つてきた言葉に、たしかに自分は馬鹿だと、サスケも思った。

* * *

「おじおこおじ、お前たちわー。安心しますわー」

響いた声に、カカシはやれやれとそちらを見て、ビハツナツかと嘆息した。

カカシの背後でサスケの手当て（千本を抜いて血止め）をしていったサクラは、まるで「まだいたの？」と彼らに言わんばかりの顔をしている。いやサクラだけでなく、その場にいたカカシを除く全員が用心棒たちの存在を忘れていたようだつた。

ガトーの用心棒たちはそんな彼女たちの様子に口元や眉を引きつらせた。話し合いは無理そうだった。

とはいって、チャクラを使いすぎた状態であれだけの相手は、さすがのカカシでもキツイ。どうするべきか。カカシはナルトたちの様子を見ながら、頭を働かせていた。

「クソ忍者！ てめーらのせいで折角の金づるが死んじまつたじゃねーか

なあ

「ひつひつひ

「つおりやあああああ

「どじどじどじゆんんだつてばよ、先生っ

「わあ、じつじゆつか

慌てるナルトに、落ち着いてはいるもののいい案が浮かばない力カシは、自分たちへと向かってくる用心棒たちを見た。こうなったらナルトたちだけでも。力カシが覚悟を決めた時、

「力カシ先生、ナルト！」

「ん？」

名前を呼ばれてそつとサクラを見ると、彼女は両手の指を一本立ててそれをクロスさせた。力カシは一瞬驚いた顔をして、頷いた。そして彼女の通りに印を結ぶ。

「さすがサクラ。影分身の術！」

「えっああ、そうか。よし俺も、影分身の術！」

二人と同じ姿が何人も現れ、用心棒たちは少しひるんで足を止めた。そんな彼らの足元に、今度は幾本もの矢が突き刺さる。橋の反対側、町の方角にはイナリを先頭に大勢の人々が武器を持って立っていた。彼らの表情は勇ましい。数日前に力カシが見た、あの無気力な姿はどこにもなかつた。

「それ以上町に近づくのなら、全島民の力を持つて抵抗する」「おおおおお」

力強い援軍の登場にナルトが青い目を輝かせ、イナリが照れくさそうに鼻をなで、タズナの目に涙が浮かんだ。

「イナリ！」

「へへんっ。ヒーローは遅れて登場するんだぜ、兄ちゃん」

「おおイナリ、おめーたち」

形成は一気に逆転した。

元々金田当てにガトーの元へ来ていた男たちだ。命は惜しいのだが、慌てて町の反対へと逃げていく。人々が歓声を上げた。

この国は変わる。いや、変わったのだ。今、この瞬間に。

喜んでいる彼らへ柔らかな目を向けていた力カシだったが、影分身を解いて再不斬の傍まで歩み寄つた。再不斬はまだかすかに息をしていた。力カシと目が合つた再不斬の口端は、少し上がっていた。

「どうやら終わったみたいだな」

「ああ」

「力カシ、悪いが頼みがある」

「なんだ?」

「あいつの、あいつの顔が見たいんだ」

ささやかな彼の願いを聞いた力カシは、額当てを下ろした。そして無言のまま、再不斬の背に刺さつた槍と刀を抜いていく。血が吹き出ても、再不斬は眉一つ動かさなかつた。痛みも感じないのだろう。目を閉じた再不斬は「恩にきる」とだけ力カシに言った。彼と力カシは敵だつた。だが、それが忍びというものでもあつた。

霧が晴れたはずの橋の上が、また白色で覆われ始めた。空から降り注ぐそれを見上げた再不斬が呟いた。

「泣いているのか？　白」

力カシは言葉を返さない。ただそつと再不斬を白の傍に横たえ、離れた。すまねえな。いや。最後にそんな短いやり取りをした。

隣にいる白へ、再不斬は腕をよろよろと動かした。優しく白の頬を撫でる彼は、ガトーを殺した時の、鬼のような姿とかけ離れた穏やかな顔をしていた。もしかすると、こちらが本来の再不斬の姿な

のかもしれなかつた。

「ずっと傍にいたんだ。最後ぐらいは傍に……でも、できるなら、お前と一緒にところに行きてえ、なあ」

それきり、彼が動くことはなかつた。

誰もが言葉なく立ちつくしている中、隣にいたナルトがぐずぐずと泣きながらカカシに言つた。

「こいつ、白ってば、雪の降る村で生まれたんだ」

「そうか」

降り注ぐ季節外れの雪が、白の顔に当たつてまるで涙のように流れ落ちた。カカシはそつと目をつむつて一人が一緒にいられるようにと願つた。

しかし、

「サクラ？　おい、どうした、サクラ！」

悲鳴と慌てたサスケの声が橋の上に響き、カカシは感傷を吹き飛ばした。目を開けて勢いよく振り返ると、サスケの腕の中に、ぐつたりしたサクラがいた。意識がないのか、サスケに揺さぶられるままにサクラの身体が揺れていた。

第三十六劇「季節外れの雪が降る」（後書き）

影分身について

影分身は禁術指定のはずなのに、みんながみんな、存在を知っているのはなぜか。……まあ、禁術なのは多重影分身（数が多い）なんんですけどね。カカシとかも普通に使ってるし、謎。あと、チートすぎるので経験がどうのってのは止めようかなと考え中。ナルトは才能あるからなくても大丈夫だと思うんだがなあ。

とりあえず、急ぎ足で終わらせた感がビシバシする文章ですね。淡淡と説明する文章が苦手だあ。次で波の国は終わりです。

修正（11・06・13）

第三十七劇「夢への架け橋」

「あのぉ先生？本当に大丈夫だから降ろして欲しいんだけど」「駄目駄目。お前がすぐ無茶するのは今回のことによく分かったからね。先生は、お前の『大丈夫』を当てにしないことにしたの」「む」

完成した立派な橋の前で、カカシはサクラと何度もか分からない会話をしていた。だがいい加減疲れたのか、諦めたのか。サクラは口を開きかけてからため息をつき、カカシの背に体重を預けた。

あの戦闘後、サクラはチャクラ切れで倒れた。

幸い次の日には元気になっていたのだが、任務完了のため里へ帰る際にカカシに負ふわることになった。本人はいたって元気なつもりなのだが、サスケもナルトもゆっくりしてろの一点張りで、カカシもそこは譲らない。

ほんと、チャクラ切れ起こすほど何をやつたんだか。

「そ、う、じ、や、の、お、お、めーさん、は、す、ぐ、無、茶、し、そ、う、じ、や。忍、び、を、辞、め、て、イ、ナ、リ、の、嫁、に、こ、ん、か？　良、い、案、じ、や、ろ」

サクラとカカシの荷物を分けて背負っていたナルトとサスケは、タズナの言葉にぎょっと目を見開き、イナリは顔を真っ赤にした。タズナは「かつかつか」と笑っている。

「な、つ、な、な、な、何、言、つ、ん、だ、よ、じ、い、ち、や、ん！」

「そ、う、だ、そ、う、だ！　い、い、加、減、に、し、ろ、つ、て、ば、よ、タ、ズ、ナ、の、お、つ、ち、や、ん」「なん、じ、や、なん、じ、や。イ、ナ、リ、も、サ、ク、ラ、が、可、愛、い、と、言、つ、と、つ、た、じ、や、ろう、に。それ、に、ほ、れ。ナ、ル、ト、お、め、ー、さ、ん、は、別、に、サ、ク、ラ、の、恋、人、で、も

なんでもないじゃろ」

「じいちゃん！ それは内緒にしてつて言つたじゃないか」

「イナリ！ お前」

「あやー、あやー」と騒ぎ始めたナルトたちをカカシは楽しそうに眺めていたが、話の当事者であるはずのサクラは、

「ツナミさん、こらこらとありがとうございました。お料理もいろいろ教えてもらつて」

「いいのよ。また遊びに来てね」

「はー」

ツナミと和やかに話をしていた。カカシはそんな彼女を見て声を上げずに少し笑つた。苦笑に近いものだつた。

「ナルト、そろそろ行くぞ」

「あ、うん。分かつてるつてばよ、カカシ先生」

「……兄ちゃん」

「へへんっだ。イナリ。お前寂しいんだろ。別に泣いたつていいんだぜ？」

「誰が泣くもんか。兄ちゃんこそ泣いたつていいぞー！」

「俺がこれぐらいで泣くかよ。ふんっ」

カカシが声をかけると、今までつかみ合つていたナルトといナリはバツが悪そうな顔をして離れ、ナルトはあつさりといナリに背を向けた。全然気にしてないぞと、背中で語つているつもりらしい。そんな彼の背後ではイナリが涙を堪えきれずに流してでしたが、実のところ、ナルトも同じような顔をして泣いていた。ナルトも寂しいのだ。一人を見ていたサクラは、呆れた顔をした。

「男の子って意地つ張りね、先生」

「ハハ。まあ、そう言つてやるな、サクラ。男には色々あるんだよ」

今度は声に出してカカシは苦笑した。

* * *

小さくなつていく彼らの背をじつと見つめていたタズナは、うむ、と一つ頷いた。隣に立っていたツナミがいぶかしげな目線をタズナに向ける。

「決めた。この橋の名前は、ナルト大橋にする!」

「ふふつそれはいい名前ね」

「そうじやろ? あの少年がイナリに勇気を『え、イナリが町民へ勇気を与えてくれたことを、決して忘れぬよ』って、な。これでこの橋が将来超有名になること間違いなしじゃ」

満足そうに笑っていたタズナは、服を引っ張られて下を見た。先ほどまで泣いていたはずの孫、イナリが真っ赤になつた目でタズナを真つ直ぐ見上げていた。

「じいちゃん。僕、じいちゃんみたいな大工になりたい」「つイナリ」

最近は涙もろくなつたな。タズナは田元を拭つた。

「ワシは超厳しいぞ」

「望むところだ」

「じゃあ、つこへ。」これから波の国まで、船に乗る事になるのかじやか

らな

「うそー。」

第三十七劇「夢への架け橋」（後書き）

これにて第一幕終了。面白みのない話ですみません。
次に第三幕についてのお詫びと説明文を載せてます。説明文はともかく、お詫び箇所だけ読んでもらえると助かります。説明文には原作のネタバレ含るので、原作知らない方はご注意を。……たぶんいないと存りますが。

さてさて、いつも読んでいただきありがとうございます（拍手も）。これからもよろしくお願いします！

修正（11・06・13）

第三幕の【お説びと説明】

【お説びと説明】

第三幕はいよいよ中 試験 ではなく、すみません。波の国編
～中 試験編までの話です。

中 試験を楽しみにしてくださっている方には申し訳ないですが、
どうしても書きたい話があるのであります。

それは、原作主人公ナルトの誕生日（十月十日）話。

七班で一度はこの日を過ぎて欲いため、中 試験を受けられるのは『下忍暦一年以上の忍び』だけという独自設定を加えさせて
もらいます（絆を深めるためにも）。
なので原作よりみんな成長してます（いろんな意味で）。

他にも七班以外のメンバーとの話なども描きたいと思つています。
ほとんど間劇（サクラ以外がメインの話。もちろんサクラは絡みます
が）です。

ある程度描いた後第四幕へ進みますが、思いついたら増えるかも
しません。登場キャラは私の好みで偏つてしまいそうなので、もし
リクエスト（キャラクター）があれば教えてください。本編に影
響がない範囲で書かせていただきます。

以下説明（考察？）。

ネタバレになる・めんどくさいから嫌だ！ という方は読まずに
飛ばしていただきても構いません。伏字はありません。

原作内では季節感がないため中忍試験がいつ頃かはつきりしないのですが、春に卒業（＝下忍になつた時期）と考えていますので、そうすると夏ぐらいに中忍試験かなと思つてます。森の描写も青々としてるし、サクラの服装を考えるに冬といふこともなさそうなので（木の葉に冬がないならあります）、波の国で降つた雪に驚いている様子がなく、雪を知つていると言つことは冬がある、と考えます）。

しかし試験が夏だと、かなり下忍期間が短い上に『彼』の里抜けが中忍試験からちょっと？ 経つてからなので、十月十日に全員そろつて誕生日パーティ、というのは無理です。第一、試験後の『彼』が和氣藹々とナルトの誕生日を祝つてくれるとは思えません。七班そのものがほによほほ、ですしね。

ナルトだけでなく他のメンバーの誕生日も祝いたい、というのもあります。サスケとともに中忍試験に被つてるでお祝いできない。という理由から中忍試験を一年遅らせるため、原作より全員少々強くなつてます。

「理解のほど、よろしくお願ひします。

以下、第七班の誕生日、当小説内での波の国終了時の年齢、原作イベント？の時期を載せます。今まで以上にネタバレ？です。これまた読まずに飛ばしていただいて構いませんので。

【第七班誕生日・年齢】年齢は当小説内の設定です。波の国終了時。

はるの サクラ (三月一十八日) 十三歳(アカデミー卒業

時はまだ十一歳)

うずまき ナルト (十月 十日) 十一歳

うちは サスケ (七月二十三日) 十二歳

はたけ カカシ (九月十五日) 二十六歳

学年の区切りは一月一日～十一月三十一日としています。これはナルトよりサクラが先に生まれていたらしいなあといつ勝手な願望(笑)。

中忍試験時は、各年齢にプラス一歳となります。しかしこうなると第一部にはカカシていーちゃんが二十九か(笑)。

【原作イベント時期】当小説内の設定です。

アカデミー入学・卒業・下忍合格・任務開始(三月終～四月初頃)

波の国編(五月～六月頃) 注1

写真撮影(六月頃) 原作で細かいことは書かれてませんが。

中忍試験推薦(五月頃～六月初頃)・中忍試験開始(六月中頃)・

中忍試験本戦(八月一日～木の葉崩し)

暁襲来(木の葉崩し)一週間後頃)

綱手探しの旅(暁襲来と同時期)・三竦みの戦い(九月初頃)・

五代目誕生(九月中頃)

ライバル対決(九月中頃)

第一部終了(十月初め頃)

注1：あの橋は相当大きいつぽそののですぐに出来るわけがない。と思うのですが、建築間に詳しくない上、NARUTO世界の技術レベルが不透明であることや、途中までできていたことを加味して一ヶ月ぐらいとしています。国から国への移動時間もいれるともつといきそうですけどね。現代人より健脚であることは間違いないませんが(しかも忍びだしなあ)。

イベント時期は大体の目安です。あまりこいついた設定を書きたくなかったのですが、原作との変更点を明確にし、混乱を避けるため載せさせていただきました。

何か不可解な点がある場合は教えていただければ助かります。

序劇「唐突な路線変更」

淡いピンク色が風に舞い上げられている場所で、彼女は待っていた。

もうすぐ帰つてくるのだ。伝えなければならぬことがあった。謝らなくてはならないことがあった。

「サクラ」

声のした方を彼女が見ると、周りを舞う花弁と同じ色を持った少女がいた。彼女はにつこりと笑う。少女は、大きな瞳を潤ませた。口元に当たる手が震えている。翡翠の瞳には喜びと、ほんの少しの寂しさが見えた。

「よかつた。元気になつたんだね」

少女は勢いよく彼女の元へと駆け出した。すぐさま抱きつこうとしてきた少女の広いおでこを、彼女は指で弾いた。少女は戸惑った様子で額を押さえ、彼女を見た。力加減を間違えてしまつたらしく、少女はかなり痛そうだった。人より広いおでこは一部が赤くなつていた。

謝るように胸の前で手を合わせた彼女は、そつと首を横に振つた。少女の翡翠の瞳が、ただでさえ大きいというのにさらに大きく開いていく。そのうち顔全体が瞳で覆われるのは、とホラーな様子が浮かんでしまい、こんな状況だというのに彼女は腹を抱え大口を開けて笑つた。

「え、どうして？　だつてこの身体は君の」

瞳の端に涙すら浮かべている彼女は、必死な少女の様子に笑いを引っこめ、少しだけ頭を右に傾けた。翡翠の瞳からポロポロと流れ始めた水滴を指で拭つてやりながら、彼女はゆっくりと唇を動かす。少女の顔が、恐怖にゆがんでいく。

「そんなこと言われても全然嬉しくないよ。私は君のために生まれたんだ。このままじゃただの道化じゃないか。私がしてきたことはすべてムダってこと? だったら、私のこといろいろなうんならはつきり言つてよ」

今度必死になつたのは彼女の方だった。否定するように首を横に何度も振つている。貧血でも起こしそうな勢いで、何度も振つている。少女はそんな彼女を見て、唇をかみ締めた。

「ここに置いていかないで、お願い。なんでもするから。君が望むならまたリセットしてもいい。根本から造り替えたつてい。君の記憶を消してもいい。苦しいんだ。

こんなはずじゃなかつたのに。君が寝ている間の代わりをするだけだつたのに。今度こそ君が君自身の手で夢を叶えられるように、準備だけするつもりだつたのに。これ以上ここにいたら、私は私は帰れない。もう苦しい。疲れた。

だからありがとうなんて言わないで。ごめんだなんて言わないで。間違いだつたなんて言わないで。私の存在を否定しないでよ」

すがり付いてきた少女を見下ろす彼女の目は、悲しみに満ちていた。伝える順番を間違えてしまつた。震える少女の身体を抱きしめて背中を叩く彼女の腕は、慈しみに満ちていた。伝えるのはこっちが先だつた。

少女がはつと顔を上げる。

「え？ 今、なんて」

桜色の髪を彼女はなでた。あまりファッショニには興味のない少女だが、髪だけはきちんと手入れしているのだ。とてもサラサラしていて触り心地がよい。

「なんで、何を言つ」

少女の脣を指で押さえると、少女は不安そうに彼女を見上げた。きっとあの時の自分はこんな顔をしていたのだろう。すぐにでも泣き出しそうな迷子の子供そのものの姿を眺め、彼女はふふと笑つた。言い得て妙とはこのことか。たしかに少女は子供で、彼女はそんな少女の。

言葉をなくして佇む少女に、彼女は柔らかく笑つた。

* * *

すっかり見慣れてしまつた天井を目にし、サクラはまばたきをした。何度もまばたきをしても変わらずに見えていた天井に、現実なのだと理解した。

彼女に言われた言葉は、それほど現実離れした威力を持つていた。

『今はあなたがサクラよ』
「サクラ……私が、サ克拉？」

そんな馬鹿なことがあるわけない。サクラは否定するために起き上がつた。

鏡の前に立てば、そこに写っているのは桜色の髪と翡翠の瞳を持

つ少女だった。右手を顔に触れさせれば、田の前の少女は左手をおそるおそる顔に触れさせた。馬鹿など咳けば、田の前の少女の唇が動き、部屋には独り言が響いた。

『あなたはもつと我慢言つていいの。私だけじゃなくて、みんなあなたの幸せを願つてるわ』

「幸せになる？ 私が？ みんなが願つてる？ そんなわけない。私はすべての元凶なのに、ありえないよ。』

それに私は君を幸せにするための存在だ。君が幸せになつてくれたら私はそれだけで幸せになれる。なんでそんなことを言つのや』

サクラは、サクラになつた少女は戸惑い、立ち去くした。

序劇「唐突な路線変更」（後書き）

第三幕の、そして本当の意味での始まり。という意味を込めて序幕としました。

原作から離れすぎて申し訳ない。第三幕の開始はこの話から始まり、途中から間劇を入れながら進みます。

修正（11・06・13）

第三十八劇「自分の心す」り

「 ん。サクラちゃん！」

「ふええつ？ ひつやあああああ

「「」ふふ

サクラがハツとして前を向くと、そこにはナルトのニアップだった。彼女はとっさに拳を突き出した。ナルトが腹を押されてもだえる。「ひでーってばよ、サ克拉ちゃん」そんな声によつやく自分がぼけつとしていたことにサクラは気がついた。

今はゴミ拾いの任務中であるにも関わらず、サクラのかごにはほとんびりゴミが入っていなかつた。

「「」めん、ナルト。大丈夫？」

「だいじょ、ぶじやないかも」

「ちよつと休んでて。後は私がやるか、ら？」

サクラははうづくまつていてるナルトから顔を上げ、こてんと首を倒した。田の前には綺麗な道があるだけで、記憶の中にあるゴミだらけの惨状はどこにもない。そんな彼女に、サスケが「もう終わつた」と淡々と告げた。そんなサスケの傍には、ゴミ袋が三つあり、どれもパンパンに膨れていた。

どうやらぼけつとしている間に終わつたらしい。サクラはうなだれる。

「「」めん

「別に」

「気しないでってばよ、サ克拉ちゃん。ゴミ拾いなんて俺とサス

ケで十分だし」

「つ……つん。『じめん』

励まそうとしたらしいナルトの言葉に、サクラは余計に下を向いた。サスケがナルトを睨んで「このウスラトンカチ」と小声でなじつた。ナルトはナルトで「てめえにだけは言われたくなーんだよ」と言い返し、いつもの喧嘩が始まった。普段ならここでサクラが二人を止めるのだが、サクラはただ地面を見つめていた。喧嘩の声すら彼女はろくに聞いていなかつた。

「……ん~、熱はないみたいだな」

「つ先生」

冷たい手が額に置かれた。

驚いてサクラが見上げると、カカシが後ろから顔を覗きこんでいた。唯一見える右目に心配げな光を見つけ、サクラはすぐに目を逸らす。カカシは目を細くした。

「サクラ、お前はもう帰りなさい」

「え?」

頭上から聞こえた声に、翡翠の瞳が見開かれる。七班にはこの後イモの収穫が任務として入つていた。だが、カカシはサクラに帰れと言つ。その意味は、

「後は俺たちだけでやるから。サクラはゆっくり休んでもたあして、あつあれつ?」

「あーーー、カカシ先生がサクラちゃんイジメてるつてばよ」「何やってんだカカシ」

「え、あ、その、さつサクラ? 先生が悪かつたから」

珍しくカカシが焦っていた。ナルトもカカシを責めながら焦っていた。サスケは普段と変わらないようでいて、やつぱり焦っているようにサクラには見えた。

何を焦っているのだろう。

不思議に思っていたサクラだが、口元に流れ込んできたしづぱい水で理由を知った。口元に触れれば黒い手袋はあつという間に湿り気を帯びていく。

「ちがつこれは」

サクラは言い訳しながら泣き止もうと目に力を入れた。涙は余計に流れ出きた。どうすればいいのか。彼女には分からなかつた。手で口元を拭つてみても、全然止まらない。明日、口が腫れているかもしれない。

とりあえずこれ以上ここにいるのがいたたまれなくて、なんとかチームメイトへ大丈夫だと伝えるために、サクラは微笑を顔に浮かべてみせた。

カカシ、ナルト、サスケが驚いた顔をしていて、「ああ、笑顔失敗したんだ」と彼女は悟つた。背を向けた。もう無理だ。

「じめんなさい。また、明日」

そのままサクラは逃げるよつにその場を去つた。

* * *

サクラの涙は、しばらく放置していると自然に止まつた。街中を

歩いていたものだから視線を浴びてしまい、彼女はたいへん恥ずかしい思いをした。

泣き止んだ今でも視線を感じるので、おそらく目が赤くなつてゐんだろうとサクラは思つたが、部屋に帰る気はしなかつた。あの部屋は自分のためといふよりも、あの子のため。そんな意識がどうしても抜けない。もう悩むことはない。好きにしていいのだとあの子はいふが、

『サクラちゃん。ゴミ拾いなんて俺とサスケで十分だし』

『後は俺たちだけでやるからさ』

今までならこんなにも落ち込むことはなかつただろう言葉も、今のサクラには上手に受け止めることができなかつた。

私がサクラになつてしまつたから、もう必要ないんだ。

思考が悪い方にしか向かない。あの子がサクラに戻つていたらあんなこと言われなかつたのだろう。考えれば考えるほど思考の渦から逃れられなくなる。こんなことじじゃ 駄目だと頭を振つて意識を切り替えようとするのだが、すぐにまた渦に飲み込まれた。

誰かに会いたくて、誰にも会いたくなかった。名前を呼ばれてしまあば、逃れられなくなるから。

「サクラちゃん？」

声にサクラが振り向けば、訝しげな顔をしたヒナタと、キバと彼の頭に乗つている赤丸、シノのハ班がいた。おそらくは任務帰りなのだろう。ヒナタが驚いているのを見ながら、サクラはいつも通りを装つた。厄介な相手に見つかつた。

「ヒナタ、久しぶり」

「久しぶり……ううん、そうじゃなくてサ

「赤丸とシノも久しぶりね」

「ああ」

「あつへん」

「おー、せりつと俺を無視するな」

忍びになつてからはお互い忙しく、しかもサクラは一日前に波の国から帰ってきたばかりだ。サクラはそのまま別れようとしたのだが、

「サクラちゃん!」

珍しそうにヒナタの大声に、やっぱり無理かと苦笑した。こういう時、イノだと氣を使いすぎて強気になれず流されてくれるのだが、ヒナタは意外と直球なのだ。しつかりと掴まれた右手を見て、さて今回はどんなことを言い出すのかとサクラは対策を練る。

「これから暇だよね。じゃ、イノちゃん探しに行こう」「わわっちょ、ヒナタ」

「じゃ、また明日ね。キバ君、赤丸君、シノ君」

なぜイノが突然出てくるのか。

さつぱり不明で、サクラは戸惑つたままヒナタに手を引っ張られた。後ろからはのんきな声が聞こえた。

「あんなにハキハキしてるヒナタ、初めて見たぜ」

「俺もだ」

「わうあつへん」

* * *

ヒナタは、驚くべきことに日向秘伝の白眼まで使ってイノを探した。どうしてそこまでするのか、サクラには彼女の意図が理解できない。理解できないので対策も考えられない。

戸惑っている間にヒナタはイノを見つけ、引っ張られる力が増した。仕方ないのでサクラは抵抗することなく流れに身を任せることにした。

「イノちゃん！」

「あれ、ヒナタ？ それに、サクラまでつづったのよ」

イノたち十班もまた任務帰りなのだろう。イノだけでなくチョウジにシカマル、担当の猿飛アスマ上忍もいた。アスマが財布片手にブツブツ呟いているので、また焼肉でもおごらされそうなのかもしれない。上忍の給料はかなりいいはずなのだが、そんな彼の財布を圧迫させるほど食べるらしい。誰が、とは言わないが。

アスマはサクラたちを見て悲鳴を上げかけていた。おごる人数が増えるとでも思ったのだろう。そんな彼に、少々現実逃避していたサクラは同情した。しかし、まったくおじつてくれないカカシよりずっと先生らしい姿である。

「今日サクラちゃん家に泊まらない？」

「へつ？」

「なるほどね、そういうこと。ええ、分かったわ

「いや、あの」

唐突な会話だったが、イノにはヒナタの意図が伝わったらしい。サクラにはさっぱり意味が分からず首をかしげた。

なぜ泊まる？ しかも自分の家……家、か。そうだ。いつかは帰

らなければならぬ。あの『サクラ』のために用意した部屋に。
胸の前で、サクラは左手をぎゅうっと握った。

「はあ、つたぐ。おーイノ。サクラ困つてんぞ」「

何やら話しう出した二人の間に、面倒くさそうな声が割つて入つた。
いつの間にか俯いていた視線をサクラが上げると、シカマルが明後
日の方を向いてあくびをしていた。イノはそんな彼を一瞬睨んでか
ら、サクラの方へと向き直る。青い瞳が細められた。

「何あんた、また本散らかしたの?」

独り暮らしをし始めてから、サクラはほとんど本を買ったことは
ない。しかし父親が残した本がたくさんあり、その本たちをアパー
トに詰め込んでいる。まだ一室に収まっているので普段は綺麗なの
だが、時折読み返しているとあれもこれもと他の部屋に持ち込むた
め、本が散乱するのだ。足の踏み場もなくなるとはこのことで、片
付けのためにイノやヒナタに助けを求めることがしばしばあった。
もちろん今回も違う。

それでもサクラは「えと、『ごめん』と笑つた。心中ではイノに
礼を言つていた。どうして彼女は自分の心がこうも読めるのだろう。
いつもいつもサクラにはそれが不思議でしづがない。文献で読ん
だ超能力というやつだろうか。

「しようがないわね。あたしの家にしましょ。ヒナタは一度帰つて
おじ様に説明してきなさい」

「うん、分かった。じゃ、また後で」

「もう日が暮れるからなるべく急ぎなさい」

あ、お泊り会するのは決定なんだね。

乾いた笑いを浮かべながら、サクラは文句一つ言わなかつた。言つても無駄であることは重々承知している。だてに親友をやつてきたわけではない。

一旦開放された右手を、今度はイノにがつしりと掴まれた。イノは律儀に待つていた男たちへと向き直る。

「そういうことだから、先生。また今度おじつてね。じゃ、また明日ー」

「おう」

「うん、またね。イノ、サクラ」

「気をつけて帰れよ

「はーい」

イノとサクラを見送るアスマの顔が輝いていたのは、おじらされずにすんだ喜びが混じっているのだろう。ちゃんと先生らしくするのも大変なんだな。サクラは引っ張られながらそんなことを思った。

* * *

借りた淡いピンクの可愛らしいパジャマを身に着けたサクラは、居心地悪そうに苦笑いを顔に貼り付けていた。

てつくり根掘り葉掘り聞かれると思っていたら、目の前の人はコイバナを始めたのだ。今日久々にサスケ君を見たけどやっぱり格好よかつたあ、だとか。ナルト君はやっぱり優しい、だとか。口を挟まず彼女たちを見守っていたのだが、一対の目が突如こちらに向いて、サクラはぎよつとした。

「で、あんたサスケ君となんかあつた?」「サスケ君に何か言われ

たの？」「

「はつ？」

サクラはまばたきをして一人を見る。じれったそうに長い金髪を揺らしたイノは「はつ？ ジゃないわよ、はつ？ ジャ」とサクラに詰め寄り、ヒナタはヒナタで「そうだよ！ はつ？ ジャないの！」とイノに同意しながら白眼を発動しかねない迫力でサクラに迫つた。

一体なんだというのか。

さっぱり不明ではあったものの、この一人がそこまでいうのだから何があるのだろう。サクラは目を少し上に向けた。記憶を探つていぐが、特にこれといって思いつくものはなかつた。瞳をきょとんとさせたサクラは、一人へと目線を下げ、首を横に振る。

「特に何もないけど？」

二人は、「そんな馬鹿なことがあるか」と言いたげな顔をした。本当に、さつきから一人はどうしたというのだろう。ウサギのヌイグルミを抱きしめながらサクラは考えてみたが、まったく分からなかつた。

不思議そうなサクラをじつと見ていたイノとヒナタは、どうやら嘘ではないことをには納得したようだ。二人で顔を見合させて頷き合つた。先にサクラを見たのはヒナタだつた。

「じゃあ、どうしてサクラちゃんはそんなに落っここんでるの？」

いよいよ来た質問に、サクラはそつと目を伏せた。ヌイグルミを抱く腕に力が入る。

「なんでもないよ

サクラが言つた瞬間、空気が凍つた。

「う、それが本当ならあたしたちの田を見て言いなやー」

「ちょっとイノちゃん、落ち着いて」

「落ち着けるわけないでしょ！」

湿つた声にサクラが慌てて伏せていた田を見ると、青い瞳があふれそうなほど水滴でゆがんでいた。声は怒っていたが、イノの瞳は悲しみに彩られていた。

驚いた。

イノはめったに泣かない。「涙は女の最終兵器だから」などとふざけたように言つていたが、どれだけ苦しくとも、彼女はいつだって涙をぐつと堪えて前を見据える。そんな強い女の子が今、泣いている。

自分のせいだ。

そのことはサクラにも分かった。でも、どうするべきなのか分からぬ。あの子ならどうするのだろうか。想像してみても、さっぱり彼女には分からなかつた。

無言のままサクラに対し、イノの目つきが鋭くなつた。

「どうしてあんたはいつもそつなのよ。自分は関係なつて顔して、今あんたの話をしてもんのよ」

「イノ」

「なんでそうなの、あんたは。舐めんじやないわよ。気づいてるんだからね。あんた、あたしたちと会話してもずっと他人事みたいに思つてたでしょ。どつか遠くから眺めてるみたいに！ あたしたちを見下すのがそんなに楽しい？ どうなのよ！ そんなになつてまで、なんでも言つてくれないのよ。何か言こなさこよつこのデコロンの癖にいっく、うああああ

サクラは慌てて「そんなことない」と告げようとした。しかし、口は動かない。決して見下していたつもりはない。それでも、イノの言っていることはほとんど正しかった。一人と話をするのは乐しかつたが、その楽しさを味わうべきなのが自分ではないと、どこか冷めていた。距離を置いていたことはまぎれもない事実で、一体どんな言葉で否定するといふのか。

固まってしまったサクラを見て、ついにイノは耐え切れなくなつたらしく大声で泣き始めた。まるで幼い子供のように。ヒナタはそんなイノを抱きしめて、サクラを見た。涙こぼれてはいなかつたものの、寂しそうなヒナタにどきりとした。

「私たちじゃ駄目なのかな？ そんなに頼りないかな」

「ひ、なた？」

「私はサクラちゃんと出合えてよかつたと心の底から思つてゐ。くじけそうな時いつも助けられた。寂しい時はいつも傍にいてくれた。友達だつて言ってくれて、すごく、嬉しかつた。

だからこれからもずっと三人でいられたらつて願つてる」

ヒナタの白い目から、一滴の涙がこぼれた。いつもなら手を伸ばして拭つてやれるのに、サクラの手は下がつたままだつた。目の前にいるのに、自分の手は届かない気がした。届かないことを、確認したくなかった。

「ねえ、サ克拉ちゃんはどう思つてるの？ 私たちのこと本当に友達だつて思つてくれてる？ ずっといたいって思つてくれてる？」

「私は」

イノもヒナタも友達で、ずっと一緒にいたい。

思つてゐる。願つてゐる。祈つてゐる。本当に？

サクラには自信がなかった。本来一人の友達であるべきなのは、自分ではなくあの子のはずだった。自分がここにいていいのか。ずっと一緒にと願っているのは、自分なのか、それともこの身体に染み付いた願いなのか。今までずっとあの子の願いだけを考えてきた。そのためだけに自分は生まれたのだから。

『今はあなたがサクラよ。幸せになりなさい』

あの子はそう言った。あの子の願いならば叶えるべきだが、幸せってなんだ。私は、一体何をすればいい。ヒナタとイノを慰めるべきなのか。もつと別のことをするべきなのか。

分からぬのだ、何も。

この時ようやくサクラは、自分が何も分かっていないことに、気づいた。

第三十八劇「自分の心すら」（後書き）

よつやくイーノヒナタが出せた。
こう、感情を吐露する場面は難しい。だいぶマシにはなったんですけど、まだまだですね。がんばります。

修正（11・06・13）

第三十九劇「むらちが先生なのか」

ぐいっと襟元を後ろに引つ張られてサクラの首が絞まつた。

サクラは抗議しようとしたのだが、目の前には誰がどう見ても壁にしか見えない木の板がずらつと並んでいて、激突寸前だったと気づけば口からは自然と礼の言葉が出た。とはいえ他にやりようもあつたひうど、思わなくはない。

小さく咳き込んだサクラは、後ろを振り返つた。

「ありがと、先生」

「……どういたしまして」

返つてくる声が呆れていますのは、先ほどから何度も同じことを繰り返しているからなのだろう。そのため息をつくサクラの田の下には、くつきりとクマがある。昨日は一睡も出来なかつたのだ。

氣まずい雰囲気でもなんとか朝ごはんだけはイノたちと一緒に食べたものの、ほとんど会話はなかつた。会話どころかイノはサクラと目も合わせなかつた。ヒナタはこそっと様子をうかがつてくるもの、目が合つとすぐに逸らした。結局何もしゃべらぬまま、サクラは彼女たちと別れた。

一人に嫌われてしまつた。

思い出すと心臓のある箇所がサクラに痛みを訴える。痛すぎて泣いてしまつてもおかしくないと思うのだが、涙が出てくる気配はこれっぽっちもなかつた。

ぐいと今度は手を引っ張られてサクラはこけそうになつた。

「サークラ、お前の家はこちでしょ」

「え……あつそう、ね」

力カシに指を指された方向は、たしかに家の方角だった。サクラは真逆へ行こうしていた身体を反転させ、んん？ 動きを止めた。力カシがどうしたと聞いてくるのを、若干眉を引きつらせながら見た。

「そついえば、先生はなんで私の家の場所を知ってるの？」

任務中、昨日同様ぼけっとしつぱなしなサクラが心配だと主張した力カシは、家まで送ると言い出した。サクラは断つて一人で歩き出したのだが、力カシは勝手についてきた。最初はついてくるなど猛抗議していたが、力カシは口笛を吹きながらそ知らぬ顔でついてくる。徹夜のしんどさもありサクラは諦めたのだ。

今二人で歩いているのはそういうた経緯があり、まだそこまでならよかつた。サクラが歩いて、その後を力カシがついてきているだけだからだ。

しかしそくよく考えてみれば、先ほどから道を外れまくっているサクラを、力カシは確実に家へと誘導していた。力カシに家の場所を教えたことがないのに、だ。サクラはじとっと力カシを見上げた。担当上忍は、相変わらず右目しか見えない怪しい格好をしていて、現状と組み合わせればどうしようもなく疑わしい。

「今さら氣づくなんて、やっぱりお前らしくないな……ちょっと待つて何その目。違つて、担当になつた時にそういう情報が回つてきただけだから！」

「ふう～ん」

「別に何もやましいことじやなくてだな。アスマや紅だつて担当下忍の住所ぐらい知つてるはずだ！ ほんとだつてどうか信じてくださいお願いしますサクラさん」

じとつとカカシを見ていたが、あまりにも必死に言いつくるう姿に「あははっ『冗談よ』」とサクラは笑った。彼女の笑顔を見たカカシは、焦燥の表情の代わりに優しげな微笑を顔に浮かべ、サクラの頭に手を置いた。

「やつと笑つたな

「え

「うんうん。やつぱお前は泣いてるより笑つてた方が可愛いよ

「カカ、わつ」

サクラが名前を呼ぼうとしたら、頭に置かれた手に力が加わり、乱暴に髪をくしゃくしゃにされた。少し声に出して笑つたカカシは、サクラの前にしゃがみ、目線を真つ直ぐ合わせてきた。カカシの目は穏やかだったが、逸らすことを許さない力強さもあった。

「何を悩んでるかは知らないけどな。一人で考えるだけじゃなくて、お前はもう少し周りを頼ることを覚えなさい。俺じゃなくともいいから、ナルトやサスケだつているし。ほら、イノちゃんやヒナタちゃんも……サクラ？」

言葉の途中でカカシがぎょっとした。本気で焦り始めた彼を見て、また泣いてしまったのかと今度はすぐに察せられた。彼女は涙を止めようとは思わなかつた。無駄だ、となんとなく悟つていた。

「先生、どうしよう

「サクラ?」

「二人に、イノとヒナタに、嫌われちゃつた

* * *

テーブルに置かれたカップがかちやりと音を立てた。

「どうぞ先生」

「……ありがとうございます、サクラ」

どこか居心地の悪そうな力カシが可笑しくて笑いを堪えながら、サクラは「こちこそ『ゴメンね』」そうぺこりと頭を下げて謝った。その後、道端で泣き出したサクラに周囲の視線が集中した。彼女の傍にいた力カシへ非難の目が向けられるのは、ごく自然な流れだつた。冷や汗をかき冗談抜きで慌てている力カシの姿に、サクラの涙が引っ込んだのは不幸中の幸いだつたろう。

とりあえず一人は気まずいその場から離れ、サクラがお詫びにと力カシを部屋に上げてコーヒーを差し出していた。

サクラは自分用に入れた紅茶から出てくる湯気をしばし眺め、カップに口つけることなく力カシへと目を向けた。力カシは珍しそうに部屋を眺めている。

「何か面白いものでもあつた？」

「……ああいや、『ごめん』」

苦笑まじりの声に力カシはハツとサクラを見て、罰が悪そうに頭の後ろへ手をやつた。普段の彼だ。サクラは紅茶を手に取り、ほうつと息を吐き出して水面を揺らす。部屋を眺めている力カシが、どこか寂しそうに見えた。なぜなのかは、サクラには分からない。けれど、そんな表情は見たたくない、気がした。

口をつけた紅茶はぬるい。一口一口。不安だとゆつくり飲みこんだ。落ち着いたところで息を吐く。

「先生は？」

「んー？」

飲みこんだはずなのに、吐き出した息と共に言葉がスッと出てきてしまい、サクラは口を閉じた。なんでもない。とはサクラには言えなかつた。訝しげにこちらを見るカカシを見ないように紅茶を見つめ、しかしすぐに顔を上げ、こてんと首を倒した。

「もしかしてお金に困つてるとか？」

「え？」

「だつてアスマ先生とか紅先生はね、うたりしてくれるみたいなのに、同じ上忍のカカシ先生は一度もないでしょー。上忍の給料はかなりいいと思うんだけど、パカパカ使つちゃうタイプだつたり？」

「いや、あの、サクラさん」

「あっ！ それとも借金があるとか？」

戸惑つているカカシへ矢継ぎ早にしゃべりかけると、そのうちがつくりと彼の肩が垂れ下がつた。

「今度何かおうらせていただきます」

「やつた！ じゃ、最近評判のエリーゼに行きたいな」

「エリーゼ？」

「ケーキ屋さん。一回行ってみたかったの」

にっこりとサクラが笑つて見せると、カカシは苦笑して「了解」と言つた。

* * *

「逆に気を遣わせてどうするんだっての、俺」

自室のベッドに寝転がりながら、カカシは深いため息を吐き出した。自分が情けなくて仕方なかつた。

何かをひどく悩んでいる教え子に「もう少し周りを見る」とだけでも伝えたかつた。だがどうにもその言葉はタイミングを外したらしい。というより、最悪なタイミングだつた。ポロポロ流れ落ちる涙に自分らしくもなく焦つたことに彼は少々戸惑つた。

泣いた、とはいっても泣き声一つサクラは上げなかつた。あんな泣き方されるくらいならば、大声を上げて泣いてくれた方がまだマシだとカカシは思つ。周囲の視線はもっとキツクなつていただろうが。

『二人に、イノとヒナタに、嫌われちゃつた』

サクラは泣き声の代わりにそう呟いた。すべてを諦めたような、そんな笑みを浮かべて。

お詫びだと、サクラに引っ張られるままカカシが部屋に上がつたのは、このまま一人にしては駄目だと思つたからだ。

おじやましますと、部屋に入り彼は立ち尽くした。部屋は綺麗だつた。あまりにも綺麗すぎて、カカシは言葉を失い、当初の目的を忘れてしまつた。

サクラの部屋は、必要最低限とはこのことかと言わんばかりに物が少なかつた。物に執着しないとか、そんなレベルの話ではない。子供が一人で住むには広いその空間は、あまりにも寒々しい。パツと見、誰も住んでいないようと思えるほど片付いている。自身もモノを置かないカカシだが、彼の部屋はまだ生活観がある。

ところどころに置かれた可愛らしいクッショングなんとか女の子の部屋らしかつたが、これらはサクラの物ではなく、イノやヒナタ

が持ち運んできたという。おそらく彼女たちもカカシと同じ印象を抱いたのだろう。部屋の中で肩身が狭そうな可愛らしい小物は、全部彼女たちが持ってきたものだった。

居心地が悪いほどに片付いた部屋を、カカシはぼけっと見つめていた。

『何か面白いものでもあった?』

苦笑混じりの声に顔を前に向けると、普段通りに見えるサクラがいた。タイミングを逃したのだと知った。どうにか聞かせないとカカシは手を頭の後ろにやつたが、いい方法は思いつかない。サクラは紅茶に息を吹きかけて飲んでいた。

『先生はさ』

サクラはその時、たしかに何かを言おうとしていた。結局、サクラがその続きを口にすることはなかった。次に発したのは明らかに別のことで、気づかれたんだとカカシは悟る。サクラからすべてを聞き出した時、果たして自分はそれを受け止めることが出来るのか。カカシには自信が持てなかつた。話を聞くという態度を見せながら、心中ではずつと恐怖していた。

受け止め損ねてしまえば、彼女を壊すきっかけにならう。

「これじゃ一体どっちが」

温かな光を帯びていた翡翠の瞳を思い出して、カカシは呟いた。

第三十九劇「どつちが先生なのか」（後書き）

力力シ先生の出番が多いのは、保護者という立場上、ですね。なるべくひいきはしたくないんですが、ご容赦ください。

結局全然話が進んでないことに一番自分がびっくりしつつ、第三十九劇をお届けしました。

修正（11・06・13）

第四十巻「答えは簡単」

机の上から一番田の引き出しには、鍵がかかっている。

サクラは小さな鍵を取り出して鍵穴に差した。開錠の音が静かな部屋の中で大きく響く。引き出しを開けると、見えたのは赤と緑のリボン。

「イノ、ヒナタ」

赤いリボンはイノからもらつたもの。もう一本は、ヒナタと交換したもの。共にサクラの宝物だ。壊れ物へ触れるように、サクラはそつと一本のリボンを手に取つた。

「サクラが私なら、これは私の宝物？」

声に出した疑問への答えは返つてこない。

しばらくじっと手の中にあるリボンを見下ろしていたサクラは、リボンをポケットにしまい、部屋を飛び出した。

すっかり日が落ちた外は暗かつた。月は雲に隠れており、ぽつりぽつりと立っている街灯が寂しげに地面を照らしている。サクラはあえて人がほとんどいない道を選び、走つた。走つて、走つて、ふいに足を止めた。

迷うように足はその場を意味なく歩いた。一度止まり、やがて進路を変える。

「お願い。これだけ許して、もつ、最後にするから」

一步進むたびに建物が少なくなつていき、人の気配も遠のいてい

く。森が見え始めたところで、サクラは目的地にたどり着いた。平屋建ての大きな建物がたくさん並んでいるその場所を、ゆっくりと歩く。

延々と続く立派な壁には、堂々と描かれた家紋があつた。火を操るという意味が込められたうちわの絵が、ここには『うちは一族』の居住区だと何より雄弁に語っていた。うちは一族の居住区は、まるで他者を飲み込むような静けさに包まれていた。

「サスケ君」

彼の顔が見たかった。無性に見たくてたまらなかつた。最後だと思った時サクラの中に浮かんできたのは、イノやヒナタではなく、なぜか彼の顔だつた。

サクラは門を眺め、屋敷を眺める。明かりは点いていない。寝るには少々早い時間だが、もう寝たのだろう。今日もまたサクラは任務をまともにできず、サスケとナルトはいつも以上に疲れたはずだから。

会えないことが残念だった。と、同時にサクラはホッとした。会えば絶対決心が鈍る。

「サクラ?」

だといつのに、彼女の後ろから声があつた。心臓がどうしようもなくうるさくなる。身体は正直で、彼の顔が見たいと訴えてくる。振り向かせうになるのをサクラは気合で抑えつけ、無言のまま逃げ出した。

「おいつ」「は、なして」

しかし、逃げ出す前に手を掴まれ無理やり彼の方を向かされた。

普段より少し苛立つたサスケが、サクラを真っ直ぐ見ていた。それ以上彼に見られたくない、サクラはもう片方の手で自分の視界を遮った。不機嫌な声で名前を呼ばれても、決して彼を見なかつた。もうサクラであることに疲れていた。波の国ではつきりと悟つたのだ。自分にはもうサクラとして生きるのは無理だ、と。

だというのに、疲れた時に代わってくれると言つたあの子は、笑つて拒絕した。あなたはもうサクラとして生きてい。突然そんなことを言われても今さらすぎる。今まで耐えられたのは、代わりだつたからだ。自分が自分であって自分じゃなかつたからだ。言い訳がいくらでもできた。自分がサ克拉じゃないから上手くいかないのだと、ずつと言い訳していた。それをすべて否定され、自分などもう要らないと突然放り出され、右も左も分からない。イノとヒナタにも嫌われてしまつた。

すべて終わらそと彼女は思った。自分がしてきたこともすべて。あの子が拒否しようと関係ない。元に戻すのだ。

「サクラつこんな時間にどこく

「違う！ 私はサクラじやない。その名前で呼ばないで」

「そつれは、どうじうことだ」

サスケの声の調子が変わつた。彼は力づくで腕を外し、サクラの顔を覗きこんだ。サスケの目は赤く、不思議な文様が浮かんでいた。鋭い目でサクラを睨んでいたサスケだつたが、すぐに写輪眼は解かれた。彼の顔はホッとしているように見えた。

「何を言つているかは知らんが、お前は俺の知つている春野サクラそのものに見えるがな」

「え？」

「集中し出すと周りが見えなくなつて壁やら電柱にぶつかる。声を

かけると変な声を出す。頭がいい割りに簡単にだまされる間抜け。嘘が下手。山中と日向の跡取りと仲がいい。料理は、そ、そこそこ美味しい。大の本の虫で、クソマジメで、ケチで、天然でお人よしすぎて貧乏くじを自分から引きにいくウスラトンカチ。それが、俺の知っている春野サクラだ」

サスケは手を離してふつと笑い、付け足した。

「ああそれから、泣き虫だ」

翡翠の瞳が大きく開き、大粒の涙が地面へと流れ落ちていった。涙と同じく、彼の言葉がサクラの胸の中にすとんと落ちた。

『今はあなたがサクラよ。幸せになりなさい』

彼女が言った意味を、ようやく理解できた。あれは別に自分を拒絶したわけじゃない。彼女は気づいていたのだ。本当は自分がずっと寂しがっていたことに。みんなと一緒に過ごしたいと願つてしまつたことに。

君は馬鹿だ。君の方が苦しいだろ?に私のことを気にするなんて。安堵や嬉しさや呆れで、サクラは涙を浮かべながら楽しそうに笑つた。指先で涙を拭う。

「サスケ君、ありがとう。なんか、悩んでたのが馬鹿みたいにすつきりしちゃつた」

「ふん」「でもね」

何かを察したらしいサスケは逃げようとしたが、そのまえにサクラは彼の肩をがっちり掴んでいた。サクラは笑顔のまま手に力をこ

める。先ほど浮かべていたものと同じ表情のはずなのだが、妙に迫力があった。

「誰が間抜けでドケチですって？」
「ドケチは言つてな……つうつ、さつサクラ、その、痛いんだが」「うん痛くしてるからね。痛くなつてもらわないと困る」「ぐおおつまえ、性格いきなり変わつてないくうあああつ」「そう? サスケ君の氣のせいだしょ」

第四十劇「答えは簡単」（後書き）

悩み事の解決って、意外とあつむつしているもんですね。でも、あまり上手くかけなかつたなあ。やっぱり悩みの解決を描くのは難しい。精進しないと。

次は間劇一話挟みます。……ヒーリングサクラのキャラが変わっている気がするんですが、気のせいですか？』

修正（11・06・13）

間劇「深まつた友情と犠牲になつたもの」

サクラは变了。

出会つた当初からイノが抱き続けている印象である。きっと一生変わらないだろうと、自信を持つてイノは宣言できる。

勉強や修行が大好きで、ファッションや恋に興味がない。他人のことになると必死になるのに、自分のことには無頓着。集中し出すと周りが一切見えなくなる。どんな悪意をぶつけられてもへラへラしてて、だけどイノやヒナタが悪意の対象になると怒る。お人よし、という言葉の範疇を超えた変人。悪意には敏感なのに、自分に向かられる好意にはとことん疎い。変なところはあげ始めるときりがない。

「分かつてたつもりだけど、あんなに馬鹿だったなんて」

曲げた膝に顔を埋めてイノは呟いた。

落ちこんでいるサクラをヒナタがつれてきた時、正直嬉しかった。今度こそ彼女の助けになるのだと、イノは意気込んでいたのだ。助けているつもりで、サクラにずっと助けてもらっていた。

山中家は、日向ほど立派な家柄というわけではないものの、木の葉で長く続く忍びの家系であった。なのでイノには生まれた時から、いや、生まれる前から忍びになることが義務付けられていた。物心ついた時から修行漬け、というほどではなくとも、普通の女の子として過ごすことは出来なかつた。

両親はなるべく普通の子と同じように遊ぶ時間を与えてくれ、イノには友達も出来た。それでもどこか他の子たちとは線引きのようなものがあつて、完全に混じることは不可能だつた。イノは必死に他の子たちに置いて行かれないようにファッションに気をつけ、恋

の話にも積極的に参加した。その頃から人気だつたサスケを好きだということにして、田で追いかけるうちに本当に好きになつたのだが、今その話は置いておく。

そんな風に、必死に普通の女の子にならうとしていたイノとは、真逆に進もうとしている子がいた。

「あつサクラちゃん！　い、一緒に遊ばない？」

よく遊ぶ友達の一人が、緊張した声で誰かに声をかけていた。サクラというらしいその子は、名前の通り桜色の髪をしていて、なんといつても優しげに輝いている翡翠の目が印象的な子だつた。見た目は同じ年だつて、ずっとずっと年上に見えた女の子は、うんと笑顔で頷く。なぜ友達が緊張していたのか、イノはその笑顔を見て理解した。

両親が自分を褒めてくれる時の笑顔にそつくりだった。
自分と同じ子供のはずなのに、どうもちぐはぐなその女の子を「
変な子」だとイノは思った。

サクラを知るうちに、変、という思いは強くなつた。春野という苗字の忍びは聞いたことがなかつたからサクラは一般的家庭だろうに、普通の子として生活することを拒否していた。イノとは違い、忍び以外の道が選べるはずなのになぜ忍びを選ぶのか。イノには理解不能だつた。

もちろん一般的家庭から優秀な忍びが生まれることはある。第一木の葉で忍びになることは憧れであり、尊敬の対象であり、誰もが子供の頃に一度は夢見る職業である。危険な職種だが、忍びを出すだけでも名誉なことなので、子供を忍者アカデミーに入学させる親は多い。

サクラの抱く思いは、しかしそんな子供の憧れレベルではなかつた。修行の密度はイノよりも濃く、真剣なものばかり。しかも親からは忍びになることを反対されているらしい。本人も危険を承知し

ていて、それでもサクラは忍び以外になる気はないのだ。

「あんた、なんでそんなに忍びになりたいのよ」

あまりにも気になつたイノは、直接たずねてみた。一瞬きょとんとしたサクラは、いつも以上に穏やかな微笑みを浮かべた。

「ある人を救いたいの。そのためには忍びになるしかないんだ」

言葉からは決意が感じられた。イノはその時初めて自分が忍びになる理由を考えた。親や親類の期待に応えるため。それも一つだろうが、納得するには押しが弱い。山中家に生まれたから、は理由ではなく言い訳だ。

考えこんでいると、サクラの手が目に入った。自分と同じかそれ以上に小さな手は、痛々しいほど怪我だらけだ。なんとなくその手に手を伸ばして触れてみた。サクラは戸惑っていたが、気にしない。バンソーコーだけの手は『テコボコ』していて、決してさわり心地のよい手ではなかつた。だがイノは、この手が好きだなと思つた。

「しょうがないわねえ
「イノちゃん？」

もしも自分が忍びにならなかつたとしても、両親は決して自分を責めないだろう。むしろ、喜びそうだ。両親は忍びの過酷さをよく知つている。

だけど自分が忍びにならなかつたとしたら、この手はもつともつとボロボロになつているだらう。誰かが近くで監視していないと、目の前の変人が無茶をしまくるのがイノの目には見えていた。

そして自分が忍びにならなければ、近くで監視することは出来ないのだらう。イノは、ボロボロな手をぎゅっと握つた。痛いのか、

サクラは顔をしかめた。きっと痛いことすら今まで忘れていたに違いないのだ、この変な友人は。

「あたしも修行に付き合つてあげるわ。あんた一人だと野垂れ死にそうだしね」

ぼけつとイノを見上げたサクラは、「ありがとう」とふんわり笑つた。礼を言いたいのはこっちだと思いつながら、明後日の方を向いたのを覚えている。

過酷な忍びの世界に足を踏み入れる覚悟が出来たのは、サクラのおかげだった。

苦しい修行に耐えられたのは、サクラがいつだって諦めなかつたからイノの負けず嫌いに火が点いたため。どれだけしんどくても弱音を吐かなかつたのは、イノが苦しそうだとサクラまで苦しむからだ。自分が笑えばとてもとても嬉しそうにサクラが笑うから、イノは笑うこと忘れずにすんだ。けど、どうしても悲しい時はずっとサクラが傍にいてくれた。

救われたことなど数知れずあつた。だけどサクラが苦しい時、イノは何も出来なかつたのだ。彼女の両親が殺されたと聞いて、慌ててサクラに会いに行つたあの時。

「さくら

「どうかしたの、イノ？」

白い病室の白いベッドに横たわっていたサクラの目には、何も浮かんでいなかつた。絶やさずにあつたあの穏やかな光も、悲しみすらも、浮かんではいなかつた。

なんと声をかけていいのか分からなくて、イノは泣いてしまつた。励ますどころかサクラになだめられた。彼女の方が辛いだろうに。あれほど自分を情けないと思つたことはない。

だからイノにとつて今回のことはチャンスだつた。サクラがここまで落ちこむことなんてそうそうない。ようやく友達の名に恥じない行動が出来るのだと、不謹慎にもそう思った。思つてしまつたのが悪かつたのかもしない。

『なんでそうなの、あんたは。舐めんぢやないわよ。気づいてるんだからね。あんた、あたしたちと会話してもずっと他人事みたいに思つてたでしょ。どつか遠くから眺めてるみたいに！ あたしたちを見下すのがそんなに楽しい？ どうなのよ！ そんなになつてまで、なんで何も言つてくれないのよ。何か言いなさこよつこの『コソンの癖』にいっく、うああああ』

サクラが自分たちを見下しているだなんて、イノは本氣で思つてなどいない。だけど飛び出た言葉は訂正できなかつた。翡翠の目が見下すという言葉を聞いた瞬間に『あの時』と同じ目になつたのをイノは見て、自分の情けなさにただ泣き喚いた。

たしかに何も言つてくれないことは悲しい。でも、どうして言つてくれないのかをきちんと聞けば、きっと答えてくれた。イノには確信が持てる。だとうのに焦つて逆に傷つけてハつ当たりして、最悪だ。自分のバカさ加減に呆れる。

「おいおい、大丈夫かよ
「無理しないほうがいいよ、イノ」

どんな状態だらうと関係なく朝はやつてくる。昨日は休んだが、一日も休むのはイノのプライドが許さなかつた。いつもの集合場所に行くと、シカマルもチョウジも、無言のままのアスマも心配そうにイノを見た。ここ一回ほどぐるぐるに眠れていないので、どれだけ自分がひどい顔をしているのか自覚はあつた。イノはあいまいに笑つた。

もうサクラは自分に愛想をつかしただらうか。

頭に浮かんだ一文を、すぐに否定した。サクラは誰かを嫌うこと
ができない。ただ、悲しんでいるのは間違いない、イノはサクラが
許してくれたとしても自分で自分が許せそうになかった。

なんとか任務を終えて帰宅していると、チョウジが「あ」と声を
出した。彼を見ると、珍しく何も食べてはおらず、小さい目が前を
見ていた。何があるのかと、下を向いていた顔を上げた。

「三人ともお疲れ様。ちょっとイノ借りてつていい?」

「おお、連れてけ連れてけ」

「へつ? わ、ちょっとシカマル何すん」

「じゃ、借りていくね」

背中を押されてシカマルを睨むが、さすが幼馴染。それぐらいじ
や効かない。イノが文句を言う前に、腕を掴まれて引っ張られる。
チョウジが懐からポテチを取り出しながら「イノ、また明日ー」と
手を振つているのを「助けなさいよ」と怒鳴つてみたが、もはや聞
こえてはいまい。

仕方なくイノは前に向き直り、気まずげに赤い背中を見た。

「サク」

「ごめんね」

サクラは前を向いたまま。謝るのは自分の方だとイノは口を開
けるのだが、それを制するようにサクラが話し始めて口をつぐんだ。

「私、イノとヒナタが大好きだよ。親友だと思つてるし、ずっと一
緒にいたいし、二人が困つてたら全力で助けになりたい」

というより、言葉を失つたという方が正しいかもしない。ピタ

りと足を止めたサクラは、イノを振り返った。

「一人には嘘をつきたくないし、隠し事もしたくない。けど、ごめん。どうしても言えないことがあるの。私だけの問題じゃないから。だからこれからも相談できないことたくさんあって、そのことで二人を傷つけるかもしれない」

一人。イノはその時、呆然と佇むヒナタを見つけた。そしてこの場所は　イノが、サクラにリボンを渡した場所だった。

「もしもそんな私でもいいと思ってくれるなら、これからもずっと友達でいてくれませんか？」

夕日を浴びて立っているサクラは、同性のイノから見ても綺麗だと思った。一体この一日で何があつたのかと目を疑いたくなるほどにサクラは綺麗になっていた。

後で追求してやろう。

イノは笑つて、サクラの背中を叩いた。ヒナタもまた笑つてサラの手を握った。綺麗だけどどこか寂しげだったサクラの瞳が、嬉しそうに細められた。

「あつたりまえでしょ。あんたの面倒見れるのはあたしたちぐらいなんだから」

「ふふふ。そうだよ。サクラちゃんがイヤだつて言つても友達ヤメてあげないよ」

「うん！　ヤメないでね」

三人顔を見合わせ、そろつて笑い出した。

「あつそうだ。今度一緒に『エリーゼ』行かない？」

「どうしたのよ。ケチなんだが珍しいわね」

「けつケチじゃないもん！ 億約家つていつてよ～」

「まあまあ、サクラちゃん落ち着いて。でもほんとに突然どうしたの？」

「ふふつ 実は、カカシ先生という名のお財布をゲットしましたー」

「なるほど。もちろんあたしたちの分もおごりでしょうね」

「当たり前」

「ふ、二人ともそんな勝手にカカシ先生のおごりって決めたら駄目だよ」

後日、財布を片手に「お前も大変なんだな」とアスマの肩に手を置くカカシの姿があつたとか。

間劇「深まつた友情と犠牲になつたもの」（後書き）

忍者への認識について。

危険な職種である忍者に、自分の子供をさせたがる親の図が原作では描かれています。現代の感覚では理解しがたいですが、警察なども忍者が行つたりするわけですし（一般人に罪を犯した忍びを捕まえるのは不可能）、消火にも術を使ってましたし（アニメ）、里は忍びで成り立っているわけですし、まあ憧れは強いだろうと。

戦争時には徴兵の意味もあるでしょう。

アカデミーについて。

原作での生徒数が30人と少なかつたので、一般的の学校もあるのだろうと考えています（選択できる）。

忍びの一族について。

やつぱり一般人と同じ、とはいいかないと思います。里を維持するためにも優秀な忍びの一族は貴重です。たとえ親が子供を忍びにさせたくないとしても、圧力はあるでしょう。

いろんな独自解釈を交えながらの仲直り・イノ編でした。サスケを好きになるきっかけは、完全捏造です。田で追いかけてるうちにしつてあるよね。

仲直りの掛け合いは結構お気に入り。

次の話はヒナタ編です。

間劇「深まつた友情と増えた悩み」

「とにかく弱りきった彼女を見たのは、初めてだった。

「サクラちゃん？」

振り返ったサクラの田元は、赤くなっていた。ヒナタが一瞬息を呑めば、その間にサクラは普段通りの表情をして、なんでもないよう振舞つた。チームメイトのキバとシノには少々戸惑っている気配があつたが、サクラに合わせていつもと同じように接していた。

そのまま別れようとしたサクラに、ヒナタはとても苛立つた。サクラはいつだって他人のことには必死になるくせに、自分のことになると途端に心を閉ざす。自分たちに恩返しするチャンスをくれない。

「これから暇だよね。じゃ、イノけやん探しに行こう！」

腕を引っ張つた。今彼女の腕を引くのは、自分の役目だとヒナタは思った。

* * *

本音を言つてしまえば、ヒナタがサクラに抱く感情はプラスのだけではない。

「はつてやあっ！」

イノとサクラと行う修行において、体術は家柄もありヒナタが一番だった。手裏剣はサクラが得意で、忍術に関してはイノが得意だから、何か一つでも取り得があることはヒナタにとつて支えだつた。

だが段々と、ヒナタの攻撃はサクラに当たらなくなつた。彼女の身のこなしにヒナタの方がついていけなくなつていった。サクラに攻撃の決め手がなかつたので今まで組み手で負けたことはないが、それでも恐怖した。人一倍努力していると思っている。ヒナタの家は日向だ。木の葉最強とうたわれる名門の出だ。反対にサクラはごくごく普通の家庭で育ち、修行を見てくれる相手もない。だといふのに着実にヒナタより強くなつっていた。

なんでこうも違うのかと、枕を濡らして起きることがたびたびあつた。

可愛くて、頼りがいがあつて、料理も上手で、優しくて……欠点が見当たらないなんて、ずるかった。そしていつしか、アカデミーの実技テストで結果が出せない彼女を見て、喜んでいる自分にヒナタは気づいた。大好きなはずの彼女へ抱く醜い感情に、強い衝撃を受けた。だから、

「嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い」

自分が大嫌いになつた。

感情をもてあましていたヒナタは、誰にもそのことを相談しなかつた。まさかサクラに言えるわけはなく、イノに言つてしまつたら嫌われるのではと不安で、かといって他に相談できる相手などいなかつた。ヒナタは段々一人との修行も休むようになつた。

アカデミーの隅っこにあるブランコに腰かけて、地面を見つめていた。今日は一人と買い物の約束をしていたが、急用が出来たと断つた。一人の顔が見れなかつた。

「どうしたのかつてばよ」

『どうしたの?』

特徴的な語尾のついた言葉に、ある口の声が重なつて聞こえた。ヒナタが勢いよく顔を上げると、その勢いに金髪の男の子は驚いてのけぞつた。

「あ

サクラではなかつた。分かりきつていたことだつたが、なぜかそれが無性に寂しかつた。

ぐにやり。

ヒナタの世界が突然大きくゆがんだ。男の子の焦つた声がした。

「わわわっ泣くなつてば」

男の子は必死にポケットを探つていたが、ハンカチなど持つていなかつたのだろう。最終的に指でヒナタの涙を拭つた。そんな彼の指先は硬くて、サクラと似ていて、余計に涙が出てきた。だがあまりにも慌てている様子に申し訳なくなり、ヒナタはなんとか落ち着こなと息を整えた。

「「めんなさ」

「べ、べつに」

口ではなんてことなさそうに言つてゐる男の子だったが、安堵しているのが分かり、ヒナタは気持ちが緩んでポロポロと心情を話始めた。いつかと同じようなシチュエーションだった。会つたばかりの同じ年の子に、言葉をぶつけてゐる。自分は何をしてゐるのだ

「それでね。その子が失敗しちゃった時、私嬉しくなっちゃって。友だちなのに、最低だよね」

「ふーん、なんで？」

「え」

「ビーハくんが最低なんだってば？」

嫌われるだらうなと思しながら話したことに対する反対し、男の子の声は軽い。見ると、空みたいな瞳を不思議ながらひらく向けていた。ヒナタは言葉に詰まる。

「俺はその、友だちだとよく分かんねーけど。俺もさう思つ時はあるつてばよ。それって最低なのか？」

「だつ、だつて普通は一緒に悲しむべきだし」

「んーーー、でもよ。やっぱり嬉しいじゃねーか。自分の近くにいるみたいで」

「……近、くーるー。」

「うと」

男の子は、ちょっと照れくさうに鼻の下を搔いていた。内緒にしてくれよと彼は前置きした。

「お前つてば、こつもサクライちゃんと一緒にいる奴だら？」

「つ」

「俺、実はサクラちゃんのことが好きでや」

「サクライちゃんが？」

「うん。でもさ、サクライちゃんつていろいろなことできるし、俺なんかと違つて成績もいいし、すつじぐく俺から遠い場所にいる気がするんだ。追いつこうとして俺も頑張つてみつもりだけど、

なんかいつもうまいかないんだよなあ、これが

「そ、だね。うん。よく分かる」

「だろ？ けど、ああやつて失敗してるところとか見ると、自分と変わらないように思える。だから俺は嬉しいんだ。絶対いつか追いつく！ つて、やる気が出でくるから」

不思議な言葉だった。そんな風に考えたことはなくて、ヒナタの心がスッキリ軽くなつた。

名前も知らない男の子は、「でも、やっぱりこれってば変なのかな」と首をひねつて真剣に考えている。ヒナタはくすくすと笑つた。男の子がこっちを向いた。

「ううん。素敵な考え方だと思つよ」

ならいいかと男の子も笑つた。

「お前、笑つた方が可愛いくてばよ」

* * *

いろいろ思い出しすぎで少し赤面したヒナタは、首を横に振つて意識を切り替えた。イノを探しながら、後ろにいるサクラの様子をうかがう。サクラはぽつりとヒナタの後姿を見ていて、胸が苦しくなつた。

『遠い場所にいる気がして』

仲良く慣れたと思える今だからこそ、彼が、ナルトが言った意味

を実感する。物理的な距離ではない。心の距離が、遠いのだ。

自分たちを大事に思ってくれているのはたしかだった。だけど、どこか線引きがある。その線を、サクラが越えることはあれど、誰かに越えさせてくれることはない。一方通行なのだ。

ヒナタにはサクラが何かを恐がつてゐるよう見えた。

いつかその何かを吐き出してくれるだらうと見守っていたが、もう限界だ。無理にでも吐き出させようと思つた。じゃないと彼女はどこか遠くへ、自分の手が届かない場所へ行ってしまう。根拠など何もなかつたけれど、ヒナタは確信していた。

『私たちじゃ駄目なのかな？ そんなに頼りないかな』

身動き一つしないサクラを見て、方法を間違えたのだとヒナタは悟つた。

今度は自分が助けるんだと意氣込んでいた。サクラと出会つてからヒナタの世界は色づいた。イノと出会えたのも、ナルトのことを好きになれたのも、サクラのおかげだつた。今度は、自分が周りが見えなくなつている彼女に、世界を見せたいと思つたのに。

「姉さま、あの」

「ごめんハナビ。今日も夕食はいらぬから」

あの日以降、ヒナタは一日連続で任務を休んで部屋に引きこもつていた。世界を見たくなかつた。

部屋の外から聞こえた妹の声にそっけなく返し、最低の姉だと自嘲した。だが、

「違います。お友達の方が来られて、あ、サクラさん、ま

勢いよく障子が開けられた。そこに立つ少女をポカンと見上げると、翡翠の瞳が「しようがない子ね」と柔らかくヒナタに注がれた。最後に見た姿ではなくいつもの　いや、それ以上に綺麗なサクラがハナビを腰に引き連れて立っていた。

「ごめんね、ハナビ。ちょっとヒナタ借りるから」

「えっはい」

「ほら。行くわよ」

手を引っ張られ、自然と立ち上がった。そのままぐいぐい引っ張られていく。途中ですれ違った父親に「あ。娘さんをちょっとお借りします」などとサクラは頭を下げ、「うむ。よろしく頼む」と父親は返していた。

どうも状況を理解できていないのは自分だけらしい。

前と立場が逆で、もしかしてサクラもあの時こんな心境だったのかとヒナタは考えた。

「ごめんね」

赤い背中を見つめていると謝罪の言葉が聞こえた。謝るのは自分の方だと口を開く前に、サクラはヒナタの顔にハンカチを押しつけた。ハンカチは濡れていて気持ちよかつた。いつの間に用意したのだろう。

「ちょっと待ってなさい」

サクラはそれだけ言うと、ヒナタを置いてどこかへ行ってしまった。ハンカチから顔を上げたヒナタは、この場所がどこであるか知つた。

『ハンカチのお礼？ 気にしなくていいのに……あ、そうだ。じゃ、このリボンと交換しましょ。ヒナタのくれたものとこれじゃ見劣りするけど』

『ちょっとサクラー、それどういう意味よ』

『あはは、『めん』『めん』。でも、イノから私、私からヒナタでちょうどいいじゃない』

『何がちょうどいいのか分かんないわよ、まったく。はあ。好きにしなさいな。それはあなたにあげたものだもの』

この場所で一人からもうつた青いリボンは、ヒナタの宝物となつた。

また涙が出てきて、サクラのハンカチを目に当てた。

「私、イノとヒナタが大好きだよ。親友だと思つてるし、ずっと一緒にいたいし、二人が困つてたら全力で助けになりたい」

足音が一つ響いたかと思えばサクラのそんな声がして、ヒナタはハンカチを目元から離した。淡い金色の髪の少女が呆然としているのが見えた。おそらく彼女も引っ張られてきたのだろう。

「一人には嘘をつきたくないし、隠し事もしたくない。けど、『めん』。どうしても言えないことがあるの。私だけの問題じゃないから。だからこれからも相談できないことたくさんあって、そのことで一人を傷つけるかもしれない」

赤と言つには弱い、オレンジと言つには濃い夕日の色が、サクラを染めていた。さっきも思つたが、彼女は本当に綺麗になつていた。一体何があつたというのだろう。聞いてもいいといつになら、教えてもらおう。

「もしもそんな私でもいいと思ってくれるなら、これからもずっと友達でいてくれませんか？」

「どうか寂しそうな問いに、ヒナタの答えなど最初から決まっていた。イノと田があつて、笑つた。イノが思い切りサクラの背中を叩き、ヒナタはサクラの手を握つた。

「あつたつまえでしょ。あなたの面倒見れるのはあたしたちぐらうなんだから」「ふふふ。そうだよ。サクラちゃんがいやだつて言つても友達ヤメてあげないよ」

「うん！ やめないでね」

三人顔を見合させ、そろつて笑い出した。

* * *

後日、ヒナタはイノと共に、サクラに連れられてとある場所に来ていた。田の前には文字の彫られた石がずらつと並んでおり、サクラはそんな石の一つの前で立ち止まつてこひらを示しながらその石に語りかけた。

「お父さんお母さん、改めて紹介するね。一人は、山中イノちゃんに田向ヒナタちゃんとつていうの。

私の血縁の親友です」

サクラがいろいろ話してくれるようになったのは嬉しいけれど、いつも表現がストレートなのはこつちが照れて困る。

居心地悪そうなイノヒナタは、別の悩みが出来たとため息をついた。

闇劇「深まつた友情と増えた悩み」（後書き）

自分だったら、恥じすぎてこのサクラとは友だちになれないなあ。
とか、思う。

それに友だちだからといって、お互いに嫌なところがない、何で
こともないでしょう。嫉妬する」ともある。人間なんだから仕方な
い。

彼女たちと一緒にこちらへん成長していけたらなあと考えています。

ナルトとヒナタの出会いについて。

このヒナタだと、原作どおりにナルトを好きになるか微妙だった
ので捏造です。

第四十一劇「変化」

「何があつた？」

かけられた言葉にサクラは首を小さく傾けた。なぜかナルトはキヨドキヨドと視線をあちこちにさまよわせていた。顔も心なしか赤い。

「何かつて、あんたこそ何があつたの？　顔赤いわよ。熱あるんじやない？」

「ひえ！　いや、や、その」

「うーんちょっと熱い、かな。しんどいなら休んだ方が……ナルト？」

サクラが彼の額に手を当てるど、ナルトの赤みが気のせいではないほどに増した。心配になつたサクラが顔を覗きこむと、ナルトは慌てて顔を彼女の反対へと向けた。目線の先には、遅刻したというのにのんびり歩く上司がいた。

カカシはナルトとサクラを見て一瞬驚いたようだが、「ああ。なるほどね」うんうん首を縦に振つた。何がなるほどなのかは不明だ。

「あ、カカシ先生。ナルトがしんどいみたいなんだけど」

「ナルトなら大丈夫大丈夫。じゃ、今日もはりきつてこいつかー」

「え？　わっちょ、先生！」

につこり笑つてゐるカカシにサクラは抗議しようとしたが、ぐいっと手を引つ張られたことで口を閉じた。つんのめり、こけそうになつ

たところをカカシに抱きとめられる。感謝するべきなのか引っ張られた文句を言うべきなのか。サクラが悩んでいると、

「あー————つカカシ先生！ サクラちゃんに何してるんだってばよ」

大声を上げてナルトがカカシに詰め寄った。元気でやかましいつものナルトだった。よく事態が分からずにサクラが気を抜いていると、カカシとは逆へとまた手を引っ張られた。

「ここの馬鹿。お前もそろそろ学べ」

「え、何を？」

どこか不機嫌そうなサスケは、しばらく無言のまま不思議な顔をしているサクラを眺めていた。やがてため息をつく。サクラから視線を外した彼は、ニコニコしているカカシを睨みつけた。なんとも不思議なサスケの行動にサクラがカカシを見ると「ほら大丈夫」と言いたげにウインクした。たしかにいつも通りみんな元気そうだ。ナルトの体調が悪そうに見えたのは、気のせいなのだろう。たぶん。ちょっと怪しい気もするが。

半分納得したサクラは、ハツと我に帰つて前を見た。

「サクラちゃん」

「行くぞー」

「ふん」

三人が振り返つて自分を待つている姿になんだか泣きたくなりながら、サクラは走つて彼らを追いかけた。

* * *

サクラは額を押さえる。

目の前ではいつものごとく喧嘩を始めたナルトとサスケに、そんな二人をあおるカカシがいた。細く長い息を吐き出したサクラは、おろおろしている気配を後ろに感じながらそつと三人に近づいていった。彼女の拳がぎゅっと握りしめられた。

「仲良く、ね？」

「ハイ！」

「すいませんでした」

「調子に乗りました」

一瞬後には地面で頭を押さえるナルトにサスケ、腹を押さえるカカシがその場にうずくまっていた。サクラはパンパンと手を叩いて三人を見下ろした。呆れきった顔をしていたが、すぐに申し訳なさそうな顔に切り替えてくるりと振り返る。

「すいません。こんなので」「はあ」

老齢の男、『写真屋は『悶絶している』この』を見て引きつった顔で、「ははは」と笑った。

今、七班が何をしているかと言つと『写真撮影である。カカシ曰く、下忍正式登録の手続きに必要なのを今まで忘れていたらしい。で、今日がその日というわけだ。

ほら撮るから並んでー。サクラが声をかけるとスクツと苦しんでいたのが嘘のように三人は立ち上がった。いつも彼らは大げさだ。左からナルト、サクラ、サスケと並び、後ろにカカシが立つた。

が、西隣がにらみ合つているのを察したサクラは眉を寄せた。折角の記念撮影なのだ。仲良く撮りたい。サクラは腕を組んでどうしたら仲良く撮影できるか悩み、思いつきにふふと笑った。彼女が手を伸ばすと、西隣から悲鳴のような高い声が聞こえた。サクラは気づいていないフリをした。

「うわっサクラちゃん！」
「サ、サクラ！」
「はいはい、スマイルスマイル」
「楽しそうだなあ。サクラ、先生も混ぜて~」

後ろから聞こえた声に、サクラがしつかり握った両手を少し持ち上げると、カカシがそこに手を置いた。写真屋は楽しそうな笑みを浮かべて、撮るよーとレンズを覗いた。

* * *

『サクラ?』

買い物に行つた帰り、門の前に佇んでいたのは見知った少女だった。名前を呼ぶとサクラは大げさなほどに肩をびくつかせ、無言のままサスケに背を向けた。気がついた時、彼は買い物袋を放り出してサクラの腕を掴んでいた。止めなければもう一度と会えないよう思ったのだ。

瞳を覗き込もうとすれば、避けるようにサクラは腕で目を隠した。そんな態度に彼はとても苛立つた。

『違う！ 私はサクラじゃない。その名前で呼ばないで』

サクラは珍しいことにひどく錯乱していた。とりあえず落ち着かせようとサスケがサクラの名を呼ぶと、彼女の肩がまた震えた。何かに怯えているようだった。サスケは目をみはった。もう片方の腕を掴んで、無理やり顔を覗きこんだ。湿った翡翠の瞳の奥に、サスケは小さな渦を見た。

一瞬驚いて、しかしすぐにどうでもよくなつた。

瞳に宿つた穏やかさも悲しみも寂しさも喜びも優しさも、いつもサクラと何一つ変わらなかつた。ここにいるのはまぎれもなく、自分の知つてゐる『春野サクラ』だと、サスケには確信を持つて言えた。サクラが言つた意味は分からぬが、サスケにとつての眞実はその一言に尽きた。だから何も問題はなかつた。

問題があるとすれば、自分が安心しすぎていることかもしれなかつた。

『何を言つてゐるかは知らんが、お前は俺の知つてゐる春野サクラそのものに見えるがな』

サスケが素直に出した言葉を、サクラはどう受け取つたのか。泣きながらサスケに笑つて見せた。初めてサクラの素顔を見た気がした。

「おはよう、サスケ君」
「……ああ

次の日、集合場所にサスケが着くとサクラが笑みを浮かべて挨拶してきた。いつものようにそつけなく返しつつ、サスケは心臓が速く脈打つていることを気づかれないように必死だった。普段通りにしていればいいのだが、妙に気まずい。勉強し始めたサクラに習つて巻物を解いても頭に入つてこない。すぐ後にやってきたナルトに

感謝したいぐらいだつた。

真っ赤になつてゐるナルトに、ちょびつと同情はした。

* * *

ほんと、何があつたんだろう。
ナルトは隣を見た。そこに今は、昨日までの沈んだ表情ではなく、
満面の笑みを浮かべているサクラがいた。ドキドキ心臓がうるさく
なつてきて、ナルトがふいつと逆へ顔を向けた瞬間、パシャつと音
がした。

ああ、よかつた。

ナルトは安心した。彼女を見つめたままの『真が残らなくて、ほ
んとによかつた。だつて恥かしすぎる。

右手の温もりがなくなつて、思わず「あ」とナルトの口から声が
出た。サクラがナルトへ顔を向けた。翡翠の瞳と目が合えば、心臓
だけでなく身体中が歡喜に揺れて騒音を奏で始める。まるで自分の
身体ではないようだとナルトは感じた。

サクラの整つた眉が怪訝そうにつり上がり、すぐに垂れ下がつた。

「やつぱりあんた調子悪いんじや
「だだ、大丈夫だつてばよ」

近づいてこようとしたサクラをナルトは必死に押しとどめる。こ
れ以上近づかれたら死んでしまう。冗談抜きでナルトはそんな心配
をした。サクラは不思議そうな顔をしていたが、引き下がってくれ
た。どこか寂しそうな表情に失敗したと後悔したもの、今のナル
トにはそれが精一杯だった。後でサスケからどんな小言を言われよ
うとも、身體がどうにかなつてしまつよりはマシだった。死んでし

まつたらもう彼女に会えない。

ふと目が合った力カシは、そんなナルトの心境を理解しているようで、苦笑いをしていた。なんだかむずがゆい。ナルトは頭の後ろをかいだ。

サクラは、綺麗になつた。

もちろん、ナルトはサクラを元々から綺麗だと思っていたが、さらに綺麗になつた。それは劇的な変化で、一体何があつたのかと疑問に思うのも仕方ないだろう。つい昨日まではあんなにも思い悩んでいたというのに、今日は晴れ渡つた笑顔だ。誰だつて気になる。それが好きな女の子なら、よけいに。

「じゃあ、センセ、ナルト、サスケ君。また明日ね」

手を振るサクラにナルトはなんとか手を振り返す。サクラが元気になつたことを、彼は本当に嬉しく思う。けれど、そこに自分がいなかつたことが悔しい。ナルトは強く思つて、振つた手を握り締めた。

一体いつになつたら自分は彼女の隣に立てるのだろうか。

* * *

手を振り返しつつ、力カシは情けなくて仕方なかつた。結局、自分は彼女に何もしてやれなかつた。どころか、気を遣わせてしまい、そのことで落ち込んでいる間にすべては解決してしまつた。情けないにもほどがある。

「ま！ 良かつたは良かつたんだが」「カカシ先生？ 何か言ったかつてばよ？」

「いいや。気のせいでしょう」

不思議そうに見上げてきたナルトの頭を乱暴に撫で回して、彼は「まかす。ナルトの悲鳴を聞きながら笑った力カシは、抗議される前に「じゃあな」とその場から消えた。

第四十一劇「変化」（後書き）

写真撮影について。

写真を撮った時期、どんな感じで撮影したのかは謎なので、捏造しました。

すぐ撮影するかなあとも思つたんですが、すこし慣れた頃（5月頃）がいい。でも5月は力カシ班波の国へ行つてるので、延期。そのまま力カシが忘れてた、みたいな。

それにもしても、この四人が写った写真欲しい。

第四十一劇「数式と天才」

図書館の端、定番の位置に座つたサクラの前にはノートや巻物、本が所狭しと広げられ、彼女はシャーペン片手にそれらを睨んでいた。ノートにはびっしりと数字や記号が並んでいる。何かの数式、らしいが、ところどころに上からバツ印がつけられて何度も書き直されていた。シャーペンの先で一つの数式をサクラは叩いた。

「ん~これじゃ駄目、か。でも途中まではいい感じなんだけどな」

ぶつぶつ小声で何事か言いながら、サクラはその数式にバツを書いた。そしてまた新しい式を書き、考えてはため息を吐き、バツ印、書物をめくつて考え、式を書き、を繰り返していた。随分と難しい顔をしている。

一体サクラが何をしているのかというと、新術の術式構成だった。波の国でサクラは周りを見ずとも察することが出来た。あの状態を術に昇格させようとしているのだ。感情の高ぶりからでしかあの状態になれないのは、あまりにも使い勝手が悪すぎる。いくら便利でも、ここぞという場面で使えなければ意味はない。

なんといっても、今まで特別な術がなかつたサクラにとって、あの状態はチャンスだつた。

サクラが必死にかつ冷静に分析した結果、あの状態は『ひたすらに竹筒を避けた修行』が関係あるのでは、と思い至つた。

攻撃が自分に向かってきた時どう避ければ一番効率がいいのか。それらを判断するための修行だったが、判断するには情報が必要となる。サクラは修行をしているうちに自然と目、耳以外からも情報を集めるようになつていたのだ。彼女が思い返せば、修行中とあの状況は感覚がよく似ていた。

もちろん、どれだけ集中したところでサクラの背中に目がついて

いるわけではなく、背後を知ることはできない。しかしあの状況では背後の詳細も知ることができた。発動のためには、修行の他にも必要なものがある、ということだ。

「チャクラで神経細胞を活性させるんだから。となると細胞に働きかけるこの式を」

あの状態になつた後、痛みがひどくなつた。チャクラがサクラの五感を鋭敏にしたのだ。言葉にするとそれだけのことだが、どのようにチャクラを流せば感覚を引き出せるのか。熟知している必要がある。

つまりはあの修行と、ずっと勉強し続けていた医療知識がよひやく役立つたのだ。

とはいっても手放しに喜べないこともある。

そもそもあの状態になつたところで身体能力そのものが向上するわけではない。感覚が鋭敏にはなるが、それは痛覚まで鋭くなるということ。入ってくる膨大な情報の処理で頭痛が起るなどの副作用がある。さらにはチャクラの消耗が大きいこともあり、中々欠点の多い術だ。使いどころはとても難しい。

それでも死角がなくなるので使いどころを考えれば強力な武器となる。防御に関してはかなり有利だ。

からよみ
空読の術。

まだ出来ていないが、サクラはそう名づけた。

「範囲も指定できた方がいいよね。うーんそつするとこれじゃ無理か」

もうすでに存在する忍術の場合、印を教えてもらい、術の発動条件がそろつていれば（そろえるのが難しいのだが）発動させることが出来る。上手く扱えるかは各々の技量しだいだ。

だが、新術の場合は理論の構成から始めなければならない。どういったチャクラの配合にするか。チャクラの形質・性質をどのように変化させるのか。どんな結果をもたらすのか。そういうものを術式に起こし、その術式から印を考えるのだ。この印が考えられない限り、術の練習すら出来ない。

もつとも理論上、印はなくても術の発動は可能だといわれている。印とは術のイメージを具現化させた（補佐する）ものだ。つまり、きちんとイメージが作れるのなら印はいらない。では、なぜ誰もが印を結ぶのか。両手がふさがる印は邪魔にしかならないというのに。答えは、術の詳細なイメージを浮かべるのが非常に困難、だからだ。

たとえば分身の術を使うには、自分と同じ姿を思い浮かべればいい。しかし、鏡や写真を見ながらならともかく、まったく同じ姿を思い浮かべられるだろうか。さらに言つたら術を使うのは戦闘中がほとんどだ。戦いながら意識を集中して思い浮かべるのは、不可能と言い切つていいだろう。

術のイメージを補佐するのが印の役目で、「あっちに向かつて走れ」など漠然と言われるよりも、「アカデミーに向かつて走れ」と具体的に言われた方が分かりやすいのと同じだ。

なので印はどうしても必要なのだが、サクラはその前段階である術式構成で詰まっていた。

術の基礎部分だ。ここがしつかりしていないと不安定な術になるので、手は抜けない。だが、先ほどから同じところで詰り、先に進まない。

「ああ、駄目だ。これだとチャクラが流れてしまつし、変化も違つてくるし。うう」

サクラは数式を親の敵のように睨みつける。もちろん、いくら睨

みつけても数式が変化することはない。一つため息をついて、サクラは分厚い本に手を伸ばす。最初から見直そうとした。

「まためんどくせー」とやつてんな、お前」

が、後ろから聞こえた声に驚きすぎたサクラは、大きく咳き込み、式の見直しじるじやなくなつた。

おいおい。

呆れた声を背後から聞きながら、涙を浮かべて「誰のせいだ」と彼女は心の中で文句を叫ぶ。

サクラが咳きこんでいる間に彼女を驚かせた犯人、シカマルはひいとノートを取り上げそれを見た。シカマルはすぐ嫌そうに顔をゆがませていく。

「術式か。しかも新術とはな。これまた」「苦労なことで」「う、わい。かえ、しけほ！」

手を伸ばすとサクラの届かない位置に避けられた。立ち上がるうとしたら頭を手で押さえつける念の入れよう。ぶるぶるとサクラ肩が震え、図書館だろうと関係なく怒鳴つてやろうと思つた時、シカマルがいつものだるそうな口調で言つた。

「この式をこれの間に入れてみたらどうだ?」「くつ?」

ノートを机に置いたシカマルは借りるぞ、と言つてサクラの手からシャーペンを抜き取り、ある術式をマルで囲む。それを矢印で引つ張り、サクラがバツを書いた別の術式の間に持つていつた。驚きで丸くなつていた翡翠の瞳が、真剣な輝きを帯び始める。シカマルはとある数字をトントンと叩いた。

「つまりお前はこの結果を出したいたいわけだ」

「うん」

「だとしたら、一つの式じゃ無理だな。ここで一回区切つて」

淀みなく動くペンを追いかけて翡翠の瞳も移動する。そして最後に書き込まれた答えに、ほうっと息を吐き出した。サクラが求めていたものが出了のだ。

「そつか。なるほどねえ」

「お前は組み合わせるのが相変わらず下手だな。全部式は出てんのによ」

「う。うるせー」

呆れたシカマルの声にサクラは頬を膨らませた。ノートにシカマルが書いたのは矢印ばかり。どうも、一つ一つの式にこだわりすぎて、組み合わせる発想が出てこなかつたらしく。サクラは昔から点と点をつなぐのが苦手だった。彼女自身、よく自覚しているので反論はない。

反論はないが、不満はあるらしいサクラが黙り込んでいると、シカマルが小さく笑つた。サクラが目を向けると、シカマルは二イフとそれはそれは憎たらしい笑みを浮かべた。

「で、何か言うことは？」

「……りがとう」

「聞けねーんだけど」

「あり・が・と・う・」・れ・い・ま・し・た、シカマル様」

「どういたしました」

ああもうムカつく。

ここが図書館でなければ、拳を机に振り下ろし、足をじたばたと動かして思い切り叫びたい心境だった。実際しそうになつたが、サクラの理性やら矜持やらが働いてストップをかけた。

実はこのめんどくせーが口癖のシカマル、学校の成績は悪いが（ついでに田つきも悪い）、頭の回転はものすごく速い。成績が悪いのはテスト中ずっと寝てているから、といつふざけた理由のため。本人曰く、鉛筆転がすのもめんどくさいらしい。こつぞやは名前すら書かず、担任のイルカに怒られていたこともある。

それでもなれば、サクラが座学で一位を取るのは無理だつたろう。

もつとも彼の頭の良さを知っているのは少ない。サクラは普段の掛け合いからなんとなく察し、ある日将棋へ誘われた時に確信した。シカマルは天才と呼ばれる類の少年だと。悔しさはあるが、それ以上にサクラが思うのはもつたいない、だつた。やる気を出せば忍びだけでなく、様々な分野で活躍できるだるう。

「でも珍しい。あんたが人の手助けしてくれるなんて……どうしよう」

「あ？」

「今日傘持つて来てないんだけど。あ。でも槍が降つてきたら傘じや無理か」

「お前が俺をどう思つてるか、よおく分かつた」「で、なんでやる氣になつたの」

あぐびをしながらサクラの正面の椅子に座つたシカマルは、本が広げられた机の上を指差した。

「この状態じゃ寝れねー」

「良かつた。槍は降らなさそうね」

サクラは息を吐きながらシカマルの前に積まれていた本を持ち上げた。するとシカマルは「ようやく寝れる」と頭を机に置いた。すぐに寝息が聞こえてくる。

「ありがとね」

そんな彼に笑顔で小さく礼を述べたサクラは、手にした本を元の位置へと直しに行つた。今度何かおごつてあげようと考えながら見渡した図書館は、人がまばらだった。

第四十一劇「数式と天才」（後書き）

空読の術に関して。

こんな名前の術なかつた、と思うんですが、あつたつけ？ 第二部の途中からは読めてないので、知っている方いらっしゃつたら教えてください。

あと、補助作用として幻術耐性がアップします。いずれかの五感から幻術にかかるても、他の五感がそれは現実じゃないぞ、と教えてくれるからです（追記）。

術全般について。

なぜ印が必要なのかを考えた末にこうしました。元々どうやって変化してるのが、とか謎だつたので。印のない術もありますし（医療忍術・螺旋丸系・瞳術とか）、印がなくても発動することは全部の術（血継限界以外）で可能。ただし難しそうな、ところどころ（追記）。

これに関してもおかしな点があれば、気軽に指摘ください。

よし、これでサクラも強くなれ……つわ、使い辛い術だな！ 身体への負担が大きい上に、能力が向上するわけじゃないとか。考え出した本人がいうのもなんんですけどね。いつ使うのか、はお楽しみに！

第四十三巻「第七班の日常」

「ゴオゴオと周囲に存在を響かせながら落ちてくる大量の水は、しぶきを上げて一旦勢いを殺し、また流れしていく。

「なんか今さらながらに、ヤメたくなつてきたんだけど」

落ちてくる大量の水、一般的に滝と呼ばれるそれを見上げたサクラは冷や汗を流しながら呟いた。返事はない。ここにいるのは彼女一人だ。むしろ返事があつたほうが怖いだろう。

先日、サクラはシカマルの助けもあつて新術の理論構成に成功した。無事に印の組み合わせも出来たのだが、さて発動させようか、となつて問題が浮上した。　スタミナ（チャクラの総量）不足だ。波の国では感情でリミッターが外れたのだろう。実際あの時サクラはチャクラ切れを起こして気絶した。まだ誰かが傍にいたから助かつたものの、一人で修行すればかなり危険な状態になるのは目に見えている。しかしながら危険な術だと分かつている以上、誰にも相談できない。止められるのもまた目に見えて明らかすぎた。

「理論上はできなくないはず。うん、大丈夫」

まずはスタミナの底上げだ！　ということで、サクラが一晩考えた修行法は滝登りだった。木登りの要領で滝を登るだけという非常にシンプルなもの。さらなるチャ克拉コントロールも身につけなければならないのでちょうどいい修行法だが、今まで以上に危険だつた。しかしそれぐらいしないと到底あの術を使えそうもない上に、なんといってもチームメイトに追いつけない。サクラ以外の男たちは、全員馬鹿みたいなスタミナ持ちなのだ。

「最初は勢いをつけて」

気合を入れたサクラは、走って滝へと向かっていった。

* * *

修行に時間をかけたくとも、任務をこなさなければ日々の生活費が稼げない現実があった。サクラには目の前に『家賃・生活費』の文字が横たわっているようにすら見える。

ならば早く任務を終わらせて修行をしたいところだが、担当上忍であるカカシは大の遅刻魔だ。彼が待ち合わせの時刻通りに来たためしはない。かといって自分も遅刻するつもりなど毛頭なかつた。かといって時間は一分一秒でも惜しい。

そんなサクラが待ち時間を利用して勉強を始めたのは、自然な流れだった。彼女の影響を受けたサスケとナルトも待ち時間を利用しようと模索し始めた。しかし待ち合わせ場所は街中だ。まさか修行ができるわけもなく、彼女と同じく勉強にいたつた。そうなると、

「サクラちゃん、ねね、ここはどうこうことだつてばよ」

「ああ、ここはね」

「サクラ」

「ちょっと待つて。たしかそれについてまとめたのがあつたはず」

一番座学の成績が良かつたサクラが教える側に回るのも、自然な流れだった。カカシよりよっぽど先生をしている。カカシの給料の一部をもらつてもいいんじゃないか。最近サクラはそう思つ。

「やあ諸君おはよー。今日は迷子がいて」

「はい、嘘！」

「だつてばよ」

「ふん」

よつやくやつてきた力カシに對して七班のメンバーは顔すら向けず、勉強道具をせつせとしまつ。冷たい態度の三人を見つめる力カシの背中から哀愁が漂つていたが、やっぱり三人は無視してさつさと任務斡旋所に向かい始めた。自業自得なので、同情の余地はない。とぼとぼ力カシも歩き始めた。

「サークーラちゃん、今日任務終わったら一緒に修行しない？」

「ナルトと？」

自分を覗き込んできたそわそわした青い目を見て、サクラは数回まばたきをした。考えてみれば、ナルトたちと個人的に修行した記憶はない。誘われてもすべて断つていた。サクラは（うわ。なんて愛想のない）と、自分で自分の行動に呆れた。いくら焦つていたとはいえ、チームメイトへの態度ではなかつた。

ちょっと反省してから、緊張した面持ちで自分の答えを待つているナルトに頭を返す。

「いいわよ」

「えつ嘘！ ほ、ほんとに？」

「こんなことで嘘ついてどうするのよ。あ、でも夕飯の材料買いに行かなくちゃいけないから、早めに終わつてもいい？」

「全然いいってば！ なんだつたら俺、荷物持ちするよ」

「ほんと？ 助かる。あ。じゃあ、そのままご飯食べていきなさい。作れそうなものなら好きなもの作つてあげるから」

「わ、マジで？ やつたー！ サクラちゃんのめーしー めーしー！」

えつとね、えつとね、俺あれ食べたい。オムライスとハンバーグとカレーとそれから肉じゃがと」

大きさなほどに喜んでいるナルトは、次から次へと料理名を挙げていく。そんなに作れるわけないでしょ。どれかにしなさい。などと怒ったものの、今にも踊りだしかねないナルトはまるで聞いていない。ひやつほーと叫んでいる。

そんなに最近いもの食べてなかつたのだろうか。あ、またカツラーメンづくしだつたんじや。

ちょっと眉を寄せたサクラだったが、ふと視界に入つたサスケのムスッとした顔に驚いて目を丸くした。

「サスケ君？　どうしたの？」
「別に」

短く答えたサスケは、ナルトを睨んでいた。どうもナルトが原因らしい。特にサスケが怒るようなことはなかつたと思うのだが。首をかしげるサクラの後ろからは、

「いやー、青春だね」

カカシのそんな声がした。

* * *

今日の任務は犬の散歩と子守だつた。いつものようにナルトが無茶をしなかつたため、あっさりと終わつた。いつもこうならいいのに。

最近サクラたちはCランクも任されるようになつたが、やつぱりまだDランクがほとんど。早くCランクを受けられるようになつて真っ赤な家計簿とおさらばしたい、というのがサクラの願いだ。そして今は約束通りナルトと修行するために演習場へと向かっているわけだが、彼は不機嫌だった。

「だーーーっサスケ！ なんでてめえまでついて来るんだってばよ」「知るか。たまたまだろ」

「嘘つけ！」

「まあまあナルト。お前も落ち着く

「カカシ先生までそろつてなんなんだよ。折角サクラちゃんと一人きりになれると思ったのにい」

任務が終了し解散したにもかかわらず、珍しく七班はそろつて歩いていた。苦笑しながら憤つているナルトに声をかける。

「いいじゃない。人数多い方が修行はかどるし、ね？」

「サクラちゃん……これはそういう問題じゃないってばよお」

「え？ でもほら、カカシ先生は一応上忍だから教わることも、ない、かもしれないけどちょびっとはあるかもしないし」

「ああ、そんな評価なのね。俺」

「ふん。自業自得だろ」

なぜか今度は落ち込んでしまつたナルトに、サクラはどうしたらよいかとおどおどした。カカシはカカシで落ち込み、サスケはナルトとカカシを見てはんつと鼻で笑つている。なんともちぐはぐだが、これが七班だつた。

やがて目当ての演習場にたどり着くと、ナルトはすっかり元気を取り戻していた。両手を突き上げ「くたくたになるまで修行して、サクラちゃんの手料理いっぱい食べるぞー」と、叫んでいる。そん

な彼を見て、普段どんなものを食べているのか心配になつた。今日はたらふく食べさせてあげよう……今回だけ食費請求はヤメとくとして。うはあ、今月も赤字か。サクラは肩を落とした。

サスケはと、勉強会でサクラが渡した巻物を読みながら印を組んでいた。力カシは木の上に乗つていちゃバラを読んでおり、サクラたちに教えてくれる気はなさそうだ。ほんと、何をしに来たんだこの人は。あきれ果て、いつそのこと感心する。遅刻魔で、未成年の前でやらしい本を堂々と読み、手伝うどころか助言すらない。駄目な上司の見本市だ。

「うはなるまいと、サクラは心に誓つた。

「あ

サクラは笑つて、ナルトを見、もくもくと修行しているサスケを見、本を読んでニヤけている力カシを見た。思いついたことがあつた。ちょっとあぐどい顔で彼女は笑つた。

「ねえナルト。いい修行法思いついたんだけど」

* * *

んふんふんふふう。

なんとも奇妙な声を上げて本を読んでいた力カシは木の上から飛びのいた。近くの枝に着地する。

「火遁！ 豪火球の術」

直後、力カシがいた場所に大きな火の玉が衝突して木の一部が焼

失した。その場が一瞬真夏になつた。カカシが以前見たより確実に術の威力が上がっている。さすがうちはというべきか。

術の発動者であるサスケは無事であるカカシを見て、「チツ」と忌々しげに舌打ちした。

「ちょっとちょっとサスケ君？　いきなり何すんの。危ないでしょうが」

今のは避けなかつたら確実に死んでいるレベルの術だ。やんわりと抗議するカカシに対し、サスケは鼻で笑うだけ。

その時、ひゅっと風の音がした。

サスケへの抗議をやめたカカシが首を横に傾ければ、先ほどまでカカシの顔があつた位置をオレンジ色の物体が通り過ぎていった。オレンジ色の物体、ナルトはニヤツと笑つた。カカシはそんなナルトの足を掴んでぐるりと回し、後ろから迫つていたもう一体にぶつける。腕の中のナルトと影分身が共に煙となつて消えた。両方ダメー（影分身）だつたらしい。

悔しそうなナルトが木の陰から姿を現した。

「くつそー」

「どうしたのさ、ナルトまで」

言ひながらもなんとなく彼らの意図は分かつっていた。

再び手に持つた本に目を落としたカカシは、逆の手に握つたクナイで飛んできた手裏剣を叩き落す。わずかに眉を動かした。彼は足裏にチャクラを集中させて、跳ぶ。彼が弾いた手裏剣に当たつて軌道を変えた別の手裏剣が迫つてきたのだ。木の枝に次々と刺さつていく手裏剣はあのままだと、確実にカカシの急所に当たつていた。計算尽くしの手裏剣術に末恐ろしいものを感じた。

「サクラ、お前だな。考えたのは

ため息をついて力カシが後ろを振り返ると、「えへへ」と可愛らしく笑つてゐるサクラがいた。見た目と反して、あの手裏剣は中々えげつない。

「先生もたまには先生らしい仕事しなくちや、でしょ」

「たまに……はあ、やれやれ」

つまり三人は「先生らしく、相手をしり」と言つてゐるわけだ。たまにはこいついうのもいいか。力カシは思うのだが、一方でサクラたちの中で自分はどんなイメージなのかと悩んでしまう。肩をすくめて「ま！ いいでしょ」と、彼は立ち上がった。片手には相変わらずいちやパラを持っている。

「お前ら相手じや本読んでも関係ないからな。ほら、さつさとかかつてこい」

* * *

日が暮れた時刻、スーパー内でぞろぞろと歩く七班がいた。結局夕食も全員で食べることになったのだ。材料費は力カシ持ちである。一食分食費が浮いたとサクラは手を叩いて喜んだ。

「もうちょっとだつたのに」
「俺もまだまだお前たちに負けてられないからね」
「だからつて写輪眼まで使うのは大人気ないってばよ、先生」
「使わないとは言つてないでしょ」

「ムキーっ！ 最後まであの本取り上げられなかつたし」

怒つているナルトと、彼の頭に手を乗せてなだめているカカシは年離れた兄弟のようで、サクラは口元に手を当てて小さく笑つた。店内は閉店間際とすることもあり人はまばらだが、それでも他の客はいる。客とすれ違つたびにおどおどするナルトと客の間に、カカシはさりげなく身体を入れて視界を遮つていた。ナルトはそのことに気づいていなさそうだが、ホッとしているのがサクラには分かる。

しかし、この二人が兄弟だとすれば自分はそれを見守る母？ なんだかぴつたりな気がした。

「サクラ、他は何がいる？」

「えつとやうね。あ。ケチャップがなかつたかな」

サスケに声をかけられたサクラは一旦笑いを引っ込める。記憶を探つて答えると、ピクリとサスケは反応した。そういうえば彼はトマトが大好きだつた。ケチャップにもこだわりがあるのかもしれない。いそいそとケチャップコーナーに向かうサスケの姿は可愛らしく、サクラはまた笑いながら重たくなつてきたカゴを持つて追いかける。ケチャップ片手に真剣に悩んでいるサスケの手元を覗きこめば、いつもサクラが買わないような（比較的）高いメーカーのものだつた。

「いつもそれ買つてるの？」

「ああ。……ここのが一番、美味しい」

「そつか。じゃ、それにしようか」

「いやまで。卵料理にはこっちの方が

どれだけこだわりがあるのか、とサクラは内心苦笑しながら悩ん

でいるサスケを見守った。そういえば父も醤油にこだわる人で、よくこんな風に悩んでいた。母はそんな父親をしようと見守っていた。懐かしい光景が思い出され、サクラは自然と穏やかな気持ちになつていく。

「はれ？　えと。ちょっと待つて。

のもつかの間、とあることに気づいてしまい、顔が熱くなる。ナルトとカカシが兄弟で自分が彼らを見守る母ならば、サスケはサスケが振り返った。心臓が高鳴る。

「よし、こつちに。ん、サクラ？　どうした？」

「ひええっ？　はー、いやつそのつな、なんでもござりません」

深い意味はないのだと自身に言い聞かせながら、サクラは勢いすぎるほどに首を振った。しばらく疑わしそうにしていたサスケだったが、ケチャップをサクラの持つカゴに入れて何事もなく歩き出した。気づくと腕が軽かった。

「何してんだ。行くぞ」

「う、うん」

カゴを片手に振り返るサスケに、サクラはまた顔が熱くなつたのを自覚しながらついて行つた。サスケのもつカゴの中ではケチャップが堂々と存在を主張していて、目線を逸らす。

元いた場所に戻ると、ナルトが「あついたつたばよ」と嬉しげに二人へ駆け寄ってきた。ナルトの手にはお菓子が握られ、カゴに入れようとしてサスケが怒鳴つた。

何勝手にいれてんだ、ウスラトンカチ。別にいいじゃねーか、サスケのケチ。あ、お前つてばうらやましいんだろ。んなわけあるか！　言い合っている一人の光景すら、今のサクラには別のものと重なつて見えてしまう。一度思い浮かべてしまつた想像というのは中々

消えてくれないらしい。それ以上一人を見ないようになると、サクラは床を見つめて歩き出した。

「サクラ、どうかした？」
「べ、別に」

必死に熱を冷まそうとしているサクラの顔を、カカシが腰をかがめて覗きこんできた。驚いて声なき悲鳴を上げた。焦ったままサクラがパクパクと無意味に口を動かしていると、

「顔、赤いよ？」

にじっと笑ったカカシが言った。とつせに「ちょっと暑いだけ」と言い訳する。そつか。あつさり引き下がったカカシは笑みを浮かべたままで、すべて見透しているようだつた。
なんだか悔しくてじとつとカカシを睨んでみたサクラだが、

「いやー、サクラは可愛いね」
「なつ」

あつさりとかわされてしまった。カカシのオムライスにだけタバasco入れようか。半ば本気で考えた。

第四十二回「第七班の日常」（後書き）

きみわたの書き方が分からなくなってしまった。うーむ。なんか違う。

ストックも少なくなってきたため、もしかしたら週一更新無理になるかもしれません。ギリギリまではがんばります>>！

間瀬「こわなつそれば反則だと文句を言った」（前書き）

ちよつと甘い？　かもしれない。

間廳「こきなりそれは反則だと文句を言いたい」

図書館から出ると雨が降っていた。

天気予報を見ていたので雨の準備はバツチシだ。腰のポーチからビニール袋を取り出したサクラは、まず借りた本を濡れないようにしつかりと包む。自分より先に本、という辺りは彼女らしい。

「うん、よし」

それから折りたたみ傘を取り出した。サクラはしつかりと本を抱えたまま器用に傘を差し、首と肩で柄を挟みながらよたよた歩き出した。家はすぐそこだ。

少し借りすぎたかもと後悔しながら歩いていると、

「くわうん

聞き慣れているようで、初めて聞く鳴き声が足元からした。サクラが見下ろすと、よくある『拾って下さい』と書かれたダンボールがぽつんと置いてある。そこに入れられた子犬が一匹、震えながらサクラを見上げていた。

「えつわわつ

数秒バタバタと無意味に足を動かしてから、ハツとして傘を一匹の傍に置いた。空を見上げる。雨は土砂降りではないが傘を差さないといけない、と思うほどには降っていて止む気配はない。天気予報も今日一日雨と告げていた。

どうしよう。

サクラは一匹を見て眉を下げた。子犬たちは濡れた身体をくっつけてなんとか寒さを凌いでいる。ハンカチで拭いてみても、あつという間に濡れて役立たずになつた。だいぶ温かくなつたとはいえ、冷たい雨にさらされてしまつ。特に今日の雨は気温をぐつと下げるらしいので、心配だった。

「ちょっと待つてね」

少し悩んだサクラは慌てて走り始めた。

* * *

「あれ、サクラじゃない？」

「んあ？」

傘を差しながら器用にポテチを食べていたチヨウジがそんなことを言つたのは、「これじゃ外で昼寝できねーなあ」とシカマルが灰色の空を見上げていた時だつた。チヨウジの視線を追いかけるとなるほど。確かにあの頭は間違えようがない。

「何やつてんだ？」

「さあ

いつも準備をしつかりするサクラには珍しく傘を忘れたのか。びしょ濡れで道にしゃがんでいた。決して小降りではない雨が華奢な身体を叩いているのも気にせず、その場を動く気配がない。あのまでは風邪を引くだろ？

めんどくせーけど声かけるか。声をかけずにいて後でイノ怒られ

る方がめんどくせーし。

どこか言い訳じみたことを胸に思い浮かべながらシカマルが口を開いた。

「あ、行っちゃった」

「みてーだな」

「残念だつたね、シカマル」

「んあ？ 何がだよ」

ついとシカマルがチョウジを見ると、彼はまたポテチを食べ始めた。チョウジの小さな目は「シカマルは違うの？」と、笑っていた。まるでシカマルの答えを知っているといいたげだった。

「僕は残念だけどなあ。一緒に帰れたのに」

シカマルは改めて友人のすごさを実感する。

そっぽを向きながら頭をかき、シカマルは先ほどまでサクラがいた場所をちらと見た。そこには定番の文句、『拾つて下さい』と書かれたダンボールと、水色の傘がぽつんと置いてあった。

「まためんどくせー」とを

「でも、らしいよね」

「……まあな」

* * *

「わっちょっそこでブルブルしちゃダメ、なんだよお

サクラの語尾が情けなく下がった。がっくり肩を落とした彼女の前には、あ～すつきりした！と言わんばかりのキラキラした黒い瞳が四つ並んでいた。怒りたいのに怒りがたい日だった。ため息をつく。

「本、しまって置いて良かつた」

ぐちゃぐちゃの泥だらけになつた部屋を見回して、心から思つた。犯人たちは風呂で温まつたらしく、すっかり元気になつて走り回つている。まあ、元気になつたみたいでよかつた。微笑みを浮かべたサクラは子犬たちを呼んだ。

「いりいり、まだ乾いてないからおいで」

「キャンキャン」

大家さんに頼み込んで一時的に犬オーケーになつたとはいえ、元気にはしゃぐ一匹にサクラは少々頭が痛くなつてきた。

というか、今更ながらどうしよう。イノやヒナタに言つたら、絶対怒られるか呆れられるかのどっちか、だよね。また考えなしに行動したの？　と。

一人の様子が思い浮かんだサクラは、うずつといふ顔をした。

「とりあえずトイレとか基本的なこと教えな、くしゅんっ」

考える前に、まずは自分がお風呂に入つた方が良さそうだった。

* * *

「よーし、じゃあ本日はこれでかいさ」

「じゃ先生、サスケ君、ナルトまた明日ね」

カカシが解散と言い終わる前にサクラはいつもの挨拶をして、走り去つていった。ナルトは彼女を一樂のラーメンにでも誘おうと思つていたのだが、声をかける暇もなかつた。

「ちょっとサクラー？ 先生の話を最後まで……俺、なんかしたかな？」

律儀なサクラは、いつも最後までカカシの話を聞いてから綺麗に一礼し、任務を終えるのだが。

今日は一日中気もそぞろで三人への対応も変だつた。カカシ同様ナルトも原因を考えてみるが、サクラに何かした覚えはない。ナルトがサスケへ目をやると同じことを考えていたのか、二人の目があつて思わずいつもの睨み合ひ。

それも長くは続かず、どちらともなく終了となつた。

「」飯おじりと思つたんだけどなあ。お前たちだけじゃ、ヤメとくか

「ふん。お前と飯なんざこいつちから願い下げだ」

「サクラちゃん。俺何かしたなら謝るからつてばよ~」

残された男三人は、がつくりと肩を落とした。

* * *

「はあ？ サクラが変？」

「もうなんだつてばよ。任務中もずっとぼなつとしてるし、なんか眠そうだし」

「あの子が変なのはいつもだけど、それは確かに変ね」

「そつそうだね。へ、へへへへへ変だと想つにあつ」

「ヒナタ、気持ちは分からぬでないでないけど、とりあえず落ち着きなさい。ほら、深呼吸」

友人と久しぶりに甘味処でくつろいでいるとやつてきた黄色いお邪魔虫を眺めながら、はい吸つて～吐いて～、ヒナタを落ち着かせるという偉業を成し遂げたイノは、熟考した。

お邪魔虫、もといナルトが言うには、体調管理をきつかりしているサクラが眠そうで、超が頭に付くほど律儀でマジメなサクラが任務中何度も余所見をし、カカシの言葉を聞き終わる前にさつさと帰つたのだという。それは、たしかに変だつた。ものすげー。

「ねえヒナタどう思」

「お、おこどりしたんだつてばよ、ヒナタ！」

「はややややあ」

「あちやー」

引っ込み思案の友人は、背中をさするというごく普通のナルトの厚意により、ダウンした。いつものことなのにナルトは相変わらず慣れないうで、わたわたしていた。アカデミー時代から繰り返されてきた光景である。ヒナタの将来が非常に心配だ……ああ、今はサクラの話だつた。はあ。どうしてあたしの周りは世話のかかる友人ばかりなのかしら。

イノは誰ともなしに文句を言いたくなつた。

「分かつたわ。何か分かつたら教えてあげる」

「頼むつてばよ」

* * *

「くしゃ んつ」

少しあくびをしたサクラは、両腕の荷物を抱えなおした。定番の噂をされてくる、ところがつだひつか。だとしたら、

「イノカヒナタかな」

齒きながら鍵をドアに差し込んで部屋に入る。途端聞こえてくる
しゃんしゃんとこづ可憐らしさに、サクラは思わず頬が緩んだ。

「ただいま」

この言葉を口に出すのは何年ぶりだろうか。

涙腺が緩みかけたサクラは、足元にじやれよつてきた「匂」を踏まないよう気をつけて部屋に入る。覚悟を決めながら部屋を見渡すが、思つていたほどの惨状はなかつた。ビニールの上に新聞を敷いただけの簡易トイレの位置をすっかり覚えているらしい。一度しか教えていないのに、だ。……あちこち散らかしているのはまだ仕方ないとするにしても。

「賢いね。ちゃんと留守番してたんだ」

荷物をテーブルの上に置いて頭を撫でた。擦り寄つてくる様は「そりでしょ?」と、血漫げに見えた。ふふっとサクラは笑う。

「えーっとトイレの準備して……あ、」飯いるよね。昨日はミルクしかなかつたんだけど……まだミルクでいいのかなあ」

一応犬の本を買ったものの、不安だ。いりこりの上詳しそうな級友の姿が浮かぶが、ヤメた。お互に忙しい身だ。こざとなれば考えよづ。

「後は里親募集のポスターか。何枚ぐらい貼るべきかな。人通りが多いところといえば、斡旋所？貼つてもいいのかな？ポスター作つて明日にでも聞いてみよう。病院なら知り合いで先生に頼めば、たぶん大丈夫だし。図書館もいいかなあ」

ブツブツ呟きながら、サクラはせつせと子犬たちの環境を整え始めた。

* * *

「キバ！ どうせ暇なんだからおつかい頼むよ。子犬一匹、引き取つてきな」「はあつ？」

マンガを読んでいたら突然そんなことを母親に言われ、キバの気分が悪くなるのも仕方ない。彼は母親を睨んだが、母親は忙しそうに身支度を整えていてキバの方など見もしない。

どうやら急な任務が入つたらしい。

「なんでもまたわざわざ」

「将来が優秀そうだったからね。さつさとつば付けとくんだよ」

犬塚家は忍犬と共に任務を行うため、自然と忍犬を育て上げる技術も高い。なので忍犬養育所の運営・管理を里から一任されている。捨て犬の保護も、たとえ忍犬に向かない犬だろうと関係なくしているので、引き取ることはよくある話だ。しかし、わざわざ犬塚の本家が出向くことはない。養育所から職員が行った方が手続きの関係上、早いからだ。

そんな理由からキバが疑問に思うのも無理はないのだが、母親は理由を教える気はないようで一枚の紙を放り投げてきた。

「ほら、住所はここだよ」

「へいへい」

面倒だと思いつつも乱雑に折り込まれた紙を広げたキバは、母親の行動理由を悟った。さつさと任務に向かつた背を見送ることなく、紙を凝視するキバの顔は真剣だった。紙は一枚のポスターであつた。今時珍しく手書きのそれには、クリーム色の毛並みをした愛らしい子犬が一匹描かれている。中々に上手な絵だ。

本当に犬たちが大事なのだと伝わってくる絵だつた。

おそらく母親は子犬よりもこの描き手に興味を抱いたのだろう。キバに行かせるのは、犬塚家と関係をつなげるため。

「しゃあねー。行くか」

「わうん」

キバと目が合つた赤丸が、嬉しそうに鳴いた。

* * *

いつものようにサクラが任務から直帰すると、わんわんという声が玄関で待ち伏せしていた。今日の任務は盜賊退治という少々荒っぽいものでサクラはたいへん疲れていたが、その声を聞いただけで元気になれるのだから不思議だ。

「ただいま」

笑ったサクラが優しく声をかけると、一匹は嬉しそうにその場をぐるぐる回り始めた。ここは玄関であり、一匹が足元で走り回っている。そんなに広くない玄関でそんなことをされると、抱き上げなければサクラは部屋に上がれない。一匹はそれが分かっていて「早く早く」と田でサクラを急かした。

「しようがないね」

しゃがんで腕を広げると、回っていた勢いそのままサクラの胸に飛び込んできた。子犬と言えども、悔れない衝撃がある。う。一瞬うめいたものの、サクラはなんとか踏ん張った。

「ちゃんといい子にしてお留守番してた？」

「わん！」「わうん」

* * *

キバは、ポスターと部屋の前に書かれた表札を何度も交互に見た。

「マジか

ポスターには連絡先が書かれていたものの、肝心の名前がなかつた。書き忘れたのかもしれないし、わざと書かなかつたのかもしれない。書き手の心情やら状況やらをキバは知らないが、もしも書き手が予想通りであるならば十中八九書き忘れたのだろうなと思う。表札には『春野サクラ』と書かれており、同じ名前の人物を、一人だけキバは知っている。

「あん？」

「わあつてるよ」

押さないのかと聞いてくる赤丸に、キバは返事をしてインターホンを押した。部屋の中から「わわつちょ、ちょっと待ってください」という聞き覚えのある声がして、ドタバタと騒がしい音と子犬らしい鳴き声も聞こえた。これは確定だつた。キバの知っている春野サクラがこのポスターの書き手らしい。彼はへえっと思つた。絵が上手いとは知らなかつた。意外だ。

「はいはい、どちらも……あれ、キバ？」

明るい声と共に出てきたサクラは、キバの記憶にある姿とまったく変わらず、とはいかなかつた。

自宅にいたからだろう。ノースリーブの白いシャツに青い短パンというラフな格好をしていた。普段見えない箇所の肌がおしげもなく空氣にされされている。キバの思考が固まつた。

付き合い 자체はそこそこ長いものの、キバは今までサクラに対して異性であることを意識したことはない。たまに話をするクラスメート、優等生のわりに口が結構悪いといった印象だった。

のだが、少し曲線を帶びている身体はキバにはないもので、なんといつてもその肌の白はキバにとつてあまりにも凶悪すぎた。

「キバ？」

声に目線を上げていけば、湿気た桜色の長い髪が少しうねりながら彼女の胸元や肩にかかっている。風呂に入っていたらしい。それでバタバタしていたのかと、キバの思考はどうでもいいものに食いつく。

何もしゃべらないキバの名を、濡れた唇が呼ぶ。赤く染まった頬に、若干潤んだ瞳まで目に入り、こいつは一体誰だ。なんてくだらない疑問が浮かんだ。頭はすぐに答えを出すのだが、心が受け取りを拒否する。キバはひどく混乱していた。それほどに目の前のサクラは普段と違うように見え、自分と同じ生き物には思えなかつた。そうだ。こいつは女だつた。

本人が聞いたら怒るだろうことをキバはようやく理解した。

「あつへん」

頭上から聞こえた赤丸の声でキバは我に返つた。サクラは心配そうにキバを見ていた。なんだかそれ以上見ていられなかつたキバは顔ごと目線を横にずらし、手に持つたポスターを突きつけた。

「お前なあ、住所だけじゃなくて姓ちゃんと名前も書けよな。ってか、お前の家は電話もねえのか？ そろすりやわざわざ俺様が来ることもなかつたのによ」

八つ当たりのように強い口調で言い終わると、キバはちらとサクラを見た。そして、きょととした。翡翠の大きな瞳が、若干ビクリじゃなく潤んでいた。そんなに自分は強い口調だったか。こいつこんなに泣きやすかつたつけ。などが頭に浮かんで、焦つた。

「キバのところが引き取ってくれるのね。わあ、ありがとうー。」「わっおい」

ふにゅと柔らかくて温かいものがキバの身体を包み、耳元で「犬塚家なら安心だわ」という声がして、ぞくりとしたものが背中を駆け巡る。こけるようなことはなかつたものの、キバの混乱は人生で最高潮に達していた。

どうしてこうなつた？　あ、なんかいい匂いがする。やわらけえ。つてそうじやなくて、俺は、俺は……何しに来たんだつけか。えと犬を、犬を、うわ、なんかが胸のことでつぶれて気持ちいい、これつてもしかして、あ、いやちげーよ！　だから俺は犬をだな。

「きやんきやん」

「あつよかつたね、あんたたち。キバの家が引き取ってくれるって

拘束が解かれたのは、部屋の奥からやつてきた小さい影たちのかげだつた。離れてくれた温もりにホッとし、キバは速くなつて心臓をなだめた。

サクラが安心しきつた笑みを浮かべて小犬たちと会話している。犬のことに関して、キバが言うのはあれだが犬塚家以上に頼りになるものはない。だから彼女が喜ぶのも無理はないのだ。と、言い聞かせる。別に自分のことがどうとかではないんだ。

「今日このまま連れて行つた方がいいの？」

「え、ああ、いや。まだこっちの準備できてねえから、引き取りは一週間後ぐらいになると思つぜ。んで、今日は話をつけて、それからちよつと書類の手続きがあつてよ」

「書類？」

「いろいろあつてな。きちんと出さなきゃいけねーんだよ。できたら今日中に手続きだけしたいんだが、いけるか？」

「うん、大丈夫」

説明に頷いた彼女が「じゃ、行こうか」と靴を履こうとしたので、キバは待つたをかけた。

「その前に着替える」

「なんで？」

「なんであつて」

きよとんと不思議そうにするサクラを見て、キバは言葉に詰まる。サクラの格好は別段可笑しくない。もつと露出が高い格好をしているものはたくさんいる。しかし素直に心臓がもたないからだ、などとキバには口が裂けても言えない。どうしたものかと悩んでいると、風が吹いた。この季節には少々冷たい風だった。

「あ、そっか。今日ちょっと寒いもんね」

「…………ああ」

「ふふ、ありがと。ついでに髪も乾かしたいんだけど、時間大丈夫？」

「五時までに行けばいい」

「じゃ、中入つて待つてくれる？ お茶ぐらい出すわよ」

キバが黙つていると上手に命令に勘違いをしてくれたので頷いておいた。

なだめたはずの心臓がまたうるさく騒いでいたことにキバは気づいたものの、静まりそうにないその音がサクラに気づかれないと祈った。

間劇「いきなりそれは反則だと文句を言いたい」（後書き）

忍犬養成について。

どこかで訓練させているのは確実。しかし、特に描写はなかつた（と思う）ので当小説では犬塚家が主に担当している、ということにしました。

カカシみたいに犬塚に関係なく忍犬使つている忍者もいるし。

キバとサクラの関係は、近所に住む悪がきとお姉さん（血のつながりはない）、なイメージです。なんかふと気がついたら近所の姉ちゃんが綺麗になつてた！　みたいな……女の子ってなんで急に綺麗になるんだろ。不思議。

あと、いろんなキャラを頑張つて出そうとして見事に失敗した。だけどあえてそのままに載せてみました。うつとおしいですかねえ。

第四十四劇「すべてはソレのせい」

あの子のために無理をすることはなくなっても、サクラは強くなるための努力をし続けていた。

一体あの子に何があつて磨り減つてしまつたのかを、実のところサクラは覚えていなかつた。それは肉体を持った弊害かもしないし、世界の法則かもしないし、元々知らなかつたのかもしない。それでも強くなろうとしていたことだけは身体が覚えていたので、強くなることに主眼を置いてきた。

今は自分がサクラで、自分の好きに生きいいとあの子は言つた。じゃあ、自分のしたいことはなんだ。自分に問い合わせた時、サクラがしたいことは今までとたいして変わらなかつた。ある人を救う。目的は同じ。対象が変わっただけ。

『待つて、待つて　君！　置いていかないで』

繰り返し繰り返し見る夢があつた。

身体に染み付いた記憶のかけらだらう夢と今までの経験から、あの子が磨り減つた理由にたどり着くのはサクラにとつて簡単であつた。

『待つて、待つてサスケ君！　置いていかないで』

うちは　サスケ。うちは一族ただ一人の生き残りで、実の兄への復讐を生きる目的に掲げている少年。彼を救いたいのだ。

とくん。

彼のことを考えると、サクラは胸が苦しくなつた。彼の近くにいると心臓が速く動いた。彼の笑顔を見ると顔が熱くなつた。

とくん。

苦しくてしんどいのに、気がつくとサクラは彼のことを考えていた。苦しくてしんどいのに、彼の傍にいたいと願ってしまう。

これはなんだろう?

「ありえない

とある一言で説明がついてしまうが、サクラはそれを認めるわけにはいかなかつた。

別段友に気を遣っているわけではない。こんな気遣いをすれば、むしろ怒られる。あの子についても同じく怒ることだらう。

「あむひ

サクラはぎゅっと膝を抱きしめる手に力をこめた。少し離れた場所からはゴオゴオと滝の音が聞こえる。何度も滝から落ちたサクラは全身ずぶぬれで、起こした火の傍に座つていた。だいぶ暖かくなつたとはいえ、川の水は冷たい。荷物の中からバスタオルを取り出して羽織つた。それでも寒くて身体が震えた。

そんな仕草の一つ一つが妙におかしくて、サクラは笑みを浮かべた。

「ふふつこれじゃ本当の人間みたいだ」

自嘲の笑みになつて、余計に凹んだ。

ため息をついたサクラは集めておいた枝を火に放り込み、ぱちぱちと燃えていく様を見つめた。

火は、どうしてもサスケを思い出させる。

以前イノとヒナタは、自分がサスケを好きなのだと勝手に断定した。本当に勝手な話だが、否定しても無駄つぽかったのであいまい

に笑つておいた。サクラはそんなことを思ひ出した。

「本当にありえないよ。私は、サスケ君を追い詰めた原因なの!」

* * *

「三十八度ちょいび。こりや風邪だね」

「……」「めんなさ」「

「謝らなくていいから、ちゃんと寝てなさい。まー、元気になつたら風邪の原因を話してもううナビな」

「う

「やつぱり何が無茶したんだな

呆れた顔をしているカカシからサクラは目を逸らした。最近の淹登りでの疲労、冷たい川の水が風邪を引いた原因なのは疑いようがない。

集合場所でサクラは倒れてしまい、おかげで今日の七班の任務は中止となつた。迷惑をかけたと反省している。

ほ、本当に話さなくちゃ駄目だらうか。絶対怒られそうな気がするからなるべく言つたくない。ああ。カカシの尋問に簡単に引っかかる姿が目に浮かぶに違ひない。

風邪で思考能力落ちていいなあ、とサクラはぼーとする頭で思つたが、周囲の面々にはサクラが健康であつたとしてもあつたり引っかかる姿が目に浮かぶに違ひない。

「このウスラトンカチ！ 粥にマヨネーズかけよつあるんじやねーよ」

「でもよお、サスケ。これじゃ味薄いじゃねーか

「わ・ざ・と、薄くしてんだつひの、ドベー…」
「んだといひあつ」

台所から聞こえる声に、サクラとカカシは顔をあわせて苦笑した。じょうがないねえ。立ち上がったカカシが部屋を出て行く。部屋は静まつたが、台所から聞こえてくる掛け合いはヒートアップし、声だけでなく何かが崩れる音までした。積み重ねていたフライパンや鍋の音かもしれない。カカシ一いつと叫ぶサスケの声がした。

「あつれー？ おかしいな」

「おかしいのはてめえらだ、この家事能力皆無者どもが！ もう後は俺がやるからサクラ見てる」

「ぶーぶー。なんだよ、手伝おつと思つたのに」

申し訳ないはずなのだが、楽しいのはなぜだらう。ダルイ身体をベッドに横たえながらサクラは笑い、苦労しているサスケに思いをはせた。ん……あれ？ もしかして。サクラは重たいまぶたを開閉させ、普段より明らかに動きの悪い頭を必死に回転させる。ズキズキ痛むが、無視をする。

イノやヒナタの言葉に、この前のスーパーでの思いつき、そこに風邪の体調不良が重なつて、サスケに対して身体が変に反応したとか？

考えて、今は特にサスケのことを思つても正常なので、どうもそうらしいとサクラは結論付けた。あんなに悩んで落ちこんだ自分って一体。深い深い安堵の息を吐き出した。

「良かつた」

「ん？ 何がだつてばよ」

やはり風邪で意識が散漫としている。いつナルトが部屋に来たの

かも分からなかつた。不思議そつな、それでいて心配そつな空色の瞳に、サクラはふつと笑つた。

「たまには風邪引くのもいいかなって思ったのよ

第四十四編「すべてはソーンのせ」（後書き）

ストックがなくなりました。どうしよう。

間劇「一ガテ」

そろそろ夏になるかという季節、汗だくになりながらこなした任務の帰りだった。

騒がしい声がないことに気づいたサクラが主な騒がしさの発信源に目を向けると、先ほどまでいたはずの位置にはいなかつた。きょろきょろと探せば、少し後ろで立ち止まっているオレンジ色をすぐ発見した。

「ナルト？ ビビしたの？」

サクラの声にナルトはビクウッと大げさに驚き、勢いよくこちらを振り返った。何か言いたいらしいのだが、口はパクパク動くだけ。しようがない。

息を吸って、吐いて、と声をかけて落ち着かせる。

指示通りに深呼吸を繰り返したナルトは、照れくさそうに「ありがと」と笑い、

「「めん。なんでもないってばよ」

嘘をついた。

「そう」

サクラも笑顔を返しながら、なるほどねと納得していた。あからさまに「なんでもなくない」様子で「なんでもない」と言われるとムカつく。イノやヒナタが怒るのも無理はない。今度からは自分も氣をつけよう。サクラはそんな反省をしてから、ナルトに気づかれ

ないよう彼が見ていた方角へ何気なく視線を向けた。
ど派手なポスターが目に付いた。

* * *

「懐かしいなあ」

紺色の浴衣を見つめ、サクラは目を細めた。
任務の後、ナルトが熱心に見つめていたポスターを確認しに行つた。近くで見るともつとド派手なポスターには打ち上げ花火が描かれていた。夏祭りのPRポスターである。

明るいポスターを見ながら、虚しさが全身を駆け巡つていった。

「言つてくれればいいのに」

祭りに行きたいのだと、はつきり言つてくれればいいのに。そうしたら、

「そうしたら

声が小さくなつていく。そうしたら、なんだろう。自分は頷いた
だろうか。一緒に行こうと言つただろうか。

考えて、サクラは首を横に振つた。きっと行かない。行けない。

「お父さん。お母さん。私は」

紺色の、母が着ていた浴衣を抱きしめた。祭りなど、2人がいなくなつてから一度も行つていなかつた。

イノやヒナタ、他にもサクラを誘ってくれた人たちはいた。きっと行けば楽しかつただろう。分かつた上で、すべて断つていた。怖かつた。

どのぐらこの間じつとしていただろうか。ふう。息をゆっくり吐き出し、浴衣を綺麗にたたんだ。

「『ゴメンね、ナルト。私はやっぱり無理みたい』

タンスの中に浴衣をしまった。

* * *

「それが、よく分からんんだってばよ」

ナルトは困った顔をした。自分を見つめる4つの目が、嘘を言つなど語つていたが、彼には本当に分からなかつた。

ここは喫茶店で、目の前にいるのはイノとヒナタの2人だ。

「でもサクラの様子が変なのはあんたに対してだけでしょ」「それは、そう、だけど」

イノにズバズバと言われてナルトは凹んだ。がくっと肩を落とす。

『ごめんね』

泣きそうな目をしたサクラを思い出す。最近、サクラは気が付くとナルトにそんな目を向けてくる。ナルトにだけ、だ。彼女に何かをした覚えはない。ナルトも悩んでいるのだ。

「でもイノちゃん。ナルト君、本当に覚えがないみたい」

「まあそうね。ここにそんな高等演技が出来るはずないし」

なんとか2人の目線が弱まつたことで、ナルトはようやく肩から力を抜いた。

「やっぱりあれかな」

「ん~。と、思うけどいつもはこんなに浮き沈みしないでしょ。ナルトだけが関係してるとも変だし」

「そうだけど」

どうしたものか。考えようとしたら、2人はなにやら話し始める。心当たりがあるらしい。オレンジジュースを飲みながら、ナルトは耳を傾ける。

あれってなんだ？

「ねえ、ナルト。あんた、まさかあの子を祭りに誘つた？」
「うえつ？」

再び向けられた目と質問に、声が裏返つた。誘おうと考えてはいたものの、まだ行動には移せていなかつた。心が見透かされたのかと、ナルトはイノを見た。イノは呆れた顔をしていた。

「誘つたのね」

「い、いや、その、まだ」

ナルトの語尾が情けなくも小さくなつていく。まだ誘えていないことが、なんだか恥ずかしかつたのだ。
しかし2人は、「あれ？」と首をかしげた。

「違うんだ。じゃあ、なんだろ」「でもヒナタ。他に思い至ることある?」

様子が変だ。どうも思い至る原因が違つたらしい。ナルトは首を傾げて悩んだ後、意を決して話しかけた。

「一体祭りがどうしたんだってば」

ピタリと2人の会話が止まつた。イノが息を吐き出した。

「あの子ね。祭りが苦手なのよ」

「え?」

「祭りが、というか……なんていうの?」

「えーっと行事、かな。クリスマスとかお正月とか」

ナルトは目を大きく開いた。彼にとつて行事は憧れだ。だから苦手、の意味が理解できない。イノもヒナタも、どこか悲しそうな顔をしてうつむいた。2人はしばらく何も喋らなかつた。ナルトも空氣に呑まれて口を閉じた。

先に顔を上げたのは、イノだった。

「あんた、サクラを祭りに誘いなさい」

「え? でも今」

「いいから、さつとと行く! それでも男なの? あんたは」

話の流れをナルトは理解できなかつた。無理に祭りへ誘い、彼女に嫌な思いはさせたくない。しかし2人の顔が真剣そのものだつたから、きっと誘うべきなのだろうとナルトは思った。財布を出して、お金をテーブルに置いた。

「分かつたつてばよ。行つてくる」

どんな風に誘えればいいだらうか。必死に考えながら彼女の家へと急いだ。

* * *

「良かつたの？ イノちゃん」

ナルトの背中を見送っていたヒナタが、優しく聞いた。イノは口ツブを見つめていた。溶けた氷がからんと音を立てて崩れた。

「あんたこそ良かつたの？ ナルトのこと、好きなんでしょう？」

意地悪なことを聞いた。思いつつ、イノは膝の上で拳を握った。ヒナタは苦笑した。

「イノちゃんは意地悪だね」

「あら、知らなかつたの？」

「……ほんとに意地悪」

いつものやり取りをして心が落ちついたイノは、拳から力を抜いた。手のひらがズキズキする。ツメの跡がついているかもしねりない。

「たしかに悔しいけど、あたしじゃ無理なんだもの。仕方ないじゃない」

「そ、うだね。私たちじゃ無理なんだよね」

ため息と共に言葉を吐き出した。ヒナタが頷く。

サクラは、昔からナルト（あいつ）に弱いから。

「あ。賭けしてみる？ ナルトがサクラを誘えるかどうか」

「それ、賭けにならないよ」

「たしかにそうねえ。じゃあ、『ナルトがサクラと二人きりで祭りに行けるかどうか』は？」

「……それも賭けにならないよ、イノちゃん」

呆れた顔のヒナタに、イノは明るい笑顔で「それもそうね」と言った。

間劇「一ガト」（後書き）

更新再開一発目が本編じゃないってどうこういつつ！

と、自分で自分にツッコム。

しかもこの話、後編っぽいものへと続いてたり……（汗）。

夏祭りはとっくにおわッてますが、結構前に書いていたお話で、
本編ストックがないため代行として掲載。

余裕があれば来週に本編とこの続きをアップしますが、あまり期待はされない方が……。

とりあえずみなさん、ただいま戻りました！

間劇「同じものなど存在しない」

不思議だ。

サクラは思いながら夜空に咲く花を見上げていた。パラパラと音を立てて咲き、枯れていく花々はとても綺麗だった。

「うはーっすっぴえってばよー、ね、サクラちゃん」

「ええ、そうね」

隣で大口開けて空を見上げていたナルトが、にかつと笑った。彼が身につけているのはオレンジの上下ではなく、白に近い灰色の浴衣だ。てっきりオレンジ色を着ると思っていたので意外だった。そんな彼の手には金魚の入った袋がぶら下がっている。金魚すくいでサクラがとつてあげたものだ。

また花火をぽかんと見始めたナルトの横顔を見て、不思議だと、サクラはもう一度思った。自分の身体を見下ろせば紺色の浴衣がある。一生この浴衣に袖を通すことはないだろうと思つていた。だから、彼女は不思議だった。

* * *

「俺に思い出をください」

鼻息荒くサクラの家にやつてきたナルトは、そんなことを言つた。意味が分からなかつた。不思議そうな翡翠の瞳に、ナルトも急ぎすぎたことに気がついたらしい。言葉を続けた。

「えーっとつまり、い、一緒に夏祭りへ行きませんか？」

ナルトの声は段々と小さくなつていった。青い瞳が不安そうに揺れている。唐突な誘いだった。でも、彼の行動はいつも唐突だ。サクラは、

「うん、分かった。

考える前に頷いてしまった。今まで誰の誘いも断り続けていたといつのに、だ。

サクラは祭りが大好きだ。祭りだけでなく、行事も大好きだ。そこには両親との思い出が良いことも悪いこともたくさん詰まっている。目には見えないサクラの宝物だ。

そんな大事な大事な宝物の上に、新しい思い出を積み上げたくなかった。

「ホントっ？ やつたーつてばよ」

頷いたことに気づいたのは、ナルトが大声で喜んだ時で、サクラは自分が何を言ったのか信じられなかつた。サクラはイノやヒナタの誘いですらずつと断つていたのだ。なぜナルトには頷いてしまつたのだろう。理由はよく分からなかつた。

一度行くといつてしまつた以上、約束を破るわけにも行かなかつたサクラは、懐かしい母の浴衣を着た。着付けはできなかつたのでヒナタの家に3人集まつて互いを着飾つた。それだけのことが想像していた以上にサクラは楽しかつた。イノもヒナタも楽しそうに笑つていた。

イノは赤地にピンクの花が描かれた少々派手だが可愛らしい浴衣を。ヒナタは女の子らしさの中にどこか気品もある紫色の浴衣を。サクラは落ち着いた紺色の浴衣をそれぞれ身につけ、里を歩く。行きかう人々も浴衣を着ていた。里中が随分と華やかで、祭りの最中

はこんな感じだったのかと初めてサクラは知った。

待ち合わせ場所に着くと、すでに男の子たちはそろっていた。すでに出店でたくさんの食べ物を買って食べているものもいた。誰とは言わない。

「お待たせー。どうどう、色々いじょー、つづきやー、サスケ君すつじく似合つてる」

「う、うめんね。待たせちゃう」

「ちよつと2人とも、今日ぐらこは仲良くなれことよ」

楽しい祭り会場前で睨みあつてゐるナルトとサスケにサクラは呆れた。2人も浴衣を着ていた。ナルトは薄い灰色で「じゅわ」「じゅわ」とした模様が濃い青で入つてゐる。サスケは黒の無地だつた。両極端な2人だ。

2人は不機嫌な顔のままサクラたちを見て、固まつた。ようこそサクラには見えた。

「へ、変、かな？」

イノやヒナタに褒められて少し自信がついていた。しかしじうもナルトとサスケの様子は可笑しく、サクラの自信があつけなくしほんだ。今日のイノとヒナタはいつも以上に可愛らしいので余計みすぼらしいかもしれない。この浴衣も母が着ると綺麗だつたが今着ているのは自分だ。

うなだれたサクラを見て、イノとヒナタが田元をきつくした。男たちがひるんだ。

「ざざつざざんそんなことないつてばよ。ひとつでもサクラちゃんに似合つてる。な？」サスケ

「う……まあ、変ではない」

顔を上げたサクラは、必死な様子の2人を見て、口元に手を当てて「ありがとう」と笑った。

会場前での一悶着は無事収束し、いよいよ祭りの会場に一步を踏み入れる。サクラは妙にその一歩が緊張した。踏み越えた瞬間思わず目をつむってしまったほどだ。ナルトが怪訝そうにサクラを呼んだ声で目を開ける。世界は、何も変わらずにそこにあった。

当たり前だ。当たり前なのだが、サクラはとても安心した。

「なんでもないのよ」

「うーん？ あ！ 金魚すくいだ。俺やつていい？」

「ふん。お前にすぐわれる金魚なんかいるのか？」

「なんだとサスケっ。よーし、じゃあ勝負だ」

金魚すくい1つでも喧嘩するのか。めんどくせーやつらだ。

と同行者の1人が呟いた。勝負、の一言に混じる騒がしいのもいた。金魚すくいについてうんちくを語るものもいた。金魚すくいの一角がやたらと賑わう。

勝負を制したのは、サクラだった。

彼女としては、別段勝負に参加したつもりはない。ヒナタに誘われて男3人とは離れた場所で静かに楽しんでいたらナルトたちに見つかり、サクラの器内で泳ぐ金魚を見て3人が勝手に落ち込んだ。なんだかサクラは申し訳ない気分になった。

「情けないわね、あんたたち」

「ん？」

あまりにも落ち込みがひどかったナルトにサクラが金魚を渡していると、イノのそんな声がした。駆け寄っていく。
何をしているのか。

浴衣だとうに相変わらずのサングラスをつけた人物に聞く。イノたちが集まっているのは射的の出店だった。そこに並んだ景品に大きなウサギのヌイグルミがあり、どうもあのヌイグルミをイノが欲しい、とねだったのが始まりらしい。ほぼ無理やり挑戦させられた彼女のチームメイトは、ヌイグルミを落とせなかつた。他のものも挑戦してみたが無理だった。

たしかに、あそこまで大きなヌイグルミを、軽いコルクの弾で落とすのは難しい。

冷静に観察していたサクラの田と、イノの田があつた。イノがにやつと笑い、サクラは嫌な予感がした。

「サクラー、あれ取つて」

まるで語尾にハートマークがついているかのような、可愛らしい口調での命令だった。拒否権などは存在しない。

ため息をついたサクラは、苦笑しながら射的の店主にお金を払う。くれた弾は3発 どうやら忍びは3発で、一般人は5発らしいで、持つて見ると予想以上に軽い。これは1発では落とせないなと分かった。視線を弾から標的へと変える。形を立体で捉え、重心、狙うべき箇所、タイミングを計算する。落とせるだろうが、問題は銃えものに慣れていないことか。

後ろから絶対無理だという声がする中、サクラは銃にコルクを詰めてまず1発打ち込んだ。

おお。

そんな歓声に耳を貸さずに素早く弾を詰める。ヌイグルミは前後に揺れていた。タイミングを計り、ぐらりとヌイグルミが後ろに倒れ掛けた時にもう1発放つ。弾はヌイグルミの額へ見事に命中した。

ウサギのヌイグルミは、その駄目押しの1発で完全にバランスを崩し、ゆっくり後ろに倒れていった。

無事に大役をこなしたサクラは息を吐き出して、振り返る。

「で、ヒナタは何がほしいの？」

突然声をかけられたことにヒナタは驚いていた。
どうして。

小さく咳かれて苦笑しかけてこない。先ほどからヒナタは胸の前で指を組んでいた。何か言いたいことがある時彼女の癖だった。

「えっとあのね。アレが欲しいな」

恥かしそうにヒナタが指差したのは桃色の髪飾りだつた。小さな花の形をした髪飾りは、たしかにヒナタに良く似合つだろう。とても小さい髪飾りの入つた箱を、サクラは簡単に射抜いて倒した。

「ありがとサクラ
「ありがとうサクラちゃん」
「どういたしまして」

和やかな会話をするサクラたちの後ろでズーンと沈んでいるものが数名いた。

「だから最初からサクラに任せとけつたんだよ、俺は」「そうだな。なぜなら、サクラの射撃技術は俺たちの中で1番だからだ」「ほんとすいよねえ。あ！　おじちゃん、焼きそばうつ」

そんな数名に止めを刺すものもまた、数名いた。

「私、また何かしちやつた？」

「別にあんなの気にしなくていいわよ」

「サクラちゃんはかつこーいなあ」

祭りの時間はわいわいと騒ぎながら過ぎていった。

* * *

ついさきほどまでの時間を思い出し、やつぱりサクラは不思議だと思った。過ぎてみれば怖がっていたものは何一つなかつた。両親との思い出は、みんなと過ごした思い出とは別の場所に堂々と居座つていた。消えるそぶりはまったくない。

一心不乱に花火を追いかけている青い瞳をしばらく見てから、サクラも目線を花火へ戻す。

『ほらサクラ、よく見えるだろ?』

『うん! とっても綺麗』

『ちゃんとお父さんに捕まつてるのよ』

『はーい』

『サクラちゃん、綺麗だね』

『そうね』

『キバもたまには役立つわね。こんな良い場所知つてるなんて』

『『たまには』が余計だつつの』

『いい昼寝場所だな』

『ここでお菓子食べるの気持ちよそいつだねえ』

『ふむ。虫たちも喜んでいる』

『まあ悪くない』

「なーにが『悪くない』だよ。スカシヤロウ」

「ああ？ なんだよドベ」

「2人とも仲良く、ね？」

「はい」「はい！」

楽しい思い出がサクラの中に積もっていく。どれ一つとして同じものはなく、サクラの新たな宝物となっていく。

闇黙「回しものない存在しない」（後書き）

忍者と一般人の差。

かなりあると思つたんですよね。チャクラが使えるか使えないかつてのは。

なので、両者が同じ土台で戦つてはダメだろうとこいつとで、屋上でねそういうハンデがつけられてこる、としてみました。ただ上忍の場合は景品なしごらこにしないこと、屋台の人たち涙田だよね、と懸念。

ナルトとのお話、を描くはずがこつの間にかサクラの両親との話しだ。あれー？

といつあえず次回は本編です。お楽しみに。

木の葉の里は、かなり大きな街である。そこに住む人数も多く、当たり前のように賑やかとなる。

だが一年のうち、とある日が迫ると途端に静まってしまう。

彼女はとある日が嫌いだった。里の雰囲気が嫌いだった。

自己紹介で嫌いなものがとつさに出てこなかつた彼女だが、これからはハツキリ『とある日の里の雰囲気が嫌い』と言おうかと考へて、ヤメた。そんなことを言つてしまえば傷つく少年がいた。少年が傷つくのは嫌だつた。

毎年毎年。そのとある日が近づくにしたがつて、いつも元気な少年がいつも俯いて歩いているのをいつも見ていた。そんな少年を見下ろす大人たちが嫌いだった。見ているしか出来ない自分が大嫌いだつた。

考えてみれば、嫌いなものなど結構たくさんある。

苦笑した彼女は、すぐに表情を引き締めた。

【とある日が嫌いだつた彼と、とある日が嫌いな彼女の話】

良くも悪くもいつだつて騒がしい木の葉の里が、とある日に近づくとしんとなる。

とある日とは、十月十日。

里を九尾と呼ばれる強大な化け狐が襲い、大きな被害を与えた日だつた。

十月になると誰もが大声で笑うこと控え始める。豪勢な食事、

贅沢をすることを控え始める。そして、いつも以上に彼を見る田が冷たくなり、ささやく声が大きくなる。

「ほりあのナよ」

「なんであんなやつがのうと生きてるんだ」

「三代目もどうして」

「殺してしまえばいいものを」

子供に投げかけるにはあまりにも残酷な言葉の数々を、彼は無言でその身に受け続けた。彼がその日を嫌いになるのは当然だつたらう。

しかし同時にちょっとぴり楽しみでもあった。

毎年その日には、彼の部屋のドアにビニール袋がかけられる。袋を覗けば、中にはショートケーキと小さな箱が入つていて、箱の上には「誕生日おめでとう」と書かれたカードがちょっと乗つている。送り主の名前は書かれてなくとも、彼の字とは比べるのが失礼なほど綺麗に書かれた文字には、見覚えがありすぎた。

送り主の少女が自分の境遇に関して不満を持つているのを、彼は知っていた。街中ですれ違えば声をかけようとしているのを、知っていた。堂々と誕生日を祝おうとしてくれているのを、知っていた。そのすべてを拒絶した。自分と一緒にいたら少女まであの視線と言葉を浴びてしまう。そう思えば、一人でいる方が気楽だったのだ。とはいっても、やはり祝つてくれると嬉しい。

だから彼はその日が嫌いだが、今年はどんなケーキなどどんなプレゼントなのだろうと想像して、その日が来るのを楽しみにしていた。

* * *

彼女は聴かつた。だから、なぜ少年を見る里の人間が冷たいのかを多少は理解できた。……納得してはいないが。

波の国で聞いた獣の咆哮。

強大な何かが、少年の中にいるのは間違いなかつた。では一体何がいるのか。

考えた時、里の大人たちが『その日』に特別冷たい目をすることや、少年の生年月日が頭を横切り、答えは簡単に導けた。十二年ほど前に里を襲つたという九尾の狐が、少年の中にいる。九尾の狐とは尾獸と呼ばれる人知を超えた存在の一つで、莫大なチャクラの塊だ。一尾から九尾まで存在が確認されている。欲深い人はこの力をなんとか我が物にしようと知恵を絞り、人間の身体に封印することに成功した。尾獸を封印された器の人間に『人柱力』などと名前までつけて。

話がずれてしまった。

つまり里に住む一定以上の大人たちは、少年の中に『九尾の狐』がいることを知っている。だからこそ『仇』かたきを見る冷たい目を少年に向けるのだ。

「失った悲しみ、怒り、憎しみのはけ口。人にとって必要なものだとは分かるけれど」

あの目は嫌いだ。

彼女は思うし、あの目をする人たちも、あの目を止めない自分を含めた人たちも嫌いだ。かといって里のものを憎むことも否定することも彼女には出来ない。少年があの目に傷ついていると知つてはながら、彼女にはそんな愚かしい一面ですら愛しいのだ。どうしようもなく。それは本能とも呼べるもので、彼女自身に抗う術はなかつた。

気づくと、毎年ビニール袋をドアノブに引っ掛けている自分がい

た。

無意識に感じていた罪悪感からだらつか。違うのだと思いたいのに、彼女はカードに名前を書くことが出来ない。意気地のない自分にほとほと呆れつつ、今年こそ… と気合を入れていた。

だから彼女はその日が嫌いだったが、今年はどんなケーキを作つてどんなプレゼントを贈ろうかと考え、その日を迎える準備をしていた。

* * *

今年は、彼にとつて特別だった。

自分の中にある化け物のことを知った年。化け物が中にあることを知った上で、恩師が自分を認めてくれた年。念願の忍びになつて、しかも好きな少女と同じ班になつた年。ムカつくけれど頼りになる仲間が初めてできた年。いつも以上に期待してしまるのは、仕方なかつた。

だが最近、どうも少女の様子がオカシイ。

「さつくらちゃん、おはよう!」

「ほあつー!」

「ほあ?」

「おおお、おはよつー

ぼうつとすることが多くなつた。任務中まで何か考えている。考えながら身体が動いているのがマジメなこの少女らしそぎて笑えた。この少女。任務中は相手の嘘を見抜いたり演技することもできるというのに、普段は嘘がつけないし嘘が見破れないし隠し事がまったく出来ないのである。スイッチでもあるかのように、任務中と普

段ではまるで違つた顔を持っていた。

挙動不審な様子は彼でなくとも何か隠しているのが丸分かりで、何を隠しているのかはスカしたチームメイトや、飽きもせずに年齢制限本を堂々と読み歩く上司の態度を見れば、頭を使うのが苦手な彼にも分かった。

とはいっても、チームメイトはたしかに最初こそ変な対応をしていたが、あまりにも少女の態度がバレバレなために隠すのをやめて堂々としているし、上司はほとんど普段と変わらない。違うところは、田がいつも以上に柔らかいことぐらいか。

ブツブツ呟いて、あっと声を上げて、ふふと嬉しそうに笑つて、時折不安そうにして、少女は彼以外のチームメイトと何かをやっていった。

『あの態度で気づかれてないと思つてるんだもんなあ』

たまにわざとやっているのではと思うが、少女はどうじまでも本気で、そんな少女を見ているだけでも彼は楽しかった。

さあ、気づいていないフリをして、迎えよう。嘘をつくのは得意だ。昔から自分自身にすら嘘をついて、楽しくもないのに笑つて過ごしてきた。

彼は「ああでも」と思った。きっと、いや絶対。その田に自分が嘘をつくことはない。心から少女に驚きと、喜びと、感謝を伝えられるに違いないから。

「よお、ナルト。久しぶりに一緒に食べに行かないか?」

当日、任務後あっさり解散してしまつて彼が肩透かしを食いつ正在ると、大好きで心から尊敬している恩師が声をかけてきた。自分の勘違いだろうか、と悩んでいた彼はその誘いに乗つた。恩師は「一楽に行かないか?」とは言わなかつた。

連れられていったのは、里の外れ。立派な平屋の屋敷が並ぶ一角だった。

「機嫌な様子の恩師が先導して門をくぐり、しかし玄関の前で彼にその場を譲った。唐突に彼は緊張し始めた。唾を飲み込んでいたと、恩師が「ほら、ナルト」と背中を押してくれた。彼は意を決して引き戸を開けた。パンパンッと耳どころか心臓に響く音がして、火薬の匂いが鼻をつき、彼の金色の髪にきらきらした細長い紙がまとわりついた。田が熱いと思うのはびっくりしたからだ、と彼は自分で言い訳した。

田の前には小さいローンのようなものを持って笑っている上司と、無理やり持たされたのか嫌そうな顔をしている（でもどこか照れているような）チームメイト。それから、

「誕生日おめでとう、ナルト！」

満面の笑みを浮かべた少女がいた。だから彼は心からの驚きと喜びと、感謝を込めて笑った。

閻禰「ひかる田」（後書き）

私事により更新が遅れました。すみません。

えつと拍手にてメッセージをいただきました。そろそろ試験に入ります。今回の話を載せるに当たって、なるべく時系列順に載せたいな、と焦り、固執してしまっていたと気づきました。

なので次回から新章に突入します。短編などは思いつき次第、第三幕に載せようと思っています。

いつも拍手＆メッセージありがとうございます。励みになつてます。どうかこれからもよろしくお願いします。

第四十五劇「一年と二ヶ月」

サクラはいつもの集合場所で分厚い本を読んでいた。表紙には忍具大全とあり、中にはたくさんの忍具が紹介されている。真剣に読書している彼女から少し離れたところではサスケが巻物を広げ、やはり真剣に読んでいた。どうせ今日も上司は遅いに違いない。1年以上、彼の元で任務をこなしている2人には簡単に想像がついた。

そう。彼女たちが忍びになつてもう1年が経つ。あまり変わらなかつた2人の体格には、差が現れ始めていた。身長はサスケの方がより高くがつしりと。サクラは身体が丸みを帯びて女性らしくなつていた。元々長かつた髪は腰の位置まで伸びていた。

「さつくらちやん、おはよー！」

「おはよー、ナルト」

元気よくそこに飛び込んできたのは金髪にオレンジの上下を着た少年、ナルト。彼も多少身長が伸びたようだが、3人の中では1番低いままだ。悩みがなさそうな彼も、身長については密かに悩んでいた。

もちろん彼らが変わったのは身長だけではない。今ではJランクを任せられBランクも数度こなした。様々な経験をし、忍者として身も心も成長している。

ギヤー、ギヤーと騒がしいナルトも一見変わっていないようで、ちゃんと成長しているのだ。……たぶん。

「やあ諸君、おはよー。今日はま

「ああーっ先生！　来るの早いつでばよ

「ちっ」

「やつた。また私の勝ちね

ようやくやって来たカカシに対してナルトは大声で悔しがり、サスケは舌打ちし、サクラは喜んだ。ごちそうさま、と2人にサクラが言つたのを考えると……どうやらカカシが何時に来るかで賭け（夕食をおじる）をしていたらしい。なるほど。たしかに成長している。

お前らな。眩いたカカシの背が、それはそれは悲しげだった。

* * *

今日の任務は崖に生えている薬草の採取だつた。危険な場所なのでJランク任務として7班に回ってきた。

途中、調子に乗ったナルトが崖から落ちかけたのをサクラとサスケがフォローしつつ、任務は無事に終わる。……やはりナルトは成長していないかもしない。

4人揃つて歩いていると空を鳥が横切つていつた。カカシとサクラが見上げる。ぴーひょると元気よく鳥が鳴く。

「さてと、俺はこれから任務の報告書を提出せにゃならんし、解散にするか」

カカシがそう言つて部下を振り返ると、サクラたちはこの後何を食べるかで話し合つていた。カカシの話など聞いてない。いや、聞いてはいるのだろうが自分の方を向いてくれない。昔は素直で可愛かったのにな。カカシはそろそろ本氣で泣きそうになつた。

いいもんいいもん、どーせ俺なんて。泣く代わりにちよつとすねた。

「『』めんつて先生。また明日ね

「ああ、気をつけて帰れよ」

「先生それ、忍者に言ひことじじゃねーってばよ」

「ふん」

瞬身の術によつてその場から力カシはいなくなつた。驚くことなく3人は歩き出す。任務終わり、一緒にご飯を吃るのが彼らの日常に組み込まれていた。「一樂にしようぜ」「またラーメンかよ」「昨日も行つたじやないの。もちろん美味しいけど」楽しげに歩いている彼らの後を、四角い箱がついていく。

3人は同時に足を止めて箱を振り返つた。箱はびびつたように動きを止める。サクラは苦笑してチームメイトたちをうかがう。サスケは目を瞑つて眉をひくつかせ、ナルトはなんともいえない顔で箱を見下ろしていた。

箱は縦に細長く、表面には岩のような模様が描かれ、先頭部分に二つの穴が空けられたそれは、どうやら岩のつもりらしい。どう見ても四角い箱だつたが。

見て見ぬフリをしようか。サクラが思つたとき、ナルトが箱を指差した。

「そんな真四角で適度な穴が開いた岩があるか！ バレバレだッつーの」

「さすが俺の見込んだ男。俺のライバルだな、これ」

箱がしゃべつた。

サスケが「こんな茶番に付き合つてられるか」舌打ちしてその場を離れようとしたのを、サクラが小声でなだめる。「賭けで負けたよね？ もしかしてサスケ君逃げるの？ ……なだめるというよりも、脅しの方が正しかった。サスケは無言で足を止めた。彼の顔は若干と言わば、青白かった。

そんな2人はさておき、箱が飛び上がり中から3つの影が現れる。

「大人のお色気。くのいち年長組、モエギ」

「因数分解大好き。ウドン」

「里一番の天才忍者。木の葉丸」

「3人合わせて木の葉丸軍団、参上！」

箱から出でてきたのはサクラたちより幼い子供で、それぞれがボーズを決めた。アカデミーの後輩たちだ。

紅一点のモエギは明るい茶色の髪を2つに分け、高い位置でくくつている。服は女の子らしく暖色でまとめてあつた。3人の中で一番しつかりしている。

ウドンと名乗った少年はメガネをかけていて、髪はこげ茶で短い。全体にぬぼーっとした空気を漂わせている。母性がくすぐられると一部から評判だ。

そして3人のリーダー格である木の葉丸^{このはまる}はツインツイン尖つた黒髪で、雰囲気が少しナルトと似ていた。特徴は首に巻いた長すぎるほどのが襟巻き（深緑色）。彼は3代目火影、猿飛^{さるねい}ヒルゼンの孫である。ナルトのことを慕つており、ことあるごとにこうしてちよっかいを出してくるのだ。

3人に共通しているのは、頭にゴーグルをつけていることだろう。お揃いらしいゴーグルは、昔ナルトがつけていたものによく似ていた。

「やつぱお前らか。で、今度はなんだ」

「なんだって……兄ちゃん最近反応が冷たいぞ、コレー！」

「ねえリーダー！ これから暇？」

騒ぐ木の葉丸をおしのけ、モエギがナルト モエギとウドンか

らはリーダーと呼ばれている に問いかけた。ナルトは困ったように振り返ってサクラたちを振り返る。これから遅い昼飯を食べに行くところだつた。食べた後はそのまま修行に入り、というのがいつもの流れだ。ナルトは頬を指で搔いた。

「んー、俺はこれから忙しいんだってばよ」

「えーっ！ 今日は俺たちと忍者！」としてくれるつて約束してた
じゃんよ」

「そ、そうだったか。えっと」

もう一度サクラたちを振り返ったナルトに、サクラは笑つて「私たちのことは気にしないで行つてきなさい」と言った。「そういうことじゃない」思いながらナルトがサスケを見ると、鼻で笑われた。

「サスケ、おま」

「みんな！ ナルトをよろしくね」

「うん。リーダーのことはモエギたちに任せてね、サクラお姉ちゃん」

「いいってさ。ほら兄ちゃん、行こうぜ」

「コラ引つ張るなつて！ も、サクラちゃん」

木の葉丸たちは嬉しそうに歓声を上げ、ナルトを引っ張つていく。そんな彼らをサクラは優しい目で見ていた。……木の葉丸が誰かにぶつかるまでは。

「いたつ」

「あ？ なんだクソがき。イテーじゃん」

「うあ」

「木の葉丸！」

全身を黒で包んだ少年だつた。頭巾まで黒色で統一している彼は、おそらくサクラたちよりも年上だらう。少年は独特の化粧を顔にしており、鋭い目つきと相まって木の葉丸に恐怖を与えた。少年が木の葉丸の胸倉を掴んで楽々と持ち上げる。木の葉丸が苦しみで顔をしかめた。

「カンクロウ、止めときなつて。後でどうやされんよ」

少年 カンクロウの連れらしい金髪の少女（カンクロウと同じ少し上）が辺りを警戒しつつ言った。

「いいだろテマリ。つるさいのが来る前にちょっと遊んでみたいじゃん」

手に力をこめたのか、木の葉丸がうめいた。

「その手を離しなさい！」

サクラは大きな声を出しながら木の葉丸に駆け寄る。カンクロウは口元だけで笑い、木の葉丸を投げた。サクラとは真逆へと投げられた木の葉丸だったが、なんとかナルトが受け止めた。ケガはなさそうで、サクラはふつと息を吐いてからカンクロウへ目線を戻す。睨み付けてくるサクラの目などまったく意に介さず、彼はサクラを上から下まで眺めた。彼の唇がゆがむ。

「へえ、中々可愛いじやん」

「……は？」

予想外の言葉にサクラが気を抜いた。その隙にカンクロウは彼女との間を詰め、細いあごに手をかけた。

いや、かけようとした。

彼は痛みで軽く手を押さえる。血は流れていない。一体何が思つた彼の目が地面を転がつている石をとらえた。

「よそんちの里で何してんだ、てめえは」

片手で石をもてあそんでいるサスケが目つき鋭くカンクロウを睨みつけた。その気迫に一瞬押されたカンクロウは、舌打ちして睨み返した。「むかつくガキがもう1匹」言いながら肩にかけた紐を握りしめる。サスケは持っていた石を握りつぶし、言い放つ。

「うせる」

「ふん。俺はお前みたいな子ぶつたガキが一番嫌いなんだよ」「おいつカラスまで使う氣か。止めときなつて」

テマリがいさめるも、カンクロウは背負つている大きな包みを地面に置いた。サスケもまた戦闘態勢にはいる。2人の緊張がピークに達した。

「止める、カンクロウ　　里の面汚しめ」

落ち着いた、落ち着きすぎた声が2人の熱を冷ました。

サスケが慌てて振り向くと、赤毛の少年が腕を組んで立っていた。誰も彼の気配にまったく気づいていなかつた。赤毛の少年はサクラたちと変わらない年に見えたが、雰囲気はずいぶんと大人びている。目元にはひどいクマがあり、大きなひょうたんを背負つていた。なんとも不思議な少年だ。

サスケと向き合つてていたカンクロウが、彼の名前を呼んだ。我愛羅^{わいら}と。

カンクロウも連れのテマリも、自身より年下の我愛羅に対しても強

氣な態度は取れないようだ。どうか異常なほどに怯えを見せていい。我愛羅は2人の様子を気にせず木の葉丸に謝っていた。礼儀正しい少年のようだ。特に怯える要素が見えない。サクラが首をかしげていると我愛羅と目があい、彼女は言葉を失った。

瞳の奥には諦めの色が見えた。

「……名はなんといつ？」

「えっ？ とと、サクラ。春野サクラ、です」

「つちはサスケに春野サクラか。覚えておこつ」

いつの間にかサスケとは互いに名乗りあつていたらしい。我愛羅、砂漠の我愛羅と名乗つた彼はカソクロウとテマリを引き連れて去つて行つた。ナルトが「なんで俺だけ」名前を聞かれなかつたので落ち込んでいた。

サクラたちが下忍になつてから1年。何かが始まろうとしていた。

第四十五劇「一年といづ歳月」（後書き）

名前表記について

人物の名前はカタカタで統一してたのですが、木の葉丸はカタカナにするとなんかイメージ違つたので漢字で通します。我愛羅ガアラについても同様。

サクラの髪の長さについて。

元は肩を越したぐらいのイメージでした。原作と違うかもしだせんが、ご容赦ください。

カンクロウをナンパ師にしてすみません。なんとかサクラを絡めようとしたらこうなりました。

それと拍手、いつもありがとうございます。ちゃんと読ませていただいております。なにやらサクラを気に入つていただけているようで、私の励みです。拍手にはお礼としてキャラの掛け合い、みたいなのが載せてあるのですが、必要ですか？ 不必要ですか？ 教えていただければ助かります。

ちまちま進んでますが、またよろしくお願ひします。

第四十六劇「再会」

「やあ諸君、おはよう。今日は」

「人生という道にでも迷つたんですか？」

「あ、あははは。さすがサクラ。よく分かつてゐるね」

縁の光が冷たくカカシに注がれる。彼は乾いた笑い声でごまかした。

今日は任務のない日だというのにサクラたち7班は、カカシから呼び出された。慌ててサクラたちがいつもの集合場所についてから、3時間が経過している。サクラが怒るのも無理はない。もちろんナルトとサスケも怒つてはいたが、サクラの迫力に呑まれて何も言えないようだ。

「ま、それはさておき」

「おいくくなつてば」

「じほん！ お前らを中忍選抜試験に推薦しといったから。ほい、こ
れ志願書な」

カカシから渡された手のひらほどの紙を3人は見つめる。彼らの頭には、先日に出会つた砂隠れ（風の国にある隠れ里。すながくれ）の忍び、我愛羅があいたちが思い浮かんでいた。通常、他里の忍びが里に入ることは許されていない。我愛羅たちは「中忍試験を受けるために木の葉まで来た」と許可証をサクラたちに見せたのだ。

サスケとナルトの目が輝く。強いものと戦える喜び。火影への道が一步近づく喜び。

「とはいっても、強制じやない。受ける受けないは個人のじゅ」

「やつた！ カカシ先生、大好きだ」

「うわっちょ、じゅりナルト！ 離れなさい」

感激したナルトがカカシに飛びつく。カカシは苦笑しつつ抱きとめ、ナルトを引き剥がした。

「受けたいものだけその書類にサインして、5日後の午後3時までに学校の301号室に来ること。あ、でも受付開始は2時だからそのつもりでな」

カカシの用事は志願書を渡すことだったらしい。それだけ言うとどこかへ去つて行った。3時間待たされて用事がたつたの5分で終わったことに苛立ちはあるものの、ナルトもサスケも試験を受けられる喜びが勝つた。志願書に書かれた中忍試験の文字を、食い入るように見つめていた。

サクラは少年2人とは違い、無邪気に喜ばなかつた。推薦者の欄に書かれたカカシの名前を信じられずに眺めている。2人はさておき、自身に中忍試験に推薦してもらつほどの実力はない。彼女はそう思つていた。

しかし、任務中にサクラが立てた作戦は見事で、全体を把握し状況にあわせて援護する能力は高い。彼女の指示・援護によつて救われたことのある7班のメンバーは、サクラの実力をきちんと評価して信頼をしていた。当の本人だけが己の実力を過小評価している。任務ではサクラが後衛・サポート役に回ることが多いため、目に見える活躍が彼女には少ないのも一因だろつ。

まだ修行が順調ならよかつたが、滝登りの修行もやつと20メートル登れるようになつたところで、頂上はまだ遠い。上忍クラスでも厳しい修行なのだが、そんなことを知らないサクラには厳しい現実だつた。

そつとため息をついた彼女を、サスケが眉間にしわを寄せてちらと見た。

『また妙なことを考えているな』

1年という期間は、短いようでも長い。その間ほとんど一緒にいたのだ。サクラが自身の実力を過小評価する傾向があるぐらい、サスケは嫌というほど知っていた。今までそのことに何度も腹を立てたか覚えていないぐらいである。

自身を過小評価するために、サクラの修行は半端ないほど難易度が高い。難易度が高ければ当然クリアするのも時間がかかる。時間がかかるればかかるほど、サクラは追い詰められたように修行へとのめりこんでいく。もう少し休めと誰が言ったところで聞き入れることはない。だからこそサスケもナルトも彼女を助けるために修行を積む。するとそのことがまた彼女を追い詰め、という奇妙な循環構造の出来上がりだ。……サスケもため息をついた。

* * *

5日後、サクラたちはアカデミーに来ていた。

ナルトが懐かしそうに校舎を眺めている横で、サスケはむつりと黙つたまま密かにサクラをうかがっていた。左手を胸の前で軽く握っているサクラは、笑顔を浮かべてナルトと会話している。サスケは息を吐いた。強制ではない試験をサクラが受けにやつてきたのは、昨日の任務終わりに「サクラちゃん、また明日」とナルトに言われたからだろう。嬉しげなナルトに「試験を受けない」とは言えなかつたのだ。

お人よしにもほどがある。

呆れつつ、サスケはこれで良かつたとも思っていた。サクラは下忍で終わるにはもつたない実力者だ。もしかしたら試験中サクラ

と戦う可能性もあるが、己とまったく違う戦闘スタイルの彼女は真剣に戦つてみたい相手だつた。純粋な戦闘では負けない自信がある、彼女のように頭を使っての戦いではどうか分からぬ。だが今の落ち込んだ姿はいただけない。あくまでサスケは、本気のサクラと戦いたいのだ。

「試験つてどんなことするんだろ。楽しみだなあ」

「ちょっとナルト。もう少し落ち着きなさい。みつともないでしょ」

「ふん、ガキが」

「あんだとサスケ！」

「すぐ怒らないの。サスケ君もナルトを煽らないでよー。もつつ」

普段どおりに騒ぎつつ、第7班はアカデミー内へ入つていった。

「あれ？」

階段をいち早く駆け登つたナルトが首を傾げる。廊下がざわついていた。試験を受けに来たと思われる下忍が20人ほど、301のプレートがかかった部屋の前に集まつていた。

「お願いですから、そこを通してください」

「止めた方がいいんじゃない、僕たち」

「そうそう。そんな実力じゃ受かりっこないつて。これは俺たちの優しさだぜ。中忍試験は難関だからな」

「この試験を受けたばかりに忍びを辞めていくもの、再起不能になつたものを俺たちはたくさん見てきた」

「中忍といつたら部隊の隊長レベルだ。任務の失敗、部下の死亡。全部隊長の責任。それをこんなガキどもに勤まるわけがないだろ」

近寄つてみると、どうやら2人の男が教室の出入口を塞いでいる

た。木の葉の額当てをしていた2人の前には、これまた木の葉の下忍が2人。こちらは少年と少女だ。

緑色の全身タイツにオレンジ色のレッグウォーマーのようなものをつけたおかっぱ頭の少年と、薄ピンクのノースリーブに黒っぽいズボンをはいたお団子頭の少女が床にしりもちをついていた。無理やり通ろうとして男たちに殴られたようだ。頬が少し腫れている。立ち往生している忍びたちは、同郷の者に対しても容赦ない2人に眉をしかめていた。

「どうちみち受からないものをふるいにかけて何が悪い」

「正論だな」

サスケが鼻で笑いながら男たちに声をかけた。茶番だと小さく呟いたのをサクラは聞いた。

「だが俺は、俺たちは通してもらう。そしてひとつひとつの結界を解いてもらおうか。3階に用があるんでな」

周りの忍びたちがまたざわついた。何言つてんだあいつ。サスケの言葉を理解できないものがほとんどだった。道を塞いでいた忍びたちの目が少し色を変える。数歩前に出たサスケは周りの反応を気にせず、サクラを振り返った。

「どうだサクラ。お前なら一番に気づいたはずだ。お前の分析力と幻術のノウハウは、俺たちの中で一番伸びているからな」

言い終わつた後で、サスケは前に向き直る。サクラは驚きで瞳を大きく開いていたが、やがて柔らかく緩ませた。前を向いたサスケの耳が、少し赤かった。

ありがとう。

礼を言つてから、サクラは胸の前においていた左手をゆっくり下ろした。彼女の眼に迷いがなくなる。

「ええ、もちろん。だつていこは2階だもの」

サクラの言葉でプレート周辺の空間がゆがんだように回り、20
1プレートに戻った。そう、ここには2階だったのだ。

「へえ、見破つたのか。でもそれだけじゃ、な」

道をふさいでいた忍びの片割れ　細い目の男　が突然サスケに回し蹴りを放つた。サスケもまた応対するために蹴りを仕掛ける。しかし2人の足がぶつかることはなかつた。緑の影が間に入つて彼らの蹴りを受け止めたのだ。2人はすぐさま距離をとつて離れる。

緑の影は、殴られて座り込んでいた、あのおかっぱの少年だつた。先ほどの弱弱しい姿からは想像もできない素早い動きで、それだけでなく簡単に2人の蹴りを素手で受け止めていたのだ。特に痛がつているそぶりはない。ビショバカ、さきほど殴られた痕すらない。

「おいリー。約束が違つじやないか。下手に警戒されたくないと言つたのはお前だぞ」

「すみません。ですが」

チームメイトらしき長髪の少年に謝つた彼、リー少年はちらとサクラを見た。リーの後ろではお団子頭の女の子がやれやれと肩をすくめている。彼女にも先ほどのケガはない。長髪少年の言葉から察するに、演技をしていたのだろう。

そう判断したサクラだが、困つたようにリーを見返した。なぜサスケではなく自分が見られるのか理解不能だった。サクラが戸惑っている間にも、リーはサスケの横を通り過ぎて彼女へと近づい

ていく。

「僕の名前はロック・リーといいます。あなたのお名前は？」

「ああ。春野サクラ、ですけど」

「サクラさん、ですか。とても素敵なお名前ですね」

「ありがとうございます」

リーは噛み締めるようにサクラの名前を呟いた。サクラはよく分からぬ顔をしたまま名乗り、名前を褒められると嬉しげに微笑んだ。リーがほっぺたを少しピンク色に染める。サクラの隣にいたナルトがむつと顔をしかめ、サスケがイライラと腕を組んだ。

「僕とお付き合いしましょう！ 死ぬまであなたを守りますから」

親指を突き立て、ウインクをしながらリーが言つた。場の空気が凍りつく。

「はあ？」

サクラ……ではなく、ナルトとサスケが大声を出した。言われた本人はよく分かっていないらしく、ぽかんとリーを見上げている。最初に我へと帰ったのはナルトだった。

「ダメダメダメダメ！ 絶対ダメだつてばよ、このゲジ眉」

「げ、ゲジ眉？ なんなんですかあなたは。僕はサクラさんに聞いてるんです。邪魔をしないでくれますか」

ナルトがリーに詰め寄り、2人は何やら言い争いを始めた。この時ようやくサクラは言葉を理解し、顔を赤くさせていた。遅い。ため息をついたサスケがサクラの手を引いてその場を離れる。ナルト

ヒコーはまだ争つておつ、気づかない。

「さつせと行くぞ」

「え？ でもサスケ君」

「ああああーっサスケ、抜け駆けしてんじゃねーぞ」

「そうですよ。するいです」

「ちつ」

「今舌打ちしやがつたな、てめー」

「あの、とりあえず落ち着いて」

「サクラさん！ 先ほどのお返事を」

現在午後2時20分。志願書提出期限まであと40分。サクラたちが教室にたどり着くのは、まだのよつだ。

第四十六劇「再会」（後書き）

話が進まない。ある程度省略してはいるんですが、中忍試験はみつちりやりたくて。しばらくこんな感じで進みます。あ、もちろんタイトルの意味は彼にとっての、です。

第四十七劇「扉をくぐる」

「おい。セイのお前、名乗れ」

サスケに声をかけたのは、リーのチームメイトである長髪の少年だ。真っ白な田を見れば、彼が日向ひゅうが一族の人間だとすぐに知れる。微かに田を細めたサスケは、顔を背けた。うちはと日向は仲が悪い。うちはも元をたどれば日向から別れていつたらしいのだが、同じ瞳術使いとして何か思うところがあるのかかもしれない。

「名乗る義務はないな

「何つ

日向の少年が田つきを鋭くさせた。サクラは嘆くように息を吐き出す。どうして自分のチームメイトはこうもケンカ腰なのだろう。険悪な空氣に浸つてしまふ前に、サスケとナルトの腕を引っ張る。

「おわ、サ、サクラつ」

「はいはい、行くわよ。すみません。私たちはもう行くんで

前半はサスケとナルトに。後半は日向の少年に告げてその場を離れる。時間があまりないといつて、7班はまだ、3階前のロビーにい

* * *

た。

「つちはの名を知つていて言つてるのか？」

「もちろんです。あの天才と謳うたわれた一族に、僕がどれだけ通用するのか。試したい」

サスケがリーから勝負を挑まれたのだ。ナルトは「なんでもまたサスケなんだよ。俺は？」と、落ち込んでいた。サクラが肩を落としているナルトをなぐさめる。

どうやらサスケは早く試験場に行きたいらしく、さっさと歩き出そうとしており、リーを相手にはしていなかつた。だが、リーは言葉の最後に「それに」と付け足して、サクラを見た。サクラがきよとんと彼を見返せば、リーの顔がピンクに染まり、サスケの眉がつり上_じがつた。

「面白い。この名がどんなものか、思い知るか？ ゲジ眉」

「ええ、ぜひとも知りたいですね」

「時間もない。5分で終わらせる」

「できますか？ 君に」

あからさまな挑発にサスケが乗ることはなかつたものの、2人の空気が一気に重たくなる。対峙し、にらみ合つた2人は、壁時計の針が動くと同時に、床を蹴つた。

殴りかかつたサスケの腕は、空氣に触れるだけ、リーはすでにそこにいなかつた。彼の動きは速すぎてサクラには捉えられなかつたが、サスケも同じだつたのだろう。驚愕の声を出していた。

気づいたときには、リーはサスケの背後に立つていた。リーが回し蹴りを放つ。なんとか直前で気づいたサスケはしゃがんで避けたが、自然な流れでもう一撃放たれた蹴りは避けられなかつた。間に合わないと判断したサスケが両腕でガードする。リーが少し笑つた。

「なつぐは」
「サスケ君つ」

ガードしたにもかかわらず、サスケの体が大きく飛ばされて床を転がった。彼の頬には蹴られた痕がしつかりとついている。サスケはもちろん、見ていたサクラやナルトも驚きで目をみはつた。まるでガードをすり抜けたように見えたのだ。

悔しげに立ち上がったサスケの目が赤くなつていて、けつけい・げんかい血継限界の写輪眼だ。この目を使えばどんな術もどんなトリックも見抜ける。本気になつたらしい。目つきも鋭さを増している。

リーは写輪眼に対して一瞬だけ驚いた顔をしたが、すぐに平静な表情に戻つた。構えも余裕を持つたまま変わらない。うちはを知つていたのだ。もちろん写輪眼についても知つてているだろうに、恐れた様子はまるでない。そんな態度にサスケは苛立つ。

「舐めるな」

再びサスケが攻撃を仕掛けていく。が、いつのまにかリーの姿はサスケの目前にあつた。速すぎる。「ぐつ」勢いよく飛び出していたサスケに対処する方法はなく、真下から彼の頸に強烈な蹴りが入る。宙に身を投げ出したサスケをリーは容赦なく追いかけた。その動きをサスケは見ていたが、ダメージから回復しきれていない体は、言うことを聞かない。

リーがサスケの背後に回りこむ。かげぶよつ影舞葉と呼ばれる木の葉の追跡術だ。単体ではあまり意味を成さないが、体術のつなぎとなることにより威力を發揮する。

しゅるると音がした。リーの腕に巻かれた包帯がサスケを覆うよう動き……飛んできた風車によつて壁に縫い付けられた。

「そこまでだ、リー！」

響いたのは低く威厳に満ちた声だった。誰もが驚いて声を振り返り、リー以外の目が、リーみたく丸くなつてしまつ。そこにいたのは、赤い甲羅の亀だつた。

亀といつてもだいぶ大きい。甲羅だけで直径1メートルはありそうだ。目つきも鋭い。首には木の葉の額当てを巻きつけてある。その亀がしゃべつた。

なぜ亀？　え、亀でも忍者になれるの？　それより亀つてしゃべるつける？

着地したサスケを始め、7班のメンバーは、呆然としゃべる亀を見ていた。リーだけが顔に汗をかきながら焦り、亀の前に膝をつく。亀がリーを叱る。リーはペニペニこと頭を下げる。その光景は、なかなかシユールだ。

「み、見ていらしたのですか」

「リー、今の技は禁じてだらうが

「すみません。そのつい……でつでででも！　僕は裏の方を使いつ

もりは

「言い訳するでない

「つすみません」

「忍びが己の技をさらす危険性を、お前もよく知つてゐるはずじゃ

力チツ。時計が動いた音でサクラたちは我に返つた。時刻は3時50分。ゴールは目前だが、早いに越したことはない。3人は顔を見合させて頷き、その場を立ち去つた。背後からは「青春してるなあつ」という熱い声が聞こえたが、誰も振り向かなかつた。

「リー！」

「ガイ先生！」

* * *

「あれ、カカシ先生？」

301の教室前には見慣れた姿があった。担当上忍のカカシだ。彼はサクラを見て、目を細めた。

「そうか。サクラも来たか。これで正式に中忍試験の申し込みができるな」

「えつ？ あ、もしかして」

「はんつそうこうことかよ」

「ふうん？」

瞬時に理解したサクラとサスケに対し、ナルトだけが分かっていない。腕を組んで首をかしげている。カカシが苦笑いした。

「この試験は、元から三人一組スリーマンセルでしか受けられない」

「んんん？ でもでも先生ってば、たしか受けるのは自由だつて」

「ああ、言つた。でも、もしもそのことを言つていたら、サクラはお前たちのことを考えて試験を受ける。たとえ志願する気はなくとも、な。違うか？」

「…………」

サクラは何も言い返さない。ナルトがそつと彼女をうかがう。もしかして今日来たのも嫌々だつたのではないか。不安げなナルトに気づいたサクラが、ナルトに向かつて首を横に振る。ナルトは「はふっ」と間抜けな息を吐き出した。明るい緑色の瞳には、強い意思

があつた。たとえ最初は無理やりだつたとしても、今は彼女自身の意思でここにいる。そのことが分かつて安心したのだ。

3人を眺めていたカカシ右目が柔らかく輝いた。

「だがお前たちは自らの意思でここに来た。サクラ、ナルト、サスケ。お前たちは俺の自慢のチームだ。行つて来い」

カカシが扉の前を譲る。サクラたちはお互いの顔を見合つてから扉を開き、中へ入つていった。

「わっ」

入つてすぐ、ナルトがまず声を上げた。教室中の視線がナルトたちに注がれていたのだ。どうやら全員受験生らしいのだが、予想以上に入数が多い。さらには、2階にかかつっていた幻術でここまでたどり着いていない者も数えれば、受験者は相当数に達するだろう。

まあ、忍びの構成で下忍が一番多いのだから、当然ともいえた。301号室は黒板のある位置が最も低く、そこから教室の出入口に向けて段々と高くなる構造をしており、アカデミーでは他学年との合同授業などを使われている広い教室だが、狭苦しく感じた。きちんと席に座ればまだ余裕はあるそうだが、机に座つたり、洛々がピリピリ張り詰めていたのもあって、教室の空気が重いのだ。

受験者たちの視線がまた前に向いて、その重圧が少しマシになる。子供か。そうあざ笑う視線もあつた。舐められたのだとサクラは気づいたが、怒りは感じない。たしかに教室内にいる受験者の中ではサクラたちが一番若かつたし、何よりも、今すぐ喧嘩を売りに行きそうなチームメイトを止めるのに必死だつた。

どんな試験の内容かは知らないが、最初は舐められていた方がいろいろと有利になる。小声で2人にそう説明してなんとか宥め、サクラがホツとしていると、

「相変わらず騒がしいな。お前らのどいりせ」

聞きなれた声がかけられる。サクラが振り向くと、淡い金色が横を駆け抜けていった。

「やあん、サスケくん。あたしつたらあ、サスケ君が遅いから心配しちゃつた」

「おっおい、山中」

振り向いた先にいたのは、つんつんした黒髪を1つにくくつた目つきの悪い少年、奈良シカマルと、ポテチを食べ続けている目の細いぼつちやりした少年、秋道チョウジだつた。隣を駆け抜けたのは彼らとチームメイトの山中イノだ。サスケに抱きついている。サスケからサクラに救難信号が送られていたが、目がハートになつたイノを正気に戻すのはサクラでも無理だ。苦笑を返す。

「ゴメン、サスケ君。

サスケが心なし肩を下げる。

「よお、お前たちも受けに来たんだな」

そこにやつて来たのは犬塚キバたちだ。フードを被つたキバの頭の上には白い子犬 黒っぽい耳は長いため垂れている の赤丸がいた。赤丸はサクラを見つけると「あうん」なんとも可愛らしい声を出して、彼女の胸に飛び込んだ。いつものことなのか。サクラは慣れた様子で赤丸を抱きとめ、「久しぶり」と笑いかけている。そんなサクラへヒナタが笑顔で声をかけた。

「良かった。サクラちゃんたちも受けるんだね」

「ええ、お互に頑張りましょ」

「ちょっとひょっと。あたしを仲間はずれにしようつての？ 混ぜなさいよ」

「わわわー、ごめんイノちゃん」

「仲間はずれって……そっちが勝手に」

ハート目から復活したイノが加われば、いつもの女子メンバー（+犬）が揃い、なんともその一角だけ華々しい。険悪なムード漂う試験場には似合わない、のどかな空氣である。

「さて、俺たちはどこまで残れますかね。なあ、うちはサスケ君？」

「随分と自身あり気だな、キバ」

「そりや俺たちはかなり修行したからな。お前らには負けねーぜ」「うつせーてばよ。サスケならともかく、俺がお前らなんかに負けるか」

「はあ。めんどくせー奴ら」

「シカマル。さつきからため息ばかりだね。これ食べる？」

「遠慮しどく」

ひたすら黙り込んでいるシノを除き、他のメンバーは好き勝手に騒いでいた。

「ちょっと君たち。もう少し静かにした方がいいな」

メガネをかけた男が一人、近寄ってきた。白い前髪から覗く額当てには木の葉のマーク。男はメガネへ片手を触れさせながら、サラたち同期9人を眺めている。シノがぼそと呟く。俺は何もしゃべっていない、と。

「君たちがルーキー9人だろ。可愛い顔してきゅっきゅと騒いで。ここは遠足じゃないんだよ」

「誰よあんた。偉そうに」「僕は薬師カブト。そんなことよりもほら、周りを見てみなよ」

サクラたちが素直に周囲を見回すと、受験者たちがつるさそうに彼女たちを見ていた。ヒナタやイノなど数名がひるんでいる中、サクラは「たしかにうるさかったかも」と反省する。視線にひるんだからではなく、他人様に迷惑をかけては「という考え方からだ。いつも変わらないサクラにヒナタは尊敬の目を、イノは呆れた目を向けた。

「特に、君たちの後ろにつる雨隠れの下忍は、気の短い連中が多いから。君たちがどやされる前に、と思ってね。うん。でも懐かしいな。僕も初めて受ける時は君たちみたいに騒いでしまったよ」

「ということは、カブトさんは2回目なんですか？」

「いや……恥ずかしいことにこれで7回目なんだ。この試験は年に2回しか行われないから、4年目かな」

「中忍試験つてそんなにハードル高いのかよ。つたぐ。つぐづぐメンドクセーな」

「あ、そうだ。可愛い後輩たちに、ちょっとだけ情報をあげようかな。この認識カードで」

言いながらカブトは何枚ものカードを取り出した。サイズは彼の手より少し大きいほどで、枚数は約200枚。カブトはカードについて説明した。チャクラで情報をカードに焼き付けているのだとか。試験に落ち続けているとはいえ、情報をしつかりと集めて次回へ繋いでいるらしい。

カブトは一枚のカードを見せてくれた。裏は全体がオレンジ色で濃い縁で縁取りされている。他は真ん中に『忍』の文字が書かれてあるだけだ。表は、というと反対に真っ白。情報を見るにはカブトのチャクラが必要で、他の人に見られないようになっているようだ。

中々便利だな、とサクラはカードを凝視した。できれば自分も作りたい。カブトがその真っ白いカードに指をつけて数秒後、地図のようなものがカード上に浮かび上がる。地図は火の国を中心とした世界地図で、各国の上には棒グラフ。地図の右上には合計153という数字。サクラはびんと来る。

「もしかして、今年の受験者数、ですか？」

「おっよく分かったね。その通り。今回の受験者数が右上の数字にある。今回は153人。そして参加国は6。それと棒グラフは国ごとの参加人数を表している」

サクラの言葉に一瞬驚きを見せてから、カブトは頷いて説明をした。木の葉が半分以上を占めていたのは、今年の試験場所が木の葉であるからだね。

「君たちは、なぜわざわざ試験を他の里と合同で行つと思つ?」

顔を上げて9人を順に見ていったカブトだが、最後にサクラを見た。分かるかい? そう聞かれているように思え、サクラはあごに手を当てて目を少し上に向けた。考えるときの癖だ。

「えつと国同士の友好を深めること。忍びのレベルを高めあうこと……表向きはそんな感じじゃないですか?」

「表向きは?」

カブトがメガネに触れる。角度が変わったため、サクラの位置からはメガネが反射し、彼の目は見えない。

「各国の忍びのレベルを見てお互いにけん制しあい、パワーバランスを保つ」

「正解。やつやつて戦争を回避できているんだ。たぶんね」

反対を言えば、この試験で大した結果を出せなかつた国は他国から狙われる可能性もあるが、とりあえず今のところは上手く機能しているシステムだ。サクラが納得している横で、首をこれでもかと倒しているナルトがいた。ナルトは自身以外が理解しているのを察したのか、必死に分かつているフリをしている。彼の演技にはチムメイトを始め何人か気づいたが、そつとしておいた。

そういうしている間に試験管が現れ、試験が始まった。

第四十七劇「扉をくぐる」（後編）

ちゃんと進みすぎじゃないか。自分でも思いつつ、試験の話はあまり省略したくないため、これからどうすればいいかしたらすると思います。

第四十八劇「第一の試験開始」

「俺が第一の試験官、森乃イビキだ。

まず始めに言つておく。試験管の許可なしに受験者同士の対戦はありえない。許可があつたとしても、相手を死に至らしめるような行為は許されない。俺様に逆らうような豚どもは、即失格だ。分かつたな」

森乃イビキ。そう名乗った男は頭全体に布を巻いており、その布に額当てがついていた。顔には2本の大きな傷が斜めに走っている。身体は大きく、いかつい顔と相まってどつしりとした威圧感があった。そんな彼の背後には数名の忍びが一やつきながら立っている。彼らもまた試験管なのだろうか？ イビキに従つているようだが。

「ではこれから試験を開始する。志願書を提出したら代わりにこの番号札を受け取り、番号札の通りに席へつけ。全員が席に着いたらとこで筆記試験の用紙を配る」

「と書かれた番号札を見せながらイビキは説明していく。筆記試験という単語に、ナルトが悲鳴を上げた。彼は筆記試験が大の苦手なのだ。

とはいっても文句を言えるわけがない。とぼとぼ歩いて席に着くナルトを、サクラは不安そうに眺めた。スリーマンセル3人一組でしか受けられない試験なのだから、チーム戦だろうとは思うのだが。なるべく近い席になりますように。

サクラの願いとは反対に、7班は全員がバラバラになってしまつた。しかもかなり離れている。他の同期メンバーも班員は別れている。

「Jの第一の試験には、いくつかルールがある。質問は一切受け付けんから、よおく聞け」

黒板にチョークを突きつけて、イビキが低い声を出す。腹の底に響くような迫力ある声だ。

「第一のルール。まずお前たちにはそれぞれ10点が与えられる。筆記試験は全部で10問、各1点ずつ。この試験は減点式となつていて、一つ間違えるごとに1点減点される。3つ間違えれば7点だ。

第一のルール。合否はチーム3人の合計点数で判定する。

第二のルール。試験中にカンニング、および、カンニングに準ずる行為を行つたと監視員にみなされた者は、その行為1回につき持ち点を2点減点させてもらう。5回カンニングを見咎められたものは、即失格とする」

監視員……教室の横にずらつと並んだ忍びたちをイビキは見た。彼らは手にボードと鉛筆を持ち、イスに腰掛けている。どおりで筆記試験にしては試験官の人数が多いわけである。

「つまりテストの終了を待たずして、退場するものが出るかもしれない」ということだ。

無様なカンニングを行つたものは自滅していくと心得ておけ」

「いつでもチェックしてやるぜ」

「仮にも中忍を目指すんだ。忍びなら、立派な忍びらしくする」などだな。それから、チームの中での点の者が1人でもいた場合は、そのチーム全員を不合格とする」

教室が少しづわついたが、イビキは「うるせえ」の一言で受験者

を静める。

「ちなみに、最後の問題は試験開始から45分後に出題する。試験時間は1時間だ。始めろつ」

慌てたように試験用紙をめぐる音が教室のあちこちからした。その中でサクラはゆっくりと紙をめぐり、まずは所属の里と名前を一番上に記入する。それからざっと問題を眺め、細い眉を真ん中に寄せた。

問題はとても難しかった。確実にナルトには……いや、この教室にいるものほとんどに解けないレベルかと思われた。自力で解けるものはサクラを始めとした数名で、その数はおそらく片手の指で足りるだろう。シカマルもやる気になれば解けるだろうが、彼がやる気を出した姿をサクラは想像できないので除外する。

鉛筆を持ったままサクラは考えこむ。最初から疑問だつたが、やはりこの試験は何かおかしい。ただの学力テストならば、ほとんどものが合格できるはずがない。

『忍びは裏の裏を読め』

カカシから最初に教わったことだ。きっとこの試験には『学力を調べる』以外の、本当の意図が存在するに違いない。サクラはイビキの語つたルールを最初から見直してみた。

まず第一のルール。減点方式。

随分変わった採点法だ。もしだだの学力テストならば、このよくな面倒をしなくていい。普通に加算していく方が採点は楽なのだ。それから第一のルール。

合否は3人の合計点で判断する。これは、忍びの行動が基本3人一組なので別段可笑しくはないだろう。が、プレーシャーにはなる。第三のルール。

カンニングを見咎められた場合に2点減点され、5回発見されると即失格。これは筆記試験としては異例すぎる。通常はカンニングを一度でも行えば失格になるだろう。それが2点だけ減点されるという甘さ。これだけならカンニングを認めているとも考えられるが、監視員をたくさん配置してカンニングをしにくくしている、この矛盾。

最後のルール。チーム内に1人でも0点の者がいればチーム全員が不合格。第2のルールとあいまって、各自にすさまじいプレッシャーを与えている。

それらのルールとこの問題の難しさを考えれば、カンニングしなければ合格はできない。なのにカンニングを判定するためだけの監視員を大勢つけ、カンニング失敗のリスクをつける。なぜか。減点方式。カンニングで2点減点。5回で失格。大勢の監視員。

チーム戦。0点ならチーム全員失格。

『無様なカンニングを行つたものは』
『忍びなら、立派な忍びらしくすることだな』

サクラの中で点がつながっていく。

試験官は、受験者たちでは自力で問題が解けないのを承知しているはずだ。しかし解かずにはいれば0点で、チームメイトを引きずり失格になる。だから受験者はカンニングをしなければならない。

そう。監視員に見つからないような、忍びらしい立派なカンニングを。

カンニングする、とはつまり、各自の情報収集能力のことだろう。これを見るのが目的に違いない。おそらくこの試験場の中には、答えを知っているものが数名いるはずだ。考えてサクラはそつと教室を眺める。1つの机に座っている人数と、埋まっている机の数を計算……明らかに3の倍数ではない受験者がいた。推理は間違つていられないらしい。

試験の裏に気づいたサクラは、しかしそまだ鉛筆を動かさなかつた。カンニング前提の試験ならば、自分が正しい答えを書くと、他の受験者がカンニングできる対象を増やしてしまつ。しばし悩んだが「まついいか」小声で納得したサクラは鉛筆を動かし始めた。どうせ自分以外にも答えを知っている者がいるのだ。それが自分になるかその者になるかで、大した違いはないだろつと思つたのだ。

それより心配なのがナルトである。サスケならおそらくは試験の意図に気づくが、ナルトはそういう人の裏を読むのが苦手だ。かといってナルトとサクラの席は遠く、伝達手段はない。情報収集・伝達に関して、もつと考える必要がありそつた。

まあ、たとえ伝達手段があつても、ナルトに『カンニングをしていない演技』ができるとは思えない。

最初の問題は暗号文だつた。以前、似た問題を見たことがあつた。その應用でサクラは難なく問題を解いていく。次の計算問題を解きながら、合格の判定基準がどこにあるのかを考えた。情報収集能力はたしかに忍びに必要な能力だ。もちろん情報の大しさをサクラもよく分かっている。でも、この試験に隠された意味^{こたえ}はきっとそれだけではないはずだ。でなければ、10問目も最初から出題しておけばいい。

考える。その意味こそ、ナルトを合格させる唯一の活路なのだ。
一向に答えが見つかぬままサクラは第9問を解き終えた。空白の第10問目を眺める。翡翠の田^{こたえ}が見開かれた。

「つ？（もしかして）」

試験管が本当に問いたいのは、おそらくこの10問目。ならば可能性はある。しばらく考え込んでいたサクラは……何かを書き始めた。

* * *

あ、止まつた。

イノはサクラの鉛筆が止まつたのを見て安堵した。イノには試験の問題など1問も分からなかつたので、サクラだけが頼みだつた。サクラがやけに悩んでいたので「もしかして分からない?」かと心配していたが、どうやら杞憂らしい。

悪いけど、カンニングさせてもらいうからね、サクラ。

少しの罪悪感を抱きつつも、背に腹は変えられない。イノは両手で円を描くような印を組んで、その印をサクラに向かた。瞬時にチヤクラを練り上げる。

「（心転身の術）」

術が発動し、イノは机に身を伏せて眠つた。……いや違う。イノはサクラの中にいた。心転身の術とは、対象者の中に術者の精神を入れて乗つ取ることのできる、山中家秘伝の術だ。今頃サクラの精神は眠りについている。

サクラの中に入ったイノは、試験用紙を眺めた。ちゃんと答えの欄が埋まっていた。良かつた。息を吐き出したイノだが、10問目の欄を見て動きを止め、

「やられた」

思わず苦笑した。

が、すぐに慌てて答えを暗記し始めた。術の効果時間は短い。覚えた後は自分でなくチームメイトの分も書かなくてはならない。必死に答えを暗記しているイノに、もつ罪悪感は見えない。

第四十八劇「第一の試験開始」（後書き）

推理する場面はかなり気を使います。『都合主義になつてないですか？ 变なトコあつたら拍手でもいいので教えてくださいね。

イビキのおひちゃん出ました！ おひちゃん好きです！ でもほんとにちびちびしか進みません。あつらつ。

来週からは忙しくなるので更新がしばらくできない可能性が高いです（すみません^_^）。詳細は活報に載せるのでそちらを『』覗ください。

誤字修正（11・09・15）試験管……（汗）。

第四十九劇「究極の選択をする」

まぶたをこすりながらサクラは上半身を起こした。唐突に眠くなつたのだ。原因は分かつてるので気にせず周囲の様子を探る。

「5回ミスつた。てめーは失格だ。こいつの連れも教室を出て行け、すぐに行だ」

聞こえた声に田を向けずとも状況を察したサクラは、今どれぐら
い経ったのかを計算する。最初の思考時間と問題を解き終わるまで、
それからイノが使つたであろう術の効果時間を足していく。……お
そらく30分ぐらいだろう。10問目まではまだある。

暇だから寝ていようか。体力の温存にもなるし。
あぐびを堪えながら彼女は本気で思った。

「23番、失格」

「27番、43番失格」

「いやだー」

睡魔と闘っている間にも、続々と失格を言い渡される受験者たち。
中には暴れて抵抗したものもいるが、監視員たちにあつさり連行さ
れていく。これでさらに受験者たちは追い詰められた。自分のカン
ニングがばれているのか、いないのか。プレッシャーの中でどれだ
け落ち着いて正確にカンニングができるか。きっとそこも審査対象
に違いない。

「いい加減にしろよ。俺がカンニングしたって証拠もあるのかよ」

「んん?」

サクラが頑張っている受験者にエールを送っていると、たつた今失格を言い渡された1人が立ち上がった。

「大体あんたら、これだけの人数ちゃんとチェックできて……げえほつ」

言葉は途中で遮られる。監視員の1人に首を押さえられているからだ。監視員の動きは速く、サクラの目には映らなかつた。サスケなら見えたかもしれない。

「いいかい、ボウヤ。私たちはこの試験のために選抜された、中忍の中でもエリート。君のまばたき一つ見落としはしないんだよ。言つてみれば、この強さが証拠だ」

わめいていた受験者はへたりこみ、監視員により教室から追い出された。

監視員の人も大変だな。

大勢の受験者が顔色を真つ青にする中、サクラはのん気に考へる。たしかに監視員が多い。しかしそれ以上に受験者はたくさんいる。各自に与えられた範囲の受験者を確認しているのだろうが、それでも1人のノルマはかなりいるはず。ふと、自分は誰に見られているのか気になった。

やつぱり列の横にいる人かな。

サクラは、鉛筆を持つてなにやら書き込んでいる若い男を見つめた。20前後、下手するともつと若く見える。この年で中忍とは、優秀なのだろう。男の目がサクラに向く。視線に気づかれたのだ。一瞬慌てたものき、考えてみると何も悪いことはしていない。「お

疲れ様です」の意味を込めて笑いかけた。

男が慌てて目線を逸らした。

仕事の邪魔をしてしまった。サクラは反省して前へ向き直る。

「59番、失格」

「38番、9番」

失格が13組目になつた。

それ以後も番号が呼ばれていく。暇なので、退場していく人たちをなんとなく眺めながら、サクラは最後の問題について想像を膨らませた。普通の学力を見る問題ではないだろうけれど。

「よしつ今から第10問目を出題する」

18組目が失格になつた時、イビキがようやく口を開いた。

「その前に一つ。最終問題についてちょっとしたルールを追加させてもらひ。これは、絶望的なルールだ」

ルール。その一言に、残つた受験者が身体を強張らせた。今まで散々苦しめられたルール。しかも絶望的、とは。

「まあお前らには、この10問目を受けるか受けないかを選んでもうらう」「うらう」「うらう……もしも受けないを選んだらどうなるの？」

「受けない場合は、お前たちの持ち点がその場で0となり失格。もちろん、同伴2名も失格となる」

教室のあちこちから戸惑いや野次のようなものが飛ぶ。ルールがそれだけならば、全員が受けるに決まっている。だからまだあるの

だ、ルールは。

イビキは上がった声に一切反応せず、静かに言葉を続けた。

「さりに受けたるを選び、問題に正解できなかつた場合。その者については今後一切、中忍試験の受験資格を剥奪する」

教室が静まり返り、すぐにまたざわついた。1人の受験者が勢いよく立ち上がる。頭に子犬を乗せた少年、キバだ。

「んな馬鹿なルールがあるかよ。実際この場には何度も試験を受けた奴がいるはずだ」

「試験官は毎年変わる。試験の内容もだ。運が悪いんだよ、お前らは。今年は俺がルールだ。その代わり引き返す道も与えてるじゃねーか。自信のない奴は受けないを選んで、来年・再来年に受けなおすばいい。来年は俺じゃないといいがな」

イビキが声だけで笑うと、試験が始まつてから1番の緊張が教室を支配した。誰もが顔を引き締めて必死に考え込んでいる中、サクラは笑顔になつていた。第一の試験を突破できた喜びからだ。

サクラは、今イビキが言った『最終問題を受けるか受けないか』が第10問目の問題である、と判断した。この究極の選択ともいえる2択こそが、イビキの問いたいことなのだと。

そもそも冷静に考えれば、一試験官に『中忍試験の受験資格を剥奪する』権利があるとは思えない。そんなことができるのは火影や里の上層部ぐらいではないだろうか。

「では始めよ。この第10問目。受けないものは手を上げろ。番号確認後、ここから出でもらひ。同伴者もだ」

サスケは絶対手を上げない。彼は己に自信がある。サクラもまた

上げない。試験の意図を知っているから。問題はナルトだが……サクラはナルトならば大丈夫と信じていた。心は揺れるかもしれない。それでも彼が意思を曲げるとは思えない。だから第一の試験は突破したと、サクラは確信したのだ。

教室には沈黙が下りていた。皆、イビキの言葉について考えている。

「俺は、俺は、うつ受けない」

「50番失格。130番。111番。道連れ失格」

1人が手を上げると、釣られるように何人もが手を上げ始める。手を上げたものたちは一様に拳を握り締めていた。悔しいのだろう。

今回の試験は、ほんとに性格が悪い。

たしかにイビキの言う通り、彼らにとつては運が悪かつた。サクラは思つて、退場していく彼らの背を哀れんだ。だが同時に、彼らの覚悟が甘かつたのだとも思った。現実問題として、難易度の高い危険な任務を、受けない、なんてできるわけがない。どれだけ危険だろうと、受けなければならぬことはある。

教室を出て行つた彼らには、まだ中忍は早い、といふことだ。

「なめんじゃねーぞ！ 俺はぜつてえ逃げねー」

空気が張り詰めた教室の中に突如響いたのは、ナルトの声だつた。彼は左手を机に叩きつけ、イビキへ指を突きつけた。

「受けてやる。もし一生下忍になつたって、意地でも火影になつてやるから別にいひつてばよ。俺は、怖くなんかねーぞ！ ふんつ」

あの馬鹿。

サクラは額を押さえてぼやくが、唇の端は持ち上がりつてい。

言いたいことを叫んだナルトは腕を組んで堂々と座った。ナルトの大声にまったく動じなかつたイビキが、口を開く。イビキの声は、

真つ直ぐナルトに向けられていた。

「もう一度聞く。人生をかけた選択だ。辞めるなら今だぞ」

「真つ直ぐ、自分の言葉はまげねえ。俺の忍道だ」

ナルトの、あまりにも率直な言葉に影響されたのか。残った者たちから強張りが取れた。受験者たちの不安を消し取つてしまつたナルトに、サクラは関心を通り越して呆れる。今までナルトはいろんな常識をぶち壊してきたが、試験までぶち壊すとは思つても見なかつた。

でもそれでこそ、サクラの知つている『つずまきナルト』だった。

「いい決意だ。では、ここに残つた全員に…………第一の試験、合格を申し渡す」

第四十九劇「究極の選択をする」（後書き）

試験はとりあえずあつたり日に終わります。」の後、ヒビキの間劇挿もうかと悩んでるんですが、たぶん次は普通に第一試験を掲載するかと。

まあ、予定は未定ですが（苦笑）。

中忍試験受験資格について。

以前から、一試験官に受験資格剥奪の権利があるとは到底思えず、いつも描[画]させていただきました。

第五十劇「5日間のサバイバル」

第一試験官、みたらし アン口に渡された紙を、サクラはじつと見つめていた。

用紙の頭には『デカデカとした文字で『同意書』とある。

「ijiから先は死人も出るからさ。同意を取つておかないとあたしの責任になっちゃうのよね。あつははははは

紺色にも見える黒髪を後ろで1つに結つている試験官が、笑いながら『同意書』について説明した。彼女が笑うたび、受験者から笑顔が消えていった。

つまりサクラが手にしているのは、『死亡同意書』とでもいってきもので、自分が死んだとしてもそれは己の責任であり、他の誰かが責を負うものではない。といったことがつづられている。

この用紙にサインをして提出しなければ第一の試験は受けられないらしい。もちろん、班員の1名でもサインをしなければその班は試験を受けることができない。

サクラは用紙から顔を上げ、第一試験の舞台となる森を見た。立ち入り禁止区域に指定されている第44演習場、通称『死の森』である。

木の葉の里にはたくさんの演習場があるためサクラもすべて把握はできていなが、この森については少し知っていた。下忍になると練習のため演習場を借りることができるのが、この演習場は少なくとも中忍以上からしか立ち入ることが許されていない。しかも立ちに入る際にはやはり、『死亡同意書』へのサインが必要だとか。一体どれだけ危険なのだろう。

それらの情報だけで眉をしかめてしまうが、今日の前に実際ある

森は木々が生い茂り、奇妙な鳴き声らしきモノが聞こえてくる、誰が見ても不気味な森だつた。たしかに危険が一杯ありそうだ。

第一の試験は、この森でサバイバルをするといふものらしい。当然、ただのサバイバルではない。

アンコが地図を取り出して説明を始める。地図、とはいつたものの、とても簡素なものだ。

「まずこの演習場は円の形をしていて、周りをフェンスが囲んである。入り口は錠のかかつたゲートが44個。中心を割るように大きな川が流れ、森の中央には塔が建つていて。ゲートから塔までは、大体10km。この限られた空間内で、あんたたちにはあるサバイバルプログラムをこなしてもらつ。

その内容は……何でもありの巻物争奪戦よ」

地図をあつさりしまつたアンコが次に取り出したのは、天と地と書かれた2種類の巻物である。天の巻物は白、地は紺色だつた。

「第一試験を突破したのは26チーム。その半分のチームには天の書。残り半分のチームには地の書を。1チームにつきどちらか一つを渡す。

天地両方の書を持つて、中央の塔まで3人で来る。それが合格条件よ。ただし期限は100時間。ちよつど5日間ね」

受験者たちの間で動搖が広がつていぐ。目線はアンコと、その後にある不気味な森を交互に行き来する。

「失格条件は、期限内に巻物を塔まで持つてこれないこと。チームメイトを失う、再起不能者を出したチーム。それと補足だけど、巻物の中身は塔につくまで決して見ないこと。機密情報を扱う任務もあるから、その信頼度を測るためよ」

説明を終えて一息ついたアンコの、最後に言つた言葉がサクラの胸に残つた。

「それからこれは、あたしからのアドバイスね……死ぬな」

* * *

各班「」とにちらばつた受験者たちは、周りを警戒したように見ながら、『同意書』を見つめていた。

あの第一試験を突破した面々だ。「受けない」という選択肢がないことを重々理解している。それでもまつたく悩まない、といふことは難しいのだろう。筆が進まないものたちが多数いた。

そんな中において、カカシ隊第7班は全員がすでにサインを終えて集まつていた。

「なるほど。どの班がどちらの巻物を持っているか。誰が持つているか分からぬといふわけか」

サスケが同意書の提出場所を見ながら呟いた。提出場所は巻物の受け渡し場所でもあり、他からは見えないよう、カーテンが引かれた。

ナルトもサクラも、彼の言葉に目線をそちらに向ける。そんな2人のいや、サスケもか 表情は普段よりも引き締まっていた。これから先は班員以外が本当の意味での敵であり、自分が殺されるだけでなく相手を殺してしまった可能性があることを、3人は理解していた。

「同意書と巻物の交換を始める」

カーテンで隠された小屋　といつても、屋根と机があるだけから1人の男が顔を出し、受験者たちに告げた。誰かが唾を飲んだ。

あちこちで書類を持った受験者たちが立ち上がる。サクラたちも例外ではない。

サクラたちが受け取ったのは天の書で、サスケが持つことになった。

「巻物を受け取ったものは担当のものについて所定のゲートにつくこと。30分後に第一試験をスタートする」

* * *

12とかかれたゲート前に、サクラたち第7班はいた。

ゲートは1班に1つのようで、サクラたち以外でこの場にいるのは監視員らしき忍びが一人いるだけだ。なので、3人は堂々と作戦会議をしていた。

「大きな方針としては2つ。

まず1つは始まつてから速攻で巻物を奪つてゴールする。もう1つは水や食料・地形の把握に時間を費やす」

サクラの言葉を、ナルトもサスケも真剣な顔をして聞いている。

「時間が経つ」とに試験の合格が厳しくなるから、そういう意味で

早くに巻物を奪えれば一番いいわね。でも、巻物は2種類。最初に戦つた相手が持つていなければ体力やチャクラを消耗した分不利になるし、たとえ都合よく『地の書』が手に入ったとしても真っ直ぐに「ゴールへ向かえば狙われる確率が高くなる。

どちらにせよ、連戦は避けたいしね」

「メリットよりデメリットの方が大きい、か

「でもさでもさ。先に奪つてゴールできた方が楽なんじゃ」

「そうね。この後の試験がどんなものか分からぬけど、早くゴールできればその分だけ休むことができるからたしかに楽だとは思うんー。とりあえずもう一つの方針について話すわね」「

少し納得が言つていらない様子のナルトに、サクラは少しだけ困った顔をして話を続けた。ナルトの言い分ももつともではあったが、彼女自身としては安全策で行きたかった。

「まず最初に食料と水を確保できれば、他の班が休んだり食糧確保に追われている時間にこちらは行動ができる。食料の確保は班員がバラける可能性が高い。そこを狙つて奇襲をかけ、巻物を奪う。もちろん誰がもっているか分からないから『ハズレ』の可能性も高いけど、3対1の戦いなら戦闘時間も短くできるし、最終的には効率がいいと思う」

「なるほどな」

「で、どちらの方針で行くにせよ。注意するのは私たちがバラバラにならないこと。もしさぐれてしまつた場合は、何か合図や合言葉のようなもので互いを確認する必要があるわ」

「え？ なんでだつてばよ」

「よく考えてみて。これは忍びの試験よ。仲間に変化して近づいてくる可能性もある」

ナルトが頭の後ろをかいた。長い合言葉は勘弁してくれつてばよ。

と、困ったような笑顔つきで。

たしかに、長すぎると彼は覚えられないだろう。

「とりあえず、私としては最初に食料と水を確保する方針で行きたいんだけど、どうかな？」

チームメイトにサクラが問いかけると、2人はしばし黙り込んだ。おそらく彼らの本音は『速攻で巻物を奪つて『ゴールしたい』なのだろう。しかし、リスクが大きすぎる。彼らは基本ムチャをしたがるタイプだが、今はチーム戦。チームメイトの安全を優勢してくれるだろう。サクラはそう確信していた。

「ああ。依存はない」

「俺もそれでいいってばよ」

2人が頷いたことで方針が決まった。サクラは嬉しそうに笑い、合言葉を決めようか。といった先に、

「そろそろ時間だ」

監視の忍びに告げられ、顔を引き締めた3人は立ち上がる。命がけの試験が始まつた。

第五十劇「5日間のサバイバル」（後書き）

まだ試験はじまつてないとか（〇・△・△）

演習場について。

一般人が使うには危険なところもたくさんあると思われるので、忍びが申請を出さないと使うことができない。という独自設定をつけさせていただいてます。

同意書について。

原作が手元にないため、中身に何が書かれていたか覚えてません。自分なりに分かりやすくまとめたつもりです。間違っている点があればご指摘願います。

死の森の危険度について。

原作よりも一年間修行しているため、みんなが強くなっている点を加味。さらに中忍でも無傷で塔までたどり着くのは難しいとあつたので、この場を借りて修行するには規制があるだろうと考えたからです。

第五十一劇「死の森」

始まりの合図から10秒ほど経つてからゆっくりゲートをくぐった力カシ隊第7班は、事前に方針を決めていたおかげか。特に焦りを見せず、冷静に周囲を警戒しながら話をしていた。

「合言葉なんだけど、どうする？」

作戦を考えるのは基本サクラの役目だが、決定は全員で行う。しかし合言葉に関してはナルトには決めかねるだろ（何せ今も『長いのは勘弁してくれ』と言わんばかりの顔をしている）。サクラにしても、ナルトに覚えやすく、かつ、他のチームに分からない合言葉、など簡単に思いつくものではない。

やや先頭を走っていたサスケは、ちらと後方を見た。怪訝に思ったサクラも同じ方向を窺つたが、特に何かがあるわけではなかつた。

「サスケ君？　どうかした？」
「いや……っ」

3人の足が止まる。どこからか悲鳴が聞こえたのだ。

「さつそく始まつたか」

冷静に咳いたサスケの隣で、ナルトが微かに顔を青くしていた。身体も強張っている。緊張することもある程度は大事だが、これは緊張しそすぎだ。

声をかけようとしたサクラより先に「どうしたよ、ビビリ君？」とサスケがナルトを小ばかにするように笑つた。青かつたナルトの

顔が一瞬で赤に染まる。「びびってねーよ!」と拳を握つて言い返したナルトは、いつもの彼に戻っていた。

「ふん、どうだかな。そんなことより、行くぞ」「そんなことつてなんだてめえ。こら待てつての」「ちょっとナルト。大声出さないの」「『』『』めんサクラちゃん」

木の枝を飛びように移動しながら、サクラは小さく笑った。素直じゃないなあと思ったのだ。肩越しに彼から睨まれたが、全然怖くはなかった。

「サクラ……ちつ。とりあえず、合言葉だが。一度しか言わない。

【忍歌、忍機、と問う】

その答えはこうだ。

【大勢の敵の騒ぎは忍びよし。静かな方に隠れ家もなし。忍には、時を知る事こそ大事なれ。敵の疲れと油断する時】だ

その一言に笑っていたサクラも顔を引き締め、戸惑つたように髪を揺らした。覚えられなかつたからではない。サスケが語つた合言葉が長すぎる。ナルトは覚えられないだろう。実際、ナルトは手を合わせて「な、も1回」と珍しくサスケに頭を下げている。が、サスケは意に介さず、まず水の確保をしようと言い出した。そのこと事態に異論はない。しかし、

サスケ君だつてこの合言葉をナルトが覚えられないぐらい理解しているはず。だから、意味があるんだ。この長い合言葉に。

そう考えたサクラは、そうねとサスケに頭を返した。ナルトは青い顔をしていたが。

「巻物は、俺が持つておく」

わざわざ懐から取り出したサスケは、チームメイトなら既に知っていることをわざわざ告げた。サクラはピンときた。

なるほど。それであんな長い合言葉を。

ようやくサクラが納得したその時、第7班を凄まじい突風が襲つた。田を開けていられない。気を抜けば飛ばされそうなほどの風に対し、サクラは足裏へとチャクラを送り地面と吸着。いつでも動けるように膝を曲げ、クナイを構えた。

だが、敵の気配はしない。

「うおあっ

「ナルト」

ナルトが風に飛ばされたのを視界に捉え、サクラは追いかけようとしたが、動けなくなつた。

風が吹き付けてきている方角に、むらりむらりと揺れる黒い影が見えた。

「ふふつみーつけた」

その影がにたつと笑った瞬間、あれだけの突風がピタリとやみ、サクラは自分へと飛んでくるクナイを見た。

身体は、指一本動かなかった。

第五十一劇「死の森」（後書き）

きた―――つ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4138r/>

君は私で私は君で

2011年10月9日17時44分発行